
神様の不良品

橘 明依

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

神様の不良品

【コード】

N9729A

【作者名】

橘 明依

【あらすじ】

できのいい兄貴を持った河井正は、いじめられていた親友をかばった罪で、自分がいじめられるという重罰を受けることになった。さらに、好きだった女子に「きもい」と言われたショックで、自分に「自室ひきこもり」の刑を課したのである。8年の時が過ぎ、やっと自分の罪を赦し、社会復帰する決心をした正。できのいい(?) 兄としては、この物語の続きを是非とも見届けなければなるまい。6月13日、61話をアップ

小さいころから出来がよく、中学、といわゆる進学校に進み、超有名国立大に入った華々しい人生だった……はずが、気付いたら薄汚れた工場の一角で安い弁当なんぞつついていた。

気付いたらってのはウソだな。怒り狂う親父を尻目に大学を辞め、画家を目指すとかいう非現実的な夢に人生捧げた挙げ句、計画的に事を進める事無く恥も臆面も無くここに戻って来たのは俺だ。つまり、半自動的にこの場所を選んだといえよう。

こんな俺に世間はフリーターだの負け組だの結構な称号を与えてくれた。ゴミ同然の俺にとって、この工場はまたおあつらえ向きの場所であった。

『三婆沙メタル株式会社』

主にスクラップの収集・加工処理を行い、金属リサイクルの新しい技術システムに貢献します。というのが謳い文句の、年季の入った埃だらけの工場である。何やってるかという事を分かりやすく説明すれば、要するに世間で不要とされるゴミくずを潰して、砕いて溶かして、固めて、もう一度使えるようにして世間様に返してやるうという奇特な会社だ。

毎日トラックで運ばれて来る金属のゴミを使えるか使えないか選別し、使えると判断されたものは、プレス加工やギロチン加工を施される。普通は、そのあと製鋼工場へ販売され、そこで有用な金属に生まれ変わるのだが、この工場では金属が生まれ変わり、さらにゲーディング用品やらキーホルダーやら、肩凝りを直すとかいう（うさんくさい）指輪に華麗に変身を遂げ、再び市場に還って行くまで一気にやっている。ゆえに敷地はバカでかい。でかいだけがとりのような会社だ。

そして俺は第二工場の末端の出荷倉庫課という部署で、新たに商品となった元スクラップ達を、検査し、袋に入れ、箱に詰め、トラ

ツクに運ぶ仕事をしている。扱われているのは主にキーホルダーのわっかの部分であった。その部署には10人ばかりの人間が居て、主に商品の検査と機械の管理をするのが3人の社員。残りのバイトとパートのおっちゃん3名、そして3人の女達が箱詰めと荷物はこびを担当する。パートのおっちゃんは定年退職後のじいさんばかりで、バイトはやる気のないフリーターの俺、そして、残りの3人の女達は、いずれも軽度の障害者だった。

一人は森真希子という40代後半のおばちゃん、ひどく耳が悪い。気の短いおばちゃんだが、怒らせさえしなければ気の良い人で、機嫌の良い時に何故かホラービデオを貸してくれたりする。

二人目は、重めの知的障害で、三宅有希という20代の女性だ。時計をやっと読める程の智能だが、通称リングちゃんと呼ばれる真っ赤な頬で、3才の子供のごとくいつもニコニコ笑っている。

三人目は相沢美咲という、推定年令38才の女性。通称みーさん。軽い知的障害と難聴で、いつも補聴器を持っている。

実は、この相沢美咲…みーさんと初めて会った時、俺は物凄いショックを受けた。何故なら、彼女の右頬と、右手には火傷の後のようなケロイドがあり、さらに右頬のケロイドの上にざっくりとした大きな傷跡があったからである。

人道上大問題なのは承知の上で敢えてその時の心理を告白するのであれば、年寄りと障害者ばかりがうごめく埃だらけのくそ暑い倉庫内はまるで地獄の一丁目のようであった。情けない話だが『こんな所に追いやられたのも親父達を裏切り、好き放題をした罰なのかもしれない』とまで思いつめていた。

ところが、出荷倉庫課の10名の中で、もつとも面倒見が良いのが、もつとも俺にシヨックを与えたみーさんであった。トイレ、食堂の場所から、誰と誰が仲よくて、誰と誰が仲が悪いかなどの工場内のゴシップに至るまで、彼女は俺に詳細に説明してくれたものだ。ただ、残念な事に彼女とはしばしば会話が噛み合わなかった。それが、知的障害によるものなのか、難聴の為であるかはしばしば判

別がつき難いのであった。例えば、こんな具合である。

「あのさ、この荷物についてるカードの番号が間違ってるんだけど」
「うん、うん。今日は暑いね」

「あのさ、番号ミスの件、こないだも課長に注意されてるんだけどさ」

「そうだね、このお茶飲みなよ」

ってな具合である。彼女いわく、補聴器はノイズが多くて聞き取れない事が多いんだそう。それで、電話をする時なんかは外していた。

そんなこんなでいつのまにやら1年が滞りなく過ぎた。そして今日も俺は工場の片隅で無愛想に弁当をかつこむと、スケッチブック片手に表に出る。

大学を辞めて8年。東京で成功するという計画が頓挫し、こんなところでこんな仕事をしてはいたが、俺は画家への夢をあきらめてはいない。本音を言えば、自分がこうしてここにいる事に今でも納得していないのだ。こことはつまり、故郷である。

画家になるうがなるまいが、俺は東京で暮らしていたあの街を愛していた。「異土のかたいになるとも」帰るつもりはさらさらなかった。それが、1年程前、勘当した筈の俺におふくろが泣きながら「なんとかかしてくれ」と電話をかけて来た。というのも、あの頑固なクソ親父が倒れ、弟が不登校から引きこもりという道をたどり、結果立派なニートとして成長し、そんな家族の状況がもともと気の強い方でないおふくろを軽いノイローゼにし、俺のおばに当たる母の姉の助言もあって、ついに長男の俺に助けを求めて来たということうわけだ。

ちょうどその時、絵の師匠にあたる人物と新事務所の設立の祝杯を上げていた俺的には実に迷惑千万な電話であった。しかも自分達

から勘当しておきながら今更助けを求めるとはなんと自分勝手な話かと腹も立つたが、せめて弟の正が社会復帰するまではと切々と訴える母親の言葉と、情にもろい師匠の説得もあって、やむをえず、細々とできかけていた絵のつながりを断ち、まさに身を割かれるような思いで東京を後にしてきたのだ。

以来1年というものの1日として心が晴れた事はない。ただ、こうして絵を書いている時だけ、常にどんよりと立ちこめている諸々の憂鬱から解き放たれる事ができた。その時の開放感を思うたびに俺は決心を新たにするのだ。自分はやはり絵筆を捨てる事はできないと。

なに、今少しの辛抱さ。ずっとここにいるわけじゃない。いつかまたあの街に戻れるさ。そうすれば、またあの頃のように自由に羽ばたく事もできるだろう。

そして、俺は目を細め、灰色の建物を模写していく。初夏。鮮やかな青空を背に萌え出する若葉。『故郷は遠きにありて思ふもの』などと昔は気取っていたもんが、こうして見ればナカナカどうしてこの風景は捨てたものじゃない。もっとも俺の画風にはさっぱり合わないけどな。

なんてモノローグしてた時だ、突然背後から声をかけられた。

「また描いてるね」

俺は振り向きもせずには答えた。

「ええ。描いてますよ」

すると、相沢美咲「みーさんは「上手だね」と言っつて、俺の隣に腰をおろした。

『当然ですよ、これでもプロ目指してたんだから』と思っつたが、俺は「ありがとう」と

笑顔を浮かべた。この人もよくここに来ては珍し気に俺の絵を覗いていくんだ。お互い、暇だよな。

「優ちゃんの絵は、工場とかトラックとかばかりだね。たまには女の子でも描けば？」

「なんで、女の子なんですか？」

「優ちゃんの好きな女の子描いたら？」

「いませんよ、そんなの」

「え？ 何っつて？ 工場が好きなの？」

なんだか会話が噛み合っつてない。俺は声を張り上げた。

「違いますっつて。好きな女の子はいないっつて言っつてるんです」

「うっそだあ。優ちゃん嘘っつき」

やっつと通じたみたいだ。

「嘘じゃないですよ」

と、言いながら俺は東京で別れた彼女を思い出した。こちらに戻っつてからしばらくは毎

日メールのやり取りをしていたが、だんだんその回数も減り、1日中が1日おきになり、

1日おきが1週間おきになり、一カ月も忘れ去り、ある日、久しぶりにメールしたら送信

不能になっていた。色んな意味でさらば青春だな。あの日、ここに帰って来た時全て終わっ

たのか？ いや、終わらせるものか。

「俺、人物は苦手なんですよ」

俺ぼそつと本音をつぶやく。でもみーさんには分からない。

「早く、彼女見つけないと。合コンでもやったら？」

「もう、いいですよ。やだなあ。俺は人物画は苦手なんですって」

苦手というより、むしろ人物画は嫌いである。しかし、それに就いてうだうだ語るより

先に昼休み終了のサイレンが鳴り、俺達は場内に戻った。

キッチンでおふくろが黙々と夕食の準備をしている。親父は居間の黒いソファに座り新

聞を読んでいる。親父の目の前ではチカチカとニュースが流れていて、どこやらで、また

奇怪な殺人事件があったとアナウンサーが告げている。仕事から戻った俺はダイニングか

ら障子越しに親父に声をかけた。

「具合はどうだ？」

1年前、親父は突然の腹痛に襲われ近くの大学病院に運ばれた。

結果、大腸にガンが発

見された。ポリープがガンになってしまったらしい。しかし、発見が早かったのと、幸い

ガンが潰れていなかったのとで、切除するだけで事は済んだ。医者

の言葉によればこの類

いのガンの再発は99%無いそうだ。しかし、『ガン』という単語

が気の弱いおふくろや、俺にもたらしたショックは恐ろしく大きなものであった。

「そろそろ検診だろ？ 面倒くさがらずにちゃんと行けよ」

親父を思いやった言葉が空しく宙を舞う。親父の中での俺の地位

は今だに勘当ムスコらしい。ここに帰って1年と言うもの、俺と口をきこうとしないどころか、まともに顔を見ようともしない。はつきり言ってムカツクが、すっかり痩せこけ、おんぼろになつた親父に対して本気で怒る気にはとてもなれない。

それからしばらくすると、家族3人のこの上なく気まずい夕食が始まる。誰も何も喋らない。

居間のテレビだけがやたらと陽気にはしゃいでいる。黙々と食事を済ませると、お

ふくろがもう一人分の食事を用意する。茶わんに白い飯をよそい、赤い椀に味噌汁を注ぎ、

皿にその日のメインディッシュを盛り付け、それら全てを四角い盆にのせる。それを2階

に運ぶのは俺の役目だ。俺は盆を受け取り、黙って食堂を出る。

いよいよ、今日の最後の大仕事……俺の人生をかけた戦いがはじまる。勝負は每晚繰り

返されるが、残念ながら今の所全敗である。

階段を昇りきり白いドアの前に立ち、2回ノックして俺は弟の名前を呼んだ。

「正」

しかし返事はない。いつもの事だ。奴はもう7年もの長きに渡りこの部屋に引きこもっている。よく飽きないものだ。

「飯置いておくぞ。体調悪くないか？」

やはり返事はない。あきらめずにもう一度声をかける。

「親父の術後の経過は良好だ。おふくろのノイローゼもなんとか直つたようだ。俺も仕事

大変だが頑張っている。家族はみな元気で頑張っている。お前をの

ぞけば」

「……」

敵は頑だ。しかし、ここであきらめるわけにはいかない。

「なあ、いい加減に出てこいよ。親父もおふくろも待っているぞ。

俺も信じている。おふ

くろなぞ、お前の顔を見たら泣いて喜びその場でひっくり返る事だろっ」

敵の良心に訴えかけてみる。が、こんなぐらいで屈服する相手なら、俺がここに帰って

来る必要もなかっただろう。あきらめずに、俺は今度は思い出作戦を使う事にした。

「覚えているか？ お前が小学校の頃、クラスで優秀賞を取った習字が今でも玄関に飾っ

てあるぞ。ほら、あの『みんな仲良く』ってやつだよ」

「……」

全く反応がない。だんだん腹が立って来る。一体誰のために俺はこんなところでくそっ

まらん思いをしていると思っっているんだ？ しかし、ここで怒っては負けだ。

「なあ、正。俺には分かっている。お前はそこらの引きこもりとは違う。子供の頃のお前

はとても明るくて元気で、兄ちゃんは常々うらやましく感じていたものだ」

「……」

「何。お前なら大丈夫だ。すぐに社会復帰できる。後はお前のやる気次第だ」

「……」

何を言っても返事はない。しまいに『嘆きの壁』に祈りを捧げる気分になってくる。

『嘆きの壁』なんて単語持って来たが、それがなんなのか実はよく

知らねえけどさ。けど

このドア見てたらそんな言葉が浮かんで来ちまうわけだ。なにしろ、ここで東京に帰る望

みをかけつつ沈黙を相手に喋ってるって本当に泣きたくなくなるからな。しまいには必ず空しく

なり、こうして日ごとに連敗記録は更新されるていくってわけだ。

自室に戻るといつもの日課でCDをかけ絵筆を握った。

キャンバスに向かってため息をつく。正の事を考えるからだ。

正直言つて、出て来たくない奴に出て来いと強要したって無駄だと思ってる。もし、

俺が奴の立場なら出て来いと言われれば言われる程絶対出て行くものかと思うだろう。し

かし、こつちにはあきらめきれない理由がある。奴さえ部屋から出て来てくれれば、おふ

くろとの約束も果たし俺は気持ちもさわやかに東京に戻れるのだ。

正は俺が大学を辞めた次の年、16才の時に不登校になった。あれから7年ということは今

今年23才か。

奴のひきこもった原因がさっぱり分からんとおふくろは嘆いていた。弟は優等生の俺と

違い、子供の頃から明るく、やんちゃで、社交家で、元気なやつだった。だから、ますま

す原因が分からない。おふくろは「優がああなるなら、まだ分かるけどね」と失礼千万な

事を言いやがったが、まあ、そうかもしれん。おとなしくて真面目で人間不信のケのあつ

た俺あなるのなら、原因は種々考えられもしよう。

しかし、今時は色々複雑怪奇だからな。学校も、世の中のしくみも、人の心も、人のつ

ながりもな。だから、みんなが心に爆弾をかかえとるんよ。いつ何がきつかけで爆発する
か分からん爆弾をよ。俺だって、正直無性にドアを閉め切りにしたくなる事があるさ。ただ
だそうしたところでどうしようもない事が分かっているから、外に出て行くだけだ。そんな
な風にモノローグし、俺は描きかけの工場に灰色を重ねて行った。

次の日の昼休み、いつものごとくスケッチをしていると背後から声がした。

「また絵を描いてるんだね」

みーさんとは声が違う。誰だ？ 不思議に思って振り返ると、真っ黒なセミロングの女性が立っていた。紺のベストにタイトスカートといういでたちだ。これは3階の事務フロアの女性の制服である。彼女は黒目がちの瞳でにこにこしながらこちらを見下ろしていた。

おや？ 俺は彼女を知っている。いや、確かに知っているはずだ……確かめるように左胸の名札に目を移す。白いプレートに『森崎』の二文字。やっぱり……俺は手を打ちかけたけれど、もちろん実際に打つわけもなく、彼女の次の言葉を待った。

「河井君。河井優君だよな？」

予想通りのセリフだ。

「私の事、覚えてる」

俺は頷いたが、照れくささもありません記憶があやふやなふりをした。

「森崎……だったよね」

「そう。森崎紀美香」

彼女は嬉しそうに頷くと「こんなところで河井君に会うなんて、すごい偶然！」と笑い、すんと隣に腰をおろした。俺はといえば、元クラスメートの無邪気さに、少しばかりの戸惑いを感じた。なぜなら、森崎紀美香は確かに記憶にこそ残っていたけれど、たいした付き合いがあったわけでもないからである。高校時代の森崎はどっちかといえば控えめで大人しい女生徒だった。故に、同じく大人しくて控えめだった俺には接点の持ちようもなかったのである。にもかかわらず彼女を記憶している理由は、その整った容姿がしょっちゅう男友達の噂の種になっていた事と、他でもない自分が彼女に淡い思いを抱いた事があったからである。

しかし、今の森崎はそれらもろもろの溝を微塵も感じさせる事なく、一足飛びにこちらに近付いて来た。

「東京の大学に行ったって聞いていたけど、ここに帰っていたんだね」

「見ての通り」

「いつ戻ったの？」

「1年ぐらい前」

「こっちで永住するの？」

「多分しないと思う」

「ふうん……」

「森崎…さんはこの社員？」

「さん付けいららないよ。社員じゃなくてバイト。フリーターしてるの。ここには3日前に入ったばかり」

「その制服は、事務？ 3階にいるの？」

「そう。入力やってる」

「ずっとフリーターしてるの？」

「ここ半年ぐらいね。その前はデザイン事務所にいたけど……」

「デザイナーだったの？」

「うん。まあ。でも、事務所のやってる事と自分のやりたい事の方性が違ってきたからやめちゃった」

「ふうん……」

森崎ってデザインなんかやるのか。意外だな。でも、そういえば、高校の時の文化祭で森崎の描いた絵を見た事あったっけ。青が基調の淡い絵だった。女らしい優しいタッチの……。

「河井君も絵なんか描くんだね。意外」

森崎が手元のスケッチブックを覗いて言った。

「それが、描くんだよなあ」

「高校の時も描いてたっけ？」

「全然」

「だよ。いつも難しい顔で参考書を睨んでたイメージがある。でも……うまいね。」

「これ、工場でしょ？」

「分かる？」

「すごく細かい所まで描くね」

そう言っただけで彼女はスケッチブック上のトタンの影の一つ一つ、フエンスの一本一本まで詳細にかたどった線の集合体をまじまじと見つめた。

と、その時だ。

「ゆーちゃん」

聞きなれた声が出て、思いきり背中を叩かれた。誰だか分かってはいたが、俺は振り返り声の主を見上げ大袈裟に顔をしかめる。

「なんですか？」

すると、みーさんはニヤニヤ笑った。

「優ちゃんがナンパしてる」

「違いますよ。彼女は高校時代のクラスメイト」

しかし、聞こえてるのか、聞こえてないのか、分かっているのか、分かってないのか、

「優ちゃんやーらしー」

と、人さし指をこつちにむけた。まったく。絵に書いたようなベタな反応だな。まあいいか。どうせいつもの到底ナイスといえないジョークだ。俺は適当なところで引き下がると、森崎をみーさんにみーさんを森崎に紹介した。

「彼女は森崎紀美香。高校の時のクラスメイトです。今はうちの会社の3階の事務所に」

います。で、この人は相沢美咲さん。俺と同じ出荷倉庫課の…又シです」

「又シってなに？ 失礼ね」

そこは聞こえたようだ。みーさんが怒る。

「本当の事じゃないですか」

森崎との事を離した仕返しにからかってつやる。そんな俺の声を無視して、みーさんは森崎ににこにここと会釈をした。森崎もノ何故かこわばった表情で会釈を返す。それを見届けるとみーさんは、「じゃ、あたしは真希ちゃん達に呼ばれているから」と、やけにあっさり退散した。

「元氣いいなあ」

その後ろ姿を見送りつぶやく。そして、同意を求めるように森崎を見ると、彼女は相変わらず顔をこわばらせていた。どうした？まさか、みーさんの下らない冗談にマジに腹立ててるのか？ まさか。

「悪い人じゃないんだけどね」

微妙に焦点をずらして、森崎の気持ちを探ろうとする。すると、森崎が返事するでもなく口を開いた。

「あの人……あの傷は何？」

それで、あつと思う。そうだ、毎日接しているうちにすっかり忘れていたが、みーさんのあの傷は始めて見る人間には物凄くショックだろう。しかし、敢えて何でもないように、つとめてさり気なく答えた。

「あ、あの人障害者なんだ。あの傷の事は聞いた事ないけどいい人だよ。」

「障害者？」

「ああ。こういう工場では、必ず何人が雇わなきゃいけないって、法律で決まっているらしい。他にも2人いるよ」

「河井君の部署に？」

「うん」

「一緒に働いてるの？」

「そうだよ」

「そっか」

森崎は一旦深く頷き、そしてこんな事を言った。

「偉いよ、河井君。良い経験してるね」

「え？」

一瞬返事に困る。

「良い経験かな？ 別にそんなに意識した事ないけど。あ、始めは驚いたけど」

「うっん。良い体験だよ。貴重だよ」

「そうかな？」

と首をかしげる。なぜなら、俺はみーさん達に障害があるからといって、特別優れているとも劣っているとも思わないからだ。ましてや、そういう彼女らと仕事している自分が、素晴らしい経験しているなんぞとは天地がひっくり返っても思わない。敢えて言うなら、彼女らはあくまでも仕事場の同僚である。さらにいえば、なにかと面倒を見てくれるみーさんに対しては尊敬の念を抱いてはいるが、それはあくまで相沢美咲という個人に対してであり、そこに彼女が障害者だからという理由は微塵も存在しない。

とはいえ、森崎のごく女性らしい優しい反応は世間基準としてごくまっとうなものであり、それにとやかく物申す程俺は不粹でもなかった。

その日から、俺の昼休みはみーさんに加え、森崎と過ごすものになった。正直言って、工場内で唯一自分らしくあれる場所と時間を2人も女性に侵入されるのはいかなものかとも思ったが、予想していた程それは不快なものでもなく、そして俺の携帯には新たに森崎の名前が加わった。

新たなつながりは、新たな時間を与えてくれた。その春から俺は休日のイベント会場で、似顔絵を描く仕事を始めることになった。森崎の大学時代の友人や仲間が多く属するとある似顔絵のプロダクションに俺も加えてもらったのだ。つまり、森崎のついでで得た仕事であった。

といつても、似顔絵書きだけで食べていける程の稼ぎは期待できない。前にも書いた通り俺は人物画が苦手だからである。工場や、車などの人工物を病的に正確に写し取るのは得意でも、人の顔を当たり障りなく見栄え良く描く才能には欠けるのだ。いや、苦手というよりむしろ嫌いと言った方が正確かもしれない。なにしろ、じつと人の顔を見ているといやでもアラが見えて来る。どんな美女にも必ず崩れた線を発見する。その現実を眺めるのがどうにも辛い。それでもじつと見ていると、しわやしみや肌のキメがやけに目について来て、しまいにはピノキオのような木の人形が、半魚人を書いていくような気がして無気味な気持ちになる事がある。その苦痛は絵を描くという行為によってギリギリ相殺する事ができた。だから、俺はなんとかその仕事を続けられた。考えてみればわがままな悩みだよな。

俺の描いた絵を見て森崎が感心したように言う。

「河井君の描く線は本当に緻密で綺麗だね」

美咲さんも褒めてくれる。

「写真みたい」

しかし、ひねくれものの俺は彼女らの言葉を素直に受け取れない。写真みたいな絵を描くぐらいなら、写真をとれば済む話じゃないのか？

「でもこれだけ正確に模写できるのは持ち味だと思っけどな」

森崎がフォローしてくれるが、やっぱり釈然としない。

「河井君、設計図とか好きそうね。細かいし」

しかし、今どき設計図なんてCADかなんかで作るんじゃないのか？

「優ちゃんてA型でしょ？」

残念。O型である。

イベント会場には森崎と一緒に事が多かった。彼女も同じバイトをしていたからだ。まれにみーさんも来た。工場付近の大型ショッピングモールで似顔絵を描いていると必ず現れた。みーさんが自分の顔を描いてくれとは言う事はなかったが、かわりに友達を連れて来てくれ、不人気な似顔絵描きとしては随分助かった。

大方は森崎と二人きりだった。賑やかなイベント会場で、行き交うカップルや家族連れなんかを暇にまかせて見ていると、自分達までデートしてる気分になって来る。森崎と俺か…と、彼女を盗み見る。彼女は一心に目の前の客の顔を描いている。

…それもいいかもな。森崎は嫌いじゃないし。と、一瞬幸せな想像をし、すぐに首を振った。…おいおい。妄想はよせよ。キモがられるぞ。っていうかそれ以前に、お前、東京に戻るつもりじゃなかったっけ？ こんなところで彼女作ってる場合じゃないだろ？

それにしても森崎は、快活に喋り、よく笑う。学生時代とは180度な印象だ。学生時代はニコニコと人の話を聞いているだけの奴だった気がするのに……。

「ちょっと、何描いてるの？」

森崎の声に俺は筆を止めた。

「いや、暇だからさ」

「だめじゃん。UFOキャッチャーなんか描いてたら」

「だって、客こないし」

ある、大雨の休日。俺と森崎は、ショッピングモールの一角にあるゲーセン前の広場でやる気なく座っていた。

「もしかして来るかもしれないじゃん」

「来ないって、こんな日。警報でてるんだよ。自分がここにいる事自体が不思議だって」

やる気のない俺の言葉に「まったく」とつぶやき、森崎がスケッチブックを覗き込んだ。

「にしても、河井君は機械物描かせると天才的よね」

「森崎程じゃないよ」

「また…茶化す」

「茶化してないって」

森崎と話しながら俺はUFOキャッチャーの中にぶら下がっている銀色のアームを丁寧に写し取って行く。

「ねえ。河井君てさ、ずっとあの工場にいるつもり？」

「なんで？」

「もっとその…絵に関する仕事したいんじゃないかと思って。例えば、デザイン会社とかさ」

「この才能を埋もれさすのはもったいない事だとは俺も思ってる…でもさ」

「でも、何？」

「それ系の会社に就職するつもりはない」

「どうして？」

「俺、自分の絵嫌いなんだよ」

「なんで？」

「なんか……。森崎はそんな風を感じる事ない？ 自分の絵が嫌いだって」

「スランプの時とか感じるかな？」

「俺は、半永久的にスランプかも」

「半永久的？」

「そう。何か足りないから自分の絵は大嫌い。でも、描かずにいられない」

「じゃあ、納得せずに描いてるって事？」

「そう」

「私はとりあえず描いたものはある程度納得してるよ」

「俺も前はそうだったよ。ずっと前は」

森崎がふーんと首を傾げた。よく分からないというように。そりゃそうだよな。自分の絵が嫌いなくせに描き続ける奴も珍しいよな。

「じゃあ、一生工場のバイト？」

「それはない」

「じゃあ、他の職種目指すわけ？」

「違う、東京に戻る」

「東京？」

「東京に絵の師匠がいるんだ。その人の元で修行して納得いけるよ
うな絵をかけた時に、プロの画家になりたいと思う」

「…」

顔をあげると森崎が目を丸くしていた。そのとぼけた顔に思わず
吹き出す。

「何？ その顔」

「…東京に戻るつもりなんだ」

「そっだよ」

「そっか…」

結局、その日は誰も客が来ず、おかげで目の前の雑然としたゲー
センの風景を全て写し取る事ができた。森崎も時間を持って余したの
かなんだか力の入らぬくまやひよこの絵を描いていた。どうやら目
の前のぬいぐるみを描いていたらしい。

「東京に戻って画家になる」とか威張ってみたものの、帰りのチ
ケットを得るためのネックである弟、正の状況は一向に改善の兆し
が見えない。毎日ドアに向かい声をかけてみるのだが当たり前のよ
うに返事はなかった。その間にも時間はどんどん過ぎて行く。まっ
たく嫌になる。よくそれだけ人を無視できるもんだな。お前には情
つてもんがないのか？ ていうか、本当にお前はどの部屋にいるの
か？ もしかして居ねえんじゃないか？ お前は本当は引きこもり
になんかならずにちゃんと就職して、遠い街で一人暮らしていて、
おふくろは俺をここに呼び戻すためだけにウソをついているだけじ
ゃないのか？ じゃなきゃこのありえねえ気配の無さはなんだ？
大体トイレはどうしてるんだ？ いくら引きこもりでも用ぐらい足

すだろう？

故郷に戻って2度目の夏が来る頃、半ばノイローゼ気味の妄想を抱き始めた俺の目の前に、7年と9ヵ月ぶりに弟が姿を現した。

それはいつものごとく盆の上に食事を乗せ奴の部屋の前にたった瞬間だった。どどんと音がし、ぐらぐらと家が揺れた。はじめはトラックでも通ったかと思つたが、それにしても揺れ方がくどい。で、俺は思った。こりや地震だよ地震。後に確認したニュース速報によれば、震源地は遠く離れた県庁所在地で、このあたりの震度は4。幸い津波の心配はなかったが、かわりに立て付けの悪いドアが開き、目の前に立つてた俺の額を強かに打った。揺れはしばらく続き、どう逃げるか思案した俺が、ふと目の前を見てぎよつとする。なぜなら半開きになつたドアの向こうの薄やみの中に、水木しげるの漫画に出てきそうな、目のぎよろつとした、青白い顔の痩せた男があぐらをかいていたからである。ばさばさに伸びた髪と、無精髭のせいで極めて判別つきにくくはあつたが、辛うじて面影がある。

「正？」

俺は、弟の名を呼んだ。しかし返事がない。聞こえなかつたんだろう。なぜなら奴はくそ生意気にもヘッドホンなどしていたからである。奴の聞いている音楽のリズムがしゃしゃか聞こえて来る。ヘッドホン越しに聞こえるぐらいだから余程でかいボリュームで聞いているんだろう。っていうか、お前いつもそんな装備だったのか？ そりや俺の呼び掛けにも応答できないわな。

「おい！」

むかついたので、今度は壁を強く叩いてやった。すると、奴は返事のかわりに立ち上がり、ベッドホンを頭からむしり取って乱暴に床に投げ付けた。怒ってるのか？ その割に無表情だな。

やつは能面のような顔で、やる気なさそうにこつちに歩いて来ると、俺の鼻先でぱしつとドアを閉めた。おかげで鼻先を擦りむいた。

次の日、いつものように工場に出かけた俺は、人手が足りんとい

う理由で第一工場の方に回された。そこで任されたのは、運ばれた鉄くず達を選別する仕事であった。ここで、使えると判断されたものは、粉碎、切断、プレス加工され、最終的には溶鉱炉で溶かされて再び世間に有用な金属に生まれ変わる。

俺のすぐ側で黄色いプレス機が音を立てている。四角い穴の中で鉄くず達が箱型に潰されていく。その様子は俺の絵心を強烈に刺激したが、それ以上に夕べ見た貧乏神のとき正の顔を思い出させました。

なぜだろう？ 狭い空間に息苦し気に収まってる姿が似てるせいかな？ そういえば奴も人間としちゃスクラップだしな。そこも似てるかもな。違いといえば、この鉄屑達はここで生まれかわり社会に戻るチャンスを与えられるのだが、弟にはそのチャンスがあるのかどうか予想できない事ぐらいだ。

…で、俺は哲学者のごとく考えた。人間もあの鉄くずみたいなのに簡単に再生できればいいのになつて。そういえば、俺らがガキの頃、『学校で大量生産的に教育される子供達』なんて陳腐な物言いがあり、当時はいちいち大袈裟な大人を笑ったものだが、あの言葉は案外真実をついていたのかもしれない。確かにオレ達は大量生産された商品に似ている。しかも、自分で自分の商品価値を見定める目まです持ってやがる。だから、自分を粗悪品と判定した商品は、さっさと人生を廃棄しちまうんだ。それも別に能動的に選ぶわけじゃなくてさ、この消費社会の価値観に照らし合わせれば、そうせざるを得ないだけだ。いわば運命つてやつだな。って、なんだよ、俺も結構陳腐な物言いしかできてねえじゃん。

そこまで考えた時、サイレンが鳴り響いた。昼休みだ。

「私、免許とつたから、今度みんなでドライブしようよ」

外れかけたスリガラスのこっち側でみーさんがフライをつつつき

ながら言う。

「嘘つけ」

作業着の、金定さんが答えた。60過ぎのこのじいさんも出荷倉庫課の仲間だ。

「お前なんかに免許がとれるか」

「嘘じゃないもん。とれたもん」

金定さん…通称金さんのきつめの冗談にみーさんがムキになる。

俺は、クソまずい工場の弁当を食いながら二人のやりとりを片耳で聞いていた。

今日は第一工場にいるんだから、向こうの食堂に行けばいいのに、ひねくれ者の俺は、あえていつもの現場で昼飯を食ってる。しかし今日は、絵を書くのは無理っぽいな。なにしろ、第一工場からここまで、移動に10分はかかるからな。そこで、なぜか俺は森崎の顔を思い浮かべていた。

「もう。金ちゃんは乗せてやらない。真希ちゃんと、ユキちゃんと、優ちゃんと、村さんと、いっちゃんとでドライブするんだもん」

「そんなに乗ったらタイヤがパンクするぞ。真希はデブだし」

「デブじゃないわ!」

口の悪い金さんを、真希さんが思いきり叩いた。

いつもながらの平和な風景だ。しかし、みーさんも、真希さんも難聴なのにこういう会話は噛み合うんだよな。金さんが大きな声で喋るからかな。口は悪いけど結構気を使ってるよなこの人。

水槽の向こう側を眺めるようにしてそんな事考えてたら、いきなり10年程前に流行った失恋ソングが鳴りはじめた。携帯の着メロだ。センス悪いな。どいつんだ? って俺のだよ。彼女にメールが届かなくなった日に着メロ設定したのが悪かった。この曲はねえよな。いい加減かえねえとな。にしても、誰から? 森崎か? いつもの場所に俺がないから「どうしたの?」ってかけて来た? まさか。

妄想まじりに携帯を取り出してみると、おふくろからの電話だっ

た。なんだよ、会社に電話してくんなよ。恥ずかしいな。ほやきつ
つも、なぜか嫌な予感がする。なんだ？ この悪寒は？ 俺は同僚
達から離れ、携帯に出た。「もしもし」言つか言わぬかのうちに、
おふくろのテンパリ気味の声が聞こえて来る。

『ああ、優？　すぐに帰って来て、大変なの、正が、正が、自殺…

…自殺』

「はあ？」

一瞬、事態がのみこめない。

『お父さんが止めてるけど、お母さんは歩けないの』

「おい、何がなんだかさっぱり分からないよ。正がどうしたって？
じさ…つって？」

最後の方は声をおとして言う。

『いいから、帰って来て。正が…、あ、お父さん！』

そこでガシャーンとガラスが割れるような音が聞こえた。

「おい、どうした？」

しかし、そこで電話が切れてしまう。これは、ただ事ではない。

俺はすぐに課長に許可をとり自宅へ向かった。

車に乗り込み、少ない情報から事態を推測していく。おふくろの言葉『正が自殺』『お父さんが止めている』『お母さん歩けない』そして、ガラスの割れる音…。そして、夕べ見た正の暗い怒りを秘めた瞳。…そうか！ あいつ、自殺未遂しやがったな。それを親父が止めてる違いはない。さらにおふくろは歩けない状況にいるようだ。怪我でもしたのか？ それにしても正が自殺未遂とは。部屋から出る度胸もないあいつが…。

帰宅してみると、大体推測した通りだった。

2階の奴の部屋の割れたガラスの前で、親父と正が揉み合っている。正は頭から血を流し、その手にはバットが握りしめられていて、殴られたんだろうか親父の顔には痣ができています。おふくろはといえば、ドアの側にうずくまって唸っていた。10メートル程先に子機が転がってツーツー音を立てている。なんだ？ この有り様は。

俺は、おふくろを飛び越え、親父と正の間に割って入った。弟は

俺を見て一瞬怯んだが、すぐにバットを振り上げ鬼のような形相で飛びかかって来た。辛うじてそれを避けると、後ろに回り奴の腕をつかんでひねり上げる。ずっと家に引きこもってた正に抵抗する力はない。俺は奴の手からバットを取り上げ、ぼさぼさの髪をひつつかみ、やせこけた顔を床に押し付けてやった。正が悲鳴をあげる。

「何やってるんだ？ お前は」

兄貴の威厳でもって叱りつけた。しかし正はひいひい悲鳴を上げるばかりで答えない。

「正ちゃん、自殺しようとしたのよ」

おふくろが顔をしかめながら言った。

「自殺？」

やっぱりそうか。

「この部屋の中から、おかしな音がするから、お母さん不思議に思っけて開けてみたんだよ。そしたら、正ちゃんがバットで自分の頭を叩いていたの。頭から血が出てたから慌てて止めに入ったんだけど、つきとばされちゃって」

「怪我でもしたのか？」

「足の骨が折れたかも。でも、お母さんは大丈夫。それより、正ちゃんはやんは？」

「こんな奴にちゃん付けするなよ」

「でも、正ちゃんの方がすごい怪我だもの」

「関係ないだろ」

「ごめんね、正ちゃん。部屋を覗いたりしてごめんね」

「なんでおふくろが謝るんだよ？ むしろ謝るのはこいつだろ？」
「ったく、おふくろがそんなだから弟はこんな風に立派な馬鹿野郎になっている正を見下ろし、そして俺はぎよつとした。なぜなら正の頭を中心に、どくどくと流れる血液が床を赤く染め、俺の足にまで達していたからだ。慌てて足をずらす。なんじゃあこりゃあ？ あ、そうか、奴の割れた額から流れる血のせいか。はつきりいつて引い

たぞ。いや、引いてる場合じゃないって。「おい、大丈夫か正？」と弟に声をかける。

「病院へ連れていこう」

親父が言った。俺に話しかけているのだろうか？

「母さんは、お父さんが支えて車まで連れていくから、お前は正を連れて来てくれ」

どうやら俺に話しかけているらしい。それは、俺がこのくそ親父に勘当されて以来、実に2954日ぶりの出来事であった。

「分かった。運転も頼めるか？ このバカ絶対に暴れるから俺が押さえておかないと」

「その怪我では、もうその元気もなさそうだが、いいだろう。運転しよう」

こうして家族4人が車に乗り込み、川向こうの大病院に向かった。正はすっかり観念したのか大人しい。応急処置でまいてやった包帯の上から額を押さえている。「大丈夫か？」と時折声をかけながら、俺は小学6年生の時に行った長野旅行の事を思い出していた。ビーナスラインで俺が車酔いした時に、こいつ心配して背中さすってくれたよな。あれが最後の家族旅行だったな。

10分程で病院に辿り着いた。おふくろは本人が言った通り足を骨折しており、軽い手術が必要との事でしばらく入院する事になった。正の怪我は10針程ぬう事にはなったが、見かけ程の重傷でもなかったようでその日のうちに家に帰ってよしという事だった。痛がるおふくろには親父が付き添う事になった。正の治療は時間がかかることなので、俺はおふくろの着替えをとり一旦家に帰ることにした。戻りついでに正の部屋の割れたガラスの処理や、よごれた床の始末をする。デスクトップ型パソコンと山積みの漫画とテレビの置かれた小さな城。なる程、ここでなら何年でも暮らせるかもしれない。

4時すぎに再び病院に戻る。会計のコーナーに正がうつむいて座っているのを見つけ、声をかける。

それにしても、久しぶりにこの世に戻った正の青白い姿は、清潔な病院のロビーにはあまりにも不釣り合いだった。襟の伸び切ったグレーのTシャツに、紺色のジャージ。治療の為に切ったのか、髪が短くなり多少はこざっぱりしたのが救いだが、初夏の陽光の中の生き生きとした景色にはとても溶け込むような代物でもなく、奴もそれを自覚してか逃げ込むように車に乗り込んだ。

帰る道すがら俺は弟に聞いた。

「なんで、自殺しようなんて思った？」

どうせ返事はないだろうと思っていたが、意外にも奴は答えた。

「お前のせいだ」

「俺の？　なんで？」

「お前が俺の部屋をのぞいからだ」

「のぞいた？　ああ、昨日の夜のことかよ。あれは地震で勝手に扉が開いたせいだろ？　俺のせいじゃないよ」

「っていうか、お前は鶴か。」

「こんな風に全身を見られたからには、今度こそ必ず死んでやる」

「おいおい……」

俺はため息をついた。

「一体、何に絶望してるんだ？　兄ちゃんに言ってみる。できる限りの力になるから」

「絶望だつて？」

と奴は鼻先で笑った。

「絶望だつて？　元々なんの希望も持ってなかった僕が、絶望だつて？」

「あのなあ」

腹が立って来る。

「何も知らないくせに、いつちよ前の哲学言っんじやねえよ。お前のおかげで、周りがどれだけ迷惑してると思ってる？ お前がそんな風にならなけりゃな、俺だってこんな所に戻らずにすんだんだぞ」
個人的恨みであった。

「結構な身分だな。大学中退して好き勝手やって」

「結構な身分で好き勝手やってるのはそっちだろう？ 働きもせず
に」

「偉そうに言うなよ。お前だって、たかだかフリーターだろ？」

「なんだと」

なんだか目くそ鼻くそみたいな言い争いである。だんだん空しくなつて来たころ、奴も同じ事を感じたのか黙りこくってしまった。

そして外界から身を守るがごとく体を丸める。バックミラー越しにその姿を見て、俺はさすがに哀れみを覚えた。

「なんで、他人に姿を見られたくないんだ？」

「……」
「一体、何が面白くないんだ？」

「……」

「無視かよ」

「……」

「ああ、いいよ。勝手にしろよ」

「……」

「だが、兄貴としてひとことだけ言っておく。世の中確かにそんなに楽しいもんじゃないが、悪い事ばかりでもないぞ」

「……」

家に帰ると、奴は再び自室にこもってしまった。それで俺は、奴の部屋のドア越しに奴に宣言してやる。

「おふくろがいないから飯は自分で作れよ。俺は自分の分以外は作る気ないし、あの親父が飯作るわけがないからな」

相変わらず返事はないが、この際放っておこう。人間、腹が減り

や嫌でも働くものさ。俺は甘やかさないぞ。ざまあみる。スパルタだ、スパルタ。悦にいりつつ階段の手すりを握った時、俺はふいに立ち止まった。一度自殺未遂を謀った弟が餓死を選ぶ危険性が頭をよぎったのである。

「おい！」

俺は再びドアの前に立ち怒鳴った。

「やっぱり飯ぐらいは用意してやる。それから、お前がまた変な気を起さないようにしよっちゅう見に来る。ドアをノックした時に返事が無ければ、容赦なくここを開ける。分かったな」

返事が無い。

「分かったかと聞いてるんだ」

無反応。

「開けるぞ」

ドアノブに手をかけ、力を入れる。すると中からつつとっしげにドンドンと床を鳴らす音がした。

おふくろに続き、親父が入院してしまった。夜中に付き添っていたおふくろの病室で心臓が痛いとうずくまり、そのまま別室に運ばれた。心臓は悪く無かったが胃に穴が開いていたらしい。正の自殺未遂は70近いじじいにとっては重すぎるストレスだったようだ。知らせを受けた俺は、今度は親父の着替えを持って病院に行くはめになった。ベッドの脇にタオルや下着を片付ける俺を親父は無言で見っていたが、やがて低い声でぼそりつぶやいた。

「正は、なんでああなんだ？」

「俺が知るわけないだろう？」

「お前なら分かるだろう？」

「なんでだよ？」

「お前も、私達を恨んでいるだろう？」

「……」

何を言い出すんだこの親父は。俺がこっちに戻って以来ひとことも喋らないと思ったら、心の中でそんな事考えてやがったのか。

鼻の中にチューブを入れられシューシュー音立てて、そんな事言ってる親父がちょっと哀れになり、今更どうとも思ってたねえよと答える。

いや、恨んでないといつてしまえば嘘になる。俺は子供の頃から絵が好きだったが、不幸にも勉強ができてしまった。そのせいで、高校に入り真剣に将来を考え、某芸大の美術科を志望した俺に向かい、両親も、担任までもが猛反対をした。その時、反抗する根性でもあればよかったのだが、割かし素直で人がよかった俺はあっさりと大人達の言葉に従ったのである。そして、T大学工学部という何やら馴染みのうすい学科に入ってしまったから、強烈に後悔するはめになる。

もし、芸大に入っていればと何度も思った。そうすれば、同じ夢を持つ仲間を……つまり人脈を得る事ができたらうし、基礎から学ぶ事ができただろうから、今のような悪戦苦闘もしなくてすんだかもしれない。俺の絵には、何か肝心なものが欠けている。だから俺は自分の絵が好きではない。もし、芸大に行っていれば、その欠けた何かもやすやすと埋められたかもしれない。

しかし、そんな過去へのIfが何になるだろう？ 第一、両親に従いT大を目指したのは俺自身の選択である。

しかしそれ以上に俺が親父に対して抱いていた怒りは、弟、正をあんな風にしてしまい、俺をここに呼び戻さざるを得なかったふがいなさに対してであった。しかし、それも、この老いぼれぶりを見れば仕方ないかと思う。昔は怖い親父だったが、今や腕力も口でも俺の方が勝っているだろう。俺が何とかしなきゃしかたねえだろ。

「父ちゃん、余計な事考えると、胃の穴ふさがらねえぞ」と言い残し、病室を後にした。

その日から、両親の見舞いと、弟正の面倒を見る毎日はじまった。家族のために働くのは苦にならないが、弟の食事を運ぶための一歩一歩が、両親の為に車を走らせるその距離が、東京と自分の間をどんと引き離していく距離のように感じる。人生とは旅に似ていると思った。

6月の下旬。1階のソファで居眠りしていた俺は、庭先からのクラクションに起された。ベランダ越しに外を見ると低い垣根越しにシルバーの車が止まっていて、窓から森崎が顔を出している。

ベランダを開け、声をかけた。

「森崎？」

森崎は俺の声に気付くとこちらに向かって手を振った。

「元氣？ お見舞いに来てあげたよ」

「一人で来たの？」

「みーちゃんと」

森崎が答えるのと同時に、彼女の後ろからみーさんが顔をのぞかせた。

「みーちゃんの運転よ」

「へえ」

俺は驚いて身を乗り出した。

「上がっていけよ」

「車、どこに停めたらいい？」

と、みーさんの声。俺はうちの前でいいよと言って、二人に上がってもらった。

「あの車、買ったんですか？」

キッチンで麦茶を入れつつみーさんに尋ねる。

「うん」

「凄いですね」

俺は感心した。よく、あの工場の稼ぎでと思ったが、そういえばみーさんは俺と違って正社員だったな。

「夕べ二人でドライブしたんだよねー」

森崎が楽しげに言う。

「ねー」

とみーさんが頷く。

「タワー？ ああ、あの河原にできた新しいやつ？」

「そう。上まで登って来た。夜景が綺麗だったよね、みーちゃん」

「みーさんの運転で？」

「そうよ、綺麗だったよね、紀美ちゃん」

内心俺は驚いていた。金定さんじゃないが、まさかこの人に免許がとれると思ってなかったからだ。ガラスのテーブルに置いた麦茶を枯れ枝のように瘦せた手で持ち、みーさんはおいしそうに飲み干した。その指先にまで届く無惨なケロイドに思わず眼が行く。

「ああ。おいしい。今日も忙しかったから」

満足げなみーさん。その言葉に俺は恐縮する。

「すいません。俺が休んでるせいで……人手足りないんですよ」

実は正の自殺未遂から1週間、ずっと会社を休んでいた。みーさんは首を振った。

「気にしなくていいよ。お父さんと、お母さんが一緒に入院したんでしょ？ 優ちゃんも大変だよ」

「うん、まあ。昼間は病院に行かなくちゃダメだし、夜は弟の分まで飯を……」

しまった！ 口を塞ぐ。正の存在は知られなくなかったのに。

「弟さん、いるの？」

森崎が興味を持ったようだ。

「うん。居るよ……」

紹介はしたくないけどね。

「優ちゃん、御飯つくるの？」

しめた、みーさんが話を変えてくれた。

「作りますよ。大してうまくないけど」

笑顔で答える。

「あたしが作ってあげようか？」

何？

「そんな事みーさんに頼んじゃ、申し訳ないですよ」

「ねえ、河井君、会社辞めちゃうの？」

また話が変わった。

「辞める気ないけど、クビになっちゃうかも。親父とおふくろが戻って来るまで家を留守にできないし……」

万が一俺が留守の時にまた自殺未遂なんぞされては叶わない。

「大丈夫よ、5年前あたしの兄ちゃんが入院した時も1カ月ぐらい休んだけど大丈夫だったもん」

「みーちゃん、お兄さんいるの？」

森崎が食い付く。

「居たよ。でも、死んじゃったの。5年前入院した時に死んじゃった」

「……………」
思わぬ告白に俺と森崎は言葉を失ったが、みーさんは世間話でもするみたいに淡々と「ずっとベッドに付ききりだったんだけどダメだった」と話した。話し終わると「トイレはどこ？」と立ち上がった。

みーさんをトイレに案内して居間に戻ると、森崎が涙ぐんでいる。
「あの人は凄いね」

と感極まったように言った。

「あの人が、あんな体で一人暮らししてるの。昨日アパートに招待してもらったの」

「御両親は居ないのかな？」

「居ないって」

と森崎はにじんだ涙を拭う。余程感激したようだ。

「それより、河井君……」

「うん？」

「あさつての似顔絵のバイトの方は来れそう？」

「ああ、そつちもしばらくは無理だな。行かなくても大丈夫かな？」

「かわりの人が来ると思うから大丈夫だけど……事務所に連絡は入れ
てある？」

「まだ。今日中に連絡する」

「それがいいわ。いつ頃から働けるの？」

「今の所分らない。おふくろが全快しないと……」

「大変ね。なにか手伝える事ない？」

「そんな……悪いからいいよ」

「水臭いね」

「だって、やっってもらう理由……ないし」

「2カ月か……」

「え？」

何が？ と尋ねようとしたその時、廊下から悲鳴が聞こえた。み

ーさんの声じゃない、あの野太い声は……。

森崎が驚いて俺を見る。

「誰？ もしかして弟さん？」

「……らしいな」

それ意外に居ないって。しかし、あのバカ、また何をやらかした？

「ちよつと待つてて」

森崎を残して二階の奴の部屋に向かう。が、奴の部屋に着くより先に奴を発見し心臓が止まりそうになる。弟は薄汚れたパジャマを着て洗面所で呆然と立ち尽くしていた。正面にみーさんがいる。どうやら、便所に行こうとして、ぱったりあってしまったってところだろう。一方のみーさんも驚いている。俺は慌てて二人に駆け寄り、半ば強引に弟の紹介をした。

「あ、みーさん。驚いた？ こいつは弟の正。見ての通り怪我してるから、家で休ませている」

俺は弟が引きこもっている事を隠した。なぜって、こいつだって初対面の相手に引きこもってるなんて事知られたくないだろう。俺は奴の面子を守ってやったのだ。具合のいい事に奴は頭に包帯を巻いていたのでみーさんは俺の嘘をあっさり信じた。それで安心して、今度は弟にみーさんを紹介する。

「この人は相沢美咲さん。俺の会社の先輩だよ。とても世話になってる」

弟はやる気のない顔で俺の話聞いていたが、唐突にみーさんを指差し、

「その傷何？」

と尋ねた。彼女の眼の下の大きな傷が気になったらしい。しかし初対面の相手にいきなり指をさしそんな事聞く奴があるだろうか？

その上奴はこう言った。

「ぼろ人形みたいだね、あんだ」

「おい！」

「なんだよ」

「もう、いいよ。さっさと上に行け！」

俺は弟を叱りつけた。

「なんだよ」

「人を指さすなよ。失礼だろ？」

「何で？ 別にいいじゃん。何が悪いの？」

あきれ返る。こいつは心の底から悪いと思っていないらしい。いや、思っていない振りをしているだけか？ いずれにしろ、これ以上ここに居て失礼な事を言われてはかなわない。

「もう、いいよ。さつさと上に行けよ！」

「小便させる」

「じゃあ、さつさとして部屋に戻れ」

俺は弟をトイレに押し込むと、みーさんを連れて居間に戻った。

俺らの姿を見ると森崎はソファから腰を浮かせ心配げに言った。

「大丈夫だった？ なんか怒鳴り声が聞こえたけど」

「うん。大丈夫。優ちゃんの弟さんに挨拶しただけよ」

みーさんは笑って答えた。弟のぶしつけな言葉は、幸いと言っていいのかどうか、耳の悪いみーさんに聞こえなかったみたいだ。奴はぼそぼそとしか喋れないからな。

「弟さん？」

「うん。優ちゃんに似て可愛いよ。でも、鬚が伸びてたね」

「可愛くないですよ、あんな奴」

「怪我してたの。可哀想」

「少しも可哀想じゃないですって」

「怪我してるんだ」

森崎が心配そうな顔する。

「してたよ。頭にぐるぐる包帯巻いてた」

「バツテイング練習してて、頭をぶつけたんです。馬鹿でしょう？」
嘘である。バットを振り回してたのは事実だが。

「大丈夫なの？ 頭なんて…」

「優ちゃん、大変ね。お父さんと、お母さんと、弟さんまで怪我しちゃうなんて」

「ねえ、河井君。やっぱり何か手伝わせてよ」
「でも…」

「そうだ、優ちゃん。あたしと紀美ちゃんとで夕御飯作りに来てあげようか？」

「二人で？」

「みーちゃんと二人だったら手伝わせてくれる？」

「手伝わせてくれるなんて…。じゃあ手伝って下さい。お願いします」

俺はソファから降りて、みーさんと森崎に土下座した。本音を言うとお助かる。ただ一つのひっかかりは正だが：大丈夫。奴は部屋にこもって出て来やしないさ。

二人が帰った後、俺は夕飯を運びついでに正に声をかけた。

「明日から、友達が夕飯を作ってくれる事に決まった。工場が終わった後の夕方、5時過ぎから来てもらう。くれぐれも失礼な事をするな。二人とも仕事をして疲れているのにわざわざ夕飯を作って下さるといふのだ。尊敬しろ。感謝しろ。それと、お前は怪我で療養中につき飯は2階に運ぶという事になってるから、別に降りて来なくていい。いつも通り生活しろ」

言うだけ言うとなささと夕飯を置いて立ち去ろうとした。と、ドア越しにぼそぼそと声がする。

「あの美人も来るのか？」

驚いて立ち止まる。

「来るさ。それより、お前見てたのか？」

「見えたんだ。お前の彼女だろ？」

「違う。けど、おかしな事すんなよ。何かしたら容赦なく殺すからな。本気だぞ」

「もう一人の人は？」

「みーさんも来てくれる。お前。さっきみたいな事2度と聞くんじやないぞ」

「あいつ、変だよ」

「変じゃねえよ。あの人は障害を抱えても自活している立派な人だ。五体満足なのに働きもしないお前の方がよっぽど変だろ」

「皮膚が普通じゃないじゃん。なんであんな風なの？」

「あれはケロイドだろ？ あんな風になるには余程の事があったんだ。人の心の傷をえぐるのはよせよ」

「でもなんか笑ねえ？」

「お前……」

弟の常軌を逸した言葉に腹立ちよりもだんだん悲しみが込み上げて来た。お前、どうしてそんな奴になっちまったんだ？ そんな奴じゃなかっただろ？

次の日、遅めに病院から戻る。おふくろのりハビリに付き合っていたら遅くなってしまった。今日から森崎とみーさんが来てくれる事になっている。玄関の鍵閉めて来たし早く帰らねえと。

俺は慌てて車を走らせ家に戻った。6時を過ぎてしまった。もう、2人も帰ったかもしれない。ところが、家に着くと玄関の鍵が開いていた。台所でみーさんが野菜を刻んでいる。

「よく、入れましたね？」

大きな声で言うつと、みーさんが振り返った。

「お帰り。ごくろうさま」

「玄関の鍵、開いてました？」

「正ちゃんが開けてくれたの」

「え？ 正が」

嘘だろ？ しかし嘘でない証拠にみーさんがここにいる。

一体、どういう事だ？ みーさんが身障者だから？ それにしては夕べの発言はなんだ？ あれは見せかけで実は奴にも弱者への思いやりが残っていたという事か？ それで、7年も引きこもった部屋から自発的に出て来た？ 「弱者への思いやり」をきっかけに？

いや、違う。はつきりとした根拠はないが、『思いやりで』とかそういうレベルの話でないのは確かだ。そんなぐらいで、奴が救われるなら始めから部屋に閉じこもったりしないだろうと思う。じゃあ、何だ？ 興味本位か？

「悪いけど、これ、テーブルに持って行ってくれない？」

みーさんが、器に盛った煮物を差し出す。

「あ、分かった」

とそれを受け取り「森崎は？」と聞く。姿が見えないようだけど。「2人で来てもしようがないから、一日交代にしたの。紀美ちゃんじゃなくてごめんね」

「そういう意味じゃないですよ」

「優ちゃん、紀美ちゃんの事好きなんですよ？」

「また。そういうんじゃないって、言ったじゃないですか」

「別に恥ずかしくないですよ？」

「恥ずかしいとか、恥ずかしくないとかじゃないですって」

「早く、結婚しないと」

みーさんは、結構しつこかった。ぐだぐだと色々語るのもめんどくさくなって来たので話をそらす。

「正、なんか言いました？」

「何って？」

「正、何か話しましたか？」

多分、なにも話しゃないだろうがな、あいつは……。

「うん、話したよ」

「え？」

「どうして、そんな変な皮膚なのって聞いて来た」

あいつ……！

「だから火事でこうなったのって教えてあげた。その後、顔の傷の事も聞いて来たから、それは聞かないでって答えた」

「すいません。あいつ、ちょっと頭が変なんです」

「いいよおー、別に。その後色々手伝ってくれたし。優ちゃんが帰

つて来るまでここにいたよ

「嘘だ」

「嘘じゃないよ。本当だよ。正ちゃんて優しいね」

「嘘だ」

ありえない。

俺のくどい否定をみーさんは笑い、枯れ枝みたいな手で野菜を刻んだ。

みーさんとは機嫌良く話したらしい正だが、夕食に降りて来る気配はなかった。実はそれをちよつと期待していただけにかっかりする。まあそんなものかもな。世の中そんなに甘くないてことだ。

で、いつものごとく奴の部屋に飯を運びドアの外から話しかけた。

「お前、みーさんと喋ったらしいな」

返事があるかとしばらく待つ。

「…」

何も無しか。何だよ昨日はベラベラ喋ったくせに。ムカついてくる。

「お前、また失礼な事聞いただろう。夕べあんだけ注意したのに…」
返事があるわけないが「いいやと開き直り、沈黙相手に喋る。

「人間として最低だな。みーさんは心が広いから許してくれたけど」
「…」

「おい、返事がないって事は死んでるのか？ 開けて確認するぞ」
すると、中からドカンと音がする。生きてるっていうよりむしろ、開けるなって事だろう。開けねえよ、そんな汚ねえ部屋誰がのぞくか。

「明日は森崎が来るからな。おかしな事するなよ」
俺はひとことだけ申し渡し、自室に戻った。

次の日、日課の両親見舞いを済ませて帰ってくると、門の前に森崎が座っていた。彼女は俺に気がつくのと立ち上がった。

「待ってたの。チャイム鳴らしても誰も出て来ないし。弟さん、お出かけ？」

「え？ あ…まあ、そうじゃないかな？ 怪我也大分よくなったみたいだし」

っていうか、あのバカ森崎の前には出て来れないらしいな。

鍵を出し玄関を開ける。森崎はスーパーの袋を片手に台所に入って行った。そして手際良く料理を始める。その後ろ姿を見てなんか良いなと俺は思った。結婚したら毎日こんな感じなんだろうか。小さな幸せってやつだよな。もつとも、その小さな幸せすらつかめない奴も最近はいんだけど。だからって結婚イコール幸せでも無いらしい。全く、複雑だよ。複雑すぎる。

「みーちゃんは、何作ってくれたの？」

「うん、ああ。筑前煮に魚を焼いてくれた」

「おいしかった？」

「おいしかったよ」

「みーちゃんは一人暮らしだから強いよね。私は簡単なものしか作れないの。ごめんね」

「いいよ、作ってもらっただけでありがたいのに……」

森崎が料理してる間に、持って帰って来たおふくろと親父の下着を洗濯する。正のも混じっている。いつの間に入れやがったんだか。その後、風呂を洗い湯をためる。それから洗濯を取り込みたたむ。家事をこなす俺を見て森崎が言った。

「河井君で、良い旦那さんになりそうね」

「なんで？」

「家事、うまいもん」

「一人暮らししてたからね」

「東京で？」

「そう」

「やっぱり今でも東京に行きたいの？」

「まあね」

「そんなにあつちが好きなのに、どうしてここに戻って来たの」

「まあ、色々事情があつてね」

「色々な事情の中身が聞きたいんだけど」

「うん、まあ色々」

「何それ？」

その日、森崎が作ってくれたのはオムライスとサラダだった。「弟さん、遅いね」と言いながら森崎は7時頃帰って行った。弟は待たなくていいからと無理矢理俺が帰らせたのだ。なにしろ奴ならずつと上に隠れてるんだから。」

そして、今日も例のごとく奴のために食事を運ぶ。会話は無い。

それから半月というもの、みーさんと森崎は約束通り毎日のようにやって来て夕食を作ってくれた。正はみーさんが来た時は多少顔を出すらしい。俺はその事を森崎から聞いて知った。

「弟さん、みーちゃんと仲良いみたいね。私が来た時はいつも居ないのね」

「ああ、森崎が来る日がちょうど通院日になってるらしい」

「よく、病院に行くのね」

「おふくろ達の見舞いも兼ねているみたいだよ」

「ふうん……」

そうこうしてるうちに母親が退院し、その付録のように親父も退院して来た。おふくろはまだ杖を必要としたが、俺と親父の協力でなんとか家事一切は行われていった。みーさんと森崎の役目は終わり、俺は1カ月ぶりに社会復帰することができた。

長い間休んだにも関わらず、会社は俺を受け入れてくれたが、俺の居た場所には既にはあさんが補充されており、何となく自分があるぶれもののような感じがして来る。さらに、そのばあさんと元からいるじいさん達が対立し、障害者3名を巻き込んでのくだらん争いがはじまっていた。

やれ、杉村さん（新しく入ったばあさんの名前だ）は楽をしたがるのだ、それは金ちゃんがり過ぎるからだの、両者に言い分があり、板挟みになった俺は「そろそろここも潮時だな」と漠然と思う。しかし、ここを辞めてどこに行くか。小遣い稼ぎだけの為に、また他の工場で働くのか？ 本当にそれでいいのか？ 刻々と時間は

過ぎて行く。気がつけば夏が終わり秋が近付いている。そして、きつとあつという間に冬が来て、正月に紅白なんぞ見ながら「またこの日が来ちまったか」とかぼやくんだらうか？ 冗談じゃねえ。そんな事は2回も繰り返せば十分だ。

しかし、どう考えても俺が東京に戻る可能性は感じられなかった。正は、みーさんにこそ懐いたようだが、おふくろ達が戻って以来は相変わらずの引きこもりっぷりで改善の気配はみられないし、それ以上に、日に日に老いぼれて行く親父とおふくろを見るにつけ、家族を見捨てて勝手な事をする事はもはや出来ないような気になって来る。長男としての責任感が芽生えたのか？ 腹立たしい事である。そんな事ばかりぐるぐると考え眠れない夜が続く。

「なんか最近元気ないよ」

と、森崎が肩を叩いた。

「分かる？」

「やっぱりそうなんだ。何かあったの？」

「うん、そろそろここ辞めようかって」

「東京に行くの？」

「違うけど」

「でも、行きたいんでしょ」

「行きたいけど、でも…」

それから俺は思わず本音を言った。

「もう無理なような気がする」

「なんで？ 行けばいいじゃない」

「そりゃ、究極に身勝手になれば行けるさ。でもなあ、もし、それをやったら、親父とおふくろ死んじまいそんな気がして無理」

「心配し過ぎじゃない？」

「そうかな？」

「そうだよ。行きたければ行けばいいじゃん。人生一度きりだよ。」

好きに生きないと」

「なんだか、やけに援護してくれる。どうした？ 森崎。」

「もういいよ、とりあえずは。それよりさ、前に森崎が言ってたようにイラストの仕事ちゃんとしてみようかなって」

「いいと思うよ。でも、甘くないよ」

「分かってるって」

「そう。それじゃ応援するよ。頑張れ！」

森崎の応援に励まされて力を得た俺は、ヒマを見つけては面接を受ける事にした。しかし、イラストレーターのみの求人などほとんどなく、たまにあっても年令制限と学歴にひっかかる。その上、俺程度の絵の描ける奴など星の数程いるのだ。せめてクリエイティブな仕事をとデザイン会社等も受けてみたが、今度はスキルがないと断られる。絵を描いていた旨を伝えてみれば「そうやってイラストを描く人が人脈を作るためにうちの会社に来たがるけど、実際の現場は君が思っている以上にハードなんだ。そういう考えで来られるのが一番困る」と冷たくあしらわれる。俺は初めて自分の立ち位置を知った。

「ねえ、今度の土曜日二人とも何か予定ある？」

10月の、ある晴れた昼休み。みーさんが言った。

「もし、ヒマなら、3人で遊びに行かない？」

「いいよ。私は大丈夫だよ」

森崎が答える。

「でも…どこに行く？」

「優ちゃんはどこ行きたい？」

みーさんが話を俺に振って来たから、「どこって？」と、スケッチブックから顔を上げ、俺、「そうだなあ」と考える。手元には精密な線で模写されたプレス機が、仕上がりかけていた。ここは、第一工場の敷地内。この間までテリトリーにしていた休憩場所から見えるものは、あらかた写し取ってしまったので、他に模写すべき対象物を探してここに移動してきたのだ。みーさんと森崎には黙っていたはずなのに、なぜか探し当てられてしまった。

「紅葉にはまだ早いよね」

と森崎。

「早すぎるだろう」

と、俺。

「別に紅葉がなくなたって、この辺りを走るだけで十分楽しいよ。あたしが車出すしき。行こうよ。きつとスカツとするよ」

と、みーさん。その言葉に俺は慌てる。

「それは、悪いよ。車なら俺が出しますよ」

「あ、あたしの運転の腕を信用してないな」

「そうじゃないですけど…」

「いいじゃん。みーちゃんにお願いしようよ。腕前見せたいんだっ

て。みーちゃんが疲れたら、私達で交代すればいいだけの話だしさ」
森崎が話に割って入って来てみーさんとなにやら目配せする。

「ねー！」

二人とも妙にテンションが高い。もしかして、俺の事励ましてくれてるつもりか？

そういえば、ここんところ、就職活動がうまくいかないせいで、我ながら暗くなってたからな。2人に気を遣わせて悪い事したかな

「森崎の運転が一番コエーよ」

冗談のつもりで言ったら森崎がマジメにふくれる。

「何だよ？ 失礼ね」

「だって、お前、免許とった次の日にぶつけたって言ってたじゃん」

「そんなの昔の話でしょ？」

二人で言い合っていると、みーさんが口を挟んで来た。

「ねえねえ。アクアリウム・リバーズに行かない？」

「え？」

って同時に言って、ついでに同時に俺らはみーさんを見た。

「アクアリウム・リバーズって、何ですか？」

聞き覚えがない名前だ。

「今年の春にオープンした、淡水魚の水族館よ」

森崎がフオローする。

ふーん。淡水魚って事は、川の魚ばかり集めてるってことか。

しかし、そんな難しい事はこの際どうでもいいだろう。水族館、水族館ね。女2人と男1人の、微妙な組み合わせでいく先としちゃ悪くないかも。

「そうしよ、そうしよ。私も一度行ってみたかったの」

森崎のひとことでアクアリウム・リバーズ行きが決定した。

みーさんが、細い手で器用にハンドルを動かす。本音を言えば、はじめは、この人に運転を任せる事が怖かったのだが、あつという

間にそんな不安は解消してしまった。要するに、みーさんは普通レベルで運転がうまかった。

青空の下、快適に車を走らせ、1時間程でアクアリウムに着く。人込みをかき分け、イワナやら鱒やらカワウソ達が遊ぶ水槽をめぐり、敷地内の喫茶店で軽く昼食をとる。

「川の魚も結構面白いね」

と、サンドウィッチをほおばり森崎が言う。

「意外にね」

みーさんが答える。

俺は、白い建物の上のイワシ雲をぼんやり見上げ、ついでに、本物のイワシが食いたいと思う。正直、この野菜サンドは、たいしておいしいはなかった。とかいって、すっかり全部食ったけどさ。

「晴れてよかったねー」

と、みーさんが伸びをしながら言った。

『食べた後に伸びしちゃう行儀悪いのよ』とか言ってた、母親の顔を思い出すでもなく思い出してた俺に、みーさんが、ほほ何の脈絡もなく、唐突に同意を求めて来た。

「やっぱり、正ちゃんもくればよかったのにねえ」

「はい？」

誰って？

「あれ？ 正ちゃんから。何も聞いてない？」

「聞いてない…あいつ、忙しいらしくてさ…しばらく顔を合わせてないんだ」

俺は死んだら地獄に落ちるだろう。

「そうなんだ。あたし、今日の事、正ちゃんも誘ったんだけど。断わられちゃったの」

「そりゃあ、そうだろうね…」

思わず本音が口にする。あいつが来るはずがない。いや、そんな

事よりも…。

「みーさん、正と連絡とってるの？」

「とってるよ。あたし達、メル友なの」

「メル友？」

嘘だろう？ あいつ携帯なんて持ってねえよ。必要ねえもん。…

あ、そうか。パソコンのメールか。しかし、あいつ、いつの間にアド交換なんて生意気な事してたんだ？ てな事思ってた俺は、さらに驚愕の真実を知る。

「正ちゃんからメル友しよって言うてくれたんだよ」

「うそだ…」

あいつからだって？ 天変地異が起きてもありえない。ってな、てな事思ってた俺は、さらに、さらなるおそろべき真実を知る。

「正しちゃんて、おもしろい子だよ。『みーさんの事を考えると、僕は勇気がわいて来るようです。そんな体なのにまじめに働くなんて、大変でしょう？ 今日もお互いに仕事頑張りましょうね』って毎日メールしてくれるのよ」

「うそだ…」

俺は再びつぶやいた。あいつに、そんな人間みたいな心があるはずがない。あいつも死んだら地獄に落ちるに違いない。

「河井君の弟さんてみーちゃんとは仲いいんだ…」

森崎が不満げにつぶやいた。

「私とは、顔合わせようともしなかったのに…」

まずい、やつが避けてた事に気づいたか。

「私って、もしかして嫌われてたりするのかな…？」

「そんな事ないって。タイミングの問題だって」

とか、嘘の上塗りをして、「そろそろ、あっちの建物行こう。あつちはまだ、見てないだろ？」と、東の青い建物を指さした。

それから、熱帯の湖のカラフルな魚達や、でかいメコン大ナマズや、小型ワニ、ピラニアなんぞを見て、こいつら、ナカナカ絵心を

そそるなと思いながら、その後は隣接するオアシス・ランドなる公園で、子供連れの家族に混じり観覧車を見つめながら、精一杯秋の一日を満喫する。そうこうしているうちに、夕方になった。俺達は、ライトアップされた『オアシス・キャンドル』や噴水を後にし、車に乗り込んだ。

帰りの運転は、頑として俺が引き受けた。行きは結局全部みーさんにまかせてしまっただけに、今度こそ、男としても引き下がるわけには行かない。

バイパスを走る道すがら、森崎が聞いて来る。

「就職活動、どう？」

「うん。ぼちぼちやってるよ。でも、全然ダメ。しばらくは、あの工場に厄介になるかな。…へたすると、一生…」

「何？ 優ちゃん工場やめるの？」

みーさんがちよつと驚いたみたいな顔する。

「…なんだ、なんだ。何も知らねーのか？ この人。…って、俺も、なんにも話してねーんだけどさあ。けど、森崎から少しぐらいは事情を聞いてるものと思ってた。だから、今日の、コレ、誘ってくれたのかと…俺が転職うまく行ってないの知ってて元気づけてくれようとしたのかと…もしかして、単にへこんでたから誘ったってだけ？」

「…か、遊ぶのに理由なんかいらねーか。」

「俺ね、転職しようかと思ってるんだ」

俺はみーさんに告白した。

「は？ 何って？」

しかし、何言ってるか分かんねえらしい。

「工場辞めようと思ってるんです」

「え？ 辞めちゃうの？」

…通じたようだ。

「そう。でも、次に働く所がナカナカ見つからなくてね…困ってるんです」

「そうかー。優ちゃん辞めちゃうのかー。あたしも辞めたいなあ。杉村のババア大嫌いだし」

と、彼女は自分と敵対している、例の新入りのおばちゃんの名前を憎々しげにつぶやいた。…やれやれ、と思う。

それきり、しばらく話題が途切れ、カーラジオから音楽ばかりが流れる。音の途切れ目で、ふと気がつくと、みーさんが、すーすと寝息を立てていた。それで、俺は森崎と二人きり、薄闇の中にとり残される。

「無邪気でうらやましいな。みーさんは」

「疲れてたのよ。行き、ずっと運転してたし」

「結局、行きの道全部ね。すげえよな」

「あたし、障害者の方が免許とれるって知らなかった」

「俺も」

「ガッツのある人だよな」

「確かに」

「ねえ、ところでさ」

「何？」

「この間、デザイン学校時代の先輩が独立して事務所持ったんだって」

「ふうん。すごいね」

「それで、今、イラスト描ける人を探してるんだって」

「そう」

「よかったら、河井君、やってみない？」

「え？」

俺は驚いてミラー越しに森崎を見た。

「…いや？」

「いやじゃないよ。そりゃ、嬉しいけど…なんで、俺を…」

「河井君の絵が好きだから、このまま埋もれさせたくないの…」

なんだそんな理由かよ、と少しがっかりする。

…って何を期待してたんだ？ こんなところで、レンアイしてるヒマはないって決めてたじゃないか。いや、まてよ？ 俺は東京はあきらめたんだっけ…

とか、何とかうじやうじや考え込んでると「あのさ」とやけに真剣な声で森崎が言った。

「私、前に勤めてた会社でつきあってた人がいたんだ」

「ふうん…そう…で、今でも付き合ってるの？」

「ううん…」

森崎の否定に、なぜかホツとする自分がいる。

「妻子持ちだったし、このままずるずる続けてちゃダメだと思って

…それで、前の会社辞めたの」

「そうなんだ」

確か『デザイン』の方向性が合わなくてやめた』とか言っていたが、嘘だったか。しかし、俺はあえて深くはつつこまなかった。

「会社辞めてからしばらくは、立ち直れなくて、働く気が起きなくて、引きこもっていたんだけど…」

森崎が何気なく口にした『ひきこもる』という言葉にドキツとする。

「でもさ、生きてると不思議なことが起きるもんだね」

「不思議な事？」

「そうよ。奇跡よ」

「奇跡？」

「変？」

「別に変じゃないよ。でも、何が奇跡だったの？」

「そうね、今、こうして、河井君やみーちゃんと3人でドライブしてる事かな？」

「何それ？」

思わず吹き出したら、みーさんが目をさましてしまった。それで、俺は森崎のその言葉の真意を知ることができなかった。

けれど、確かに、生きていると、時々奇跡みたいな出来事が起きる時がある。だから、生きよつと思えるのだ。その先に出会うかも
しれない、奇跡を信じて…。

続く

しかし、人生とはしばしば希望よりも絶望の色合いが濃いものなのか。

俺は森崎に紹介してもらったデザイン会社に1カ月ほど勤めたものの、あっさりと辞めてしまった。辞めたといえば聞こえがいいが、実は首になったのである。

理由は色々ある。

自分の名譽のために格好良く理由をつけるなら、事務所の求めるものと、自分の目ざすものが違ったとうことだ。

主に広告用のチラシ製作をしているこの会社において芸術性などというものは無視される。大切なのはクライアントに気に入ってもらえるものを、いかに短時間で、要領よく、そつなく仕上げるかである。それだけの事である。それだけであるのにもかかわらず『それだけの事』が俺にはこなせなかった。なぜなら、ひたすら自分のこだわりを追究してしまうからである。

こだわりを追究すれば時間がかかる。いいものを創るには絶対的に時間がかかると俺は信じている。しかし、クライアントは「いいもの」など求めない。自分の満足できる範囲内ですばやく見栄えのいいものを仕上げて来る事だけが重要なのだ。

そして、さらに、これが致命的ふあったのだが（致命的であることは目に見えていたのだが）俺はソフトの扱いに慣れていなかった。

「せっかくの紀美香の紹介だけど……」

森崎の先輩にあたる俺の上司は申し訳なさげに言った。

「うちが欲しいのは即戦力だから…」

「俺は絵の仕事がもらえらと思つてたんですけど…」

「残念だけど、うちにはそんなにイラストの仕事はないし…。紀美香にちゃんと説明しておかなかった私も悪かったの。ごめんね」

11月下旬。

そろそろ木枯らしの吹きかける街頭で、この世界から一人置き去りにされたような気になる。

どこをさがしても、袋小路から抜け出る術はない。いつそ正のようにならな小世界に閉じこもつてしまおうか。そうすれば、親父とおふくろは2人の大きな赤ん坊を抱え途方に暮れる事になるだろう。しかし、それもすべて自分達の責任である。ざまあみろだ。いや、それとも…。

と、俺は欄干越しに流れる川を見下ろした。川面は鈍色に白々しく日の光を反射させながら流れつづけている。

…いつそ、ここで身を投げれば楽になるんだろうか？

不吉な考えにとりつかれた時プルプルと携帯がなった。森崎からだ。だった。

「ごめんね」

開口一番森崎が言った。

「なんで謝るの？」

川面を眺めたままぶつきらぼうに答える。

「私の考えが甘くて、河井君にも先輩にもいやな思いさせて…」

「別に、森崎のせいじゃないだろ？ いい年こいて何もできないのは、今まで怠けてた自分のせいだ。因果応報つてやつだ」

「でも…」

「もういいって」

多少きつい口調で言うと、森崎は黙ってしまった。

川沿いに町並みは続いて行く。既に夕暮れが迫り、気の早いクリスマス仕様のイルミネーションが光が川面に映っている。その美しさがやけに空々しく感じる。

「ねえ」

森崎が俺の真横に立った。

「少し歩いて話そう」

それで俺達もきらきら光るイルミネーションの中を歩くはめになった。居心地の悪さばかり感じる。

「あのね」

と、森崎が光の中で言った。

「もし良かったら、私ソフトの使い方教えてあげるよ。そうすれば、きつと…」

「もういいよ」

俺は怒った。同じ年の、多少の恋心を抱いた事もある相手に、ここまで気をもませなければならぬ自分がない自分が、たまらなく情けなくなつたからだ。

「俺にはやっぱり向いてないんだよ。会社勤めなんて…」

「…じゃあ、どうするの？ これから」

「どうにかするぞ」

「どうにかって、どう？ どの世界もそうだと思うけど…いい加減にやっつてうまくいく程世の中そんなに甘くないよ」

分かりきってるよそんな事は…と、食い下がる森崎が少々煩わしくなる。

「いいんだよ。別に俺は東京に戻る気だし。ここで定職をみつける

気もないし」

「いつ？ いつ戻るのよ」

「森崎には関係ないだろ？」

「そうやって、目の前のことから逃げてるだけじゃないの？」
「もういいから、俺の事は放っておいてくれよ」

どこからかクリスマスソングが流れて来る。11月に何がクリスマスだ、嘘くさいと思う。

森崎は泣きそうな顔をした。しかし、泣き崩れる事はしなかった。かわりにこう言った。

「分かった。もう、よけいなおせっかいしない」

「それが賢明だな」

「キズつけてごめんね。さよなら」

「ああ、さようなら」

「…」

「…」

「…だとおもったんだけどな」

「は？」

「あの工場の前で偶然河井君見かけた時…」

「何？」

「もういいわ。私がバカだったのよ。子供みたいに…」

「何言ってるんだ」

「さようなら」

「おい！」

呼びかける俺に目もくれず森崎は足早に去って行く。それを追いかける気力もなく俺は脱力する。とはいえ、いつまでもそうしてられないから金と銀の光りの中を俺はよろよろ歩き出した。袋小路に迷う哀れな仔羊の頭上に、聖なる歌は降り注ぐ。

その日から俺は一週間ほど部屋に閉じこもった。

閉じこもって何をしてたかったというと、ひたすら絵を描いていた。

モチーフは思いつく限りの人の顔だった。

うるこ人間や、木造人間、メタル人間、プレス機に押し潰された人。溶鉱炉でどろどろにされ再生される人、人、人…。

一度、母親がふいにドアを開け、足の踏み場もなく散乱した画用紙を見て悲鳴をあげた。

「あんたは気がふれたの？」

「大丈夫だよ」

俺は笑顔で答えた。

「俺の絵を完成させようとしてるんだ。いつか完成するさ」

しかし、描けども描けども思う通りの絵は描けない。そして一週間後。ついに俺は散らばった画用紙の上に昏倒した。薄れる意識の中に一枚の絵が浮かんで来る。

…つぎはぎのマリア。

あれは、俺の人生を狂わせた絵だ。

師匠の描いた…あの絵。

…どうしたら、あんなふうに…。

神様の不良品

目を覚ますと昼だった。

深夜、昏倒してそのまま寝てしまったようだ。色々な夢を見たが何一つ思えていない。ただ、やたらと癒される夢だったような気がする。

起き上がり、ボリボリと頭をかき、一週間ぶりに部屋から出る。階下の洗面所で顔を洗う。

何やってるんだ、お前は？

って、差し向いの無精髭の男に話しかける。

みっともねえ顔しやがって。これじゃ、正と同じじゃねえか。

まったく、こういうのをミイラとりがミイラになったって言うんだろうか？ ちょっと違うかな？ などと自問自答し、まあ、どうでもいいやと速効で結論付けると、鬚を剃り、洗濯済みの服に着替えた。

なにしろ、いいかげんに職探しにでも行かないとやばいだろう。とりあえず、まだ引きこもりになる気はないからな。

家の中はシーンとしている。両親は出かけているようだ。最近二人ともよく外に出かけている。家にいたってノイローゼになるのが関の山だから俺が進めたのだ。

そしているはずの弟の気配は相変わらずまったく感じられない。

職安を後にし、車を走らせる。

激しい徒労感にさいなまれていた。望むような職が見つからなかったからである。果たして、この町に俺の居場所なんかあるんだろうか？ 家族のために犠牲になるという行為、それ自体は美しくはあるけれども、『俺にとつて』それが本当に正しいといえるのか？ なんだか子供のころに読んだ杜子春で物語を思い出す。正直、昔読んだ時はよく意味が分からなかったが、もしかしてこういう事なんだろうか？

などなごらちもない事を考えていた時だ。ふと窓の外を見た俺の目に異様なものが飛び込んで来た。

それは、ひとことと言えばみの虫だ。いや、みの虫みたいな男だ。多分、何枚も重ね着をしているんだろう。しかし、いくら冬とはいえ着込み過ぎだ。だるまのように膨れ上がっているじゃないか。一番上に羽織ったどてらは、おそらく元は別の色だったのだろう。Ck褪せた茶色で、その上に灰色のマフラーをして、頭には煎茶色のニット帽をかぶり、そこからはボサボサの髪がのぞいていた。顔がよく見えなかったのは、薄暗いからというよりもむしろ奴が後ろ向きにどぶ川を眺めていたからである。

「なんだありゃ？」

思わず口をついて出る。

世の中には妙な奴がいたもんだ。その風体のあまりの馬鹿馬鹿しさに少しだけ憂さが晴れた気がした。

結局望むような職にはつけそうにもないとあきらめ、数日後、隣の工場にバイトで入る。手っ取り早く稼ぐにはそれしかなかったのだ。

そこは大手企業の工場で、俺は荷物運びをまかされた。

しかし、そこではもう絵を描く事はなかった。無機質な工場内はモチーフに事欠かなかったが、それらを描く事に自分自身が倦んで来たからである。しかし、さて、それでどうする？ お前は何を描く？ 何が描きたい？ という（あの日以来提示された）問いかけの答えは、行く先見えぬ未来以上に曖昧模糊としている。それがはつきりと見えない限りどうしても描く気にはなれない。

そんな具合に一週間ばかりたったころ、みーさんからメールが入った。

『次の土曜日にクリスマスパーティーやるけど優ちゃんも来る？』

みーさんが、懐かしいな。

と、休憩時間、人気のない倉庫裏のフェンスにもたれて思う。なにしろ、前の工場を辞めてからわずか二カ月しかたっていないのにもう何年もたった気がしていた。

クリスマスか……。たいして興味もなかったがとりあえず返信した。

『誰が来るんですか？』

メンバーは重要である。（しかし、みーさんには会いたいなと思う）

しばらくすると返事が来た。

『まだ、ちゃんと決めてないけど、とりあえずキミちゃんには声をかけたよ』

キミカ…その名前にドキッとしたところ、続けざまにメールが入って来た。

『優ちゃん、キミちゃんとケンカしたってね。どうして？』

『別に色々あって…』

と返信すると、またすぐに返事が来た。

『許してあげなよ。キミちゃんさびしそうだよ』

許すも、許さないもないが、みーさんの言葉で俺はあの夜の事を痛烈に思い出した。別に今まで忘れていたわけではない。あえて心の外に置いておいただけだ。しかし、今、落ち着いて考えてみれば、何もあんな態度を取らなくてもよかったと思う。

『どうする？ くるでしょ？』

みーさんから半ば強制的なメールが来た。

俺は随分迷いつつも返信した。

『分かりました。行きます』

まだ、やり直しはきくだろう。

何をやり直したいのか、そしてそれを本当にやり直したいのかどうかも定かではないけれど、俺はそんな事を考えていた。

12月24日 土曜日

俺はミーさんのアパートに向かった。

三婆沙メタル工場から東に徒歩2分というヒントと住所をたよりにたどりつけば、そこはアパートとは名ばかりの…むしろ長家といった方がふさわしい…トタン屋根の今にも崩れそうな平家一階建てのボロ家であった。

かろうじて設置された配線むき出しのインタホンを鳴らすと、ミーさんがドアを開けて「いらっしやい」と招き入れてくれる。外見の割にはこざっぱりと整っており、入ってすぐの台所を通り抜けた奥の和室には、大きな鏡台が置かれていた。

「優ちゃん1番のりね」

子供相手みたいにミーさんが褒めてくれる。別に嬉しくもなんともないが、とりあえず出された座ぶとんにあぐらをかいて、じつくりと部屋の中を見回せば、壁に金や銀のモールが飾られクリスマスらしい雰囲気になっている。あの枯れ枝のような手で一生懸命部屋を飾り付けるミーさんの姿など思い浮かべていると、当のミーさんがケーキを持って来てこちらにやって来た。

「小さくてごめんね。でも、3人ならこれぐらいで十分よね」

3人？ てことは俺とミーさんと森崎ってことか…。思ったより人数が少なかったが、俺にはそのほうがかえって良かった。

みーさんはパタパと部屋の中を走り回り皿や料理を並べている。一人でやらせるわけにもいかず、

「俺もやるよ」

と立ち上がり台所に入る。

「ありがと。じゃあ、お皿並べてくれる？」

「うん。買い出しとかあったらやるけど？」

「買い出しは昨日手伝ってもらってすませた」

「え？ 森崎に？」

「違うよ。キミちゃん今日はやっぱり無理だった」

「え？」

みーさんを見た。

「だって、今日来るの3人って…」

森崎以外に、他に誰が来るっていうんだ？ 真希さん？ 金さん

？ 色々候補を考えていると、俺の言葉などまるで聞こえていない

かのようにみーさんが言った。

「あたし思うの。仲直りするなら、ちゃんと優ちゃんから連絡した

方がいいって…優ちゃん、キミちゃんのこと好きなんですよ？」

「それは…」

…そう真正面から聞いたただされると答えに困る。しかし、みーさ

んときたら俺が森崎を好きだとやみくもに思い込んでいたように。

「隠さなくてもいいよ。見てれば分かるよ」

そうだろうか？ 確かに森崎の事は好きだ。あんな別れ方したま

まで終わりたくないと思う。だが…

「ねえ。いつもいっつもキミちゃんの方が優ちゃんの方に必死

だったけどさ、今度は優ちゃんの方からなんとかしてあげなよ。こ

れじゃあかわいそうだよ。キミちゃんが」

それも分かっている。こんない加減な事を続けていたら結局森

崎は離れて行ってしまっただろう。しかし…しかしだ。なのに、この

すっきりしない気持ちはなんだろう？

いや、本当は分かっている。俺が彼女に真剣に向き合えないわけはただ一つ…。

「ねえ、もし仲直りしたいならさ、今、メールしてあげなよ。ここにおいでって…」

みーさんがそう言った時だ。ガチャッと玄関のドアが開いて誰かが入って来た。

「森崎？」

などと声をだし振り返り、正直俺はぎょつとした。なぜなら、そこに見知らぬ男が、いや、正確には一度だけ会った事のある男が立っていたからである。

「ミノ虫男！」

俺は思わず指さし叫んだ。

そう、それは数週間前、職安帰りにドブ川のほとりで見たあの不思議な男であった。奴はあの時と同じく、何重にも着込んだ小汚い服の上にすすけた茶色のどてらをはおり、灰色のマフラーをして、手に汚ねえ買ひ物袋をさげていた。袋の中からは赤色の髪がみえていた。人形でも入れているんだろうか？

どんな顔か確かめようとそだが、サングラスとマスクのためにはさっぱり分かりやしねえ。こいつ、みーさんの知り合いだったのか？みーさんも随分変な奴と付き合ってるもんだなあ、…と思った時、後ろからパタパタとみーさんの足音がして、そして、意外な…この上なく意外な名を口にした。

「あら。正ちゃん遅かったのね。待ってたのよ」

「はあ？」

俺はまたもや、思わず声をあげていた。

「誰って？」

随分聞きなれないような、聞きなれたような名前だぞ？

「何してるの？ 早く上がって。お兄さんも待っていたのよ」

みーさんの声が響く。それはとても無邪気で、この上なく屈託のない物言いではあったけど…

って、おい。お兄さんて誰の事？ まさか俺の事？

ってことは、つまり、このミノ虫男は、まさか…

「正なのか？」

俺は言葉の通じぬ人に言うように、ゆっくりと一音ずつ区切って聞いた。

違う…というようにミノ虫男は首を振ったが、

「そうよー。正ちゃん最近よく遊びに来てくれるのよ。でも随分寒がりだと思わない？ あの格好」

罪のないみーさんの言葉が奴の逃げ道を完璧に奪った。

神様の不良品

その時の気持ちをどういふ言葉で表わせばいいのかわからない。
驚天動地とも言えはいいのか？

俺は、人慣れぬ子猫にでも近付くように、用心深く弟の距離を縮めていった。

「正」

逃げるなよ。

「お前…」

たのむから…。

「ひきこもるの」

後少しだ。

「やめてたんだな？」

…兄ちゃんは嬉しいよ。

そう言いかけた時だった。

それまででくの棒のごとくそこにつっ立っていたミノ虫男は、く
りと背を向けて脱兎のごとく…いや正確には脱ミノ虫のごとく駆
け出した。

俺は奴が落としていった汚ねえ買物袋を跳び越し、スニーカーに無理矢理足を突っ込むと、奴の後を追いかけようとした。しかし、靴ひもと格闘している間に随分距離を離されてしまったらしく、路地から表通りにとび出した時には、奴の姿ははるか橋を越えた向こう。視覚的に説明すればタバコのケーヌほどの大きさとなっていた。とはいえ、8年も引きこもっていたあげくの重装備の男に追い付くのはそれほど難しい事では無く、幸いそこから先が一本道だったせいもあり、あっという間に俺は奴を追いこしていた。…って、追いかけてどーすんだよって振り向くと、

「なぜ逃げる？」

と、鬼のような形相でたずねた。

すると、弟は俺の形相に怖れをなしたか、なんとこっちにケツを向けて逆方向に走り出した。

「おい！ どこに行く！」

もちろん俺はすぐに奴を追いかけようとしたが、靴ひもを踏んですっ転んでしまった。ちくしょう、靴ひものばかやろう！ と悪態つきつつ靴ひもを結び直し立ち上がって前を見て俺は悲鳴を上げた。

「何してんだ！ バカヤロウ！」

…なんと、あのミノ虫男は…弟は、橋の欄干に足をかけ飛び降りようとしていたのだ。

『また』死ぬつもりか。あのバカ！

俺が駆け出した時、ちょうどみーさんが追い付いて来て弟の腕をつかんで引っばった。

「正ちゃん。ダメ！」

力まかせに引つ張ったからか、それとも奴の態勢がアンバランスだったためか、正の体は欄干から離れ、みーさんと重なったままアスファルトの上に転がった。

ギリギリセーフだ！

俺は走りながら安堵の息をついた。ところがだ、せっかく命を助けてもらったにも関わらず、あの弟はみーさんに向かってあるところとかこう叫びやがった。

「邪魔すんな」

そして、自分に折り重なるように倒れていたみーさんを突き飛ばした。

「おい！」

俺は驚いてみーさんに駆け寄った。そしてみーさんを抱き起こすと弟を怒鳴り付けた。

「何するんだ？ お前、彼女がどういう体か知ってるだろう？」

「…」

正はなにも答ええない。しかもグラスンとマスクで顔を隠しているから表情からそのその思いを推し量る事もできやしない。

「おい、顔ぐらい見せたらどうだよ」

しかし、奴が俺の言葉に答えるはずもなく、すべての受付は終了しましたとでもいうようにあっちを向くと、再び欄干に足をかけた。

「おい！」

俺は慌てて弟に駆け寄り、後ろから羽交い締めにした。

「やめるよ」

すると弟はやつと俺の声に答えた。

「離せよ」

「何で死ななくちゃいけないんだよ？」

「あのゴミが裏切るからだろ？」

「ゴミって誰だよ」

「あのボロ女だろ？」

「お前、サイテーだな」

「裏切るから悪いんだろ？ 兄貴呼ぶなんてサイテー？ じゃないか」

もやし男の分際で、弟は異様に力が強かった。それで、揉み合ってるうちに、俺の手が奴の顔を隠したグラサンにひっかかり外れてしまった。月明かりの下、ギョロギョロした目が現れる。空洞みたいな目だ。その暗さに思わず身震いが走る。

「そこまで、俺達に見られたくないか？」

「いいから、離せよ」

「なのに、なんでみーさんならいいんだ？」

「うるせえ、離せ」

「みーさんのことを好きだからじゃないのか？」

「違うよ。あいつは『オレ以下』だから、俺が付き合ってやってるだけだよ」

その言葉に俺は少なからずショックをうけた。

「お前：何でそんな風にしか考えられないんだ？」

あんなに優しくかったこいつをこんなにしたのは一体なんなんだ？ などと、気を取られていたせいで弟をつかんでいた手の力が弱まったためだろうか？ とにかく、弟は一瞬の隙を見のがさなかった。欄干からぐつと身を乗り出し、いよいよ飛び下りようとする。

「おい！」

我に返った俺は、弟を助けようと欄干をつかみ思いきり前に身を乗り出した。そして、寸でのところで奴の体をとらえ、力まかせに

地上に押し戻した。

ところが、あまりにも勢いをつけ過ぎたせいだろうか？
弟を地上に押し戻した瞬間、妙に体が軽くなったのを感じた。

気がつくとは何の事はない、俺の体は仰向けのまま宙に浮いていたのだ。

30センチほどさきに欄干が見える。俺は手を伸ばしそれを掴もうとしたが、あっという間に欄干は見えなくなっていた。

仰向けのまま俺は落下していく。

頭上にぼう然と俺を見下ろす弟の顔が見える。

…なんでだ？

俺は虚空に向かって呼びかけた。

…なんで俺が死ななきゃいけないんだ？ こんな所で…！

何でこんなところで俺が死ななきゃいけないんだ？

落下しつつ俺は叫んだ：叫んだはずだった。

しかし、その声は激しい水しぶきとともにかき消されてしまう。そして、しばしの静寂の後、こんな言葉が水底から水泡とともに浮かんできた。

「別にいいんじゃないのか？ 死んだって。どうせどこにも辿り着けないなら、ここで全て終わらたところで構やしないんじゃないのか？」

「何をいうんだ」と俺は叫ぶ。

「死んでたまるか！ 絶対に」

すると水底の声は嘲るように答えた。

「じゃあたずねるが、お前この上生きて一体何をやる気なんだ？ この世界でお前にできる事があるとでも思ってるのか？ いたずらに年だけ重ねて醜く老いさばらえていくだけが関の山じゃないのか？」

「黙れ！」

俺はその不吉な声にあらがうがごとく手足をばたつかせた。しかし思いのほか激しい想念の渦は、俺をからめとり容赦なく水の底へ

と引きずり込もうとする。

「いい加減、手を離しやがれこの死に神め！」

俺はもがいた。

「俺はまだ生きるんだ。俺にはまだ生きる理由がある！ 俺には絵がある。俺の絵を描くまでは絶対に死ねない」

「ふん」

再び声がする。

「絵があるって？ 笑わせるな。誰がお前の絵を評価してくれたよ。お前一人が勝手にすがりついてるだけだろう？ さつさと気付けよ。お前には何も無いんだ。親を裏切り、自分勝手な事をしたあげく結局何も手に入れられなかった中途半端な人間のくせに、芸術だの何のご大層な理由をつけて現実から目を背けてるただの哀れな能無しだよ。この先生きてたって何もいい事なんか無いさ。さあ、さつさと死んじまえ。楽になるぞ」

「いやだ、俺は死なない。まだ、死にたくない。俺は絵を描きたいんだ」

そう叫んだ時、後頭部に強い衝撃が走り、体中の力が抜けていくのを感じた。薄れ行く意識の中思う。…俺はこのまま本当に死んでしまっただろうか？

目覚めると、俺は薄汚れた部屋のまん中で寝転がっていた。

…どこだろう？　ここは？

見覚えがあるような無いような奇妙な空間だ。じつと天井を見てみると、妙に懐かしいのと、妙ににがいのとをごちゃまぜにしたような不思議な気分になって来る。

この『にがさ』は何だ？　大体俺は今までどこにいたんだ？　…何も思い出せない。

いつまでも寝転がっていても仕方がないので、立ち上がりカーテンを開けてみる。すると、目の前に見覚えのある風景が広がった。それは、懐かしい東京の、ごみごみとした下町の風景だった。…しかし、何でこんなところにいるんだろう？　何も思い出せずにいると、突然背後から明るいメロディーが流れ出した。

振り返るとテレビがついていて、顔なじみのアナウンサーが『今日の運勢』を告げている。テレビの右端に表示されている時刻はすでに8時過ぎだ。それを見たたん、突然焦りを感じた。今日は大学の前期試験の日だった事を思い出したのだ。俺はカバンに筆記用具とノートを詰め込むと、靴ひもを結ぶのもそこに部屋を飛び出した。

そう、俺はT大学の1回生だ。この春上京し一人暮らしを始めたばかりだった。正直、大学にも学部の中にもなんの魅力も感じていなかった。しかし、親の手前通いつづけている。大して面白い毎日でもないが、人生そんなもんだらう。

角を曲がると、坂の下に駅が見えてきた。既に電車が来ている。しめたぞ、あれに乗れば試験に間に合うだらう。俺は歩調を速めた。速めようとした。しかし、何かに足をとられて思うように進めない。

…なんでだ？ どうしてこう足が重いんだ？ 焦りながら下を見ると、驚いた事にアスファルトが割れてぬかるみになっている。そこへ足がめり込み、なかなか思うように進めないのだ。早く…早くと焦りながらずぶずぶと音を立てて前に進み、やっと駅にたどり着く。そこには長い行列ができていた。

…なんだこれは？ 何の行列だ？

イライラしながら前にいる若い男にたずねる。

「これはなんの行列ですか？」

すると、男は振り向いて答えた。

「切符を買ったための行列だよ」

…おや？ …と、俺はそいつの顔を見て驚く。

「お前、棚橋じゃないか？」

そう、そいつは大学でできた数少ない友人の一人棚橋だ。しかし、奴は俺の質問には答えず、かわりにこう言った。

「ずっと待ってたって切符は買えないと思うぞ」

「はあ？」

奇妙な事を言う奴だ。

「じゃあ、何でお前は並んでるんだよ？」

聞いてみるが返事がない。それどころか、鼻歌など歌いながら携帯をいじりはじめた。こんな奴相手にしてられるかと列を離れ、そういえば定期を持っていた事を思い出し、それで改札をくぐり、ようやく電車に飛び乗った。ところが、ホツとしたのも束の間。走り出した電車が何と反対方向に向かっていている事に気がつく。驚いた俺は車掌室に飛び込んだ。

「おい、進行方向を変えてくれ。逆だ、逆だよ」

ところが車掌は何食わぬ顔で電車を走り続けさせる。そのふてぶてしい態度に腹が立ち一発殴ってやろうとしたところ、後ろから親父の声が聞こえてきた。

「これでいいんだ。このまま行けば、お前の将来も安泰なんだ」
振り返ると電車の中のはずなのに、なぜかそこは実家の和室にな
っていて、親戚一同が集まって宴会をやっている。

「なんだよみんな？」

俺は面喰らって叫んだ。

「電車を私物化しちゃダメだろう？」

「良いのよ、優ちゃん」

おふくろが嬉しそうに言う。

「あなたの大学合格のお祝いのために特別貸し切りにもらった
の」

「なんだ？ そんな事できるのか？ 随分金がかかったろうなと思
ってたなら、母方のおばさんに話しかけられた。」

「丁大合格おめでとつ、優ちゃん。あなたなら、やると思ってたわ。
昔からうちの一族
の血をひいてると思えないほど優秀だったもんね」

その言葉に少々戸惑いながら、俺は本音をもらした。

「でも、俺、本当は絵の勉強をしたいんだ。本当は美大に行きたい
んだ……」

「何を言ってるんだ河井」

なぜかそこに居る高校時代の担任がビールを片手に首をふった。

「世の中に画家になりたいと思ってる人間が何人いると思ってるんだ？ その中で成功するのはほんの一握りの人間だぞ。それこそT大に受かるよりも倍率が高いんだぞ。バカな夢は持つな。さっさとあきらめるんだ」

「そうよ、優ちゃん」

おふくろがあいづちをうつ。

「芸大なんてものすごくお金がかかるの。国公立に行ってくれないと困るのよ」

「そうだぞ、優。お前は恵まれてるんだぞ。T大なんて入りたいたからって入れるって所じゃないんだぞ」

父方のおじが言う。そして、

「うちの息子なんかバカだから大学なんか行かせずにとっと就職させたんだ」

と、ゲラゲラ笑った。すると、遠い親戚のおばさんが嫌みか皮肉かしらないセリフをぬかした。

「それでいいのよ。うちの子だって専門学校よ。でもいいの。大学なんて行かなくなっただけいいの。人間、学歴が全てじゃないんだからかなりムカツク。

うるせえよ。俺だって別に行きたくてT大に行くわけじゃねえよ。それでも、これでも、皆様の期待に応えるために一応努力はしたんだよ。遊んでばかりいて権利放棄した奴に嫌みいわれる筋合いはねえんだよ。

とかなんとか思いながら大人達の馬鹿騒ぎを見ているうち、正の姿に気がついた。弟は、部屋の隅っこでつまらなさそうにぼつんと座ってる。そりゃつまらないだろうな。奴には関係のない馬鹿騒ぎだもの。それにしても、久しぶりにあいつの顔を見た気がする。こしばらく進路の事で手一杯でまともに話した事もない…というか、避けられてる気がする。中学校に入って以来、あいつ、なんかおかしいぞ。妙にきつい目をするようになった…。何か悩みでもあるの

か？

「おい、正」

俺は、弟に呼びかけた。奴に話さなくちゃいけない事を思い出したからだ。

ところが奴は俺に気がつくど、ふいつと立ち上がり部屋からでていってしまつ。

それを見て、俺はなぜか非常な焦りを感じた。

…今、止めなくてはいけない。今、止めなくては…。今なら、まだ間に合うんだ。

何が間に合うんだ？ と思いながら俺は弟の後を追った。

「正！ おい、正」

しかし、弟は耳のない人のようにどんどん先に進んで行ってしまつ。行く先は闇だ。そっちに行つちゃいけない！

俺は手を伸ばし、弟の肩をつかもうとした。しかし、もう少しで手が届くと思つたその時、キキーっと思を立って電車が停止した。

扉が開く。

目の前にはT大の校舎がそびえていた。

俺は高校時代の担任と親戚一同に体をつかまれ、開いた扉から無理矢理大学へと放り投げられた。

見覚えのあるキャンパスは、雑多人でごったがえしていた。試験の日だというのにまるで文化祭でもやっているようだ。

その人込みをかき分けて、俺は試験会場になる教室を探した。ところが、いくら階段を昇っても、どれだけ廊下の角を曲がっても、一向に目的の教室はみつからない。やばい。このままでは、試験がはじまってしまふ。あせりながら、時計を見ると、既に試験開始時間は過ぎていた。

なんてことだ！ いや、まだ間に合う。少しぐらいの遅刻なら、試験官も大目に見てくれるはず…。とにかく急がないと…。と、俺は走り出した。

息をきらして角を曲がったところで、窓の外を見て笑っている人の女生徒を見かけた。俺は彼女らに駆け寄り、道を尋ねた。

「すみません。試験会場はどこですか？」

俺の言葉に彼女達が振り返る。その顔を見て、俺はかなり驚いた。なぜなら、それはみーさんと森崎だったからである。

「あれ？ 2人ともこの学校の生徒だったんだ？」

あっけにとられる俺に向かい、

「そうよ」

と二人は同時にうなずいた。

「でも、河井君試験なんか受けてる場合なの？」

森崎が言う。

「あたりまえだろ？　なんでそんなおかしな事聞くんのだ？」

「だって、画家になるなら試験なんか受けてるヒマはないはずでしょっ？」

「画家にはなるさ」

俺は自信たつぷりに答えた。

で、答えてから、あれ？　と思う。

…何言ってるんだ、俺は。画家になるなんて夢は、あきらめたはずなのに。

そう、あきらめたはずだ。両親や担任に説得されて。

…大体、そんなものになれっこないんだよ。そうさ、夢なんて持つだけ無駄なんだ。

現代の若い奴よろしくシニカルに自嘲すると、みーさんが「そんなことないわよ」と首をふった。

「夢を持つのが無駄だなんて思っちゃだめよ。思った瞬間に何もかも終わるのよ」

「みーちゃんの言う通りよ」

と森崎がうなずく。

「人間はね、自分の持っている力を斉一杯に発揮して生きていかなくちゃいけないのよ。だから、河井君も自分の才能を斉一杯引き出す事を考えなくちゃいけないわ」

不思議だ。この二人は、なぜ心の中で思ったただけの事に返事がで

きるんだらう？ それはそれとして、彼女らの言葉は、非常に説得力があつたし、なにより力強く感じた。それで、俺も「そうだよな」と、うなずき、うなずいてから始めて俺はみーさんの異変に気がついた。

「あれ？ みーさん、腕のケロイドは？ 顔の傷も消えてる…」

そう。今、俺の目の前にいるみーさんは、…おそらくこれが彼女の元の姿なんだらう…全ての傷が消え、とても美しかった。

みーさんは答えた。

「ああ。あれなら、外したの。でも、すぐにまたつけるつもりよ」

「どうして？ 今の方が綺麗だから、今のままでいれれば？」

「あら？ 私はあのままの姿が気に入ってるのよ。もしかして、優ちゃんはあの姿がみつともないと思っているの？」

「別に…そんなことはないけど」

と、いいつつ目をふせる俺をからかうようにみーさんが言った。

「優ちゃん、嘘をついているのね」

「嘘なんか…」

俺はごまかそうとして、その努力が無駄な事に気付く。だって彼女らには心が読めるのだから…。案の定、みーさんには俺の心などお見通しだった。

「別にいいのよ。優ちゃんのように感じて普通なんだもの。問題は私がどう思うかだわ。そして、私は恥ずかしいと思つてないからいいのよ。だって、私は私なりに斉一杯に頑張つて、胸をはれる生き方してるもの。それで十分じゃない？」

その言葉を聞いて、自分が恥ずかしくなる。

俺は、五体満足のかせに、そして、人より少しばかりいい大学に

行く頭を持っているくせに、何もかも中途半端な生き方をしている。そのおかげで、こんな迷路に迷い込み、何年も出られずにもがくはめになっているんだ。

俺は、2人にたずねた。

「ねえ、どうしたら、この迷路から抜けだせるのかな？」

「出口は自分で見つけなくちゃ」と森崎が言う。

「優ちゃんの好きな道に行くのが一番よ」とみーさんが答える。

「いくら探しても出口は見つからないし、自分の好きなようにやったら、両親を裏切る事になる」

俺は二人に言った。

二人は何も答えなかった。

そのかわりに、みーさんが

「そろそろ着替えなくちゃ」

と、ケロイドと傷を身に纏った。

「あれ？」

俺は驚いて声をあげた。

なぜなら、傷を身に纏ったみーさんが、目の前でみるみるうちに一枚の絵になったからだ。

しかも、その絵を俺は知っていた。

「おい、見るよ」

隣の森崎に言う。

「あれだよ、あれ。俺の言ったあの絵。師匠の描いた傑作」つぎ

はぎの『マリア』だ！ 俺の運命を変えた絵だ」

けど、既に俺の隣には森崎はおらず、あたりは真っ暗やみになっていた。その闇の中、みーさんが姿を変えたマリアの絵が映画のスクリーンにうつる映像みたいに光っている。その美しさと大きさに圧倒されていると、どこからか声が聞こえて来た。

…兄ちゃん、ごめんな兄ちゃん…

誰だ？ と思った途端にマリアの姿がぼやけて、体が宙に浮かんだ。そのまま仰向けに宙を漂っていると、手にあったかい感触がある。誰かが手を握っているらしい。

…誰だ？

閉じていた目をうつすら開けてみると、天井が見えた。そしてさっきの音が、さっきよりもはっきりと聞こえて来た。

「兄ちゃん、ごめんな兄ちゃん」

相変わらず、宙に浮かんだようなぼやけた気分なのに、俺のもう一つの意識はその声の主が誰か分かっているらしく、

「正か…」

と、うめくような声を出した。

すると、弟が俺の顔をのぞき込んで叫んだ。

「兄ちゃん！ 目を覚ましたか？ 兄ちゃん！」

「お前…いつ東京に来たんだ？…」

「は？」

弟が訝しげな顔をする。

…そりゃそうだ、何おかしな事聞いてるんだ、俺は…。

混濁した意識の中で、しかし弟にどうしても伝えなくちゃいけない事があった事だけを明確に思い出す。そうだ、言わないと。今、言わないと…。

俺は、必死で口を動かした。なぜか、言葉がスムーズに出ない。それでも、ようやく言いたい事を言い切ると、全ての仕事を終えた人みたいに俺はゆっくりとまぶたを閉じた。

気がつくくと再び俺はあの絵の前に立っていた。

その女は、胸に十字架を抱いて花の上に横たわっていた。

栗色の長い髪が色とりどりの花の上を川のように四方に流れ出している。

美しい女だが、その体には、まるで陶器に入ったひび割れのような、細かな線が無数に入れられている。

『つぎはぎのマリア』

というタイトルから、この女性が聖母である事が分かる。しかし、それはいわゆる聖母には少しも似ておらず、むしろ、今風のどこにでもいる日本人の女のように思われた。

それにしても、不思議な絵だ。

技巧的には、とりたてて優れているとは思えない。線の引き方は大雑把だし、デッサンも正確とはいいがたい。適当に走り描いたような線の上に、これまた無造作に色がのせられている。にもかかわらず、なぜか、背景の花々は光り輝くように見えた。何よりも俺を圧倒したのは、その女の姿だった。それは、今にも…そう今にも声を立て起き上がりそうな、そんな命の息吹を感じさせたのである。

…なんなんだろう？ このリアルさは？

俺は、無造作に重ねられた線と色の集合体に見入った。

しかし、どう眺めても、やはりとりたてて何が優れているとも思えない。正直、技術だけなら俺の方が上とすら思われる。なのに、

なぜ、こう胸に迫って来るのか？ その謎を解くために俺は一本一本の線を指でなぞってみた。しかし、謎は解けそうにもない。結局、最後にこう思いついた。

…そうだ。実際に描いてみればいいんだ。

思いつくや否や、俺は傍らの画用紙と鉛筆を手にとり、目の前の絵を丹念に模写し始めた。それは、さほど難しい作業ではなかった。その証拠に、俺はあっという間に、色も線も、キャンバスの大きさまで正確にその絵を写し終えたのである。そして、それをオリジナルの絵と並べてじっくりと眺めてみた。何の遜色もない。寸分の違いもない。優れたコピーである。ただ一つを除いては。

「ダメだ…」

俺はため息をついた。

俺の絵は生きていない。魂がこもっていない。

俺は、自分の絵をカッターで引き裂くと、もう一度模写をはじめた。しかし、やはりうまく描けない。何枚描いても結果は同じだった。俺の絵は断じて魂を持つ事はなかった。

ついに断念し、俺は別なモチーフを求めてその場を離れた。その頃には忘れていた絵への情熱をすっかり思い出していたのだ。

街はモチーフで溢れていた。

捨てられた空き缶の屑、薄汚れた標識、ガード下に停められた車…すべてが俺の絵心をそそる。しかしとりあえずは、でかい墓石のようなビルの数々を写し取っていく。決して命のやどりようのない無機質な物体ではあったが、それらを正確に写し取る事は自分の性

にひどくあつており、出来上がりにも十分満足できた。いつしかその作業に俺は没頭しつづけ、そして、何度か月も昇り、日は沈み、描き散らした絵が100枚を越える頃、俺は試しに自分の絵を売ってみる事にした。

駅前の人通りの多い路上。

そこは、夢の吹きだまりだった。

明日のスターを夢見るストリートミュージシャンが、あちこちで声を張り上げている。自分の絵を並べて売っている奴もいるし、インチキくさいアクセサリーの販売をしてる外人の姿も見える。

俺も仲間に加わり、その一角に自分の絵を並べてみた。時おり、足を止めて眺めてくれる人も居たが、大方は一瞥もせずに通り過ぎていく。しかし、それでも稀に買ってくれる奇特な客も居た。

時間を持て余した時は、画用紙に絵を描いていた。そんな時は、いつもあのマリアを描くのが習慣になっていた。

売っている絵は無機質な物が多かったが、あの、生き生きとしたマリアを自分の手で再現する事を、俺はまだあきらめてはいなかった。しかし、最近ではすっかりあの絵の記憶がおぼろになっており、消えかかった思い出の線を辿っていても一向にうまく描けない。

…なぜだろう？ あの展覧会の間中、あの絵を見るために、毎日のようにあの画廊に通ったのに。心の奥底。深層心理には、しっかりと焼き付いているはずなのに…。

臃げな記憶を、さらにかき乱すように、北風が頬をうつ。その冷たさに、雑念が戻る。…集中力が途切れると、ケツが痛くなってくる。おまけに寒い。手も冷えて来た。無理もない。もう、11月も半ばだもんな。そう、もう11月だ。早いもんだ。そういえば、俺いつから大学に行つてなかったっけ。8月に退学届けを出したんだっけ。お袋、泣いていたなあ。親父は怒っていたなあ。正の奴はあの場に居なかったが、元気なんだろうか？ それにしても、本当に

これで良かったのかな。いや、これでいいんだ。思ったんだ。俺にはやっぱり絵しかないって。それを思い出させてくれたのは、あのマリアだ。彼女が俺に絵を描く事を思い出させてくれた。そう。あの時、あの絵に出会ったのが運命なんだ。あれは、啓示だ。言いかえるなら奇跡だ。そう、奇跡は時おり起きる。例えば、こんな風に…。

それは、12月の寒い夜の事だった。

俺はいつものように駅前で絵を売っていた。

人通りも少ない日で、時間を持て余した俺はかじかむ手で例のマリアの絵を描いていた。

その時、目の前で人が立ち止まる気配がした。

無頓着に落書きを続ける俺の手元を覗き込み、その客は言った。

「ちょっといいかな？」

「はい？」

俺は無愛想に顔を上げて返事をした。返事をしてから驚きのあまり目をぱちくりとさせた(と思う)。なぜなら、そこに立っていたのは、あの『つぎはぎのマリア』の作者であり、そして後に俺が師匠と呼ぶ事になる、菊池大成だったからである。

彼は屈託のない笑顔で俺の描いた東京タワーの絵を指さして俺に尋ねた。

「この絵、いくらかな？」

…生きていると、時おりこんな奇跡に出会う事がある。だから生きていこうと思えるのだ。たとえそれが果てのない迷路だとしても。

そのアトリエは十字路のまん中であつた。

8畳ぐらいの日あたりの良い部屋で、真冬でも暖房がいらぬほど暖かく、平凡な会社員のアトリエとしては上出来だつた。

壁には大小の絵が飾られていて、花や、和服の女、ピンクのドレスの童女、陽光を受ける海原、なぜか懐かしい田園風景等々が描かれていた。空中にも絵が浮いていて、その中からは、風のそよ音や、潮騒が聞こえていた。驚いた事に、絵はその世界の入り口になつていたので。もし、それらが頭より低い位置にあれば、くぐつて行つたかもしれないが、残念ながら全て高い所にあるために、それはできなかつた。アトリエの左の壁には、菊地大成の住む郊外の平凡な風景が描かれていた。それはまだ描きかけだ。

右側には例の『つぎはぎのマリア』が飾られているが、他の絵のごとく世界の入り口にはなつていなかった。にもかかわらず、師匠は「この絵は『右のアトリエ』に続く扉なんだ」と言つた。それがどういふ意味かは分からない。

正面はアーチ型の出口になつていてその先は霧で隠れている。「この道はどこに続くのか」と尋ねたら、「知らない」と師匠は首を振つた。そして、俺の後ろにも道があつて、それは駅の路上やら、大学のキャンパスやら、もっと向こうには俺の家まで続いていた。

それにしても、奇妙な風景だ。

「師匠のアトリエって、こんなだっけ？」

俺は思わず口に出してしまつた。

あの、路上での出会いから半年、もうすつかりここはおなじみの場所のはずなのに、どうにも違和感を覚えて仕方が無い。ところが、師匠は返事もせず、真剣そのものでキャンパスに向かつているから、仕方なく俺も持つて来たスケッチブックになんやかやと描いて

みた。しかし、相変わらず思うように描けないので、すぐに飽いて目の前の大成の横顔を眺めた。

40過ぎの師匠の横顔は、どこことなく高校時代の美術の教師を思い出させた。画家ってのはみんなこんな感じなのかと自分の顔を鏡に映してその差にがっかりする。

それにしても、相変わらず師匠の描く絵は美しかった。人も、町並みも、路傍の花でさえ、なんでそんなつまらないモチーフがそんなに綺麗になるんだって感じに写し取られていく。つまり、この人には世界がこんな風に見えるのかと、その事自体が俺には不思議だった。

そして、もう一つ特筆すべきは、彼が左手で絵を描く事だ。別に左利きだというわけでは無い。右手が不自由なわけでも無い。それである日、なんでそんな妙な事をするのかと聞いてみると「この方が、いい絵が描けるから」との答えがかえって来た。

そういうもののかなと首をひねりつつ、俺も試しにやってみたが、にわか仕込みの左利きでうまくかけるわけも無い。どうやら、俺にとっては右手とか左手とかいう事と、絵の良し悪しとは関係なさそうなので左で描くのはあきらめた。それでも師匠の絵の秘密をどうしても知りたい俺は、とりあえず師匠の筆遣いを見て学ぶ事にした。

「パパ」

突然可愛い声が出て、小学2年生になる師匠の娘さんが入って来た。

「おやつだよ」

少女はそういうと、可愛い手でお茶とロールケーキを置いて行く。

それを機に、師匠は筆を止め、「少し休もうか」と屈託のない笑顔を浮かべた。その表情を見た時、もしかしてこの笑顔こそが、師匠の絵の秘密かもしれないと思う。もしそうだとするならば、俺にはひどく遠い世界だ。

それでも、師匠と過ごす日々は、ひどく楽しかった。

師匠を通じて知り合った人々、同じく絵を描く人、そうでない人、みな気さくで優しくかった。

いつしか、俺と同じく師匠の絵に魂を奪われた彼女…彩香と付き合うようになった。バイト三昧の貧しい生活だったが、かかつてない充実感を覚えていた。後から続く道、今いる場所、そして霧のかかるはるか向こうを眺めながら「これでいい、このまま行けばいい」と、心のどこかで思っていた。そうこうしているうちに、師匠の絵が認められるようになり、とうとうそれだけで食べていけるまでになった。それが実力の差である事を思い知らされたものの、俺達は素直に師匠の出世を喜んだ。事務所を立ち上げたあの日は、彼女と俺と師匠の3人、徹夜で祝杯を上げた。2月の寒い夜の事だった。ビルとビルの間で浮かんでいた月の姿を今でも覚えている…

「優?... 優?」

どこからか声が聞こえる。

聞き覚えのある声だ。

あれは、おふくろの声じゃないか?

俺はゆっくりと目をあけた。
やけに白い。霧がかかっているようだ。

…どこだ？　ここは？

しばらくぼんやりとしているうちに、ピッピッと規則正しい音がしているのに気が付く。音がする方を見たら、武骨な機材のてっぺんのモニターの黒い画面の上に緑色の光が波打っているのが見えた。

だんだん記憶がはつきりして来る。…そうだ。俺は正を助けようとして、橋から川に落ちたんだ…

おふくろが泣いている。よく見ると背後にオヤジも立っている。

…正は…？

「正は家にいる」

と、おふくろが言った。相変わらず部屋にこもっているらしい。

が、しかし、あの夜俺を川から助け出し、救急車を呼んでくれたのは正なんだとおふくろが説明する。

「そうか」

と俺はうなずいた。あいつがなあ…と思う。

そうだ、これが俺の今いる場所だった。俺は戻って来たんだ。あの、十字路の霧のかかった道のはるか彼方に。

俺は再び目を閉じた。しかし、もうあの夢は見ないだろう。なにしろ、もうすっかりここに帰って来たのだから。

別にだからといって残念とも思わない。

ただ一つ後悔があるとすれば、あの十字路の上のアトリエで『右側のアトリエ』を覗かなかったことぐらいだ。

神様の不良品

意識が戻ってからしばらくして、俺が入れられているのがICU（集中治療室）である事を知った。

たかが溺れたぐらいで大袈裟だ。水さえ吐き出させればそれでOKじゃないのかと看護師に尋ねたところ、肺に水が入っていた場合、肺水腫や感染症などで死ぬ事もある。一見元気に見えても、時間がたつてから感染症で死ぬケースもあるから、これは決して大袈裟な処置でもなんでも無いんですよとの返事だった。なるほど。納得する。

幸い、俺は肺水腫にもならず、感染症にもかからず、2週間ほどで退院できる事になった。しかし、入院した時期が年末だったため、病院から出た時にはすっかり年が改まっていた。

「去年は大変な1年だったわね」

車に荷物を運び入れながら、おふくろが言う。

「もう、こんな事はこりこり。今年は、何ごとも無く過ごしたいものだわ」

まったく、おふくろの言うとおりだ。去年は大殺界かというぐらい、次から次に大事件が起きて心が休まるヒマも無かった。今年は平穩無事に過ぎて欲しいものだが…。

しかし、願いも空しく、次なる事件が退院早々の俺を直撃した。

なんと、正の奴が失踪したのだ。

『お父さん、お母さん、お兄ちゃん
少し出かけて来ます。
いつ帰るか分かりませんが、
ちゃんと帰るので心配しないでください』

お兄ちゃんへ

お兄ちゃんの言うとおりにやってみようと思います』

という書き置きをテーブルの上に残して、ある朝、家族が目覚
ました時には、既に姿をくらましていた。

はじめは、冗談だと思った。

なにしろ、鶴のごとく他人に姿を見せるのを拒否っていた弟だ。

それが、よりによって家出などという大冒険に踏み出すとは到底
信じ難い。

しかし、弟の部屋を覗けば誰も居ないし、おふくろの10年来の
友である赤色のママチャリも消えている。それだけではない。おふ
くろが通販で買った黄色の風水財布も無くなっていた。その中には
生活費3千円と、残高10万円のキャッシュカードが入っていたら
しい。それだけの装備で奴は世間という大海原へ漕ぎ出したわけだ。

大丈夫。あいつにそんなに遠くへ行く根性があるわけがない。す
ぐに戻ってくるさ、…という俺の見解も空しく、弟は戻って来な
かった。5日、6日たっても、1週間たつても戻って来なかった。

日が経つにつれ、おふくろは無口になり、ひたすらテレビの画面
ばかり追うようになっていった。もしかして、何かのニュースで弟
の消息が分かるんじゃないかと思っっているようだ。時おり、テレビ

から目を離れた時には、俺に恨みがましい視線を向けて「あんた、一体あの子に何をそそのかしたんだ？」と詰問する。それは、奴の書き置きの最後のフレーズによるものだろうが、残念ながら、まことに遺憾ながら、何ひとつ記憶にない。「そんなはず無いでしょう？　ちゃんと思い出しなさい！」

おふくろはガキを叱りつけるように言った。その迫力に寝小便をたれていた頃のトラウマが疼いたりもしたが、そんな事言われたって、思い出せないものは思い出せない。大体、引きこもりきりだったあいつと、働き通しの俺が、口をきくヒマなどほとんど無かったのだ。その数少ない記憶を何度掘り返しても思い出せないのだから、俺、やっぱり何も言っていないんじゃないかな？　そう言ったら、おふくろはますます恨みがましい目で俺を睨み、最後には「そう、思い出せないなら仕方がないわね」と悲しげにため息をつく。良心が痛む。俺のせいなのか？　いいや。絶対に違う！　弟よ、よくも兄に冤罪を着せて、のうのうとママチャリなんぞに乗って明日の風に吹かれていられるな。お前に人の心があるなら、今すぐ連絡して来い！

無口の時期を過ぎ、おふくろはとうとう寝込んでしまった。

警察に届けて欲しい、という願いをオヤジはなぜか却下する。

「大丈夫だ。あいつも男だ。何とかするだろう。お父さんも若い頃、自転車で随分遠くまで行ったもんだ。男には冒険が必要だ！」

遠い目をして語るオヤジを、おふくろが叱りつけた。

「何が冒険よ！　あなたとあの子じゃ、条件が違い過ぎるでしょう！」

確かに、大学時代に柔道部の副主将まで勤める体力と根性の持ち主だったオヤジと、モヤシ男の弟では条件が違い過ぎる。しかし、この件については、俺もオヤジの肩を持ちたかった。

「ああ見えて、あいつも子供の頃はスポーツが好きだったじゃないか。大丈夫だよ。あいつは、オヤジに似てる」

すると、またおふくろが恨みがましい目を俺に向ける。その目が『あんたのせいで正ちゃんはいなくなっただんでしょう?』と訴えかけている。おそれをなした俺は慌ててフオローを入れた。

「どっちみち、金がつきたら帰ってくるさ」

「あの子はキャッシュカードを持ってる」

と、おふくろ。

「大丈夫だよ。暗証番号が分からないだろう?」

「すぐに分かるわよ」

そういつて、おふくろは背中を向ける。

「分かったなら、分かったで…」

そこまで言つて、俺は膝を叩いた。

「そうだ。通帳があるだろう。通強記入すれば、いつ、どこでおろしたか分かるぞ」

その言葉でおふくろが目を輝かせた。

「そうね。通帳は和室のからくりダンスの中にあるわ。頼める?」

「分かった、すぐに調べて来る!」

善は急げとばかりに、通帳を持って駅前郵便局に駆け込む。その結果判明したのは、弟が家出した翌朝、隣町の駅前郵便局で残高全てをおろしてしまっていた事だった。

この結果を両親に知らせたところ「だから、お父さんの誕生日を暗証番号にするなんてやめようつて言ったのに」と、おふくろがオヤジを責めはじめた。すると、オヤジはオヤジで「何年前の話だ。今はキャッシュコーナーでも手軽に番号の変更ができるのに、そのまましておくお前が悪い」と言い出す始末。

阿呆らしくなって、弟の部屋に行く。

部屋の中は見違えるように綺麗になっていた。おふくろが掃除をしたらしい。

乱雑に散らばっていた雑誌類は壁際にきちんと積み上げられ、布団もたたまれて部屋の隅に置かれている。奴が中学の頃買い入れた

勉強机はそのまま、その上に寡黙なパソコンが暗い画面をこちらに向けていた。壁にはカレンダーが貼られていて、なぜか1999年の7月になってる。いまさら、ノストラダムスかよと失笑するが、ふと素に帰って思う。あいつはこの日付けを…世界最後と言われた日付けを…どんな思いで見えていたんだろう？

失踪の手がかりになるものでもないかと、机の引き出しをあけてみる。すると、雑然とした中に1葉の写真を見つけた。修学旅行の時のものらしい。数人の女子高生が写ってるものが1点。なんだこりゃ？ さてはこの中に好きな娘がいるのか？ しかし、どの娘だろう？ 右端は…ちがうな。派手すぎる。まん中右も…違うな、右端と大して違わない。左端は、絶対じゃないな。じゃあ、まん中左の彼女か？ そうだ。違くない。あいつにも、こんな頃があったんじゃないか…なのになんで、引きこもったんだろう？

写真を片付けると、俺はパソコンに目を向けた。正直、俺はインターネットと言いうものに全く興味がない。というか、興味を持っているヒマがなかった。何しろ、東京時代は金がなくてパソコンを買うどころではなかったし、こちらに戻ってから、特に必要とする事がなかったから、敢えて近付こうとも思わなかった。

しかし、ひきこもる人間にとっては、これが全世界の事もあるらしい。弟もそうだったんだろうか？ ……そういえば…と、そこまで考えて甦る記憶があった。弟は、パソコンのメルアドから、みーさんと連絡をとっていたと聞く。もしかして、彼女なら何か知っているんじゃないだろうか？

思いつくや否や、俺は携帯を取り出し、みーさんにメールをうった。

『正から、何か連絡来ていませんか？』

打ち終わるとすぐに、着信があった。

みーさんから!？　　と思っ画面を見る俺。

しかし、それは、みーさんからの着信ではなかった。

そこに表示されたのは、もっと、思いもよらぬ人の名前だった…！

「もしもし」

俺は電話に出た。

そして、出てしまつてから後悔した。

別に相手が嫌いなわけじゃない。一生着信拒否したいという訳でもない。

ただ、この状況下で話せる相手ではないというだけだ。

といつて、放つておくわけにもいかない相手だというのも確かだった。いずれは何かの形で決着をつけなければいけないと思つていた。正直もう、電話はこないと思つていた。もしかして、自然消滅もあり得ると思つていた。しかしやはり何かの形で決着はつけようと思つていた。弟の事が片付いたらそうするつもりでいた。

それだけ俺にとって大切な事だった。少なくとも弟の行方を案じながら考えられる事ではなかった。

だから無理に頭の片隅に追いやつていたのだ森崎の事は。

そう。電話の相手は森崎だった。彼女は最後に別れた11月のあの日の続きみたいなさつけないさで『お久しぶり』でも『元気だった？』でもなく『昨日東京から戻つて来たの』と言つた。

あまりの脈絡のなさに面喰らいながらも、一応「そうなんだ」と返事して、そしてこう付け加えた。

「で、俺、森崎が旅行に行くつて事聞いてたっけ？」

『言つてないわ』

と彼女の返事。

俺は気まずさを忘れて思わず吹き出した。…まいった、森崎つて天然だっけ…？ とは口に出さなかつたが…。しかし、そんな俺の思いとは裏腹に、森崎の声は真面目だった。

『今日、みーちゃんに聞いたけど、河井君、溺れて入院したんだってね』

「ああ。知らなかったの?」

『旅行先に、携帯持っていかなかったから…』

「どうして? 携帯ないと不便だろ?」

『別に…たいした理由ないけど…それより、重態だったって聞いたけど…大丈夫なの? 後遺症とかないの?』

「ああ。…今はびんぴんしてるよ」

『そう…良かった…』

耳もとに安堵のため息が聞こえて来る。

それから、しばらくの沈黙が流れ、忘れていた気まずさが戻って来る。そして、今の俺には森崎に言うべき言葉が何も無い事に気付く。なぜなら弟の事で頭が一杯だからだ。だから、俺は改めて電話するといって電話を切るうとした。ところが、一言も何も発しないうちに森崎が口を開いた。

『私ね、年末からずっと東京に行ってたんだ』

「え?」

驚く。

「年末からっていうと、ひと月も? …ずっと?」

『そう。ずっと』

「会社は?」

『辞めた。元の…デザイナーの仕事に戻ろうと思って』

「でも、ひと月も…どこに泊まってたの?」

『親戚が居るし。それに、友達も何人かいるし』

「そう…楽しかった?」

『楽しかったよ。年末はデイスニーシーに居たの』

「そう。良かったね」

『友達に色々案内してもらったのよ。カオスにも行ったわ』

「カオスに行ったの?」

カオスとは、俺が師匠の絵に出会った地下の画廊だ。

『うん。ちょうど、好きな画家が個展やってたからだけど』

『けっこう風情あるだろう?』

『あるね…それで…そこでね、河井君にそっくりな人見たのよ。河井君かと思った』

『それは無いよ』

『でも、そっくりだったわよ。見たのは一瞬ですぐ消えちゃったけど』

『じゃあ、生き霊とばしたかな…?』

俺の下らない冗談に『飛ばしたのかも』と彼女は少し笑った。

『でも、それで、私思ったの…こんなところで河井君の幻見るなんて…重症だなって』

『え?』

『それで私ね…』

そこまで彼女が言った時、耳もとで携帯が震えた。メールが来たようだ。…多分、みーさんからだ。

『森崎、ちよっと待ってくれ』

俺は森崎の言葉を強く遮った。

『え?』

森崎の戸惑った声が聞こえた。

『どうして?』

『どうしてって…それは…』

それは、メールがついたから…という理由ばかりでもなかった。

『河井君…また逃げるの?』

『違う。そういう事じゃ無くて…』

今は答える言葉が無いからだとも言えず

『弟が…』

あまり、言いたくなかったが…

『弟が行方不明なんだ…』

『え?』

再び森崎の驚く声が聞こえた。

『弟さんが?』

「そうだよ。あいつ、半月前に家出して、それきり戻って来ないんだ。それで、みーさんに何か知らないかさつきメールして…今、返信があつたんだ。だから…」

『本当に? 本当に弟さん行方不明なの?』

「本当だよ」

『…でも、今日みーさんの携帯に、弟さんからメール来てたよ?』

「え?」

「こんどは俺が驚く番だった。」

『弟さん、毎日メールくれるって言ってたよ、みーちゃん』

「そんなバカな…あいつ、確かに家出して…それで、おふくろは寝込むし家の中はめっちゃめっちゃなんだ。それに、あいつ携帯なんて持ってないし。なんでメールができるんだ?」

『それが本当なら…』

森崎は少し間を明けて、こう言った。

『ネットカフェからじゃないかな? フリーメールのアドレス持ってたば、どこからでもメールできるよ』

「そうか…!」

「そういえば、あいつはパソコンからみーさんにメールしていると
言っていた…。」

『でも、どこのネットカフェだろう?』

『それは…ネットカフェはどこにでもあるから…あ、でも…ねえ、
それなら弟さんパソコン持ってるよね』

「ああ。持ってるよ」

と、俺は後ろを振り返り、奴の机の上にあるパソコンを見た。

「多分…一日中こればっかりやってたんじゃないかな?」

『だったらさ…ブログとか、サイトとか持っていたんじゃないかな?』

「…どうだろう? やってても不思議じゃないけどな」

『調べてみたら? もし、弟さんがネットカフェから書き込みして』

れば、行方を知らせる手がかりを残してるかもしれないよ』
「なるほど…！」

俺は森崎に礼を言つと、携帯を切り、さっそくパソコンを立ち上げてみた。

半端な知識であるが、サイトを探すぐらいの事はできる…はずだ。

心配するまでもなく、すぐに弟のサイトは見つかった。

デスクトップの『お気に入り』と書かれたフォルダの中に『僕のサイト』というファイルがあったからだ。

俺は「eマーク」のついたそのファイルをクリックした。

すると、どくる模様のなにやら禍々しい画面が現われた。

そのまん中には、趣味の悪い赤色で「土人中」という文字がでかでかと掲げられ、その下にはこれまた趣味の悪い薄もも色で、こんな文が書かれていた。

『世界は広いと言っけれど

僕の世界は土の中の穴ぐらだ。

世界には色んな色が有るというが

僕の世界は真っ暗やみだ。

なぜなら、僕はもぐらだからだ。

もぐらには、遠くまで旅する足もないし、

色を見るための目だってない。

でも、ああよかった

僕にたくましい足がなくてよかった。

そんなものがあつたら、

僕は世界の果てまで行きたがつただろう。

ああよかった

僕に目がなくてよかった。

そんなものがあつたら、

きつと僕はいろんな色を見たくて仕方なかつただろう。

はじめから足も目もなければ、

この世界で安心していられる

僕は土の中にすむもぐらだ

「土の中」作／土中 喪黒つ『

…なるほどな…。

たいしてうまい詩とも思わないが、気持ちは伝わって来る。

…けどお前には足も目もあつたんだよな…。

俺はため息をつくくと、もっと下の画面を見るために、マウスのボタンをスクロールして行った。

20 (後書き)

ここまで読んでもらってありがとうございます。
これからはちよっとペースをあげて更新していく予定なので、
どうぞよろしくお願いいたします

『土中喪黒うつ（つちなか もぐろうつ） 2?才 高校中退 無職
ヒッキー暦8年 未来の大詩人にして大作家』

それは、どくろ模様が縦横に連なる、はっきりいってセンスねえ背景の上に、まがまがしい血文字で書かれた一文だ。もっと詳しく言うのなら、弟が自分のサイトに載せた自己紹介文だった。

「なにが未来の大詩人だばかやろつ」

俺は軽く毒づくくと、ブラウザバックしトップページに戻った。そして、目を皿のようにしてそこに書かれた全文章を読んで分かった事は、どうやら弟が生意気にもこのサイトに詩や小説を発表しているらしいことだった。しかも、さらに生意気な事に、奴はブログとやらまでやっている。マイブログと書かれた文字をクリックすると、アホの一つ覚えのごとき黒いトーン一色のダークなページが現われた。そして、右上にはやっぱりどくろがいる。他にやりようはないものか……と思ったが、とにかくにも、それが奴のブログだった。

何が書いてあるかと読んで行けば、俺の知らないアニメやライトノベルへの、偉そうな批評批判が延々と書かれている。そして、これらの記事に紛れ込むようにして、時々「死ねればいいのに」という独白があったり、または明らかに俺と思われる男に対する罵詈雑言が書かれていた。それを要約すると、大体こんな感じだ。

『大学中退のへボ絵書きにもなれない負け組フリーターのくせに、上から物言ってるんじゃないやねえ』

さらにそういった文章の後には、必ずといっていいほど、どこの

どいつかも分からない連中からのコメントが山のように寄せられていた。それらを極端に短く要約すると、大体こんな感じになる。

『バカ兄貴逝つてよし。首吊つて、氏んでこい』

「なんだとこのやろう」

と、書き返してやろうと思ったが、同レベルに落ちるのが嫌なのでやめておいた。

さらに、奴の書いた小説なるものを読んでみる事にした。

が、しかし、自称『未来の大家作家』にしては、お粗末すぎるものばかりで、いずれも10行と読めない。唯一読めたのは、ひきこもりの男が回想する『青春 ひきこもらー』という小説だけであった。それは大体こんな内容だった。

できのいい兄貴をもった高校1年生、山田亜矢松という男がいた。元来、小心で内気な男だったが、非社交家な兄、勉に対抗するために、必死で社交家を演じていた。

亜矢松はクラスメイトに好かれるために、道化を演じた。それでかえってなめられて、パシリ扱いになる。それでも、亜矢松はクラス内の居場所も見つけ、辛うじて平穏な日々を送っていた。

そんな亜矢松に親友ができる。そいつは他のクラスの因幡という男だ。

二人が出会ったのは学校の図書館だった。亜矢松は元々本など読む奴でもなかったが、好きな女が図書委員だったのでしばしば通っていた。そこに毎日因幡も来ていたというわけだ。二人はしょっちゅう顔を合わせているうちに、話すようになっていった。

因幡はいじめられていて、しょっちゅうアザを作っていた。しかし、因幡はいつでも全く平気な顔をしていた。それどころか、イジ

メでしか自己の劣等感を晴らせない連中を哀れんでいるような風さえあった。そんな因幡の態度に亜矢松はいつしか尊敬の念を抱くようになっていった。

それだけではない。相手が孤立しているという安心もあって、普段、つるんでいる仲間には言えない愚痴や本音も因幡には語る事ができた。因幡は、亜矢松の話に熱心に耳を傾け、そして、冷静に分析し、助言をくれた。読書家の因幡は博学だった。自分の持っている知識を惜しみなく亜矢松に与えてくれた。

次の年、2人は同じクラスになった。しかし不幸にして、昨年来因幡をいじめていた連中も同じクラスになったため、因幡はまたしてもいじめられる事になった。それを見た亜矢松は…。

亜矢松は見て見ぬふりをした。

無理もない事だ。

因幡を虐めるグループは体格もよく、あまりにも凶悪すぎて、ひよわな亜矢松が到底戦いうる相手では無かった。亜矢松が逃げたといつて誰が彼を責められるだろう？

誰だつて一番大切なのは、自分の身の安全なのだ。そう。いつだつて『誤りし彼』を責めるは他人ではない。『彼』を責めたてるのは他ならぬ彼自身なのだ。哀れな亜矢松も己の心に責め立てられた責められ、責め立られ、ついに耐えられなくなった。そして、ある日ついに彼は爆発した。因幡を虐める連中の前に果敢にも挑みかかり、友人を守ったのだ……おろかでお人好しの亜矢松。その結末も知らずに…！

ここまで読んで俺は思った。…これは実話じゃないのか？ そして、さらに文字を追って行く。

身の安全よりも友情をとった亜矢松の勇氣に、その日、因幡は心から感謝してくれた。

彼は『ずっと虚勢をはっていたが、本当は辛かったのだ』と告白して泣いた。

友の嬉しそうな様子を見て亜矢松は満足した。そして思った。これで良かったのだと。例えクラスで孤立しても何も恥じる事は無いのだと。代償は大きかったが、かけがえのない友情を得る事ができたのだと…。

ところが。

翌日学校に行くと、世界の全てが変わっていた。

今まで優しかった友達が、視線を逸らすようになった。

放課ごとに暴力を受けた。

今までの亜矢松のクラスでの地位がさほど高く無かっただけに、思いもしない反抗がボスクラスの奴の怒りを倍増させたのだろう。報復は執拗を極めた。

が、しかし、暴力には耐えられた。覚悟をしていたからだ。それよりも、彼の心を打ち碎いたのは因幡の変心であった。

そう。因幡は亜矢松を裏切り、虐める側に回ったのである。

しかも、今までのうっぶんを晴らすごとく、誰よりも率先して亜矢松を虐めた。

それでも、亜矢松はしばらくは耐えていた。なぜなら、クラスメイトの中に彼が好きだった女生徒：例の図書委員の彼女が居たからである。彼女の存在だけが、この地獄にわずかの聖域を設けてくれた。

彼女はイジメに加わったりしなかった。かといって、とりたてて

亜矢松に優しくかったわけでも無いが、「こんな僕をいじめない事」を亜矢松は勘違いしてしまった。彼女も少しは自分に好意を持ってくれていると思いついてしまったのである。

修学旅行の後、亜矢松は誰にも分からないように彼女の写真を買った。ところが、この事がクラス中に知れ渡ってしまった。なぜなら、因幡が亜矢松の行動を知ってばらしたからだ。なぜ、因幡が亜矢松の気持ちを知っていたかといえば、その昔亜矢松自身が因幡に打ち明けていたからだ。亜矢松はクラス中の人間に笑われた。情けなかった。彼女にすまないと思った。クラスメイトがはやしたてる中、そつと彼女の方を見ると彼女と目があつた。こんな目に合わせごめんという意味をこめて、そつと頭を下げると、彼女が泣きそつな顔でいった。

「最悪！　なんで、あたしがあんなキモイのに好かれなくちゃいけないの？」

とたんに彼女の友人が彼女を取り囲み、彼女をなぐさめはじめた。

亜矢松にはわけが分からなかった。

彼女の言葉の意味が理解できなかった。

ともあれ、その事で彼の心の砦は崩壊した。

物語はそこで終わっていた。

『続く』という文字を見つめながら白日夢のごとく俺の頭に浮かぶのは、あの日、やけにきつい目をしていた弟の姿だった…。

この国では 毎日内戦が起きている
教室内の内戦だ

理由は重大だ

クライダサイクウキヨメナイ

地雷を踏んだらさよならだ

大人なんてあてにならない

奴らは言った

「イジメなんかない」

奴らは言った

「彼らは、ただ、からかっていただけだ」

奴らは言った

「お前、被害妄想じゃないのか？」

そして、最後にはこう言った

「いじめられる方が悪いんだ」

何が悪いんだろう？

誰にだって悪いとこなんてあるはずなのに。

人生を台なしにされるぐらい、

僕の個性が罪深いというんだろうか？

そんなわけあるはずないだろう？

どこからどう見ても、何のとりえもない

どこにでもいる普通の人間でしかないこの僕が。

そんなある日、僕は啓示を受けた

そして悟った

悪いのが悪いんじゃない。
弱いのが悪いんだ。

そうだろう？

キリストだって罪人にされたんだ。

でもみんな知ってるだろう？

悪いから罪人にされたんじゃない。

彼が存在していると都合の悪い連中相手に
戦おうとしなかったから罪人にされたんだ。

強いやつは、弱いやつを責める。

責める理由は、どれだけだっけってつくりだせる。

弱い奴は永久に責め続けられる。

そして、いつか醜悪な化け物に仕立て上げられる。

気付かぬうちに悪者にされるんだ。

それもしかたのない事だ。

誰だって自分は正しいと信じたいから

大義名分は必要だもんな

けど、見てみるよ

どっかの大国だっけ

正義の名の元に、戦争しているけど

みんな知ってるだろう？

正義なんてどこにあるんだ？

なのに大人達は言うんだ。

戦争反対

平和を大事に

それを聞いて僕は思った
コイツライミワカッテルノカナ？

『内戦』と名付けられたその文字の羅列を、俺は食い入るように眺めていた。それは、弟の詩だ。

弟は、自分のサイトにこんなトーンの詩ばかり、数え切れないほど載せていた。

黒い画面に灰色で書かれたそれらの文字から受け取るイメージは、どこことなく俺の描く人物画に似ているように思えた。絶望的な孤独と、怒りと、恨みを抱きながらも、見えない誰かに届く事をひたすら願って書かれたであろうその叫びは、誰かの心に届いたのだろうか？

届かねえよ。

と、俺は吐き捨てる。

今どき、これっぽっちの苦しみ、笑いのネタにもなりやしねえよ。

何しろ、皆がみな自己嫌悪に陥っている世の中だ。ありもしない粹や、下らない縛りをもってに作り、自縄自縛になって身動き取れなくなった哀れな魂が、他の奴も地獄の渦へ巻き込もうと足を引っ張りあう世の中さ。やっかいな事に、それらは笑いの裏に巧妙に隠されている。陽気な顔をして、いつまでも着地点を見出せぬまま、みんなでどんどん崖っぷちに追いつめられて行くんだろ。そして、いつかみんなで崖から飛び下りればいい。そう。まるでレミングの群れのように。

それから、俺は手元の携帯に目を落とした。そして、ディスプレイに表示されっぱなしの文章を読むともなしに読む。

『おはようございます。今日もお仕事頑張ってください。』

僕も一日頑張ります！ 正』

おととい、みーさんから転送されて来た、弟のメールである。

妙に前向きなその文章も夕子の悪い冗談のようにしか思えない。

一体奴は、どこから、どんな気持ちで、こんなメールを送ったのだろう？

ちなみに、みーさんへの連絡は3日前に途絶えたらしい。おそらくは、事情を知ったみーさんが弟に居所を知らせるようメールで説得したため、奴に警戒心を抱かせたためと思われる。

しかし、自サイトの掲示板への書き込みはしているようだ。どうやら、こちらはばれていないと思っっているのだろう。が、しかし毎日チェックしているぞ。ここ数日、会社から帰って、夕食をとってこの部屋でパソコンを見るのが日課になっているんだ。

今日も、弟は書き込みをしていた。

それは、奴の小説に感想をくれたFAN（！）への丁寧な返事だった。意外な事だが奴の小説は意外に人気があるのだ。しかし、人気があるのは、ネガティブな詩や、ひきこもり小説ではなくて、巨乳魔法使いが主人公の学園ファンタジーに対してだが…。

本日の弟の書き込みは、この一月あまりのそれと同じく、居所を一切悟らせぬ事務的な返礼でしかなかったが、とりあえず奴が無事な事を確認できるものではあった。それで、ホッと胸をなでおろしたその時、携帯がメールの着信を知らせた。送信者は森崎だ。

何の用かと開いてみれば、

『弟さんの行方分かった？』
と書いてある。

『今調べているが、ページが多すぎて読み切れない』

と書いて送信すると、すぐに返事が帰ってきた。
『良かったら、サイトのアドレスを教えてください。私も調べてみるから』

渡りに船とはこの事である。それで『それはとても助かる』とメールで打ち込み、ついでに奴のホームページのアドレスを携帯に一字一字丁寧に打ち込んで行く。そして、打ち込んでしまっただけから、しかし、まてよと首をかしげた。なぜなら、こんな心の声が聞こえて来たからだ。

『俺はそこまで森崎に甘えて良いのだろうか？ 彼女も俺に対してそこまでする義理もないだろうに。しかも、このアドレスを知らせるといふ事は、あいつの恥部を晒すようなもんだぞ。なにしろ、ここにはあまりにも奴の全てがさらけだされすぎてる。もし、俺が奴の立場なら、これを多少でも面識のある人間に知られる事をどう思うだろう？ しかも相手は、奴にとっては年上美人の森崎だ。かなり抵抗あるんじゃないのかなあ？ いや、抵抗あるに決まっている』

そう考えると、俺はせっかく打ち込んだメールを送らずに削除しようとした。ところが、削除しようとした時、今度はこんな心の声が聞こえて来た。

『いや。この際、そんな事を言っている場合じゃないだろう。なにしろ事はインターネット上での話だ。パソコンに関してはドシロウトの俺なんかより、森崎に頼った方が効率がいいに決まっている』

さんざん迷ったあげく、俺はついに決心した。

そして、奴のサイトのアドレスを打ち込んだメールを、森崎にあてて送ったのである。ただし、こう付け加えて。

『何を見ても驚かないでくれ。あいつの名誉のために黙っていたが、

神様の不良品

あいつは8年間もひきこもっていたんだ』

「東京にいるらしいよ、弟さん」

と、森崎が言った。

昼間のカフェの明るい風景によく馴染む、実にあっさりとした口ぶりだ。

「東京？」

その意外な言葉に、手にとったサンドウィッチを落としそうになる。

「マジで？」

たずねる俺に「うん」「とうなずき、

嘘は言っていないと思う」

と森崎は断言した。

「言っていないと思うって…直接、話したの？」

「そうよ」

「そうよ…って…どうやって？」

「インターネット上で話したのよ」

「ああ」

納得する。

「チャットかなんかで？」

「掲示板よ」

「でも、いつの間にそんなに仲良くなったの？」

「簡単よ。弟さんのサイトの掲示板に小説の感想を書いて、そのついでに私のサイトへのリンクを貼っておいたの。そうしたら弟さん、私のサイトに来てくれたのよ」

「そういえば…」

思い当たる事がある。

「少し前からあいつのサイトに『リリカ』って女の人がよく書き込みしてたけど…」

その人物は、奴の引きこもり小説に対して、やけに丁寧な感想を書いていた。珍しい女も居たもんだと思っていたが、それがまさか…

「それが、私よ」

と森崎がうなずく。

「なるほどね」

俺は感心した。

インターネットの事をよく知らないだけに、感動も大きい。

「けど、森崎、サイトなんてやってるんだ」

「まあね。今まで書きためた絵をのせてるだけなんだけど…」

「ふうん…」

俺は森崎の描く繊細なタッチの少女達の絵を思い出した。

「それで…リンクを貼ったら、弟さんも私のサイトに来てくれて、私の絵にも感想くれたの。それをきっかけに色々話したのよ」

「あいつと話すなんか事あるの？」

森崎と弟に、共通の話題があるとは思えない。

「いくらでもあるわよ。だって、私も中学の頃ひどいイジメにあったから」

「え？」

初耳だった。

「森崎が？」

「そうよ。登校拒否にはならなかったけど」

「信じられない。でも、なんで？」

「中学生の頃、太っていてね…あ、でもそれが原因じゃ無いのよ。やせようと思ってダイエットのために毎日マラソンしたら、足が早くなっちゃってね…その年のマラソン大会で、何と優勝しちゃったの」

「凄いいじゃん。でも、それとイジメとなんの関係があるの？」

「うん。それが、ストリートに優勝したわけじゃなくて、元々一位で走っていた子がゴール前で転んじゃってね。それで、ちょうどその後ろにいた私が優勝できたってわけ。タナボタ式の優勝だったの。」

そんなことがあったものだから、元々一位だった子が納得できなかったらしくてね」

「もしかして、それでイジメになったとか？」

「そ。色んな事されたわよ。『森崎紀美香がわざと転ばせた』なんていう噂たてられて、どんなに『違う』って言っても聞いてもらえなくて、おかげで悪者にされちゃった。クラスの大半の女子から無視されたり、上ぐつ捨てられたり、教科書隠されたり…」

「ムカツク奴だな」

「今、考えるとかわいそうな子だと思う。だって、負けたくらいで普通そこまでする？ そこまで『勝ち』にこだわるって、自分が苦しいだけだと思う。それに、理由がなんであれ、人を傷つけなきゃ済まないなんて、よほど『他の何か』で自分が傷付いている証拠よ…」

「…。当時はそこまで考えられなかったけど」

「そういうもんかな？」

でもよく、登校拒否にならなかったな？

辛かっただろう？」

「辛かったわ。毎日泣いてた。先生に相談したって、『いじめられる方にも原因あるんじゃないの？』で終わっちゃうし。でも、とことん追いつめられたら、私最後にキレちゃって…」

「キレた？」

「うん。それで、そっくり同じ事を相手にしてやった」

「へ？」

「辛い、私は孤立まではしてなくて、味方になってくれる子もいたから。その子達と組んで、上履き隠したり、通りがかる度に皮肉言っただけだったり、とにかく私がされた事をそっくり仕返してやった」

「…。そう…。なんだ」

軽く引いた。

「なんか…信じられない。森崎って、優等生でおとなしいイメージしかなかったから…」

「そう見える？ でも、やられたらやり返すわよ。そうしなきゃ、多分、私が壊されてたわ」

「…で、その彼女はどうしたの？」

「ああ。彼女なら、最終的には私のごきげんうかがって来たわ。謝ったんじゃないかって、ごきげんをうかがって来たの。なんか、阿呆らしくなっちゃった。『偉そうになんだかんだ語ったって、弱いものには強気が出るのに、相手が強いと分かったら手の平返すんだ』って思った。下らない。でも、人間てそんなものかなって、その時は思った。それきりでお終い。彼女との関わりはそこまでよ」

「その話、弟にもしたの？」

「したわよ。そしたら、『リリカさんは強いですね』って感心されちゃった。だから『こういうのは、強さとはいわないと思う』と答えたおいた。そしたら弟さん、言ったわ。『いや、あなたは強い。それに比べて僕は弱い。弱いからいじめられる。いじめられるのは弱い僕が悪いんだ』って。だから私こう言っておいた『何が本当の強さかなんて、誰にも分からないと思う。何が本当に正しいかも、誰にも断言できないと思う。もし、人を傷つけられる事が強くて正しい事なら、私は弱くても、間違っただけでもないと思う』って。それから、まあ色々な事を話し合ったんだけど、最後には『ありがとう』って…なぜかお礼を言われちゃった。お礼なんていららないのに」

そう言っただけ、森崎は少し笑った。

「いや。俺には、弟の気持ち分かる気がするよ」

「そう？」

「ああ。分かるさ」

だって、いじめられるような奴をここまで相手にしてくれる女が、今、この日本にどれだけいる？ あいつには森崎が女神のように見えたりしないだろうか…。少なくとも今の俺にはそう見える。

「俺からも礼を言わせてくれ。ありがとう」

頭を下げると、

「やめてっば」

と、森崎は笑いながら首を振った。

「私もつい熱くなつて語っちゃっただけ。インターネットって、人をそんな風にさせるところがあるの。でも、そんな話をしたのは一度きりよ。その後は絵の話ばかりで…」

「絵の?」

「うん。弟さん、絵に興味があるらしいわよ」

「へえ? あいつが絵なんかに? 意外だな」

「兄貴の影響って言ってたわよ」

「俺の? まさか! あいつとそんな話したこともない」

「でも、彼はあなたの影響って思ってるみたいよ。それに…ああ、一番大事な事伝えるの忘れてたけど」

「何?」

「弟さんが東京に出た最初の理由は、あなたの師匠にあたる人に会いに行くためだったって…」

「え?」

「がく然とする。」

「嘘だろ?」

「嘘じゃないわよ。あなたにそうしろって言われたから東京に来たんだって」

その言葉で俺は弟の置き手紙のフレーズを思い出した。

「お兄ちゃんへ」

お兄ちゃんの言うとおりにやってみようと思います」

って、あれだ。つまり、そういう事が、だが、しかし…。

「でも、言ったおぼえがない」

「それは…もしかして…河井君が意識不明の時に言ったからじゃないかな?」

「意識不明?」

「うん。弟さんの話によると、あなたが病院に運ばれて生死の境を

さまよってる時に言われたって」

「ああ！」

…なるほど！

やっと納得がいく。つまり、うわごとだったってわけだ。それなら覚えてなくても不思議じゃない。

しかし、それならそれで、分からない事がある。なぜ俺はあいつに師匠の元へ行けなどと進めたのだろう？

そんな事を思った時、森崎が席を立った。

「そろそろ行かないと…」

「もう、時間？」

「うん。もう、40分過ぎちゃった。もう行かないと、お客さんとの約束の時間に間に合わない」

「仕事、大変そうだね」

「うん、まあね。でも、やっぱり私にはこっちのがあってるわ」

彼女は、今、デザイナーの仕事に戻っている。

「そっか。よかったな。充実してるみたいで」

「まあね。それより、今度はこんな昼休み中じゃなくて、日曜にでもゆっくり会おうね」

そう言つと、彼女はA3の封筒を抱えて店から出て行った。

後に残された俺は、残りわずかな休憩時間と競争するようにサンドウィッチを平らげ、早々に工場へと戻って行った。

「すまなかつたな」

日あたりの良いアトリエのまん中で、師匠が頭を下げた。

「まさかあいつがお前の弟とは思わなかつたんだ。なにしろ、髪はぼうぼうだし、鬚はのびてるし……」

「謝らないで下さいよ。しょうがないですよ。それにしても……あいつ、名乗らなかつたんですか？」

「ああ。だから、どっかからの家出人とは思つたが、お前の弟とは想像もしなかつた……」

ここは、東京。

俺の師匠、菊池大成のアトリエだ。

説明するまでもないが、弟を探して上京してきているのである。

(1週間の休みをもらうのは、正直いつて辛かった)

弟は、確かにここに来たらしい。

ある晩、師匠が買い物から帰って来ると、門の前で自転車と一緒に寝ているホームレスがいた。それが、弟、正だ。驚いた師匠が声をかけると、奴は腹が減つたので何か食わせてくれという。その際、奴は、河井正とは名乗らず、『田中太郎』とかいうふざけた偽名を使ったそうだ。

気のいい師匠は、弟を家に上げ、飯を食わせてやった。それだけでなく、数日泊めてやったそうだ。この人には昔からそういうところがある。よく、道ばたで寝ている人とか拾ってくる事があった。

(俺も拾われたクチかもな)

それが、なんで俺の弟かって分かったといえば、例のママチャリさ。

ブレーキが壊れちゃって、もう使えないからと、奴が置き捨てていったそれは、今だに師匠の庭に置かれている。ボロくなっている

が、確かにあれはおふくろ愛用のママチャリだ。あの、真っ赤さ加減といい、あのだピंकのハンドルカバーといい見間違えるはずがない。

「で、弟はここにいる間何をしてたんです？」

「何も」

「何も？」

「ああ。ただ、黙ってぼーっと俺の絵を眺めていた。そして、3日後ぐらいに出ていった」

「行き先は？」

「何も聞いてない。しかし、自転車を置いていったっていう事は、都内にいるんじゃないか？」

「そうですね…」

結局、たいした手がかりはつかめなかった。軽くへこむ。

「まあ、何日でも泊まっていけよ。俺もなるべく協力するし…」

という、師匠の好意に甘える事にする。

奥さんには、某駅で買った超レアなあんころ餅を渡す。とても、喜んでくれた。

次の日からさっそく俺は都内を駆けずり回った。

弟の行きそうな所：秋葉原、池袋のネットカフェ。それから…渋谷、新宿駅構内のホームレスの中まで捜しまわった。

しかし、世の中そんなに甘くない。言うまでもないが、東京は広い。ネットカフェに限定したって、何件あるのか見当もつかない。奴の姿は見当たらない。

こんなんで、本当に見つかるんだろうか？　すぐに絶望的な気分になってくる。

3日目の夜、何の収穫もないまま師匠宅に戻る。

母屋から少し離れたアトリエのソファに座り、師匠が描く絵をぼーっと眺める。

昔も、よくここに座ってこうしていたもんだ（あの頃は、横に彩香がいたけど）。

その時、俺は「あれ？」と思った。

部屋の奥の方の乱雑に置かれたキャンバスの横に、見なれぬ扉を見つけたからだ。

「あんな扉、ありましたっけ？」

と、尋ねると、

「今ごろ気付いたのか？」

と、師匠はあきれ顔する。

「去年、建て増しをしたんだ。『倉庫』替わりの和室だよ」

「へえ……」

興味はあるが、見に行こうという気力がない。なにしろ、連日歩き回って、心も体もへとへとなのだ。それで、見るともなしに、薄茶色の扉を見ているうちに何だか寂しい気持ちになってくる。何が寂しいって、俺の知らないものがそこにある事が寂しかった。それで、つい、こんな事を言ってしまう。

「なんか…俺のいない間に、色々変わってますね。駅も、改装しちゃったし……」

「ああ。駅な。地下行きのエスカレーターについて、便利になっただろう？」

「むしろ、ややこしくなりましたよ」と、俺はこぼす。

何だか、悔しい。その思い出を共有できない事がだ。だんだん俺がここにいた形跡がかき消されていく。そして、いつかここには俺の記憶など跡形も残さぬよそよそしい場所になってしまっただろうか？俺はもう、ここには戻れないんだろうか？

いや、そんな筈はない。だって、あの頃と変わらず師匠のアトリ工は居心地がいいし、立ちこめる匂いも懐かしいし、何より俺の無くしてた魂の片割れが戻って来るような気がする。

ああ。そうだ。これだ。この感じだよ。

これが、生きるという感じだ。

そうだ。俺はやっぱり、ここに戻らなくちゃいけない。きっと、戻らなくちゃいけない。

そんな風に思いながら、眠りに落ちていった…。

目的は何であれ、上京は俺に生きる気力を取り戻させてくれた。しかし、肝心の弟は見つからぬまま、あつという間に日は過ぎてしまう。そして、ついに最後の日が来てしまった。

色んな意味でがっかりだった。

弟が見つからなかった事もがっかりだが、せつかく上京したにも関わらず、弟探しなんぞしていたせいで、行きたい場所、会いたい人の元にさっぱり行けなかった事がなおさらがっかりだ。

俺の落胆ぶりに師匠が深い同情を示す。

「残念だったけど、大丈夫だよ。あいつだって、いい年こいた男だ。その気になりゃあ、なんとしてでも生きていけるさ」

「…生存の確認はしてるので大丈夫です」

あいつが生きている事は、森崎からのメールで知っていた。あいつは、相変らず毎日のように森崎のサイトに入りに出ているらしい。

「あいつが行きそうなネットカフェには、ビラを配っておいたし…」
例のミノ虫男のイメージイラストを森崎に描いてもらって、ビラを作ったのだ。

「警察には？」

「警察には言ってます、…あいつの『必ず帰る』っていう言葉を

信じて、届けるのはもう少し待とうと思います」

「そうか。俺も気をつけておくよ。何か分かったら連絡する」

それから、俺は師匠の家を後にして、新幹線に乗るギリギリの間まで弟の姿を探素事にした。しかし、午後6時。とうとう断念。暗たんたる気持ちで山手線に乗り込む。

椅子に座り、目を閉じてこの度の上京について思いめぐらす。この顛末を、両親にどう説明するか考える。そしておふくろの失望するのを想像し、げんなりする。何で、俺がこんなに気をもまなくちゃいけないんだと腹が立って来る。その時、ズボンの中で携帯がふるえた。メールが来たようだ。誰からだ？ ああ、森崎か。それにしちゃ、中途半端な時間だな。あいつは夜しかメールして来ないのに。…とかなんとか思いながら画面を見る。そして、そこに書かれた文字を見て、思わず椅子から立ち上がった。

『お疲れ。今日、帰って来るんだよね。弟さん見つかった？ 見つかってないかな？ もし見つかってなければ、参考にして欲しいんだけど…。実は、私も今思い出したんだけど…。前に、上京した時に、カオスって画廊で河井君にそっくりな人の幻を見たっていったでしょう？ あれ、もしかして、幻じゃなくて、河井君の弟だったんじゃないのかな？』

あんな奴と似ているなんて、断じて認めたくない。

しかし、他人から見ると、俺達は双児のようにそっくりらしい…と、昔はよく言われたものだ。

俺は、携帯をカバンに放り込むと、次の駅で山手線を降り、懐かしい町へ向かった…。

午後7時過ぎの双葉町駅のホームに降り立つ。
改札を抜けると、昔と変わらない風景が目飛び込んで来る。

そこは夢の吹きだまりだ。

明日のスターを夢見るストリートミュージシャンが、あちこちで声を張り上げている。自分の絵を並べて売っている奴もいるし、インチキくさいアクセサリーの販売をしてる外人の姿も見える。

かつては俺もその仲間に加わり、その一角で自分での絵を並べていた。大学を辞めた後、20才になるかならないかの頃だ。

あの頃、俺は師匠の絵を再現させる事に熱中していた。師匠の数有る傑作の中でも、究極の傑作『つぎはぎのマリア』の絵だ。

その絵の中では、一人の女が胸に十字架を抱いて横たわっていた。栗色の長い髪が色とりどりの花の上を川のように四方に流れ出していた。

美しい女だが、その体には、まるで陶器に入ったひび割れのような、細かな線が無数に入れられていた。

そして、その女を包む無数の花々はなぜか光り輝いていた。

今でも、頭の中では忠実に再現できる。けれど、紙の上に再現させる事はできない。

しかし、その絵に出会って、俺の人生は変わった。他人が聞けば転落したの間違いだろうと言うかもしれない。けれど、俺はあの絵と出会った時に初めて己の中に宿る魂を自覚する事ができた。言い換えれば、あの時から、俺は『生きる』という事を学びはじめたのかもしれない。

そして、初めてあの絵を見たのが、この双葉町駅前の地下にある小さな画廊だった。それは、CHAOSカオスという名の、普通なら見過ごしてしまうような小さな画廊だ。森崎はそこで弟らしき人物を見たという。もし、それが本当に弟だとするのなら、よく辿り着けたもんだ。いや、よく知っていたもんだ。ここが俺の運命を変えた第一の場所だった事を。

今、俺はその画廊の前に立ち、入り口の上に飾られた『CHAOS』って文字を眺めている。CHAOS（渾沌）とは言ったもんだな。まさに、今の俺の状況そのものじゃないか？

画廊は、昔にくらべると綺麗になっていた。改装したらしい。まだ電気がついてるから中に入れるみたいだ。入ろうかな？

ためしに入ってみると、中ではどこかの芸大生達の作品が展示されていた。めぼしい作品もなく、弟の姿を見つけれなくてもなく、失望とともに外に出る。

ギャラリー脇の階段を昇ると、先きほどの広場の前に出る。ギターをかき鳴らす二人組を横目に、一輪車に乗る若い奴らにぶつからぬよう広場を横切っていく。そして、車道を横切り、向側のカフェに入り、ホットドックとコーヒーで簡単な夕食をとる。昔はよくここに彩香と一緒に来たもんだ。

俺は2階のカウンター席に座った。ここからは広場の様子がよく見える。こんな風にぼーっと過去を懐かしむのも悪くない。

しばらくそんな風に景色を見てると、メールが入った。森崎からだ。それで、今現在、現実に引き戻される。

『今、どこにいる？ もう、新幹線？』

画面に表示された文字を見て、俺は先きほど、電車の中で受け取ったメールに返事を送るのを忘れていた事に気が付く。それで、こんな風に返信した。

『いや。まだ東京にいるよ。さっきの森崎のメールをヒントに双葉町に来たんだ。それで、例の画廊…カオス…に行ってみたよ。でも、残念ながらいなかった。けど、もしかしてこの辺りのネットカフェにいるかもれないから、夕食とった後、この辺りをじっくり探すつもり…』

送信を済ませ、携帯を閉じ、コーヒーカップに手をやる。そして、再び窓の外を見て、過ぎ去った時間へと思いを巡らす。

と、その時、ガラス越しに妙なものが見えた。

男だ。

白いダウンジャケットを着た男が、広場のまん中をふらふらと歩いている。

ずいぶんおぼつかない足取りだ。一輪車の男にぶつかりそうになってる。

けれど、何で、俺はそんなものに心をとめたんだろう？

不可思議に思いつつコーヒーを一すすり、そして、思う。

そつだ。あの雰囲気。あの歩き方。どこかで見たような気がするんだ。だから、心をとめたんだ。

そこまで思ったところでピンとくるものがある。けれど、俺はすぐにその直感を否定した。

…あれは、違う。…あれは『あいつ』じゃない。…あいつは、もつと、ミノ虫っぽいはずだもん。

しかし、どうにも気になって仕方がない。俺はコーヒーを一気に胃の中に流し込むと、広場に行くために店を出た。

車道を横断しようとするが、あいにく信号は赤だ。しばらく待たなくちゃいけない。幸いな事に、道路をはさんでいても広場の様子はよく見える。例の男は、立ち止まり、電柱にもたれて空を見てる。服の白さがやたらと目だつ。

遠目にその横顔を見て、俺は思った。

…絶対に違う。あれは、どこにでもいる普通の奴だ。俺の知っている弟は、あんなに清潔じゃない。長髪だったし、無精髭も生えていたはじだし…師匠の前に現われたあいつもそんな姿をしていたというし。

しかし、そこで俺は思い直す。

…けど待てよ？ 森崎が見たのは、俺そっくりの男の姿だったっていうな…だとすれば、ミノ虫でもないし、ロン毛でも鬚ヅラでもない。どこにでもいる、普通の奴のはずっじゃないか？ …と、いうことは…

そこまで考えた時、タイミング良く信号が青になった。俺は走って広場に向かった。だんだんと男の顔がはっきり見えて来る。

…間違いない。

認めざるを得なかった。

「正…」

その名を叫ぶと、聞こえたのか聞こえなかったのか、奴は電柱にもたれたまま脱力し、しりもちをついた。そして、駆け寄った俺の目の前でがくりと気を失った。

「ただの風邪ですよ。2、3日も寝てれば治りますよ」

白髪の医師がもそもそと言つ。

「そうですか」

俺は安堵して、布団の中で寝息をたてている弟の顔を見下ろした。「でも、少し栄養失調気味ですから、熱が下がったらたっぷりと栄養をつけさせてあげてください」

そう言つと、猫背気味の医師は、薬を置いて静かに部屋から去つていった。師匠の奥さんがそれを追つて出ていく。

「よかつたな。おおごとでなくて」

と、師匠が言つた。

「はい。…いや十分大騒ぎでしたけどね」

俺は答えた。

本当に大騒ぎだったのだ。やっと見つけた弟に目の前で倒れられて、救急車を呼ぶか、タクシーを手配するか途方にくれていた時にタイミングよく師匠から電話が入った。「これこれこういうわけで、今大変なんです」と訴える俺を落ち着かせ、師匠は車を飛ばして来てくれた。幸い、あの駅から師匠の家は近かつたので、そのまま弟をここまで運び、夜明けを待たずに医者を呼んだ。

「本当にすみません。また、お世話かけるはめになつちゃって」

と、恐縮すると、

「気にすんな。それより弟見つかつて良かったな」

と、師匠は言つてくれる。

とりあえず、奴が完治するまでは俺も東京にとどまる事にする。奴をここに置いていたら、また何をしでかすか分からないからだ。けど、何もせず世話になるのも悪いので、家の事を手伝つ事にした。一応一人暮らししてた身でもあるし、家事全般なんでもこなせるわけだし。そして、次の日、朝食の後始末をして弟の部屋に戻

ると、奴は目をぱつちりと開けてガラス越しの庭の風景を見ていた。

「目、さめたかよ」

と近寄ってくと、

「ここは、どこ？」

と、鼻声で尋ねる。

「ここは、菊地大成……つまり俺の師匠の家の母屋の一室だ。お前はただの風邪だから、安心して寝てろ」

と、説明しててやると、

「……そう」

と、だけ答えて、弟は眠ってしまった。しかし、その日の昼過ぎには、起き上がって粥を食べるまでになる。そして薬を飲むと、またひたすら眠る。そんな調子で2日も眠っていたら熱も下がり、咳もおさまってきた。この調子なら明後日ぐらいには家に戻るだろうなんて思いつつ、昼飯を終えて離れのアトリエに向かう。師匠と話そうと思っで行ったのに、アトリエの中はがらんと静まりかえっていた。師匠は出かけているようだ。

それで、勝手に上がり込み、師匠の帰りを待つ事にする。初めはソファに座って待っていたのだが、そのうち退屈になってきて、ヒマつぶしに師匠の絵でも見ようと思いつく。そして、アトリエのあちこちに雑然と立て掛けられているキャンバスを一つ一つ手に取って、つくづくと眺めた。見なれた絵もあったし、初めて見る絵もかなりあった。そのいずれもが光り輝くように美しい世界を、四角いキャンバスの向こうに果てしなく広げている。

そうしてキャンバスを物色しているうちに、例の増築したという倉庫の扉の前にたどり着いていた。扉の横には、際立って大きなキャンバスが3点立て掛けられていた。それらを見た時、胸の中にある予感がよぎる。それで、俺は不可思議にも高鳴る鼓動をおさえ切れぬまま、それらに手を伸ばした。

最初のキャンバスには何も描かれていなかった。

次のキャンバスには、この家と、家族の姿が描きかけになっていた。

そして、最後のキャンバスには…

「ああ…！」

思わず声を上げる。

「これだったか」

そこには…そう、あの『つぎはぎのマリア』が…あの十字架を抱いて眠る女が居たのだ。それは、上京後初めての邂逅であり、約3年ぶりの再会であった。

ほとばしる命の息吹と、その背徳的な美しさが、初めて出会った時そのままの衝撃を俺に与える。それで、俺はこの絵に向かう時常にそうであったように、今もまた忘我の境に入り眺め続けた。

どれぐらい、そうしていただろう？

背後に気配を感じ、俺は我に返った。

師匠かなと思っただが、ゴホゴホ咳をするから弟と分かる。

「何だ？ もう起きれるのか？」

と、たずねるが返事がない。

仕方ないから放っておくと、しばらくして弟が言った。

「なんでここに来いって言ったの？」

「うん？」

「何で、ここに来いって言ったの？」

「ああ…」

俺はうなずいた。奴が言ってるのは、つまりは俺が言ったという

『うわごと』の事だろう。うわごとだから理由なんて知らない。けど、まさかそんなこと言えない。だから、とりあえず、思いつきで答えておいた。

「ここにある絵をお前に見て欲しかったんだろう…」

そして、心の中でこう付け加えた『多分、おそろく、きっと』。

「絵を？」

弟は首をかしげた。

「なんで？」

「なんでって…」

知るかよ。今、適当に言っただけだもん。けど、何か答えなければ治まりそうがない。それで、俺はありとあらゆる知恵を総動員してこう答えた。

「…だつて、綺麗だろう？ 心が洗われるようじゃないか？」

「ふーん…」

『ふーん』で…『ふーん』で終わりかよ。なんとなくムカツク。

だからというわけでもないが、なんとなく説教口調になってしまう。

「…お前、今までどこで、何をしてたんだよ？ さんざんみんなに

心配かけて。迷惑かけるのも大概にしるよ」

すると、奴は臆面もなく言った。

「仕事を探してたんだ」

「仕事!？」

「うん。まだ、見つかってないけど…」

驚いたなんてものじゃない。

仕事だつて？ ここで？ 何を考えてるんだ？ マジで訳わかん

ねえよこいつ。

「まさか…東京に住みたいとか？」

「別に…」

別に住む気ないのに、何でここで探す？ 内心のうるささに反比例して、俺達の周りを気まずい沈黙が包む。次の言葉が見つからないまま固まっていると、弟が口を開いた。

「でも、俺はこういう絵は嫌いだな」

「何？」

「俺はこういう絵は嫌いだって」

なんだよ、今度は絵の話しかよ。脈絡がないんだよ、お前は。

「嫌いって…どうしてさ？」

「だって、なんか綺麗すぎる。綺麗なばかりで…なんていったらいいんだろう？ 真実味がないよ」

まともに長いセンテンスを喋ったと思ったらこれだ。まったく頭にくる。

俺としちゃ言いたい事が山のようにある。それを要約すればこんな感じだ。

『アホか、お前は。これがただの綺麗なだけの絵に見えるのか？

それは、お前の目が節穴だからだろう？ ちゃんと学んだ人間には分かるんだよ。これは、ただの綺麗なだけの絵とは違う。どう違うと言えばだなあ、あゝ、うゝ…』

最後の方がまとまらずにいると、天上から声がした。

「綺麗なだけとは言ってくれたな」

神の声か？ と見上げたら、残念ながら神ではなくて師匠だった。

師匠は例の倉庫の扉を半開きにしてにゅっと顔を出している。

「うわ！ どちらから出て来るんですか？」

って、わりにベタに驚くと、

「休憩してたんだ」

と師匠は言う。

「倉庫で？」

「ってきくと、」

「この部屋は倉庫件休憩室なんだ」
って、奥を指さす。

そこは、6畳の和室になっていてドミノ状に置かれたキャンバスと、こたつとテレビが置いてあるのが見えた。なるほど、なんかくつろげそうな感じだ。

「それにしても、綺麗なばっかとは言ってくれたな」
と、師匠は弟をじっと見た。で、弟はといえば、師匠の視線に耐え切れずにぶいっとそっぽを向く。

「まずい…」と、俺は思った。弟の無遠慮な言葉が師匠を怒らせたらしい…しかし、普段はこんなことで怒る人じゃないんだが…いや、とにかく、仲裁しなきゃと俺は二人の間に割って入った。

「すいません。何しろこいつは8年も社会と断絶していたんで、口のきき方を忘れたんだと思います。どうか許してやってください」

しかし、師匠はそんな俺の言葉の1文字もきいちゃいない。
「俺は、こいつと話をしているんだ」

って、俺を押し退ける。

「ゴホゴホ」と、弟が咳込んだ。動揺しているようだ。しかし、師匠はおかまいなしだ。

「俺の絵に真実味がないってどういう事だよ？」

「それは、つまり…ゴホゴホ」
弟が再び咳き込む。

「おい、大丈夫か？」

俺は、思わず弟に手を差し伸べた。

「それは、つまり…なんだよ？」
師匠は割としつこい。

「それは、つまり…ゴホゴホ…ゴホゴホ…ゴホゴホ…」
「つまり…なんだよ？」

「つまり、この世がこんなに綺麗なわけがないからだ」

「この世がこんなに綺麗なわけがない？」

師匠は首をかしげた。

「何を根拠にそう思うんだ？」

「根拠？」

弟はそう言うと、また咳き込んだ。それでも、考え考え、はつきりところ答えた。

「根拠は…、根拠は…：…そうだ、この僕が…僕の存在が…」

「お前が？」

師匠はますます首をかしげた。

「なんで？」

その答えは、俺もぜひききたいと思った。

「なんで、この世が綺麗じゃない事の証明がお前の存在なんだ？」
 師匠の問いかけに、既に解答を用意していたらしく、弟は間髪なく答えた。

「それは、僕がもぐらだからだ」
 「もぐらあ？」

師匠は妙な顔をする。無理もない、あまりにも突拍子もない答えだもん。しかし、俺にはすぐにその意味が分かった。奴のホームページに載っていた『土人中』って詩を思い出したからだ。その途端、芋づる式に他の詩や小説の数々も浮かんで来た。特にあの『青春ひきこもらー』って小説を強烈に思い出し、気付いたら「やっぱり…」と口に出していた。

「やっぱり…お前、イジメ受けてたんだな」
 すると、弟が驚いたように俺を見た。その顔は、驚きからみるみる怒りに変わっていく。それで、俺は自分あまりにも軽率な事を言ってしまった事に気付く。こいつにとっては触れられたくないところだったのかもしれない。

「いや…悪いとは思ったけど、お前のホームページ読ませてもらったんだ。不愉快だったなら謝るけど…でも、何も、お前の秘密を暴くつもりじゃなかったんだ。純粹にお前の居所をつかむためだったんだ。けど…あのイジメが題材の『青春 ひきこもらー』って小説…読んだよ。あれ、本当の事なんだろう？」

弟は何も答えない。何も答えられないのが『答え』だろう。俺は自分の勘の正しさを確信する。

「なんで、話してくれなかったんだ？」

「…」

「話してくれれば、お前がこんな風になる前になんとかできたかもしれないのに」

「……」
「兄ちゃん悔しいよ。心無い奴の為に、大事な家族をこんな風にされて」

正直言つて、こいつを虐めた奴全員を殺してやりたいぐらいだ。だんだんヒートアップしているくる俺とは対照的に、弟はクールに黙り込んでいたが、やがてぽつりと口を開いた。

「いじめられてたなんて言えるわけないだろう？」

「……なんでだよ？」

「みつともないからだよ」

「なにがみつともないんだよ」

「だってさ、いじめられるって事は『お前は醜くて生きる価値のない不良品だ』って宣告されてるようなもんなんだよ。そんな事家族に言えるもんか」

「そんな事、誰も思わないよ」

「兄貴になんか、分からないよ。いつも、ソツなく、なんでもこなしてた優等生の兄貴になんてさ。大体、あの頃あなたが俺に関心持った事あったかよ？」

その言葉に胸をえぐられるような気がする。確かに俺は……。

……確かに、俺は、学生時代はなんでもソツなくこなして来た。自慢ではないが、勉強はもちろん、スポーツもそこそこできた。成績がよくてもイジメに合わなかったのは、他人と適度に距離を置いて付き合う器用さも持っていたからさ。けれど、あの頃は自分が自分だと思えた事もなかった。画家の夢をあっさりＴ大志望に転向させられるぐらい自分の思い（願望）に対する執着もなかった。そして、それと同じぐらい他人にも執着がなかった。言葉を変えれば無関心それは、弟に対してもそうだったかもしれない。

その時、ふいに師匠が口をはさんで来た。

「おい。お前、俺の質問に答えてないぞ。なんで、お前がこの世界

が綺麗でない事の証明なんだ？ 今の話だと、単にお前自身が汚いつていう証明にしかならないんじゃないか？」

弟が驚いて師匠を見た。不意打ちだもんな。つていうか、師匠…この上食い下がらなくてもいいのに…。弟が哀れになってくる。それで、俺は『もうやめましよう』と、師匠に目で合図を送った。しかし、師匠は気付かない。

弟が、また咳をはじめた。どうやら、奴は咳をすると考えがまとまるらしい。「げぼげぼほん」と3度程くり返した後、奴は答えた。

「それは…僕がニートで引きこもりだからだ」

すると、師匠がまた首をかしげた。

「なんでお前が『ニート』で『引きこもり』だとこの世が綺麗でない証拠になるんだ？」

「だって…世の中の基準からすれば、人間失格だろ？」

「ああ、そういう事か。お前は人間失格なんだ。そう思ってるわけだ」

師匠が妙な肯定のしかたをする。すると、弟は…否定の言葉でも期待していたんだろうか？ …微妙に声を荒げた。

「俺が思いたくなくなつて、世間がそう思っじゃないか！」

「思つかもな」

「ああ、思っさ。けど、俺だって別に好きでこうなつたわけじゃない。俺は不幸な巡り合わせでいじめられる立場に立たされただけだ。けど、その途端、クラスの奴らは、俺にさんざんひどい言葉を浴びせられるようになった。今なら分かる。それは、奴ら自身が他の誰かに浴びせられて、心の中にため込んで腐敗させた『呪いの言葉』さ。本来別の誰かにぶつけるべき言葉を、それができないもんだから、奴らは弱い僕に浴びせかけた。僕は言葉のゴミ箱にされたんだ。そして、さんざん呪いの言葉を浴びせられ続けた僕は、ついにもぐらになつてしまった。土の中でしか生きられない、醜い化け者さ。…どうだよ？ これが、僕が存在がこの世の醜さである証明だよ！」

弟は、まるでため込んだ恨みを吐き出すかのごとく滔々と語る。

「分かったよ！」

俺は辛くなつて叫んだ。

「お前は何も悪くないよ。お前はただの被害者だ。いじめは、いじめられる方が悪いなんて言う奴もいるが、それはあまりにも強者の奢り高ぶつた意見だ。いや、虐める奴は強者なんかじゃないな。本当に強い奴は、弱い奴を思いやる余裕を持てるはずだ。100歩譲つていじめられる方が悪いとしても、個人に対して余りある程の制裁を加え過ぎだ。けどさ、お前、そんな奴らのために人生台なしにされて悔しくないのか？ 見返してやれよ。人生その気になつて頑張れば、いつからでも開ける。まして、お前は、まだ若いんだし……」

思わず激昂してしまう一方で、弟は、例のクールな顔を俺に向ける。

それで……やっぱり、俺の気持ちなんか伝わらないか……と落胆すると、意外にも弟の口から出て来たのは「そつだよな」という言葉だった。

「そつだよな。兄貴の言うとおりだよな。僕は何も間違つていないんだから、過去の事なんか気にせず頑張ります。そうすれば、いつかみんなも分かってくれるよな」

「そつだよ」

俺はうなずいた。

「いつかきつと、世の中悪いもんじゃないと思えるぞ」

あてもないのに希望を持たせる。

「うふふ」

弟が笑った。

「なるほどね」

「なんだよ」

「そりゃ、こんな絵にハマるわけだと思って」

「どういう意味だよ？」

「理屈じゃないんだよ」

と、弟は言う。

「綺麗事じゃ、何も解決しないの」

「綺麗事だよ？」

「そうさ、兄貴も、その人も何も分かってない。世の中光だけじゃないんだよ。あんた達は苦労知らずだよ」

「誰が苦労知らずだよ」

「っていういか、お前に言われたくない。」

「苦労知らずでなきゃ、世の中の醜さから顔を背けていただけの妄想野郎だ」

「なんだと？」

キレかけた俺を師匠が制する。

「妄想野郎か。そりゃ、悪かったな。でも、それだけ文句言えりゃ結構な事さ」

師匠の言葉に弟はそっぽを向く。

それから、師匠はゆっくりと視線を『つぎはぎのマリア』の方にうつした。そして言った。

「優は、これ気に入ってくれたんだよなあ」

「あ、はい。俺もこんな風に描ければって思ってたけど、どうしても無理です」

「別に、同じように描く必要無いさ。それより、この絵、なんで描いたか教えた事あったっけ？」

「うん？ ……そういえば聞いた事ないなあ」

「じゃ、教えてやるっか？」

「え？」

そりゃ、興味ある。誰だって好きなものの事は知りたいもんだ。

で「それは、ぜひ」ってうなずくと、師匠は
「じゃあ、こっちに来いよ。弟も」
と言って、俺らを倉庫の中へと導いていった。

部屋の中に一歩足を踏み入れると、畳の青い匂いに包まれる。

師匠は奥の壁にドミノ状に置かれた大小のキャンバスを指さして

「あれは、俺の昔の作品だ」

と言った。

「ここを建てる前は、母屋に置いておいたんだ」

「へえ…」

この状況下でこんな事言うのもなんだが、俺は少しワクワクした。

「見せてもらってもいいですか？」

なにしろ、俺はこの人の弟子である以前に熱烈なファンなのだ。

そんな人の作品なら見たくないわけないだろう。

「もちろんいいさ」

と、師匠はうなずいた。そして俺の後ろにぱつと突っ立っている弟に向かって言った。

「お前も見てみるよ。そのためにここに入れてもらったんだから」

『そのために？』：なんだか意味ありげだ。けどまあ、そんなことどうでもいいや。俺はうきうきとキャンバスを手にとる。どのように美しい世界が展開されるんだろうと。

ところが、そこに描かれていたのは、俺の予想もしない世界だった。

1枚目のキャンバスには、制服を着た骸骨の群れが居た。それは今にも襲いかかりそうにこちらを見ていた。

2枚目のキャンバスには、全身を蜘蛛の巣で覆われた男が苦悩する様が描かれていた。

3枚目のキャンバスには、刃を持つ父の下で嘆く母子が居た。

俺は啞然としてそれらを見つめた。…なんだ？ この異様な世界

は…！ しかし、予想を裏切られたと感じる一方で、奇妙な事に俺はそれらを見た事があると思った。

と、突然。背後から幽鬼のごとき声がした。

「なんだ。まともな絵も描けるんじゃない」

振り返ると、弟が青白い顔で俺を見下ろしている。奴は俺の横に正座すると、他のキャンバスも次々に開けていった。

そこに、展開されるのは、今の師匠の作風とは似ても似つかぬ、暗くて救いのない世界ばかりだった。世界観だけではない。色使いはもちろん、タッチも今とは真逆である。神経質にすら思えるほど繊細かつエキセントリックなそれらの作品は、同時に作者のおそろしい非凡さも感じさせた。それにしても、やっぱり、これらの作品をどこかで見たおぼえがある。気のせいではない。はっきりと覚えている。しかし、どこで見たんだろう？ それが思い出せない。俺は必死で記憶の糸を辿った。やがてたどり着いたのは、騒ぎ立てるリポーターと、青ざめた若い男の姿だった。そして、俺は思い出した。

「松坂牙城…！ これは、松坂牙城の絵だ！」

俺の叫び声に弟が…それ以上に師匠が驚いた顔をする。

「お前、知ってるのか？」

「知ってますよ。俺だって絵書きの端くれだもん。これ、松坂牙城の絵でしょう？ 確か20年ぐらい前に心中事件起した…」

「心中？」

弟が俺を見た。

「そうさ。その事件をきっかけに画壇から消えちゃった天才画家だよ…」

と、そこまで喋くつて、俺は「あれ？」と首をかしげる。

「でも、これが師匠の昔の作品ってことは…」

と、師匠の顔を見ると、師匠はこの上なくバツの悪そうな顔をして…

「そつだよ。松坂牙城は昔の俺の雅号だよ」
と、うなずいた。

「嘘でしょ？」
感動のあまり、体が震える。なにしろ、牙城の名はいまや若い画家の間じゃ、ちよつとした伝説になっているんだ。しかし、師匠にとつちやそんな俺の感慨など有り難迷惑らしい。

「そんな顔するなよ。俺にとつちや不名誉な過去なんだから」と、渋い顔する。

「師匠にそつでも、俺にとっては…。それにしても、本当に今と全然作風違うな。今の師匠の作風つてもつとのびのびとしたタッチじゃないですか」

「そりゃ、お前…そこにあるのは俺が右手で描いた絵だもん」
「右手で!？」

ちよつと驚く。確かに、師匠はいつだって左手で絵を描いているが…。

「それだけで、こつも違うもんですか? っていうか…この細かさは、俺の作風に近い気がする…ああ、もちろん、全然レベルは違うけど」

「だから、お前が売ってた絵に目を止めたんだよ」
「なるほど」

世の中、何がどう繋がっているか分からないもんだ。しきりと感心していると、師匠は俺の隣の弟に声をかけた。

「どつだ。弟君よ。それが、俺の昔見てた世界さ。表の絵と全然違うだろう?」

弟は「うん」とうなずいた。そして、
「これ、あんた?」

と、キャンバスの中で母子に刃を向けている男を指さす。

「違う」

師匠は首を振り、

「それは俺のオヤジだよ」

と答えた。

「え？」

俺と弟は同時に師匠を見た。

「父親？」

弟が不思議そうな顔をする。

「父親が刃を持つてるの？」

「そうさ」

師匠はうなずく。すると弟はその絵を手にしたまま尋ねた。

「…この中に、あなたはいるの？」

「ああ。いるとも」

師匠はそう言つと、母親の手の中の少年を指さした。

弟がぎよっとする。驚いたようだ。もちろん、俺だって。

それから、師匠はさらに別のキャンバスを指さして言った。

「そして、この蜘蛛の巣に覆われて苦しんでいるのも、俺。こつちの骸骨の群れは級友だ。いつかみんなして『俺に』襲いかかってくる」

「意外ですね。師匠にもこんなネガティブな面があったなんて」

「そりゃ…誰にだってあるだろう？」

「いや、なんとなく師匠にはない気がした」

「気がしてるだけさ。人間なんて色んな面を持ってて当たり前だろ
う」

「そっか」

分かってているのに、ついつい相手を何かの型にカテゴライズしたがるのは悪しき現代病だな。

と、弟が言う。

「あんた、実の父親に殺されかけたって事？」

「いや」

師匠は首を振った。

「俺は実の父親を知らない。それは義理の父親だ」

「殺されかけたの？」

「いや、それはただの比喩だよ。けどまあ、精神的にはまさにその絵のままだった」

「それって、まさか…」

言いかけて言いよどむ俺の言葉を後を弟が引き受ける。

「虐待されてたの？」

師匠はうなずいた。

俺も弟も、返す言葉を失った。

言葉を失った俺達に向かい、師匠は淡々と話を続けた。

「俺は実の父親の顔を知らない。母親は今で言うバツイチの再婚だった。」

「しかし、つくづく下らない男をつかんだもんだ。ロクに働きもしないで家でゴロゴロして酒ばかり飲んでい。俺は物心つく頃から義父に毎日殴られて育った。当時は離婚する家庭自体が珍しかったから、俺の家の事情はすぐに噂の的になった。おかげで教師にも同級生にもバカにされ、いじめられ、孤独で世の中を恨んでいた。そんな中で唯一の楽しみは絵を描く事だった」

それは、初めて聞く話だった。なぜなら、師匠は昔の話をあんなりしたがらなかつたからだ。

「俺は怒りや恨みを全て絵にぶつけていた。そうやって、心のバランスを取っていたんだ。聞いた話では俺の実の父親も売れない絵描きだったという。血は争えない。絵だけは教師も目をみはるほどに上手かった。それで俺はいつも思っていた。『いつか、有名な画家になって、この不幸な世界から抜け出してやる。俺ぐらいの才能があれば絶対にできるはずだ』と。」

その願いは案外早く叶えられた。俺は十代にして画壇にデビューする事ができた。そして俺は一躍有名人になった。すると、俺を虐めてた連中が手の平を返して御機嫌をうかがってくるようになった。絵は描くだけ売れ、金も有り余るほど入ってくる。その頃ようやく母親も義父に見切りをつけ、やっと母子二人の家族らしい生活ができるようになった。世界は一変した！俺は有頂天になった。これで、望み通り不幸な世界から抜けられた……！と思つたんだ。

ところが、喜びは長く続かなかつた。

どんな素晴らしい生活も、いつまでも続けばあたりまえの日常に

なっていく。日常に戻れば夢も醒める。そして、ある朝突然気付いてしまったんだ。『何も変わっていない…！』と。

何が変わっていないか？ それは心の空虚さだ。

なぜ空虚かって？ それは信じられる人間が周りに居なかったからさ。

なにしろ、俺の名前に引かれて近付いてくる奴らは下品な金の亡者ばかりだったし、俺のファンと称する奴らは、自分達の理想像を押し付ける偶像崇拝者ばかりだった。

画家になっても、相変わらず世界は狭くて、息苦しいばかりだ。俺は次第に苛立って来る。こんなはずがない。なんで何も変わらななんだ？

そんな時、義父と離婚したばかりの母親が、早々と次の男を見つけて出て行ってしまった。

その頃は毎晩ほとんど眠れたことがない。群集が俺を殺しにくる夢ばかり見るからだ。それは、仕事関係の奴だったり、ファンだったりしたが、最後は必ず学生時代オレを虐めてた連中と、義父の姿に変わった。

おいつめられて、どこにも逃げ場はない…！ そんな思いで目がさめる。そんな夜がずっと続いた。そして、寝不足と疲労で俺は次第にノイローゼになっていった。

その頃の俺の唯一の安らぎは、中学から付き合っていた女という時だけだった。彼女も複雑な家庭の娘で、同じように孤独だった。

彼女は音楽をやっていて、創作を通じてお互いに引かれあっていた。ある日俺は彼女に言った。『もう疲れた、2人で死のう』。半分冗談のつもりだったが、彼女が嬉しそうに『いいよ』と答えたから、それで全てが決まってしまった。その日の夜中には二人で車で山に向かっていた。

あの時の奇妙な高揚感は今だに忘れられない。俺達はワクワクし

ていた。音楽を鳴らしながら猛スピードで走って行く。世界がどんどん闇の中を過ぎ去って行く。うねる道を山頂へと向かい、急カーブでアクセルを踏む。

そして、俺達は、崖から車ごと落ちた。

どれぐらいの高さだったのかな？ 気がつくと、俺は花の中にいた。すぐ側に彼女が仰向きに横たわっていて、足元で車が炎上しているのが分かった。その炎のおかげで、夜だというのに辺りがはっきり見える。そこは、一面の花畑だった。それで、つきり、もう死んだのかなと思ったが、まだ生きている証拠に体のあちこちが痛い。俺は彼女に聞いた『生きているか？』そしたら『生きてるよ』と返事があった。それから『でも、もうダメだと思っ』とも聞こえた。俺は、まだ元気が残っていたから、上半身だけ起して、彼女の側に這い寄って行った。見ると、ガラスの破片で彼女は体中が傷だらけになっていた。俺は彼女の手をとった。『大丈夫か？』って聞いたら、彼女は『痛い』と涙をこぼした。俺は『しっかりしろ』と彼女を励ました。すると彼女は『バカだね、死にに来たんでしょ？』と笑った。『ごめんな。こんな目にあわせてごめんな』と謝ると、彼女は首を振った。『何言ってるの？ 私嬉しかったんだよ。あんたが有名になっちゃって、私、世界に一人ぼっちで取り残されたいな気分になってたのに、最後は一緒に行こうって言うてくれた。だから、すごく嬉しかったんだよ』そう言っって笑いながら泣く。

なんて事をしてしまったんだろう？ と、その時初めて思った。俺も彼女も不幸だった。でも、2人で生きれば幸せになれたかもしれないのに…。

しかし、後悔先にたたずだ。足元で車が爆発し、勢いよく炎が燃

え上がった。俺は、突然『死にたくない』と思った。『彼女と一緒に幸せになりたい』と。そう思った途端、世界中が光った。大袈裟でもなんでもなく、本当に光ったんだ。そして、花も、彼女も、木々までもがやけに鮮やかに美しく見えた。それは、不思議な光景だった。けど、長くは続かなかった。すぐに意識を失ってしまったからだ。

気がつくと、病室にいた。

彼女の死についてはしばらく隠されたが、動けるようになるにつれ、耳に入ってきた。

初めは、言い様のない虚脱感に襲われた。

次に、深い悲しみに包まれた。

最後に、恐ろしくなった。

彼女を失った俺の目の前に、果てしなく人生が広がっている。

これから、どう生きようか？

2度と死ぬ勇氣はもてない。

絵も、描きたくない。

絵は、長い事俺にとつての逃げ場所だったが、少しも自分や周りの人間を幸せにしないのなら、描かない方がいい。

それから俺は、絵を捨てた。松坂牙城の名も捨て、普通に就職した。人生をやり直すつもりだった。

しかし、誰にでもできるはずの会社勤めは、俺にとっては拷問以外の何ものでもなかった。時間に縛られる事も苦痛だったし、少しも尊敬できない奴に頭を下げるのも腹立たしかった。人とぶつかる事を避け、上手くやる事ばかりやる同僚達を見ては、何がおもしろくて生きているのかと内心軽蔑の眼差しを送っていたもんだ。

人を軽蔑していた俺は、人に軽蔑し返された。そのせいか、噛み違えた歯車みたいに、何もかもが上手く行かなかった。そこでも俺は孤独だった。疲労もあり、精神的にも肉体的にも追いつめられて

いった。単調で重苦しい日々が果てしなく続いた。こんな日が続くぐらいなら死んだ方がマシだと思つた事もある。

それでも、死ななかつたのは、贖罪のためさ。罪を犯した俺は、存分に苦しまなきゃいけない。しかし、生きるためには自分を殺さなければいけないかつた。俺は若い頃に培つた主張もこだわりもポリシーも抑え、ひたすら相手を受け入れる事に徹し、一日一日積み重ねるようになつて生きていった。

ところが、そうしているうちに、思いもかけない景色が見えて来た。

くだらないと思つていた事にも理由があるし、理不尽だと思つて居た相手にも理不尽なりの理由があると気付きはじめたんだ。

たいした発見じゃないが、たつたそれだけの事に気付くために膨大な時間を費やしてしまつた。

そんな頃、今のかみさんに出会つた。

きつかけは、絵さ。あいつの趣味は絵画鑑賞だつたんだ。といっても、見るだけで描かない。

幸せな家庭に育つた平凡な奴だが、明るくてこだわりがなく一緒にいると妙に居心地がいい。それで、気付いたら結婚する事になつてた。

一緒になる時、俺はあいつに、過去に起きた事の全てを打ち明けた。重い過去にも関わらず、あいつは理解してくれたようだ。

長女が産まれた時「絵を描いてくれない？」とあいつが言つた。

娘の絵を描いて欲しいというんだ。俺は了解した。もちろん本気で描くつもりはなかつた。ほんのお遊び程度に描くつもりだつた。

ところが、絵筆を取り白い紙に向かうとほとぼしるように暗いイメージが湧いてくる。忘れたつもりでも、俺の右手は何もかも覚えているんだ。あの、『陰鬱な世界』を。

悩んだ末、俺は左手で描く事にした。左手では、右手で描く程早くも上手くも描けない。それで俺は初心に戻り、モチーフを無心で観察して、できるだけ正確に線や光を写し取るうとした。しかしど

れだけ丁寧に描いても、右手でやるような正確な線は描けない。にもかかわらず、仕上がった絵を見て驚いた。それは、今までの俺にはとても描く事ができないような美しい世界だったからだ。

いつしか俺は描く事の面白さを思い出していた。子供の頃そうしていたように、仕事の合間にスケッチブックを持ち写生に出かける。あの頃と違うのは、今度は自分のためでなくて家族のために描くことだ。だから、モチーフもなるべく家族が喜びそうなものを選んだ。例えば、道ばたの花や、田舎の風景、夏の海に、川辺に咲くすすき…。探せばどこにでも描けるものはある。

そんな風に何枚も描いて行くうち、ふとこんな疑問を持った。

『どうして昔の俺は、あんなに汚い世界に生きていたんだろう？
春に咲く花も、夏の木陰も、秋の夜の月も、澄み切った冬の空も
…この世界には、こんなに美しいものがあふれているというのに…』

その答えはすぐにみつかった。

『簡単な話さ。不幸な人間には、美しいものを美しいと感じる余裕がないからだ』

…じゃあ、どうして俺は不幸だったんだ？

『孤独だったからだ』

…彼女が居たのに？

『そういえば、そうだな』

それで分からなくなる。

神様の不良品

『..』
『..』してあの頃と今じゃこんなに生きている世界が違うんだろ

そんなある日、一人の画商が訪ねて来た。なんでも、どこやらで俺の絵を見かけてえらく気に入ったから、個展を開いてみませんかという話だった。

もちろん断わった。

理由は？

決まっている。俺は、二度と本気で絵は描かないと誓ったんだ。

しかし、彼はしつこかった。何度でも訪ねて来た。あまりにもしつこいから、ついに俺は自分が松坂牙城だった事や、心中の一件を打ち明けて、二度と本気で絵は描かないつもりなんだと告げた。

ところが全て聞き終えた彼は『それなら、なおさらあなたは描くべきだ』と言う。それでも拒否すると、ついに彼は怒りはじめた。

『あんたは、何十万もの人間がのどから手が出るほど欲しくても与えられない才能を持っているくせに、それを放棄するのか。だって、本当にそれを必要としている人にくれてやりなさい。誰にもくれてやれないなら、あんたは描くべきだ』と。

俺は言い返した。

『才能があるって？ そういつてくれるのは嬉しいよ。自分ではそれほどとも思っていないがね。第一、才能があるからなんだっていうんだ？ 人より偉いとしても？ 冗談じゃない。俺は絵を捨ててから色んなものを見たよ。絵なんか描けなくなつて立派な人間はいくらでもいる。一日一日を幸せに過ごせる才能がどれだけ貴重なものか知ってるのか？ それがないのがどんなに辛いかわかってるか？俺はそれがないがために、血を吐くような思いをしなくちゃならな

かったんだ』

『誰も、絵が描けるから偉いとは言っていない。誰にだって与えられた天分と言つものがある。それは良いものでもある反面、悪いもの

でもある。時には自分を苦しめもする。しかし、結局はそれと共存しなくちゃならない。あんたは、たまたまそれが絵を描く才能だったってことだ。それは変えようのない事実だ。にもかかわらず、描かないっていうのなら、あんたは自分から逃げるって事だよ。この先、画家としても、一人の人間としても、中途半端な生き方しかできないだろう。』

その言葉は、俺の中に眠っていた何かを呼び覚まさせた。しかし、それが何なのかは言葉にできない。それで俺は反駁した。

『確かにあんたのいう通りかもしれない。絵は俺にとって生きる事そのものだった。絵を捨てた後も、俺の手は目の前にある風景を無意識に描写したがついていたさ。俺の頭の中はいつもキャンバスと画材で一杯だと言ってもいい。けど、絵が俺を導いたのはどんな世界だった？』

子供の頃は単に描く事が好きで描いていた。少し成長すると、それは不幸な現実から逃げるための手段に変わっていった。現実から逃げられた後は、俺を苦しめるものになった。なぜなら『現実からは逃げられない事』が証明されたからだ。あげくの果てにどうなった？ 一人の人間を殺してしまっただけじゃないか？』

俺の言葉に、彼はしばし沈痛な面持ちをみせた。それでも言葉は止めない。

『あんたを破滅に導かせたのは絵じゃない。あんた自身だ。絵はあんた自身を表現するだけさ。世界を作るのはあんただ。現実からは逃げられないが、現実を変える事ができる。現にあんたは既に変えただろう？』

『俺が世界を変えただって？』

結局その日、彼には帰ってもらったが、その言葉はずっと心の中にひっかかり続けた。…俺が現実を変えた？ そうなんだろうか？ 確かに今の俺を取りまく世界は、あの頃のように悲愴ではないが、そして謎めいた彼の言葉は、俺の心に希望の灯をともした。…もしかして俺は許されたんだろうか？ …それは僅かな風にも消え入りそうなかすかな光ではあった。がしかし、もし許されたのなら、もう一度絵を描きたい。ここに至り、やっと自分にとってどれ程絵が大切であったかを痛感する。

ある日、俺はついに決心した。

そうだ、過去と向かい合おう。長年俺を苦しめ続けた悪夢、俺に絵を捨てさせたあの夜の出来事と向かい合おう。そうすれば、答えが分かるかもしれない…。そして俺は左手に筆を握りキャンバスに向かった」

そこまで語ると、師匠は入り口の方を振り返った。ここからは見えないが、そこには、あの『つぎはぎのマリア』が置いてある筈だ。

「あの夜の出来事は、ずっと俺を苦しめ続けていた。日中は、まだました。他事に忙殺されて考えるヒマもないのだから。けれど、夜ごと俺を苦しめる。その悪夢を、俺は白日の元に晒す事にした。キャンバスに向かい、日の光の中であの日の事をゆっくりと思いつく。それは気の狂いそうな作業だった。けれど、正確に思い出さなければ絵にはできない。俺はあの日車に乗った時から気を失うまでの状況を、映画の一場コマコマを追うように思い出していった。

車に乗り込む二人。ハンドルを握る俺。やたらと楽しげな彼女。音楽をかける。アクセルを踏み込む。景色が飛んでいく。

あの時、二人はワクワクしていた。この世界から消えられる事に興奮していた。この最悪な世界。醜くて、暗くて、歪んだ世界。誰も信じられない世界。それら全てが窓の外を過ぎ去り、やがて闇の

中に消えていく。

そこまで思い出した俺の頭の中に例の画商の声が響いてきた。

（あんたを破滅に導かせたのは絵じゃない。あんた自身だ。絵はあんた自身を表現するだけさ。世界を作るのはあんただ）

一瞬のフェイドアウトの後、車は崖から落ちる。

キャンバスの前の俺は、その後の出来事を丹念にキャンバスに写しとっていく。

一面の花畑、その中に眠る彼女。

その姿を描きながら、俺は彼女に語りかけた。

…どうか俺を許してくれ、あんな目に合わせた俺を許してくれ。
一人のうのうと生きのびてしまった俺を許してくれ。

すると、記憶の彼方から彼女の声が聞こえて来る。

…気にする事ないよ。これは、あたしも望んだ事だもん。これで良かったんだよ。逃げてても逃げててもつきまとう苦しみを振り払うためには、死ぬより他に仕方なかったんだよ。

…そうだよな。

俺は彼女に答える。

…あの頃、俺達を取りまく世界は、それほど醜くて汚なく思えたんだ。

なにしろ、俺の名前に引かれて近付いてくる奴らは下品な金の亡者ばかりだったし、俺のファンと称する奴らは、自分達の理想像を押し付ける偶像崇拜者ばかりだったし、その上、義父と離婚したばかりの母親が、早々と次の男を見つけて出て行ってしまった。画家になっても、相変わらず世界は狭くて、息苦しいばかりだった。

『でも、本当にそうか？』

俺は彼女の体に肌色をのせながら思った。

『本当にあの頃世界は醜かったのか？』

そして彼女の唇を赤く染めながら思った。

『本当に世界は汚かったんだらうか？』

彼女の体に傷を入れながら思った。

『本当に誰も信じられるものがいなかったんだらうか？』

俺の目の前でどんどん彼女が出来上がっていく。記憶のままの美しい彼女だ。青白い顔で目を閉じて笑ってる。そして俺は、もう一度彼女に問いかけた。

『なあ、あの時の俺には本当に誰も信じられるものがいなかったのかな？』

すると、どこから誰かの答える声が聞こえた。

『仕方ないわよ、人間は弱いものだから…』

彼女の声じゃない。しかし、その声、そして言葉には聞き覚えがあった。どこで？

記憶の糸を辿りながらふと見たキャンパスの彼女の顔に、カミさんの顔が重なって見えた。それで『ああ、そうか』と思う。

そうだ、あれは結婚する前、俺が過去の事を告白した時に、カミ

さんが俺に言ったセリフだ。あの頃の俺は誰とも結婚する気はなかった。それは全てあの夜に犯した罪のせいだ。俺を赦してくれる人間がいるとは思えなかった。だから、あの時俺はあいつに全てを打ち明け『俺は最低な男だから…』と…暗に軽蔑しただろ？ だったらさつさと早く見切りをつけてくれって気持ちを含めて言った。もしたらあいつは答えた。

『仕方ないわよ、人間は弱いものだから…』

そう言われた瞬間、体が軽くなるのを感じた。まるで長年背負い続けた重い荷物を降ろしたようだった。あの時、俺は救われたんだ。そして世界は一変した。

考えてみれば、あの頃俺は人を赦す事を学んでいたんだ。それは同時に自分を赦す事でもあった。ずっと自分に向けていた刃を降ろした時、少しづつ他人の弱さを受け入れる事ができるようになって来た。

そうだ、人間は弱いものだ。だから、狡くも醜くももなる。けれど、それだけじゃない。強くて優しく素晴らしいものも同時に持っている。どちらを引き出すかは己自身だ。醜さには醜さが返ってくる、優しさには優しさが返ってくる。今すぐに返らなくても、いずれは返ってくる。今ここにいるのは、過去の自分が造り上げた自分なのだ。

『そうか』

それで俺は気付いた。

『牙城だったころも今も、世の中自体は何もかわっちゃいない』

ただ、あの頃の俺は他人の罪を許せず、他人の醜いところばかり

に目を向けていた。この世の人間の全ての醜いところしか見出せなければ、人間で構成されたこの世界は醜く染まらざるを得ないだろう。そして、他人に潔癖さばかりを求める俺は、実は誰よりも自分に対する理解を求めていることにも気付く。自分も他人に赦されてこの世に存在しているちっぽけな点でしかないというのに、俺は誰も赦そうとしていなかった。

それは一つの発見だった。しかし、同時に激しい悔恨の波が押し寄せてくる。そんな事のために、俺は彼女を殺してしまった。しかし、今さら悔やんでも、何も返りはしない。俺は祈りを込めて彼女に十字架を抱かせた。

…神よ、彼女に永遠の安息をあたえたまえ、絶えざる光もて照らしたまえ…」

31 (前書き)

先ほどアップした際、同じ文章を2まわりコピーした物をあげてしまったので修正いたしました。
失礼しました；

「世界を創るのは自分自身だ。絵を描いていたから破滅したんじゃない。俺の持つ世界観そのものが俺を破滅に導いたんだ。」

そう悟った俺はあらためて画家として生きる事を決意した。

しかし、過去の俺とは違う世界を描きたいと思った。その決意もこめて、雅号を菊地大成と改めた。

それから堰を切ったように描いたさ。

それは、まるで欠けたパズルのピースをはめ込んだようなしっくりとした気分だった。そして気付いた。俺にとって絵は欠くべからざる物だったってことを。恨みのためでも、逃げのためでもない。俺はただ描きたいから描いているだけということにな…」

そこで、師匠は言葉を終わらせた。

正直ショックだった。色んな意味でショックだった。

第一にショックだったのは、師匠にそんな重い過去があったって事だ。この人は、かつてそんな暗さを微塵も感じさせなかったことがない。第二にショックだったのは、俺自身についてだ。師匠が絵に対して持つ程の情熱を果たして俺が持っているのだろうか？ それ以前にもっと根本的な問題として、俺にそれほどの才能があるのだろうか？

一方、弟はといえば醒めたもんだった。

「あんたの苦労話は分かったよ。でもそれが何だっというの？」

と、こうだ。

すると、師匠は言った。

「つまり、俺の絵はただの綺麗事じゃなくて、本当に綺麗なんだと言いたかったわけさ」

なんだそりゃ、師匠…って思わず突っ込みたくなるが、よく見れば弟はやけに神妙な顔をしていた。あれでも何か感じるところがあったのかもしれない。

その晩はとりあえず泊めてもらい、次の日帰る事にした。

夜、寝室に行くと、弟が布団の上であぐらをかいて天井を見ている。

「まだ、寝ないのか？」

と、尋ねると、返事のかわりに咳をする。

「先に寝るぞ」

って布団に潜り込むと、弟が言った。

「なあ、兄ちゃん。昼間のあいつのあの話は、一体何が言いたかったんだろう？」

そんなの本人に聞けよと思うが、一応親切に答えておく。

「そうだな。ようするに、この世は自分の意識の持ちようでもうどうにも変えられるっ事じゃないかな」

「でもさ。俺みたいに人から裏切られて踏み付けられた奴が世界を変えるなんてできるのかな？」

「…そうかな。やってみなきゃ分からないけど…できるんじゃないのか？ 師匠がいいお手本だ」

「けど、俺を苦しめた連中を許すなんてできそうもない」

「…できなくても、生きていきたいなら、恨みも何もかも忘れて自

分が白紙になるしかないんじゃないのかな？」

「無理だよ」

「でも、そうしなければお前に未来はないと思うぞ」

「でも、無理なんだ。許すとかそういう事以前に、怖くて仕方がないんだ。俺ね、こつち来てから練習を兼ねて何社も面接に行ったんだよ」

「え？」

俺は布団の上に起き上がると、弟の方を見てあぐらをかいた。

「職探ししてたって、そういう意味だったのか」

「そうさ。俺、兄ちゃんが川に落ちて死にそうになった時、つくづく自分に嫌気がさしたんだ。それで、どうしても立ち直りたくてここまで来た。でもダメなんだ。面接会場に行っても、どうしても扉が開けられないんだ。怖くて仕方ないんだよ。兄ちゃん、俺どうすればいいんだろう？」

「そうだったのか」

俺は泣きそうになった。何とかしてやりたいと思う。しかし、どうすれば良いんだろう？ 分からない。分からないなりに考え、答えを出す。

「きつとき、お前の場合、人を許す前に自分を許す方が大事なんだと思う」

「自分を？」

「そうさ。お前は心無い連中に投げかけられた言葉のせいで、きつい負の暗示にかかってしまっている。その暗示を解いていくんだ」

「…どうすれば解ける？」

「そうだな。とりあえず…否定的な言葉が浮かんだら打ち消す事だ。いいか、俺はお前のクラスメートなんかより、よほどお前の事を知っているが、お前はどこにだっている普通の奴さ。誰に恥じる事もない人間だ。俺の言葉を信じろ」

口からでまかせだ。けど、今の俺にはそれより言うべき言葉が見つかからない。それでも、弟にとってはなぐさめになったのだろうか。

ようやく布団にもぐり眠る気になったようだ。奴は、向こうむきに寝転がるとボソリと言った。

「なあ、兄ちゃん。神様っているのかな」

「え？ うーん、どうかな？ いるような気もするし、居ないような気もするなあ」

「もしいるならさ、なんで俺みたい的不良品つくったかな？」

「不良品？」

「そうさ。何の役にも立たない不良品さ」

「馬鹿やろつ。言ったる？ お前は不良品なんかじゃない。どこにでもいる普通の奴だよ」

「そうかな……」

「そうさ」

「ありがとう」

そう言つとそれきり弟は黙ってしまった。しばらくすると寝息が聞こえてくる。どうやら眠ったらしい。しかし俺は眠れず、散歩がてらアトリエに向かう。最後にもう一度、あのマリアを見ておこうと思ったからだ。

アトリエに行くと、なんと師匠が居た。

ちよつど、あのマリアの絵を壁に立て掛け、その前で黙然と座っている。

「師匠」

と声をかけると、驚いて俺を見た。

「ああ。優か。弟の様子はどうだ？」

「なんとか、眠ったようです」

そう答えると、俺は師匠の隣に腰を降ろした。

それからしばらく師匠と二人でぼけつとマリアを眺める。やがて師匠がぼそつと言った。

「弟、立ち直れるといいな」

「そうですね」

俺はうなずく。

「どうなる事か…。でも師匠の話しには感じるところがあったみたいですよ」

「そうか？ 醒めてなかったか？」

「上辺はね。でも今さつき真剣に尋ねて来ましたよ。あの話はどういう意味だったのかって」

「そうか」

「あいつの事もだけど、俺こそ…」

「うん？」

「俺、絵を続ける事迷っちゃうな」

「何で？」

「俺、師匠みたく才能ない事が分かったし」

「そんな事ないと思うぞ」

「お世辞はいいです」

「世辞じゃねえよ」

「いいですってば。自分の事は自分で一番良く分かってるから。でもね、だからって今の生活を超える事には耐えられないんです。何だか、自分が自分でないような気が日に日に強まって、もうたまらないんです」

「人間究極自分の好きなように生きるしかねえよ」

「…そうですね？」

「そうさ。それが自分の人生を生きるって事じゃないかと思うぞ」

「そうなのかな…」

師匠と話しても迷いは深まるばかりだった。

次の朝、俺は弟とともに東京を離れた。夕べ眠れなかったせいから新幹線の中でついうとうとと目を閉じてしまう。

すると、闇の中にマリアの絵を眺めてる師匠の姿が見えて来た。

一体、何を思って眺めているんだろう？ 苦々しい過去の傷は、本当に癒えてるんだろうか？ 果たして人生に、本当に『解決しま

した』なんて言い切れる事があるんだろうか？ その謎は今の俺には解けそうもないが、

ただ一つだけはつきりと分かった事がある。あのマリアの絵は、師匠が生と死のはざまで見えた光の記憶だったんだ。だからあれ程美しいんだろう。…そんな事を思いながら、俺は眠りに落ちていった。

光の中にいる時、人はその明るさに気付かぬものだ。けれど、闇の中にいると、人はわずか一条の光にさえ満幅の輝きを見ようとす。にもかかわらず人は闇にとらわれる。それは、彼が彼自身に課する罰である。罰は、罪を呼び寄せる。そして、罪は新たな罰を彼自身に課す。その連鎖は永久に続いて行く。それを断ち切りたければ、自分が罪人であるという意識を捨てるよりない。自分だけでなく、本来誰にも罪などないのだ。目を背けているのはいつも彼自身である。光の世界はいつもすぐ側で扉を開き、彼が来るのを待ち詫びているというのに。

目覚ましが鳴った。

6:30だ。もう起きなくなてはならない。今日は大切な日なのだから。

布団から身を起す。3月下旬。まだ寒い。ひやりとした空気に包まれ、思わず身震いする。そして、

…大丈夫だろうか？

一抹の不安がよぎる。

…どうか大丈夫であって欲しい。

と願いつつ、服に着替え階下へ向かう。

テーブルの上には朝食が用意されていた。

目玉焼きにサラダが二人分。

オヤジが起きるのは、いつも8時過ぎだから、これは俺と、弟の分だ。おふくろはオヤジを待って食べる。

「正は、起きて来たか？」

おフクロに尋ねると

「まだ」

との返事。

「果たしてちゃんと起きてくるのかなあ？」という言葉を飲みこみ、俺はリモコンのスイッチを入れた。顔なじみのキャスターがニュースを語っている。6:40の表示を見ながら、俺は朝食をかきこんだ。

と、その時、トントン…と、背後から足音が聞こえてきた。心臓が1度だけ大きく鼓動を打つ。飯を飲み込み振り返ると、弟が立っている。

「…オス」

箸を持ったまま右手を上げると、弟は黙って向い側に座った。

それから、俺達は無言で朝食を済ませ、顔を洗うため、順番に洗面所へ向かう。

7:30

チャイムが鳴った。

おフクロが玄関に駆けていく。

「おはようございます!」

元気な声が聞こえる。

みーさんの声だ。

どうやら、約束通り来てくれたらしい。

俺は大きく息を吸い込むと、ソファに埋もれていた弟の肩を力強く叩いた。

「ほら! 行くぞ!」

「ああ…」

弟はうなずくと、ソファからゆっくり立ち上がった。

家から三婆沙メタル株式会社までは、歩いて20分ほどの距離である。

今日から俺達はそこで働くのだ。

そう。俺達はそこで働くのである。

つまり、俺は元いた工場に出戻ると言うわけだ。

そうなった理由はいくつかある。

まず、俺がつい先日まで働いていた工場だが、年末に入院して1カ月も休んだ上、弟さがして半月も休んだために、すっかり信用をなくして結局クビになってしまった。

そんなわけで困り果てていた時、弟が『働きたい』と相談を持ちかけて来た。それは、あの東京への旅から1週間後の事だった。あれ以来、弟はすっかり心を入れ替え、部屋から出るようになった。…わけでもなく、相変わらずほとんど一日部屋に閉じこもっていた。それで、相変わらず3食俺が運んでいたわけだが、その日に限り、自分からドアを開けて「相談があるから、入って来い」と俺に言う。驚きつつも、言われるまま部屋に入って「なんだ？」と尋ねると「俺、やっぱり働こうと思う」と言う。

「そうか」

と、俺はうなずいた。同時に嬉しくなった。あの旅行も無駄じゃなかったってことだ。

「じゃあ、早速明日から職安へ行くか」

身乗り出した俺に向かい、弟は人さし指をたてこう言った。

「でも、一つ条件がある」

「条件？」

「…なんだ？」

「面接を受けなくても入れる会社はないか？」

「…そんな会社、あるわけがない。」

しかし、奴の働きたいという願いはどうしても叶えてやりたかった。せつかく芽吹きかけた希望の芽である。なんとか大きく育ててやりたい。それで、俺は3日3晩考えた。しかし、なかなか良い知恵が浮かばない。

そんなおり、みーさんから電話がかかって来た。それで、俺がまた仕事を辞めてぶらぶらしている事を告げると、

『じゃあ、うちの会社に戻って来ないか』

と言ってくれる。なんでも、とある部署のパートさんの間でもめ事がおこり、大量に人が辞め、人手不足で大変な事になっているそうなのだ。

気持ちはありがたかったが、少々迷惑な申し出でもあった。なぜなら、次の転職はちゃんとした会社に入ろうと思っていたからだ。しかも、ここではない場所です…。

ところが、断わろうとした俺の頭に、突然閃くものがあった。「そうだ!」。俺は叫んだ。そして早口で尋ねた。

「人手が足りないって事は、2人同時に勤める事はできるのかな? もし、いいなら、俺ともう一人セットで勤めたい奴がいるんだけど!」

『え? 何って?』

みーさんの返事。どうやら、聞き取れなかったらしい。それで、今度はゆっくりと言った。

「あのね。もし、人手が足りないのなら、俺と、もう一人、一緒に働きたい奴がいるんだけど」

『ああ』

今度は伝わったようだ。

『多分良いと思うよ。明日課長に聞いてみるよ』

聞くまでもなくOKだろう。何しろ、俺はあの会社では信用があった。案の定、次の日みーさんから連絡が来る。

『優ちゃんの知り合いなら大歓迎だっ』

「よっしゃ!」と俺は手を打った。

その日の夜、俺は、早速弟に聞いてみた。

「お前、俺が前にいた会社で働いてみる気はないか？」
すると、弟は意表をつかれた顔をした。

「兄貴が前に努めていた会社って…例の、リサイクル会社？」

「そうさ。あそこなら俺もよく知ってる人がたくさんいるし、仕事もそれほど難しくないし…」

「でも、面接あるんだろう？」

「そりゃ、あるさ。面接の無いところなんてないぞ」

「じゃあ、無理だ」

「そう言つなよ。あそこなら、みーさんもいるし…」

「みーさんも？」

その名前に弟は心を動かされたようだ。いい感じだ。

「そうさ」

「ここぞとばかり、言葉を励ます。

「それだけじゃない。俺も、働かせてもらつつもりだ」

「あ、そう」

こちらはそつけない反応。ちよつとムカツク。が、しかし、ここで挫けてなるものか。

「それに、面接つたつて形だけだよ。なにしろ、俺の弟というだけで信用があるからな」

半ばハツタリをかますと、弟はしばらく考え込んだ後、

「分かった。やってみる」

と答えた。

次の日会社に電話すると、早速面接に来てくれという。面接は思ったほど手こずることもなく、俺の予言通り形式だけのものに終わった。そして、1週間後に来てくれと言われ、そして今に到ったわけだが…。

正直、俺も緊張していた。
うまくいくだろうか？

今日が弟の人生の分岐点。立ち直れるか、立ち直れないかの瀬戸際なのだ。

しかし、弟はもっと緊張しているだろう。横を行く弟の顔を見る。うつむき加減。表情もみえない。

と、その時

「桜、綺麗だね」

と、みーさんが言った。

顔をあげれば川沿いに満開の桜並木が続いている。

「ああ。もう、そんな季節か」

思わず口にする俺。少しでも緊張がほぐれる。やはり、みーさんに迎えに来てもらって良かった。

「おい、見るよ、桜が咲いてる」

俺は弟に話しかけた。しかし、奴は心ここにあらずって具合で返事も無い。

そんな弟の姿を見て、…頑張れ、弟よ…と、俺は心の中でそっ
と励ました。

そうこうしているうちに、工場に着き、鉄製の門をくぐる。

サイレンが鳴り響く。

神様の不良品

さあ、仕事の第一日目だ。

33 (前書き)

ここより38話あたり(正確には39話前半)まで書き換えましたが、構成を少しいじっただけで、ほとんど内容に変わりはないです；以前、読んで下さった方には申し訳ありません。お時間があれば、どの辺りをどう変えたか読んで比べてみるのも一興かとおもいます。

m (| |) m ペコリ...では。 08・09・23 橘明

続「青春 ひきこもり」

【前回までのあらすじ】

できのいい兄貴を持った山田亜矢松：もとい、河井正は、いじめられていた親友をかばってしまった罪で、自分がいじめられるという罰を受けることになった。さらに、好きだった女子に「きもい」と言われたショックで、自らに自室監禁の刑を課したのある。そして、8年の時が過ぎ、やっと自分の罪を赦し、社会復帰する決心をしたのであった。

できのいい(?)兄としては、この物語の続きを是非とも見届けなければなるまい。

「おい、河井弟！」

フロア長のイライラした声が聞こえる。

また、弟が何かやらかしたかと、俺は電子ドライバー片手に少々うんざりする。

「お前、また日報出してないだろう？」

「すいません」

弟が答えた。

「後で出そうと思っていました」

「後じゃなくて、今、出してくれないかな？」

「でも、ロッカーに入れてあるんで…」

「じゃあ、今すぐ取って来い」

「でも、今手が放せなくて…」

「ちっ」

小金井さんの舌打ちが聞こえた。

「おい！ 河井兄！」

なぜ、俺にふる？

などという思いはおくびにも出さず振り返ると、小金井さんが苦々しい顔でこつちを見ていた。そして、言った。

「弟のかわりに、カゴ車を運んでやれ！」

『っえー。なんで俺があ？ 俺だって、今、手が放させないんですけどお…』

などと言えるわけないので、しぶしぶ「はい」と答えて、作業台から離れ、工場奥のカゴ車置き場へと向かった。

弟がぼやとした顔で俺の事見てる。なんだその人柄な感じは。むかつくので、すれ違いざまその頭をどついてやった。

「なんで日報ぐらいまともに提出できないかな？」

昼飯時、俺は弟に説教をした。

「帰る前に、二階事務所にぽいっと置いてくるだけの事だろう？」

「だって、事務所の女ムカツクもん」

「はあ？」

「あいつら、俺を見て笑うんだ」

「笑う？」

「そつだよ。事務所中の女がぐるになっっている」

「まさか。気のせいだろ」

「気のせいじゃないよ。ほら。今も笑ってるだろ？ あそこ」

そつ言うと、弟はハシで食堂の中央をさした。

そこには、確かに事務所勤務の女子社員達がかたまつてメシを食っている。話に熱中しているらしく、時々わつと笑い声を上げてはいるが…。

「別に、お前の事なんか笑ってないと思うぞ」

「でも、目が合ったし」

「被害妄想だよ。被害妄想。っていうか、自意識過剰だ」

「違うよ。絶対気のせいなんかじゃない」

「…大丈夫かよ？お前」

あまりの弟の強固な物言いに、俺は、少々不安を感じる。

久しぶりに穴蔵から出た弟は、人が怖くて仕方ないようだ。今だに、俺とみーさん以外の人間には馴染もうとしない。ちなみに、工場勤務開始より、そろそろ一カ月が過ぎようとしている。

「河井弟さーん」

午後の勤務。また、弟が呼ばれている。

あれは、正社員の前田君の声だ。

前田君は、24才。弟とほぼ同じ年だが、あちらはしっかりしてる上に、気が短い。

「弟さん、昨日分別の方手伝いましたよねー」

嫌みっいたらしい言い方だ。

「ホラー1階でのゴミの分別の作業」

「…はい。しましたけど…」

弟がぼそぼそと答えた。

「その時、ボンベ抜くの忘れてるでしょう？」

「…そうでしたっけ？」

「忘れてます。あのー前にも言ったと思うんですけど、ボンベを間違えて圧縮機にかけると爆発して危険なので必ず分けて下さいね」

「あ、スイマセンでした。でも、あの作業って、他の人もやってるはずですよね」

「河井弟さんの担当した所が一番異物混入多かったってクレームきたんですよ。二度手間になるから、きちんとやてくださいって」

「…スイマセンでした」

「いいです。今度から気をつけて下さい」

そのやりとりの一部始終を聞きながら俺はため息をついた。

いまだかつて、弟がどなられなかった日はない。こんなに簡単な仕事なのに、どうして怒られずにできないんだろう？ そっちの方が不思議だ。大体、俺の記憶では、弟は結構器用な奴だったはずなのに。長い事穴蔵にいと、脳の回路も故障してしまうとでもいうんだらうか？

そんな事を思いながら、俺は目の前のコイルを外していく。

俺は、今、テレビの解体作業をしている。

バラされた部品は、同じ素材どうして集められ、砕かれ、溶かされ、新しい製品として甦る。

閑話休題。2011年のデジタル放送開始にともない、ブラウン管テレビの製造は既に中止されているという。

用無しになったブラウン管テレビの運命は、うちみたいなリサイクル工場で解体されるか、もしくは発展途上国に身売りさせられるのどっちか…らしい。

そんな事情で、この先我が社に来るブラウン管テレビの数も増えていくだろうとの事。もったいないな。まだ使えるのにな。哀れな奴らだ。あれだけ人間様を楽しませてやったのに、技術革新の波に押されて、いらなくなったらポイでおしまいか。諸行無常を感じる。けど、この作業は嫌いじゃない、機械の構造を見るのは俺の性分にもあっている…同じ事ばかり繰り返していると、時々眠くなるけどな。

しかし、どんな仕事もそうであるように、この仕事もただやれば良いというものではない。少しでも速くやらなければならぬ。一日何台ばらせたか、毎日日報を書かされる。

企業ってというのは利益優先だからな。効率を求められるのはごく当然の事で、毎日提出させられる日報を集計し、ラインごとに成績を競わされる。

そして、うちのラインはこの一月程成績が落ち込んでいるらしく、正社員はかりかりしていた。当然である。社員にとっては、自分の出世にも関わる重要な競争なのだから。ラインスタッフ一同馬車馬のようにケツをたたかれ、ひっしで頑張っているのだが、一向に成績が伸びない。その原因は誰もが知っていた。河井正…つまり、弟の作業が遅いからだ。

「悪いね。今日は、道具類はみんな貸し出しちゃってて…」
「痩せた眼鏡のおばちゃん言う。」

「え？ でもいつもたくさん置いてあるじゃないですか」
「俺はおばさんに言い返した。」

「それがさ」
「とおばちゃんは言う。」

「こないだから、学生バイトがたくさん来ているでしょう？ あの
子達にみんな貸し出しちゃって…」

「それぐらいで無くなるかなあ？」

「納得行かずに俺が食い下がると、後ろから弟が言った。」

「もう、いいよ兄ちゃん」

「でも」

「フロア長に言えば、何とかしてくれるよ」

「そりゃ、スペアぐらいあるかもしれないけど…またどやされるぞ」

「仕方ないよ」

そう言うと、弟は、肩を落として元来た道を歩き始めた。仕方な

いので俺はおばちゃんに礼を言い、その場を去った。そして、しばらく歩くと、後ろから笑い声がする。

「？」

俺は後ろを振り返ったが、何も見えなかった。

「まったく。何でドライバー無くしたりするんだ？」

「知らないよ。いつもと同じ所に置いておいたつもりなんだよ」

「その『つもり』が良くないって、いつも言っているだろう？」

俺達は、一応各々に道具を与えられている。無くしたり忘れたりしたら、さっきの庶務課に借りに行くのだが…。

「タイミング悪かったな。無いなんて。こんな事めつたに無いんだけどな…」

すると、弟がぼそつとつぶやいた。

「本当に、タイミングが悪かったただけなのかどうか…！」

作業場に着くと、既に朝礼が始まっていた。俺らは慌てて整列している同僚達の中に混じる。すると、フロア長の小金井さんがギロリと俺達を見たので「すいません」と小さな声で謝りペコリと頭を下げた。

前田君が社員代表で言う。

「昨日のうちのラインの解体台数は300台。目標の330台には全然足りていない。目標台数に達するためには、一人一日最低でも33台はバラしてもらわないと困ります。それで、うちのラインは成績が4週連続最下位なので、今日からは目標台数に達するまでサービス残業してやってもらいます」

「ええっ？」

という雰囲気フロア中に漂う。

「サービス残業がいやなら、少しでも速く作業するように。以上。今日も一日頑張ってください」

その日の作業場は、異様な緊張感が漂っていた。そりゃそうだ。

できれば、誰だってサービス残業なんかやりたくない…。俺も死にものぐるいで作業した。眠いとか言っている場合じゃない。と、その時

「河井さん！」

いきなり名前を呼ばれて驚く。

「それ順番ちがーう！」

「え？」

「どこが？ 聞こうとして気がつく。俺じゃない。今のは弟が言われた言葉だ。」

「ほら、まずは偏向ヨークから外さないよ。コイルばかり触ってもダメだって…」

見ると、正しの作業台に前田君が張りついていた。

「すみません」

弟が謝る。

「あのマニュアルどこにやったんですか？ マニュアル見てやればいいと思うんですけど」

「あ、あれ。ここには無いです」

「ここには無い。じゃあ、どこに有るんですか？ ロッカーですか？ それなら、取って来てもらっていいですよ」

「いいえ、そうじゃ無くて…」

「どこですか？」

「家に持って帰って無くしました」

「まじですか？」

「すみません」

「そういえば、河井さん、ドライバーもなくなりましたよねえ。別に良いんですけどお、会社から渡したのものにも、それなりに経費がかかってるんでえ…」

「すみません」

「ていうか、マニュアルも無しで今までどうやって作業してたんですか？」

「記憶とカンで…」

「それで、よく作業できてなしたねえ。ある意味スゴイですけど…。メモとかとってなかったんですか？」

「マニュアル有るからいいと思ってとってませんでした」

「…」

「すみません」

「いいです。マニュアル貸しますから。でも、これ僕のですから、無くさないで下さいね」

「はい。ありがとうございます」

その日、結局俺達は7時まで残るはめになった。一時間半の残業である。

すっかり暗くなった屋外に出る。川沿いの道をとぼとぼと2人で歩く。

「そう、落ち込むなよ」

俺は弟を励ました。

今日一日の出来事で、弟と来たらすっかり憔悴しきっている。正直、こつちだつて疲れ切っているのだが…。

「そのうち、仕事にも前田君にもなれるって…」

弟の心理的ショックのが辛かるうと必死で元気付けていた時、どこからか、また「わっ」と笑い声が聞こえて来た。何かと違って声の方を見ると、川べりに女子社員が固まって笑っている。

「何だよ？ こんな所で」

つぶやいた時、右手に弟がもたれかかって来た。

「どうした？ 貧血か？」

尋ねる俺に弟が答えた。

「兄ちゃん。俺、ダメかもしれない。ダメかも…」

弟はぶるぶるふるえていた。

もし、神という名の作家がいるのなら、そいつはそうとうのひねくれ者に違いない。容易にハッピーエンドは見せたがらないようだ。

「おい、正、正」

午前7時15分。弟の部屋のドアをノックする。

「そろそろ起きないと遅刻するぞ」

しかし、返事が返って来ない。

「おい、正」

俺はしつこくノックした。それでも弟は出て来ない。仕方がないので、扉を開けて中に入ると、弟は、まだ布団の中にもぐっていた。

「おい、起きろよ。遅刻するぞ。それとも体調でも悪いのか？」
すると、弟が答えた。

「うん。腹が痛い」

「カゼか？」

「多分、そうだと思う」

「大丈夫か？」

俺は、昨日の弟の様子を思い出し不安になった。

「本当にただのカゼか？」

「そうだよ。多分一日寝れば治ると思うから、大丈夫だよ」

「そうか……」

弟の言葉を信じて、俺は仕事に向かった。

「弟さん、大丈夫？」

その日の夜、久しぶりに森崎から電話があった。そのタイミング

の良さに少々驚く。

「弟なら、今日は体調を崩して仕事を休んだけど…なんで知ってるの？」

『うん。うちのサイトに、弟さんがおかしな書き込みしてるから』
「なんでも弟は、今でも森崎のサイトにちよいちよい顔を出しているらしい。」

「おかしな書き込みって？」

『なんか、会社に行くのが怖いみたいな事言ってるよ』

「怖い？」

『うん。みんなが自分の事を見て笑ってるって』

「…」

それで、また俺は昨日の弟の様子を思い出した。

「確かに昨日の帰り少し様子がおかしかったけど…別に誰も笑ってないと思うし…久しぶりに外に出たからそんな風に思えるだけで、あいつの気のせいだよ。一時的なもんじゃないかな？」

『それなら、いいけど…気をつけてあげてね』

「分かった。ありがとう」

そこで、電話を切った。

ちなみに、森崎との付き合いは、弟の失踪事件以来なんとなく復活していた。しかし、微妙な関係だ。よくこれで続いているなど正直不思議に思う。森崎は待っていてくれるのかもしれないが、今はまだ何も決められない。その卑怯さを知りながら、ずるずると日を過ごしている自分がいる。

翌日、俺はまた弟の部屋の扉をノックした。

「おい、正。どうだ？ 具合は」

しかし、弟の返事はない。

昨日も奴は一日部屋にこもっていた。一抹の不安がよぎる。

俺は、ドアを開け、奴の部屋に入って行った。弟は布団にもぐったままだ。俺は布団ごと奴を揺さぶった。

「おい、正、正！」

すると、弟が布団から顔をのぞかせた。その顔色の悪さにぎよとする。

「大丈夫か？ お前……」

弟は力なく首をふった。

「どうした？ どこが悪いんだ？」

しかし、弟は首をふったきり何も答ええない。しばらく待ってやっ
と出て来たのは「無理」という言葉だけだった。

結局その日も弟は仕事を休んだ。

小金井さんに休む旨を伝えると「そうか」と言っただけでため息をつく。
なんだか申し訳ない気持ちになってくる。弟一人のためにライン中、
ひいては会社中の人に迷惑をかけるはめになるのだから……。

しかし、次の日も、また次の日も、そのまた次の日も、弟は会社
に行く事ができなかった。

毎朝それを告げるたび、小金井さんの顔つきは渋くなってくる。

ある朝とうとういたたまれなくなつて、「すみません」と頭を下げ
ると、

「別に謝る事はない。補充はいつでもきくから」

と、言われた。その言葉に胃が痛くなる。このままではヤバイ。

復帰するより先に、奴はクビにされるかもれない。そんなことにな
ったら、また、あの地獄のような穴蔵生活に戻ってしまう。そう考
えると、気が気ではない。親父とおふくろの顔にも焦燥感が漂い出
した。

その夜、俺は森崎に電話し「その後、弟は書き込みをしているか
どうか？」尋ねた。森崎は『してるよ』と答える。

『大分、調子悪いみたい。私では、どうしてもあげられないぐらい

…」

「なんて書いてるの？」

『色々ありすぎて、口で説明するのはちょっと…。そこにパソコン有る？』

「うちには、無いんだ。有るけど…弟の部屋にしかない」

『そう。困ったな。見て、読んでもらうのが一番と思っただけ。私の家に来てもらうにも、いつも帰るの8時過ぎだし…』

「いいよ。近所にネットカフェがあるから。そこで見てみる。森崎のサイトに行けばいいんだね？でも、アドレスを知らないな（俺は、めったにパソコンを触らないので、検索をしようと思っただけじゃなかった）」

『そうね。今からメールでサイトのアドレス送るわ』
「分かった」

電話を切つてしばらくすると、森崎のメールが届いた。確かにサイトのアドレスが書いてあるのを確認すると、俺は自転車で近所のネットカフェに向かった。

森崎こと、『リリカ』のサイトは、とても少女趣味に出来上がっている。言葉を替えれば乙女チックってやつだ。まず、出入り口では花と小鳥に囲まれた横顔の少女が迎えてくれる。Gallyと書かれた文字をクリックすると、繊細な輪郭をもった少女達が現れる。その、泣いたり、微笑んだりしている少女達は全て森崎の描いたものだ。それらは森崎にどこことなく似ているようにも見える。どのみち、俺には到底描けない世界だ。

そのサイトの掲示板も、その雰囲気になさわしく、白い背景に淡

いパステルカラーの小さな文字が並んでいた。その数々の書き込みの中には、確かに弟の書いたものもある。

『リリカさんこんばんは。僕は、やっぱりダメかもしれません』

4月16日、火曜日に投稿されたものである。何がダメなんだと思いつつ、過去の書き込みを追っていくと、森崎が返信をしていた。

2008年4月16日（火） 21時08分 「名前」 :

リリカ

「コメント」 : どうしちゃったの？ 会社で何かあったの？
話してみて。

すると、弟の返信。

2008年4月16日（火） 21時24分 「名前」 :

土中喪黒う（注 弟のインターネットでの名前である）

「コメント」 : 実は、僕孤立しているんです。みんな僕を笑いにするのです。上司も僕だけには厳しいんです。

ああ…なるほど。このことか、森崎が言っていたのは…と納得しつつどんどん過去ログを追って行くと、30分ほど後にリリカが返信していた。

2008年4月16日（火） 21時58分 「名前」 :

リリカ

「コメント」 : 本当に笑いにされているのかな？ 気のせいじゃないかな？

孤立するのは、モグちゃん（弟の事らしい）の事をみんなが知ら

ないからだと思うよ。

上司が厳しいのも仕事場なら、ある程度仕方ない事だよ。

モグちゃんは、働く事になれていないから、よけいにそう感じるんじゃないかな？

悪く考えると、ますます悪くなるよ。

まずは、笑顔で挨拶してみたら？

モグちゃんの良い所が分ければ、みんなの態度も変わると思うよ。

…なるほどな。良い事言っつな、森崎は…などと感心しながら、さらにログを追って行く。

2008年4月16日（火） 22時10分 「名前」 :

土中喪黒う（注 弟のインターネットでの名前である）

「コメント」 : そんな事で、解決しないと思います。

あいつらは、根本的に僕を馬鹿にしているんです。

2008年4月16日（火） 22時30分 「名前」 :

土中喪黒う（注 弟のインターネットでの名前である）

「コメント」 : じゃあ、また引きこもっちゃうの？

辛いと思うけど今が頑張り時だよ。

御両親もお兄さんも、モグちゃんの事心配してると思うよ。

誰も人の事を馬鹿にしたりなんかしないと思うな。

明日からは、頑張って会社に行こうよ。

リリカは必死で励ましてくれて。けれど、一部は真実、一部

は気休めだなと俺は思った。多少の被害妄想が入っているとはいえ、あいつが会社で馬鹿にされ、孤立しているのは事実である。その原因は、あいつの勤務態度にある。それを自覚しない限り、あいつの辛さは無くならないだろう。

2008年4月17日 (水) 00時05分 「名前」 :
土中喪黒う

「コメント」 : 分かりました。頑張ってみます。

との書き込みがある。

しかし、俺はその先の展開を知っている。奴は説得されなかった。仕事には行けなかった。そして、その日の朝にはこんな、失礼極まる書き込みをしていた。

2008年4月17日 (水) 08時55分 「名前」 :
土中喪黒う

「コメント」 : やっぱり今日も行けませんでした。

家族の考えなんてどうでも良いです。兄貴なんてあてにしてないし。仕事で俺が叱られても、あいつは無関心だし。

あいつにとって、俺は居なくてもいい存在なんです。

なんて言いぐさだ。腹を立てながらも森崎の返信を見る。

2008年4月17日 (水) 21時43分 「名前」 :
リリカ

「コメント」 : そっか。今日も休んだんだ。しょうがないね。

でも、お兄さんが無関心だなんて思わないで。仕事場で馴れ合った

ら反感を買っつから、あえて距離をおいてるんだと思うよ。
本当は、齒がゆい思っているんじゃないかな？

思い出してよ。お兄さん家出したモグちゃんを探してわざわざ東京まで来てくれたでしょ？

無関心なら、放っておくと思うよ。

お兄さんも、御両親もモグちゃんが幸せになる事を望んでると思うよ。

森崎は分かってくれている。俺が、工場であえてあいつのフォロ
ーに入らないわけをだ。この先、俺が居なくなってもやっていける
ようであれば困るんだ。

弟は、これを読んでどう感じたのか。その日はそれきり書き込み
をしていなかった。次の日も沈黙を守っている。その間見知らぬ奴
のメッセージが続く。そして、やっと今日の午前9時35分。奴は
書き込みをしていた。

2008年4月19日 (木) 09時28分 「名前」 :

土中喪黒う

「コメント」 : リリカさん。今日も休みました。

ついに一週間休み続けてしまいました。

リリカさんの言っている事は分かっているつもりです。

でも、怖くて仕方がないんです。

仕事に行くと頭がぐちゃぐちゃになってしまっんです。

上司に怒られると、さらにパニックになります。

どう動けばいいのかわからないんです。

リリカさん、どうして僕はこうなんでしょうか？

頑張りたいのに、体が言う事を聞きません。

両親にも兄にも、本当に申し訳ないです。

僕は、変わりたい。でも変わりません。
どうしても変われないなら、死んだ方がましです。

そこで、2人のやりとりは終わっていた。

34 (後書き)

今回、もぐろうの相談に対するリリカの回答は、某お悩み掲示板の相談と回答を参考にして書きました。

自分にとっても参考になりました(^^)∴。生かしたいです…；

「河井兄貴。ちょっと時間とれるか？」
月曜の午前中、仕事をしている俺に、小金井さんが話しかけて来た。

俺は作業の手を止め、顔を上げた。

「え？ 別に良いですけど…」

「じゃあ、キリがいたらそれでいいから、2階の応接室まで来てくれるかな？」

「はい…」

うなずくと、俺は適当なところで作業を切り上げ、2階の応接室へと向かった。

…小金井さんが、俺を呼び出すなんて…何の用だろう？ 珍しい…

思いつつ、ひんやりとした廊下を歩く。そんな俺を待ち受けていたのは、最悪の事態だった。

「実はなあ、お前の弟の事なんだけどなあ…」

応接室のソファに座り、小金井さんが言う。

「そこら中が迷惑してるんだよな」

…そうか、その件だったか…。

俺の胸が早鐘のように鼓動を打ち始める。

…しかし、考えてみれば、他に話なんてないよな。

「お前は、どう思うっ？」

「えっ？」

「兄貴として、弟の事をどう思うっ？」

「あ…はい」

俺はしどろもどろ答えた。

「そう…ですね。正直言っつて、ものすごく迷惑をかけているとは思いますが…」

「そうだよな。あいつ一人のために、みんな凄く迷惑しているよな」
「でも…兄としてフォローするなら、あいつなりに凄く頑張っているとは思いますが」

「あいつなりにねえ…」

そこで、小金井さんは言葉を止めた。

「けど、会社っつていうのは、成果が上がらないと仕方ないっつていうのは、分かっているよな」

「え…まあ、…はい」

「会社っつていうのは、利益をあげる事が全てなんだ。利益を上げるには、効率を良くしなければならぬ。そのためには、チーム全員の足並みをそろえなくちゃいけない事も、分かるよな？」

「ええ。だから、僕も足をひっぱらないように頑張ってます」

「お前の事じゃない。弟のことだ」

「ああ。そうですよね」

「正直言っつて困るんだよな」

「はあ、…でも、あいつなりに…」

「だから。『あいつなり』に何なんだ？ 今日で欠勤何日目だと思っつてるんだ？」

「それは…体調が悪くて…」

「だったら、この際ゆっくり休んだらどうだ？」

「え？ それって」

…遠回しのクビ勧告じゃないか？

声なき言葉に小金井さんが答えた。

「これ以上休むようなら、そういう事もあり得る」

「でも…」

「あいつにも伝えておいてくれ。ヤル気があるのか、無いのか。もし、無いのなら、申し訳ないが、うちでは面倒をみきれない」

「……」

返す言葉も無かった。が、仕方が無い。全て悪いのはアイツなのだから。それにしても、

…どう、弟に伝えよう？ どう弟に切り出そう。

そんな思いばかりが、目まぐるしく渦巻く。しかし、どう伝えようが、どう切り出そうが、伝える事実はひとつだ。弟の絶望する顔が浮かんでくる。暗澹とした気持ちで一日が終わり、外に出ると既にもう暗かった。足取りも重く歩いて行く。

…ええい。いい加減に、吹っ切れよ！

俺は自分で自分を叱りつけた。

…まだ、別にクビと決まったわけじゃ無い。明日からでも出勤して、今まで以上に頑張れば、きっと小金井さんの気持ちも動くはずだ。そうだ。明日は無理にでも弟を引きずり出そう。首に縄をつけてでも、会社に連れてくるんだ。そこまで、樂觀的な妄想をして、それからすぐにため息をつく。そんな事は無理なのだ。

…仕方ないんだよ。

俺は自分に言い聞かせた。

…これも、あいつが招いた事だ。因果応報。やった事は、自分に返ってくるって事さ。それが、この世の法則なんだ

そうさ。全部あいつが悪いんだ。まともに働けないあいつが悪いんだ。

けれど、因果応報と言うのなら、あいつが引きこもらなければいけなかったのは、一体何の報いなんだろう？　そもそも元々器用だったあいつが、たかだか、テレビの解体や、ゴミの分別なんて簡単な仕事さえこなせなくなったのは、8年も引きこもっていたせいだろうか？　そして、引きこもらなければいけなくなったのは、イジメのせいだ。しかも、そのイジメの発端は、あいつの正義感だった。親友を守ったがために、あいつは級友によってたかって廃人にされた。これは、一体何の罪で、何の罰だ？　考えれば、考える程分かんなくなる。しかし、何の因果でか分からないが、あいつは、暗闇の中に生きる事を余儀無くされた。それなら、それで、受け入れるより仕方ないのかと観念しようか。そして、これで、俺の東京に帰る夢も絶たれた事になる。それも、俺の運命か。

自嘲気味に空を見上げると、ぽっかりと月が浮かんでいた。

月は、その、わずかな輝きで闇を照らしている。

それは、まるであてのない希望のように、頼りのない光ではあるが、それでも人は先に進まねばならぬ。そうだ、人は進まねばならぬ。ならば、どうすれば良いのだろうか？　俺に何ができるんだろう？　あいつだって、もう全てを投げているかもしれない。今さら人の言葉を聞く耳もないかもしれない。

いや、違う。

あいつは、リリカに助けを求めた。そうだ、言っていたじゃない

か。

「僕は、変わりたい。でも、変わりません。どうしても、変われないのなら、死んだ方がましです」

その、悲鳴のような言葉を思い出すと、俺はやみくもに走り出していた。

行く先は、家ではなく、ネットカフェだ。

『リリカさん、はじめまして。マリアといます。』

リリカさんの描かれる、少女達にひかれてやって来ました。繊細ではかなげなタッチが印象的です。ね。

私も絵を描きますが、

このようなガラス細工のような少女達は描けません。無い物ねだりでうらやましく思います。』

入力した文字が、画面上に表示されていく。そう。これは、俺の書いた文章だ。リリカ…森崎の掲示板に書き込む為に考えた。言うまでもなく嘘八百、でっちあげの文章だ。念には念を入れて、マリアという女性名を使う。なぜ、こんな大嘘をつくのか？ それは、弟のためだ。さらに俺は文字を打ち込んでいく。

『そして、喪黒うさん、こんにちは。』

リリカさんと喪黒うさんのやり取りを

全部読ませてもらい、他人事とは思えず書き込みをさせてもらいます。

喪黒うさんはずっと引きこもり、そして社会復帰なさったとの事、大変、勇気がある事だっと思えます。立派だと思えます。

実は、私の弟も、引きこもっていました。

しかし、ついに立ち直る事のできないまま

1年前、病で亡くなりました。

どうか、喪黒うさんには、ここで挫折せず、私の弟の分までも頑張っ
って欲しいと思います。

それでは、また参ります』

我ながら陳腐な文章だ。それに女の名を語るにも抵抗がある。

しかし、まさか、俺の名前は出せない。あいつは、リリカの正体が森崎であることも知らないんだ。まして家族に、こんな風に、覗き見されている事を知ったら、どんな気持ちができるだろう？ それを思うと、とても自分の名前を出す気にはなれなかった。

だから、あくまでもあいつの知らないどこかの女性…しかも、あいつと似た境遇の弟を持った悲しい姉を演じる事にした。そうやって、あいつの心を揺さぶるつもりだ。マリアの名前には、暗にあの『つぎはぎのマリア』のイメージを込めている。

それから、しばらく他のサイトを覗いたりして時間をつぶし、20分程たつたところで、リリカの掲示板に戻ると、なんと、すでに弟の返信が入っていた。

『マリアさん。コメントありがとうございます。』

弟さんは、僕と同じだったんですね。でも、亡くなられたんですね。

『ご冥福をお祈りします。』

弟さんの分まで頑張りたいと言いたいところですが、僕には無理そうです。

『ごめんなさい』

軽く失望する。しかし、まあ、そうだな。これぐらいで気持ちが動くぐらいなら、あいつだって苦労していないだろう。

だが、しかし…どうしても立ち直ってもらわなければ困る。自分のためだけじゃなく、あいつ自身のためにも。それで、俺は少々ムキになった。キーボードに指を乗せ、考え考え打ち込む。

『もぐろうさん。』

返信ありがとうございます。

あなたを見てみると、本当に弟を思い出します。

弟もそうでした。ずっと、自分は仕事なんかできないと信じ込んでいました。

しかし、入院して先が長くない事を知った時、やっと気付いたんです。

自分は働けないのではなくて、ただ、勇気がなかったただけだと言う事に…。

そう。ほんの少しの勇気がないために、

人生のほとんどの時間を無駄に過ごしてしまった事を、

あの子は最期の最期まで後悔していました。

死ぬまぎわ、あの子は言いました。

「姉さん、僕が馬鹿だったよ。もし、生まれかわれるなら、今度こそ働きたいよ」と。

彼は本当に後悔していました。

しかし、気付いた時には、すでに手後れだったのです。

喪黒うさんには、弟のような思いをしてもらいたくない。

どうか、生きている間にできる事を精一杯やって下さい』

書き込んでしばらく待つと、弟の返信が入って来た。弟の返信は、速い。どう答えて来たか、固唾をのみ、その文字を追う。

『マリアさん。』

弟さんの事、本当に気の毒に思います。

けれど、やっぱり僕には期待に答えられそうもありません。

僕は、病気にはなりませんでしたが、何度も死ぬ事を考えました。巻き添えで兄を殺しそうになって以来、自殺はしないと心に誓いました。

けれど、正直いって、今でもそんなに生きたいとは思っていません。

もし、今すぐこの世から消えられるなら、それはそれで本望です。そして、もし生まれ変わったなら、僕はこの国には生まれたくありません。

もっと貧しくてもいいから、自分らしく、自由にのびのびと生きられる国に生まれたいです』

正直いって、ショックだった。俺の考えたチープな設定がギャグに思えるぐらい、奴の悩みは深刻だ。あいつ、まだ死に神に取り付かれてたのか。どうしよう。どう返事しよう？ 考え考え文章を打つ。

『喪黒うさん。それは、あなたが本当の死に直面してないから言える事だと思います。』

もし、どうしても死ななければいけないと決まったら

あなたはきつと生きたいと思うでしょう』

そこまで書いて俺は師匠の言葉を思い出した。そうだ、師匠も言っていたじゃないか。心中事件でいざ本当に死にかけた時、突然『死にたくない』と思ったって。俺は自分を励まして文章を続けていった。

『そして、その時、そして気付くでしょう。』

「自分は、あまりにも何もしていなかった」と

私の弟もそうでした。

あなたの言う通り、今のこの国は生きやすい国とはおもいません。それでも、あなたが望む自由な人生を、

今の人生で実現する事は不可能でしょうか？

私はそうは思いません。

しかし、何か行動しなければ夢は夢のままです。終わります。』

数分後、弟から返信がある。

『マリアさん。』

確かに僕は、人並み以上に何もしていないと自覚しています。僕だって何かしたいのです。でもできないんです。怖くて無理なんです。』

俺はすぐに返事をした。

『喪黒うさん。』

あなたは今、生まれ変わろうとしてるのです。

子供が生まれる時、陣痛があるのはご存知ですね。

あなたが感じている辛さは、陣痛のようなものです。

そこを乗り越えれば、きっと未来が開けます。』

その後返って来た言葉に、俺は再びショックを受けた。

『マリアさんの言う事は、頭では分かっているんです。

でも、ダメなんです。体がついて来ないんです。

会社に行くと、体が震えるんです。

抑えようとしてもダメなんです。

自分で自分がコントロールできないんです。

人がそばに来るだけで、震えが走ります。
上司に叱られるとますますひどくなります。
震える事が怖くて人前にでられません』

…震える？　なんだそれ？…

あまりにも意外な言葉ではあったが、俺の頭にフラッシュバックするシーンがあった。…そうだ、あの日の帰宅途中、あいつ、震えていたじゃないか。あの事を言っているのか？　間違いない。きつとそうだろう。しかし、それが分かったからと言って、どう返事すればいいのかが分からない。しばらく考えたあげく、更新ボタンを押すと、リリカの文章が投稿されていた。

『マリアさん。訪問ありがとうございます。』

大変な過去をお持ちなのですね。

弟さんのご冥福をお祈りします。

そして、マリアさんが一日も早く

悲しみを乗り越えられる事を祈っています。

仲間がふえるのはとても嬉しいです。

マリアさんはどんな画家が好きですか？

好きな絵のお話をたくさんして行って下さいね
いつでも歓迎します。

そして、モグちゃんこんばんは。

私も、マリアさんの言われる通り

今、モグちゃんは新しく生まれようとしてるんだと思います。

これ乗り越えれば、きっと本当の自由を手に入れる日が来ると
思うよ

さて、体が震えると言う事ですが

実は私の友人にも同じような事がありました。

精神科で見てもらったところ、社会不安障害と診断されました。薬を飲みながら仕事を続けているうちに治りました。意外と、同じような症状にかかる人多いらしいです。

モグちゃんも病院に行ってお薬をもらって下さい。

大丈夫です。薬を飲み続ければちゃんと治ります。』

社会不安障害？ 初めて聞く名前だ。ネットで検索してみると、専用のサイトが見つかった。

なんでも、対人恐怖症のひどくなったものらしい。パニック障害なんかも含まれるようだ。弟はいやがらせばかり受け過ぎて人が怖くなったのかもしれない。サイトには症状に苦しむ人の書き込みもあった。いずれも孤立して苦しんでいたという過去を持つ。人と人のつながりは大事と言われるが、人を追い詰めるのも人である。それでも、つながらなければいけないというのなら、なくてはならない物あるんじゃないだろうか？ それは、例えば思いやりとか、優しさのような。

考え出すと、果てがないので森崎の掲示板に戻ってみる。すると、既に弟の投稿が入っていた。

『リリカさん。

本当に、病院に行けば治るのでしょうか？

治るものなら治したいです。

でも、精神科なんて…怖いし、恥ずかしいです。』

その文章を読んでこっちが恥ずかしくなる。

いい年こいた男が、何を言ってるんだ。

俺はキーボードを叩いた。

『リリカさん。』

コメントありがとうございます。

私が好きなのは、ピカソにモネ、パウル・クレー…etcです。特にモネの光に満ちたみずみずしい世界が好きです。

けれど、私の絵は無機質で冷たいものばかりです。

いつか、ああいう世界を描ければと思います。

たくさんお話ししましょうね

そして、喪黒うさん。

リリカさんの言う通りです。

恥ずかしがっていないで、ちゃんと病院に行って治しましょう。問題が起きたら、目の前の事を1つ1つ解決していけばいいのです。

逃げるから、怖くなるのです』

すると、すぐに弟から返信が入った。

『確かに、僕の心は恐怖で満ちあふれています。

それは、僕が逃げてばかりいるからでしょうか？』

『その通りです』

俺は入力した。

『でも、逃げたくなるのは、何もかも完璧にしようと思うからだと思えます。』

仕事でもなんでも、最初から上手く行くわけないのです。

ゆっくり進めばいいのです…』

ここまで入力し、とりあえず送信する。

俺の言いたい事は、大体言った。後は奴の心次第だ。

しばらく待つと、リリカからの投稿が入っていた。

『モグちゃん。私もマリアさんの言う通り、ゆっくり進めばいいと思うよ。』

それとね、私思うの。世の中って、自分の見たいようにしか見えないんだって。

モグちゃんが、周りの人全てを悪いように思えば、みんな悪い人になるし、

良い人と思えば、良い人になるんじゃないかなって…。
全部自分の心次第じゃないのかな？』

あれ？ 森崎の奴、師匠と同じこと言っているな。と、思いつつ更新ボタンを押すと、弟からの返信が入っていた。

『分かりました。少し考えてみます』

それから、俺は、ネットカフェを後にして自宅に戻った。

そして、飯を食い終わると、さんざん迷ったあげく、弟の部屋に向かう。やはり、伝えなければならぬだろう。何をかつて？ 昼間の小金井さんの言葉をである。

引きこもっていたからといえども、二十歳をすぎた大人である以上は、奴も一人の社会人と見なさなければならぬ。社会人である以上は、自分が直面している現実を受け止めなければならぬだろう。

「おい、いいか？」

弟の部屋のドアを叩くと、

「いいよ」

という声が聞こえた。

遠慮なく中に入ると、弟がパソコンの前に座っている。なんだか俺の知らないアニメの絵が表示されていた。

「もう、起きられるのか？」

と、たずねたら、答えのかわりに

「今、帰ったのか？」

と質問された。

「ああ。残業でね」

「それにしても、やけに遅かったな」

「お前のせいだろう」

「…」

弟はしばらく黙り込んだ後、こう言った。

「で、何の用だ？」

「ああ、実はな…」

そして、俺は昼間の小金井さんの言葉を奴に伝えていく。はつきりと迷惑がられている事、明日出勤しなければ、クビにされるかも

しれないという事などをだ。弟は終始無言で聞いていたが、最後に「分かった」と答えた。

「じゃあ、じっくりと考える。後はお前の気持ちひとつだから」
俺はそう言くと、立ち上がった。そして、ドアに手をかけも一度弟に向かつて言う。

「この後の選択はお前に任せる。明日は起こしにこない。もし、会社に行く気があるのなら、自分で起きて来い」

それから、俺は風呂に入りベッドに入る。疲れもあり、ぐっすりと眠ってしまった。

そして、次の朝。

いつも通りに目がさめる。

服を着替え、階下におりる。

台所兼食堂では、いつもどおりテレビが騒がしく音をたてていて、ちょうど天気予報をやっていた。今日は一日快晴らしい。

しかし、弟の姿は見えない。

「正は？」

おふくろに尋ねると、

「まだ起きて来ないわよ」

との返事。

「今日も休むんじゃないの？」

心持ち、投げやりだ。

…そうか。そういう選択か。

失望とともに思う。

…そんなに簡単に人間変わらないとう事か…いや、嘆くまい。一番苦しいのはあいつのはずなんだ。

おふくろが、朝食を運んで来た。箸をつけるが、ロクにのどを通らない。まいった、思った以上に精神的にダメージを受けている。やがて、出なければいけない時間になった。それで、仕方がないと俺は観念する。これが現実だ。認めなければ。…なに、まだ時期が早かったただけだ。今回はダメだったが、またチャンスはあるはずだ。そうだ。嘆くヒマがあるなら次の事を考えよう。…きっと、同じような境遇の家族が一度は口にした事があるだろう言葉を、自身に言い聞かせる。

そして、俺は立ち上がった。

と、その時、

「おはよう」

なんと、弟が起きてきた。

驚いて、振り返ると、奴はちゃんと着替えていた。

「お…遅いじゃないか…」

俺はできる限り平静をよそおった。

「もう、飯を食っているヒマないぞ」

「うつん…」

弟が首をふる。

「今日は会社には行かない」

「何？」

「さんざん迷ったけど、まだ行けない。小金井さんに伝えておいて」「まだ行けないって…じゃあ、いつから行くんだよ？」

「明日から」

「じゃあ、今日はどうするんだ？」

「病院に行ってくる」

「病院？」

「うん。精神科にかかって来る」

その言葉で、俺は全てを理解できた。昨日のやりとり、奴の心に届いていたんだな。

ところが、何も知らないおふくろが悲鳴を上げた。

「精神科ですって？　なんで？」

すると、弟が答えた。

「実は、俺…体が震えて、いう事をきかないんだ。このままじゃ働けないからどうしようって思ってたら、『精神病院で見てもらおうといい』ってある人が教えてくれた」

「誰よ？　そんなこと言ったの」

「インターネットの人」

「失礼な人ね。そんな人の言う事信用しないの！」

「おふくろ…！」

俺はおふくろをとがめた。

「そんな言い方ないだろう？」

精神科が恥ずかしいっていうのかよ

？ あいつはあいつなりに、自分の事をなんとかしようと思つての
決断だろ？ 下らない偏見で邪魔するなよ」

「でも、精神科なんて…」

「そう言い方が、どれだけ嫌な思いさせるか考えるよ。なあ、正
と、弟を見る。」

「お前が行くべきと思つなら、行けよ」

「…分かった…」

弟は微妙な面持ちで頷いた。それで、俺の心が軽くなる。

「よし。じゃあ、小金井さんにはちゃんと伝えておくから」

「頼む」

そう言つて頭を下げた弟の肩を軽く叩き、俺はカバンを手に部屋
を出ていく。背後からおふくろの声がする。

「分かったわ。あなたがそう決心したなら行きなさい。保険証だし
て置いてあげるから…」

それを聞きながら、『大丈夫、大丈夫』と俺は弟にエールを送る。
『きつと、お前は勝てる』。

…いや、弟だけじゃない。俺にとつても今日は戦いだ。小金井さ
んはきつと、嫌な顔をするだろう。けど、あいつのためにもきつと
切り抜けてみせる。

見上げれば、抜けるような空に綿雲がひとつ浮かんでいた。けれ
ど、今日は快晴だ。天気予報はきつと外れないだろう。

「今日も弟は休みです」

そう伝えると、小金井さんは案の定嫌な顔をする…と思いきや、
「あ、そう」とだけ答えた。

その態度にかえって不安になる。見切りをつけられたのではないか？

「あ、でも今日は病院に行っているので、近いうちには出て来れるかと思いますが」

「なるほどね」

と、小金井さんはそっけない。そして、それきり行ってしまおうとする。俺は、慌てて小金井さんの後を追いかけた。

「すみません。後で、お時間とついていただけませんか？」
すると、小金井さんは振りかえって答えた。

「時間？」

「はい。お話したい事があるんです」

「弟の事か？」

「はい」

「分かった。後で都合をつけて連絡する」

「よろしく願います」

小金井さんとの話し合いは、昼休みに、昨日と同じ応接室で行われる事になった。

緊張気味に部屋に入ると、小金井さんは既に来ていてソファに深々と座っている。

俺は一礼し、正面の椅子に腰かけた。なんだか、尋問を受ける被疑者と、刑事みたいである。小金井さんは言った。

「ちょうど、こちらからも話したい事があったんだ」

「話したい事？」

ドキッとする。

「ああ。こちらも弟の事でな」

胃がずきずきと痛みだす。

「あの…それって」

唇も乾いて来る。

小金井さんはうなずいてみせた。

「悪いけど、前田とも相談した結果、お前の弟には辞めてもらおう事にした」

…ああ、やっぱり。

がつくりとうなだれそうになる。だが、しかし、ここで怯むわけにはいかない。これも想定済みの事なのだから。なんとか、態勢を逆転させなくては…。

…けどなあ。

俺は巖のような小金井さんの姿を見て思った。

…この人の心を変えるなんて事ができるのか？

大体が、この人は存在事態が怖いのだ。四角い顔に、いかつい目と鼻と口が並んでいる。ガタイもいいし、いつもへの字口で俺らを見張っている様は、昔の仁侠映画に出て来るヤクザの親分のごとしである。

けど仕事ではものすごく頼りになるんだとみーさんが言っていた。だから、結構職場でも慕われている。仕事の上でも、人間的にも俺のはるかに及ばない相手である。しかも、今からかばおうというの

はあの弟である。

弱気の虫が顔を出し、俺の中で葛藤が始まった。

はつきり言つて小金井さんや同僚達の怒る気持ちも分かるのだ。仕事はしないわ、ルールは守らないわ、休みっぱなしだわ、そんな奴を置いておけるような余裕は、きょうびどこの企業にだつてないだろう。俺だつて、そんな奴弟じゃなければとっくに見切りをつけている。やる気がないのなら、さつさと辞めちまえてな。

ここは、素直に頭を下げた方がいいんじゃないのか？ 「はい、おっしゃる通りです。ご迷惑かけてすいません」と言つてしまふのが、楽なんじゃないのか？

…いいや。ダメだ。

お前も知っているだろう？ 弟が不器用ながらも立ち向かおうとしている事を。だから、自分に誓つたじゃないか。徹底的にあいつの味方をするよ。

いや、でも、俺は『この事』も知っている。『それは、甘えだ』と言つ事をだ。みんながそんな事を言い出したら、世の中成り立たない。できない奴は切り捨てられても当然。全てはあいつが悪いんだ。自己責任だ。さあ、上のセリフを小金井さんに言うんだ。その方がお前にとつても得だぞ。企業に情を求めるな。下手に揉める奴は嫌われるだけだ。どうせ何を訴えたつて聞いてくれやしないさ。

そう、俺は企業なんかは何も期待してない。企業だけでなく、同僚にも何も期待してない。世の中自体に何も期待してない。ここに戻つて来てから、そんな風になつてしまった。不幸な考え方なのは分かつている。別にそれで構わない。どうせ、今だけなもの。いずれはここを出ていくんだから。（ここに居る俺は本当の俺じゃな

い)だから、俺がクビになるという話しだったら、きつとあつさり引き下がったろう。…けど、これは、俺の事じゃない。弟の事だ。兄としても、ここはやはり引き下がれない。っていうか、どうせ長くここに居るつもりないんだから、揉めようが嫌われようがいいじやないか。そうだよ、俺の方こそクビになったって構いやしないんだった！ じゃあ言いたい事を言ってやれ！

…最後に、天啓のごとくそう閃くと、ついに俺は言った。

「待つて下さい。クビだけは勘弁してやってください！ 俺からちやんとあいつに言い聞かせますので、もう少しだけ時間をやって下さい！」

「うーん…」

小金井さんが渋い顔をした。

「無理だな。兄貴として、弟をかばいたい気持ちは分からないでもないが、世の中、そんなに甘くないぞ」

「おっしゃる事はよく分かります。でも、もう少しだけ時間をやって欲しいんです」

「ダメだ」

「そう言わずに、お願いします。あいつにとっては、今が人生の岐路なんです」

「くどい」

予想以上に敵は手強そうだ。てこでも動かないってやつだな。けど、それはこつちだつて同じだ。むしろ、こつちのが必死なぐらいだ。なにしろ人生かかっているんだからな。こうなったら、とことん粘ってやる。今、流行のモンスター・ペアレンツならぬモンスター・ブラザーになつてやる。いや、あんな連中と一緒にされては叶わな

い。俺の主張は理に叶っている。それに、主張しただけの責任は取る覚悟でいる。だから、この際ヒンシュクかってもいい。最悪クビになっても構わない。言うべき事は、言ってる。しかし、そんな決心した時に限って、タイミング良くサイレンが鳴り、昼休みが終わってしまった。これ幸いと、小金井さんが腰を上げる。

「さあ、時間だ。話はここまでだ」

ちくしょう。これも弟の運命なのか？　いいや、そうじゃない。そうはさせない。

「まだ、話は終わってません！　っていうか、俺の言い分全然聞いてないじゃないですか！」

ぶしつけに言うと、小金井さんが不快感を露にした。

「無理なものは無理だと言っててるんだよ」

「無理を承知でお願いしているんです。どうか、俺の話を最後まで聞いて下さい」

「聞く事なんてない」

「いいえ。あります。聞いてもらわなくちゃいけません。実は、これはずっと誰にも話さないつもりでしたが…あいつは…弟は…」

そこで言葉をとめる。この先を話していいものかどうか迷ったからだ。幸いに…と云っていいのか、その態度が、かえって敵の興味をひいたらしい。

「何だよ？　言うべき事があるならちゃんとええよ」

なんと、小金井さんが再びソファに腰を降ろした。それで、俺は決心した。…弟よ。スマン。お前のプライドを傷つけるつもりはないが、全てをぶちまける兄を許してくれ…。そうするより他に、方法が見つからないんだ。

「実は、あいつは…弟は、対人恐怖症にかかっているんです」

その言葉に、小金井さんが驚いた。

「対人恐怖症？　風邪で休んでるんじゃないのか？」

そう。やつの欠勤理由は、表向き風邪という事になっていた。別に、嘘をついたつもりはない。初めは本当に風邪だと思っていたの

だから。けど、実際は違った。精神的なものだった。本来、分かった時点で正直に話すべきなのだが、奴が恥ずかしがるので黙っていた。しかし、こうなっては見栄をはっている場合ではない。

「風邪と言ったのは、あいつが精神的な病気だつて事を知られるのを嫌がっていたからです。今でも、偏見持つ人がいるらしいから…」

「確かに、精神病と聞くと、嫌がる人間も年寄りにはいるかもな。しかし、事情は分かったが、そんな状態で仕事ができるのか？」

「はい。医師の診断では、それほど重い症状でもないので、働きながらでも治せるという事です」

「ふーん…」

小金井さんは腕組みをした。

「しかし、対人恐怖症なるなんて、ここの環境がよほど合わなかったつて事だよな。少なくとも、ここで働き続ける事は難しいんじゃないか？」

…ヤバイ。逆効果だ。

「いや、何もここの環境が悪いつて事じゃないんです！確かに軽いイジメが合ったりして、それが引き金になったのかもしれないけれど、問題の根はもつと深いんです！」

あくまで、推測の域をでない事を、断定的に言つてやる。すると、小金井さんが引き込まれて来た。

「根が深いつてのは、どういうことだ？」

「それは…実は…：…これも言うつもりなかったんですけど…あいつずっと引きこもっていたんです！」

「引きこもつてた？」

「ええ。そうです。8年も引きこもっていたんです。引きこもつた原因は、イジメです。高校生の頃、いじめられっ子だった親友をかばつて、かえつて自分がいじめられるハメになつたんです。つまり、あいつは、何も悪くないんです。むしろ、裏切られた被害者なんです。あいつが職場に馴染めない原因は、裏切られ、いじめられたトラウマです。対人恐怖症も、それが原因に間違いないです。哀れな

奴なんです。

あいつ、イジメの事も、病気の事も、ずっと誰にも言わずに一人で抱えこんでいたんです。それが、先日、やっと打ち明けてくれて、それで病院へ行く決心をしてくれたんです。それが、あいつにとつて、どんなに勇気のいる事だったか分かりますか？ あいつは、今、必死で立ち直ろうとしてるんです。生きようとしてるんです。どうか、ここで切り捨てないでやって下さい。あいつに、生きるチャンスを与えてやって下さい」

なんだか、クサイドラマのワンシーンみたいだ。いくら、弟のためとはいえ、こんなに熱くなれた自分が信じられない。この町に戻って以来ずっと冷めきっていたのに…。でも、悪くない。こんな感じも。心の奥底から生きる気力が戻ってくるようだ。

一方、俺の演説を聞いた小金井さんはしばらく黙り込んだ。迷っているんだろう。俺は、小金井さんの言葉を待った。しばらくして小金井さんが、口を開いた。

「…いや、うすうすそんな事じゃないかと思ってたんだ。結構、こういう所には多いんだよ。引きこもってたって奴」

「そうなんですか」

「ああ。けど、それは、何の言い訳にもならないって事は分かってるよな？」

「それは…分かってますけど…」

「お前が分かってたって仕方ないだろう？ あいつ自身が自覚しなくちゃ」

「だから、自覚するチャンスを与えてやって欲しいんです」

「チャンスを与える価値が、あいつにあるのか？」

「それは…あると思います」

「戦力になってくれると断言できるか？」

「大丈夫です。あいつ、もともとは器用な奴なんです。本気になれば

ば仕事ぐらいすぐに覚えられるはずです。それに、俺なんかより、ずっと人に好かれる奴だったんです。今は自分を見失ってるだけです。きつと、すぐに元の自分を思い出します。見守ってやる目さえあれば」

「うー…ん」

小金井さんは唸った。そして、また

「世の中そんなに甘くないがなあ…」

と繰り返す。ダメだ。まだ迷っている。

こうなったら、最後の手段とばかりに、俺は土下座して叫んだ。

「お願いします！ なんなら、俺の給料無しでもかまいません。あいつの更正料です。3カ月間でもいいです。どうか、お願いします」

ここまで言えば、どんな強情な相手も折れるだろう。…と、上目づかいで様子をつかがう。しかし、案に相違して、目に飛び込んできたのは小金井さんのあきれ顔だった。

「給料無しになんて、できるかよ」

その言葉に、俺の頭もさーっと冷えてくる。…そりゃ、そうだな。まともな企業なら、給料ゼロになんてできないよな。やっぱり、どうあってもこの人を動かすのは無理のようだ。これも、弟の運命なんだろう。

…仕方ない。自業自得だ。

ついに、あきらめる。

…反省して次の道を探させよう。何、大丈夫さ。失敗は成功の元だ。

無理矢理自分を納得させていると、小金井さんが俺の肩をポンと叩いた。

何かと思い、顔を上げると、驚いた事に彼はこう言った。

「分かったよ。そこまでお前が言うなら、もう少しだけチャンスをやろう」

「へ？」

「とりあえず、クビは取り消した」

にわかには信じられなかったが、どうやら交渉は成功したようだ。

「本当ですか!？」

と喜ぶ俺に「ただし」と、小金井さんが言う。

「試用期間として3カ月だけだぞ。それで使い物にならなけりゃ、辞めてもらうからな」

異存があるはずもない。で、俺はもう一度勢いよく頭を下げた。

「それで十分です。ありがとうございます!」

不覚にも泣きそうになる。

38 (後書き)

33話よりここまで修正を入れました。なお、この物語はフィクションです。実在の人物、私の周りの方々等に、モデルにしている人はいりません。ご了承くださいませ。

「長い間御迷惑をおかけしてすみませんでした」

「ぼそぼそと弟が言う。それは、4月24日水曜日朝の事であった。これからは戦力になれるよう、全力で頑張ります」

しかし、職場一同シラーツとしている。聞いているのか、いないのか、無関心なだけなのか。それともハラワタが煮えくり返っているのか……。とりあえず、頭を下げ、弟の挨拶が終わると、前田君が今日の予定と人員配置、目標解体台数などを発表し、朝礼が終わった。

いつもと同じ一日が始まる。

俺の仕事は昨日やり残した解体作業の続きからだ。午前中は、何ごともなく過ぎた。時々、弟の様子をうかがうと、真面目にやっているようだが、あくびばかりしている。しかし、仕事はなかなかきちんとできているようだ。夕べ、一人でマニュアル（俺の貸してやったやつだ）を何度も読み返したらしい。感心な事だ。

「どうよ。調子は」

昼飯時、食堂で、弟に尋ねる。

「眠い」

と、奴は答えた。

「眠い？」

「うん。薬のせいだと思う」

「薬？ ああ、例の病気の……で、効いているのか？ 震えは？」

「今のところ大丈夫。前は、後ろに人が来るだけでダメだったのに……」

「じゃあ効いてるんだな」

「うん」

食堂内を見回すと、あちらで女性社員達が固まって何か喋っている。そして、時々わつと笑う。いつもの風景だ。この間は、耐えられなかった弟も、今日は平気のようだ。ホツとする。

きよるきよるしていると、意外な人物と目があった。みーさんだ。ちようど、食堂に入つて来るところだった。

「あれー？」

みーさんもこちらに気付き手を振る。

「正ちゃん。お久しぶりー」

その言葉に、弟が顔を上げた。そして、みーさんを見つけると、心もち頬が緩む。広い工場敷地内なので、めつたに顔を合わせる事もないだけに、嬉しかったらしい。みーさんは、連れれの友達に何か耳打ちすると、無邪気にこちらにやって来た。そして、言った。

「病気、もう大丈夫なの？」

ちなみに、みーさんにはこいつのメンタル的な病については何も話していない。弟も知られたくないのか、

「うん。風邪ならもう大丈夫だよ」

と、嘘をついてうなずいた。

「良かった」

と、みーさんが笑顔を見せる。

「悩みがあつたら何でも話してね。相談にのるから」

みーさんは相変わらず優しい。

「ありがとう」

弟も嬉しそうにうなずく。

その顔を見て思う。いつそ、みーさんと同じ部署に行かせた方が、こいつにとっては良いのかも…と。

と、その時どさりと音をたてて俺らのそばに座る人物がいた。驚いた事に、それは小金井さんだった。柔らかかった弟の表情が、み

るみる強ばっていく。俺も、正直びびりまくっていた。食っているうどんの味が分からなくなる。小金井さんはそんな俺らにおかまいなしで、みーさんに話しかけた。

「おい、美咲。お前、最近彼氏できたらしいな」

「何それ？ 誰よでたらめ言ってるの」

「この間『さくら』でお前が超イケメンと飲んでるのを、金達が見かけたっつてよ」

「『さくら』？ あー、それ優香ちゃんの彼氏よ。3人で飲んでたの」

「なんだー。残念だな。モテないなあ」

「うるさいー！」

俺達は啞然として二人のやり取りを見守っていた。みーさんはともかく、小金井さんはついぞ俺達に見せた事のない笑顔を見せている。この人でもこんな顔するのかと感心していると、みーさんが俺らを見て言った。

「あー。コガちゃん。正ちゃんをいじめないでよ。大事な友達なんだから」

「虐めてなんかないよ。な、優しい上司だろう？」

「…それは…」

弟が口ごもる。俺は苦笑した。そんな質問に答えられるわけがない。

「いや、勘弁してやって下さいよ。こいつ、びびりまくってるんですから」

俺がフオーすると、小金井さんが憤慨した。

「バカヤロー。俺は優しいんだよ」

「どこが？ と、俺は（おそらく弟も）思う。」

「ああ。それで思い出したけど」

小金井さんが話題を変えた。

「そーいえば、河井兄弟の歓迎会やってなかったな」

「え？ 歓迎会？」

俺は驚いた。

「そんなのあるんですか？」

「いや、ここのところ忙しくてできなかったけど、久しぶりにやるか」

「いや、いいですよ。そんなの。弟はもちろん、俺もあまりそういう集まりは好きじゃないし…」

「前田とか呼びたくないなら、親しい奴だけ呼んでやればいいだろう？ そうだな。俺と、美咲とお前ら二人と言うのはどうだ？」

「うーん。あなたも呼びたくないメンバーの一人なんだがなあ…と俺は思う。しかし、あまり遠慮し過ぎるのも失礼に当たると思い。」

「そうですか。それなら、是非…」
と、言った。

「いいね」

みーさんが言う。

「会場はどこにしよう？」

「『さくら』がいいんじゃないか？」

小金井さんが答える。

「いいね。あそこなら、安くておいしいし、お薦めだね」

みーさんがはしゃいだ。

こうして、なぜか俺達はみーさんと、小金井さんとともに飲みに行くはめになったのである。

さくらは、工場から歩いて10分程のところにある居酒屋だ。以前、工場に勤めていた頃にも、みーさんや同僚とともにちよいちよい来たもんだ。狭い店だが、安いし、味もまあまあだしで、うちの工場の社員にも地味に人気がある。

俺らが行った金曜の夜も、混んでいた。俺らの他におそらくうち

の工場の社員と思われるおっさんグループや、女性の二人連れ、カップルの姿などがあり、既にもう満席だった。20人も入れれば一杯になってしまいうくらいの小さな店なのだ。店内は比較的明るいため、人の顔がよく見えた。おっさんグループは店主と顔なじみらしく、カウンターで盛り上がっていた。それを横目に座敷席に4人向かい合って座る。俺はみーさんの横、小金井さんの正面、そして弟は小金井さんの横で小さくなっている。緊張した面持ちだ。俺だって緊張している。正直、こんなんでおもしろいかなと思っただ。

しかし、アルコールが入って来ると、緊張もほぐれて来る。ちなみに、俺自身、普段あまり飲まないようにしているが、実は結構飲める方だ。弟はどうだろう？ おそらく、酒を飲むのはこれが初めてじゃないのだろうか？ 案の定、ビールの苦さにどうも馴染まないようで、ひとくち飲んだきり食う方に専念していた。

みーさんは、いける口だ。小金井さんも、全てのおっさんがそうであるようによく飲む。

初めのうちは、みーさんと俺が仲良くなったいきさつやら、俺らがいた部署の噂話なんかをぼつり、ぼつりとする。ぎこちない会話も、小金井さんの酔いがまわるにつけほころんで来る。小金井さんは赤い顔をして自分の若い頃の話が始める。なんでも、ああみえて、昔はナイーブな文学青年だったらしい。本当は働かずに小説でも書きたかったが、家が貧しくてそんな事も言ってられなかった。それで、高校を卒業してすぐに町工場に、旋盤工として就職したらしい。初めのうちは、現場の仕事等できるのか不安だったが、仕事を覚えれば覚える程おもしろくなっていったそうだ。しかし、ある日仕事中に事故を起し、指を無くしてしまった。(そういえば、小金井さんの右手には親指がない)その上、右手の筋を痛めてしまい、日常生活は辛うじてできるものの、旋盤工としての道はあきらめざるを得なかったそうだ。それで、その頃できたばかりのうちの会社に知り合いのついでに入ったらしい。

「鉄に関わっていたかったからな」

と、小金井さんは言った。

小金井さんの前職の旋盤工とは、鋼などの金属を丸く削る仕事らしく、そういう訳で鉄との関わりが深い分、愛着もあるというわけだ。

それから、小金井さんの町工場時代の話になる。「原子力発電や、漁船、宇宙衛生の部品や、遊園地の遊具も創った事があるんだ」と小金井さんは自慢げに語る。そして、その頃出会った様々な人々、職人のエピソードを話してくれる。俺はほろ酔い加減でその話を聞く。夢心地に聞こえてくる職人達の生きざまは、どこことなく芸術家のそれと似ている。いつしか俺は東京の馴染みの店で師匠と話してのような錯覚におちいつてきた。そして、あの頃いつも思っていたように思った『俺の絵を描かなくちゃ』。そう思った途端、俺の頭の中に広大無辺なイメージがあふれ出す。その先には、例のあのマリアがいる。いよいよ酔いがまわって来たようだ。まずい。弟の事を思えば、酔っぱらうわけにもいかない。正気との綱引き。行きつ戻りつはじめた時だ…

突然、弟が立ち上がり、持っていた箸を床に叩き付けた。

何をするかと驚いて見ていると、弟は俺らの横にいた女性二人組に向かって叫んだ。

「てめーら、じろじろと見てんじゃねーよ」

一気に酔いがさめる。

え？ 見てたっけ？

俺らにすればそんな感じである。

程よく酔いがまわって来たからか、それとも小金井さんの話に聞き入っていたからか、周りの客の事など気にもとめていなかった。

しかし、弟はキレている。どなられた女性客二人はおびえている。他の客は啞然としてこちらを見ている。中にはそれこそ半笑いの奴も居り、きまりが悪くなつて来る。

「おい！！」

俺は弟に呼びかけた。

「座れよ。みんな驚いてるじゃないか」

しかし、弟は俺の言葉など聞きもせず、女性二人をにらみ付けたままだ。あまりの恐ろしい形相に、こやつとつとつ気が触れたのかと俺は少々心配になり、そこで、あつと気がつく。そうか、例のメンタルの病がこいつをナーバスにさせているんだ。そうに違いない。それで俺も立ち上がり、弟にだけ聞こえるよう、奴の耳もとで囁いた。

「お前、それ気のせいだよ。薬を飲めば落ち着くよ」

弟は、俺が何を言いたいのかをすぐに察したようだ。俺を見て首をふりながら言った。

「違うよ。『それ』とは関係ない。第一見られていたのは俺じゃない。あいつらが見ていたのは、みーさんだ」

その言葉に心臓を撃ち抜かれたようなショックを受ける。

口にこそ出さなかったが、みーさんと出かけるたびに周囲の好奇心に満ちた視線と違和感を俺もずつと感じていた。けれど、気付いているのかわからないのか、みーさん自身あつげらんとしていたし、口にすれば、かえって傷つける事になるとも思ったし、それと、ずつと気付かぬふりをしていた。けれど、弟には…この正義感の強い単純馬鹿には見過ごす事ができなかつたらしい。（それが、奴の本質であり、奴を悲劇へと誘った原因でもある）

「お前ら、そんなに人の不幸がおもしろいかよ」

弟は、今にも殴りかからんばかりの剣幕である。女性の方は、あきらかに怯えていた。『これは、まずい』と俺は思った。彼女らのみーさんを笑ったにしろ、笑っていないにしろ、女性を殴るのはまずい。俺は、弟を諫めた。

「おい、よせつてば。たまたまこっちの方を見ただけかもしれないだろう？」

「違う。あいつらは、笑っていた」

弟は、頑固に首を振る。だめだ、とても抑えられそうにない。仕方なく、彼女らに言う。

「悪い、もう帰ってくれないか？ このままじゃ、こいつ、何をするか分からない」

「馬鹿アニキ！ あんな奴ら、かばうなよ！」

「お前は黙ってる！ さ、早く今のうちに帰るんだ」

けれど、女の子達は動こうとせず、その顔には罪悪感ともなんとも言えぬ気まずそうな表情を浮かべていた。その顔を見て俺は思った。…案外弟の言葉は凶星だったのかもしれない…。

みーさんはいえれば、決して彼女達を見ようとはせず、まるで、何も見えず、何も聞こえないかのように箸を動かしている。もしかして、これはみーさんにとっては慣れっこのシチュエーションで、何も分からぬふりは、精一杯の防御姿勢なのかもしれない。そんな

みーさんの姿を見て、俺はなんともいえぬやり切れなさを感じた。同時に弟と同じく怒りをおぼえる。お前らは、何の権利があつて、人を笑うのか？ たかが皮膚一枚の事で、人が人を嘲笑しても許されると言うのか？

と、その時小金井さんが唐突に口を開いた。

「君らは、そんなに体の不自由な人が珍しいのか？」

その問いかけに、女性らはますます気まずそうな顔をした。

「こつという人に、会った事がないんだな？ じゃあ、いいだろう。こつちに来てじっくり話をしてみるよ」

俺らは…俺と弟はびっくりして小金井さんを見た。そして言葉にならぬ声を放つ。

…正気かよ。みーさんを見せ物にする気かよ？

俺らのそんな白い空気など知った事じゃないように、小金井さんは、彼女らを手招きした。

「さあ、一緒に飲もう」

「よせよ！」

弟が怒る。

「あんだ、何考えてるんだよ」

「話してみようって言うてるだけだよ」

「馬鹿か！ 偽善者。こんな馬鹿女達と話す事無いよ。みーさんだつて嫌だろう？」

弟の呼びかけに、みーさんはやっと気付いたように顔を上げた。

「え？ なあに？」

すると、小金井さんが答えた。

「あの子達も一緒に飲もうって誘ってるんだ。いいだろう？」

「あ？ いいよ？ 別に」

みーさんはさらっと答えた。そして笑顔で

「こっちにおいでよ」

と、言った。2人の女性は互いに顔を見合わせ、しばらく戸惑っていたようだが、最後にはおずおずとこちらにやって来た。俺も弟も、啞然としてその様を見守っていた。

まったく、なんて飲み会になったもんだ。

怖い上司と、キレる弟、顔に傷を持つ哀れな女性と、それを興味本位に眺めていた初対面の2人組。こんなメンツでどう楽しめと言うのか。せつかく回りかけた酔いがすっかり醒めてしまった。何とも気まずい雰囲気が漂う。誰か何とかしてくれよ。

この、カチンコチンに固まった空気を最初に壊したのは、小金井さんだった。

「お嬢さん達、障害者に会うのは初めてなの？」

すると、2人のうち、目がねをかけた方の子がうなずいた。

「はい」

「でも、別にその人の事を笑ってたわけじゃありません」

もう一人の気の強そうな方がきっぱりと言った。

「私達は、別な事で笑ってただけです」

すると、…弟は彼女とは決して目を合わせようとはせずに…、独り言のように言った。

「嘘つくくじじゃねーよ。お前らみたいなのは、平気で人を傷つけるんだよ」

「決めつけないですよ。自意識過剰なんじゃないですか？」

眼鏡の子が怒り出す。

「落ち着けよ」

俺は弟をなだめた。

「彼女達の言う通り、お前も少し、決めつけすぎだ」

「だって、信じられるかよ。こんな奴らの言葉。口先でこんな事言っただって、裏に回れば何言ってるか分からないんだ」

その言葉を聞いて、気が滅入って来た。奴の女性不信は…いや、人間不信は相当根が深いようだ。そうなるには、それだけの理由もあるのだから、それにしても…。

「でも、俺には彼女達が嘘を言ってるようには思えないけどな」

「俺には、嘘ついてるようには思えないね」

駄目だ。水掛け論だ。と、その時、みーさんが口を開いた。

「正ちゃん、よしなよ。寂しいよ、そういう考え方」

「え？」

弟が驚いてみーさんを見る。

「本人が、違うって言うのなら、違うって信じようよ…。じゃなきゃ、何も信じられないよ」

「でも…」

弟は不服そうだ。まあ、そうだろう。本人はみーさんを庇ったつもりなんだから。

「まあまあ」

と、小金井さんが言う。

「俺もこの子達を信じるよ。もし、本当に心の底から笑っていたなら、俺がここに加わるように進めた時点で逃げてると思うぞ」

「…言われてみれば、そうですね。なんでも悪意にとってちゃ、自分が苦しいだけですよね」

俺もうなずいた。そして、

「ほら。お前も顔を上げて、もう少しにっこりしろよ」

と、弟の頭を叩いた。

「…」

弟は無然としている。その顔には『俺は絶対に認めない』と書いてある。やれやれ…と、俺はため息をついた。…しかし、まあ、いきなり機嫌よくなれるわけないか…。

「不器用な奴だな」

小金井さんが苦笑した。

「でも、河井弟は、それで、正義感のつもりなんだな」

「それは、分かけど…」

眼鏡の女の子が膨れっ面で言う。

「もし、本当に私達がその女の人の事を笑っていたなら、怒るのは

人として当たり前の事だと思えます…でも、私達は笑ってないし…
確かな証拠もないのに人を疑うのは間違ってると思う」

「分かった、分かった」

小金井さんが言った。

「信じるよ。河井弟も、信じるだろ？」

けれど、弟は何も答ええない。まるでガキだな。

「本当にごめんね」

俺は弟に変わって頭を下げた。

「こいつ、頭の回路が単純すぎるんだ。根は悪い奴じゃないんだけどな」

それから、小金井さんがみーさんの紹介をする。産婆沙メタル工場に、もう、かれこれ20年も勤めている事。隠れた職場のドンである事。などなど…。

それで、おれも続いて話した。入社時に一番良く面倒を見てくれたのがみーさんである事。また、みーさんが一人暮らしをしておりしばしば遊びに行った事。免許も持っていてよくドライブに行ったりしている事。などなど…。

弟は終始仏頂面。意地でも喋るもんかって感じた。そのバリアを崩すために俺はしきりに酒を進めたけれど、奴は頑として飲もうとはしなかった。

女の子達は。俺らの話を聞いて、自分達が抱いていた障害者のイメージと、みーさんがあまりにも違う事に驚いていた。もっと、こう…可哀相な存在と置いていたらしい。それで、俺も酒の勢いにまかせて普段より饒舌になった。

「いや。俺だって、実際のところは知らないけどさ、みーさんを見る限りは健常者より立派だし、日々充実させて生きていると思うよ。つくづく思うけど、幸福に生きるには健常者も障害者も関係無いのかもれない。要するに、本人次第なんだと思うよ」

すると、女の子達もうなずいた。

「本当にそう思います。とても、勉強になりました」

…けど、それは実際にも脳天気な意見だった。所詮、人事でしかない、その人の苦しみは、その人にしか分からない。それを知るのもう少し後の話になるのだけれど…。

飲み会が終わり、別れた後も、弟はずっと黙ったきりだった。怒っているのかと心配したが、そうではなくて、考え込んでいるらしかった。奴の心の中では様々な思いが交差していた。そして、その中でも一番の疑問は、なぜ、小金井さんがあの二人を仲間に入れ、みーさんがそれを平然と受け入れたかについてだった。いまだに、奴は彼女達を疑っていた。あの二人は、絶対にみーさんを笑っていたと。ところが、奴にとってさらに衝撃だった事に、飲み会が終わる頃には、みーさんは彼女らとすっかり仲良くなり、遊ぶ約束まで決めていた。

「俺にはさっぱり分からない」

と、弟が首を振る。

「なんで、あの人はあんな奴らを許せたんだ？」

「それは、そもそもみーさんが、彼女達の事を疑っていなかったからだろう」

「それは、俺だって最後の方には、あの二人が想像よりはましな人間かなと思ったださ。決めつけるのが悪い事も分かってる。でも、本当のところあいつらがどう思ってるかなんて、アニキにだって分からないだろう？」

「そりゃ、疑い出したらキリがないが…」

「でも、俺は何度も見たんだよ。一見いい奴が平気で裏切ったり、嘘をついたりして、しかも、その後もものうのうと生きているのを…」
「なるほどな」

俺はため息をつく。やはり、こいつの人間不信は、相当根が深いようだ。

「確かに、そういう人間もいると思うよ。俺だつて会つた事がないわけじゃない。でも、世の中には許さなきゃしょうがない事もあるんじゃないか？ 例えば、誰かが自分を裏切つたからと言って、その事ですつと人を恨み続けてたら、前に進めなくなるだけだろう？」「それじゃ、人を裏切つても許されるってことか？」「そうでなくて」

そこで、言葉を切る。どうしたら、こいつの心を溶かす事ができるだろう？

「例えば、裏切るなんていうのは、裏切つた本人の問題であつて、裏切られた方にとっては単なる出来事に過ぎないということだ。そこに、捕らわれるなど言ってるんだよ」

「意味が分からない」

「人間は弱いから、間違いも起すつて事だ。しかし、間違つてから、悪人と言う事じゃない。克服するべきは本人であつて、他人がそれを無理矢理矯正しようなんて、おこがましいっていつてるんだよ」

「兄ちゃんの言う事は、難しすぎる」

「そうかな？ 難しいかな？ じゃあ、どう言えば伝わるのかなあ？ と、俺はさんざん考えたあげく、こうまとめた。

「つまり、人が何を言おうが、何をしようが、自分が間違つた事をしてないなら、堂々としていればいいっていう事だ」

「こんどはちゃんと伝わったようだ。」

「そんなものかな」

「弟はぽつりとつぶやいた。」

しかし、それきり、会話は途切れた。

その夜の出来事で、弟が何を感じ、どう考え、どう結論付けたのか、それは当人ではない俺には決して知る由はない。が、少なくとも表面上、目立った変化は見えなかった。ただ一つ、わずかに変わった事と言えば、奴の小金井さんに対する警戒心が若干ではあるが和らいだ事である。

そりゃ、そうだろう。

何しろ、あの、飲み会のおり、いくら頭に血が昇ったとはいえ、上司に向かつて『あんた』と呼びつけ『偽善者』とののしつたのである。今さら、何をおそれる事があるだろう？ しかし、小金井さんは、その事に腹を立てているようでもなかった。それどころか、むしろ、弟の事を気に入ってくれたようにさえ見えた。それが証拠に、あれ以後、弟にまめに声をかけるようになった。仕事の指導も丁寧にしてくれているようだし、時には、弟が、俺や、みーさんと3人で昼飯をくってる折など、どこからかふらっと現れ、あれこれ世間話をしていくこともあった。…もしかすると、弟の不器用ながらもみーさんを庇おうとした正義感にうたれたのかもしれない。

しかし、正直言つて、この、上司の接近について、初めのうちは、弟も…そして俺も、ありがた迷惑に感じていた。理由は怖いからだ。しかし、そのうちに慣れた。そして、怖い上司Aのプレッシャーが無くなった弟は、多少は仕事がスムーズにこなせるようになって来た。といつても、一人前にはまだ3割程足りない。まだまだ、奴にとって世界は恐怖に満ちていたからだ。例えば、こんな風に…。

「河井弟さん、すいませーん」

前田君の声がする。

…なんだろう？…俺は目の前の仕事に集中しつつ、耳をそばだてた。前田君の、例の、あの皮肉っぽい言い方がフロアに響き渡る。

「あの一、このカゴ車、弟さんが運んで来てくれたんですよ」

…カゴ車？ ああ。解体前のテレビが積み重ねられている鉄製のカゴ車を運んで来たんだな。それをライン正面に設置して、俺らは解体作業をする。そして、カゴ車が空になったら、フロア奥のカゴ車置き場から次のカゴ車を運んで来る事になっている。弟は、今あるカゴ車が空になりかけているのに気付いたから、新しいものを運んで来たんだろう。しかし、それが、なんだって言うんだ？

前田君は言った。

「あの一。まだ、前のカゴ車が空になってないんで、新しいのを持って来てもらっても困るんですけど」

俺は、ちらりと振り返った。確かにそこには、解体前のテレビが一杯積み重ねられたカゴ車と、ほぼ空のカゴ車があった。ほぼ空の方には、2台のテレビが置かれている。前田君は、それら指さして言った。

「ほら、まだ、残ってますよね、テレビ」

すると、弟はモゴモゴと答えた。

「でも、カゴ車の中のテレビが、3台になったら、次のカゴ車を運んで来るように言われたから…」

「僕、そんな指示、しましたっけ？」

「前田さんは言ってますけど…」

「じゃあ、誰が言ったんですか？」

「それは…」

弟の言葉は、妙に歯切れが悪い。どうやら、自分に指導した人物を庇っているらしい。前田君はイライラと言った。

「2台もこんな所に置かれると、邪魔なんですよ。元に戻して来

てくれますか？」

「でも、それじゃ、また運ばなくちゃいけないじゃないですか？」
弟の言う通りだ。しかし、前田君は撤回しない。

「その通りです。でも、邪魔なので返して来て下さい」

その言葉に、俺は、正直言つてムカついた。他に同じ事をする奴はいくらでもいるのに、何で、弟にだけ厳しく言うのか。頭にきて、ひとこと言つてやろうかと作業の手を止めると、

「おい、前田」

小金井さんの声がした。

「河井弟に、なるべく早くカゴ車を持って来るように指示したのは、俺だ」

「小金井さんの指示ですか？ こんな所にカゴ車が2台もあると邪魔なんですけど」

さすが。前田君は、上司であろうが怯まない。

「でも、その方が作業の切れ目がなくて効率良いだろう？」

「それは、確かにそうですね」

「それに、こんなところ誰も通らないだろう。2台置いてあっても問題ないぞ」

「そうですねえ？」

前田君は自説に固執した。正しい、正しくないはさておき、その度胸は感心する。

「そうだよ。だから、このままにしておけ。河井弟は作業に戻れ。時間のロスだ」

「小金井さんが、そこまで言うなら放っておきますけど、何かあっても僕は知りませんよ」

こうして、とりあえずその場は収まり、俺も改めて作業に集中した。それにしても、最近の前田君の態度はなにか変だ。確かに、彼は性格はきつい、それは仕事に熱心なせいで、決して、あんな理不尽な事を言うような人間じゃなかったのに。要するに、それほど、

弟の事が嫌いって事か。弟は、弟なりに頑張っているんだがな。まあ、今までが今までだ。長い目で見るしかないだろう。一度失った信用を取り戻すためには、倍以上の時間がかかるといっしな。

「ねえ、今度の日曜日、ヒマ？」

出し抜けにみーさんが言った。

「え？ 俺はちよつと予定があるけど…なんで？」

俺は聞き返した。弟は黙々と握り飯を食っている。昼休み。食堂での出来事だ。

「うん。実は、この間の飲み会で会ったあの子達…覚えてる？ 眼鏡の子と、ロングヘアの…」

「覚えてるよ」

忘れるわけが無い。弟が喧嘩を吹っかけた二人組の女子だ。

「でも、彼女達が何か？」

「うん。実は、また今度遊びに行こうかって話がでているんだけど

…

「マジで？」

…信じられない。あんなに、最悪な出会い方をしたのに。

「本当よ。正ちゃんは、行けない？」

「無理」

弟はあっさりと言をふった。そして「予定がある」と嘘をついた。

「そうなんだ。残念」

みーさんは首をすくめる。

「2人ともがっかりするわ」

「まさか」

俺は笑った。

「だって、俺ら、ほとんど喋らなかつたのに」

「そうだったけ？ でも、あの眼鏡の子…カナちゃんていうんだけど

…が、どうしても、もう一度正ちゃんと会いたいって言ってるのよ…」

それを聞いて、思わず俺は叫んだ。

「嘘でしょう?」

「何で嘘なのよ?」

「だって…」

…だって、絶対に印象悪いはずなのに。俺の記憶では、あの時、あの子、最後まで弟と口をきこうとしなかったぞ。それどころか、目を合わせる事すら拒否していたのに…。まさか、あれが好意の裏返しとか? ありえない! じゃあ、なんだ? なぜ、今さら会いたがる? …

色々考えてたら、弟がぼそっとつぶやいた。

「タイプじゃない」

「何だと?」

俺は突っ込んだ。

「別に、お前が好きだから、会いたいって言うてるわけじゃないかもしれないだろう?」

「…うるさいな。とにかく、無理なもんは、無理なの!」

「じゃあ、仕方ないけどさ…」

みーさんがため息をつく。

「気が変わったら、いつでも言っただろ」

けど、弟は永久に気なんか変わらないって顔で、握り飯を頬張り続けていた。

2008年5月14日 (水) 21時32分 「名前」
土中喪黒う :

リリカさんこんばんは、お久しぶりです。喪黒うです。結構長い事ごぶさたしていましたが、僕はなんとか元気に頑張っています。リリカさんに言われた通り病院に行き、薬をもらったおかげで、体の震えもおさまり、前より落ち着いて仕事ができるようになってからです。

これも、リリカさん、そしてマリアさんのおかげです。お礼を言わせて下さい。

ありがとう

さて、リリカさん。

最近、僕には大きなナゾができました。僕には障害者の友人がいます。

とても、いい人で、僕にとっては尊敬できる人なのですが、その人と外を歩いていると、みんなが僕らに注目します。中には、笑っている人間もいます。

僕にはそれが、腹立たしくなりません。なのに、その友人は、怒りもしないし、泣きもしません。どうして、あの人はあんなに強くいられるのでしょうか？

2008年5月14日 (水) 22時43分 「名前」
リリカ :

もぐちゃん、お久しぶり。
仕事頑張ってるみたいだね(^^)
私なんかでも役に立ててよかった。嬉しいです

さて、もぐちゃんの知り合いの話ですが

実は、私にも障害者の友人がいて、

彼女と遊びに行くたびに

知らない人達の視線を感じる事がよくあります。

そして、やはり、彼女も泣きもせず、怒りもせず、

自分の境遇を嘆く事もなく、強く、明るく生きています。

私は、そんな彼女を見ていて、心の底から凄く思います。

そして、私にとっても、彼女がどうして強くいられるのかはナゾ
ですが

敢えて言うのなら、

人が生まれた時に与えられる物は決まっています、

それを受け入れて生きるしか仕方がないという事を

彼女が誰よりも分かっているからかもしれません。

2008年5月14日 (水) 23時01分 「名前」
土中喪黒う :

>人が生まれた時に与えられる物は決まっています、

>それを受け入れて生きるしか仕方がないという事を

>彼女が誰よりも分かっているからかもしれません。

そうなのかもしれませんね。

彼女達は、そう、割り切っているのかもしれませんがね。

でも、僕は思っています。

もし、神様がいて、人間の幸せを願っているのなら
どうして、誰もに同じ物をくれなかったのでしょうか？
皆が同じピースを持っていたなら、

誰もが平等にパズルを完成させる事ができる筈です。
そうすれば、不平等もなく、誰もが不幸を感じず
誰も悲しむ事もなく生きられるだろうにと思います。

2008年5月14日 (水) 09時32分 「名前」：
リリカ

そうかな？ みんなが同じピースを持って、同じパズル完成させるのが

平等で、幸せな事なのかな？

それじゃあ、違う人間に生まれて来る意味がないんじゃないのかな？

もぐちゃんに言われて、一つ気がついた。

誰もが生まれた時に与えられるピースは、色も、形も、数も違って
きつと完成させられる絵も、それぞれ違うんだろうけど。
きつと、誰もが、それぞれの絵を完成させられるように
神様は平等にピースを与えてくれるんじゃないのかな？
大事なのは、自分に与えられた物の価値に気付き
それを大切にすることじゃないのかな？

「なるほどね」

俺はパソコンの画面に表示された文字を目で追いながらつぶやいた。

「パズルのピースか、なかなかうまい事言っな」

「詩人ね、もぐちゃん。さすが、小説を書くだけあるわ」

「俺は、森崎の書き込みに感動したんだけど。でも、弟の事ほめてやってくれてありがとう。森崎だけだよ」

そう言つと、俺はマックから離れ、テーブルの上に置かれたコーヒーに手を伸ばした。

日曜、俺は森崎の家にいる。

オンライン上での弟の様子を見る、という理由で上がり込んだのだ。

森崎の部屋は全体的に白いトーンで統一されていた。机も、椅子も、パソコンも、壁も何もかも白い。白い壁の中に、トーマス・マツクナイトの月が浮かんでいる。異国の港の上に浮かぶ、丸い月だ。

「で、結局弟さん、今日は行かなかつたのね」

白いキーボードに手を乗せて森崎が言う。

「あいつが行くわけがないよ」

俺は答えた。

例のみーさん主催のデート（と決めつけていいのかどうか分からないが）の事である。

「まだ、そこまで他人に気を許していないよ」

「そうなんだ」

そう言つと、森崎はマウスをクリックしてパソコンを終了させた。

「もったいないね。おもしろそうなのになのに」

「おもしろそうつて、例の彼女の事？」

「そうよ。ケンカした相手に会いたがるなんて、おもしろいと思わない？」

「おもしろいっていうより、意図が分からなくて不思議だよ」

「私が思うに、人にすごく興味のある子か…それとも…」

「それとも？」

「単にもぐちゃんのルックスが好みだったか…」

「まさか！ あいつ、身なりに少しも気をつかってないのに」

「じゃあ、人に興味がある子なのかな」

「ふうん」

それじゃ、俺とは正反対だな…と思いつつ、コーヒーをひとくち飲む。

「でも、いい感じね。もぐちゃん、仕事頑張ってるみたいだし」

「まだ、スムーズにはいい難いけどな」

「…続きそうなの？ 仕事」

「微妙なところ。でも、この間いった通り、上司が気に入ってくれたみたいだから、この調子でいけばもしかすると感じてかな…」

「そっか…」

それを聞いて、森崎はなぜかため息をついた。

「何か残念」

「どうして？」

「…そろそろ、お悩み相談室のお姉さんも廃業だと思つと、すごく残念」

その言葉に、俺は思わず吹き出す。

「何？ それ？」

「サイトの書き込みの事よ。最近、もぐちゃんの書き込みも減つたし…。でも、これって、いい事なのよ。ちゃんと現実を生きているって事」

「そういうもんなの？」

「そう。すごく良い事よ。ちょっと寂しいけど…」

「ふうん…そうなんだ」

あいにく俺は、ネットなどほとんどやらないから、その気持ちは分からない。で、何の感慨もなく壁の時計に目をやると、既に2時15分を回っていた。

「おい。それより、そろそろ出ないとヤバいぞ。映画、間に合わない」

「え？ もうそんな時間？」

森崎が驚いて時計を見上げる。

「確か、上映開始3時だったろ？ 歩いていくなら、もう出ないと」
「本当だ！」

そういうと、森崎はばたばたと立ち上がり、飲みさしのコーヒークップを盆に乗せた。

「先に外に出てて、私はここを片付けてから行くから…」
「わかった」

うなずくと、カバンを持ち階下へ急ぐ。そして、玄関から外に出て、森崎を待った。5分ほどして森崎が出て来る。そして、俺達は歩き出した。

映画館までは、ここから歩いて10分ほどの距離のショッピングモールの中にある。以前、森崎と一緒に似顔絵書きのバイトをしたあの店だ。近所とはいえ、行くのは結構久しぶりだ。店までは、小さな川沿いの道に行く。初夏。沿岸の木々は緑色の若葉を風にそよがせている。一年で一番いい季節だ。その葉の隙間からこぼれる光の中を歩きながら、ふと、森崎が言う。

「ねえ、河井君」

「うん？」

「もしもさ…」

「何？」

「もしも、もぐちゃん…弟さんがこのまま社会復帰できそうなら…」
「…？」

「社会復帰できそうなら…」

「何だよ？」

「河井君はこの先どうするの？ 東京に戻るの？」
「…」

それは、いずれは答えを出さなければいけないと思いつつも、ずっと、目をそらしていた問題だった。

弟が無事に社会復帰できたらどうするのか？

それは、俺と森崎との関係においてこの上なく大事な問題であった。なぜなら、それは、俺がかつて森崎に「弟のためだけにこの町にいる」と告げたからである。そして、常に「いずれは東京に戻る」ことを、そこはかたなく仄めかしていた。にもかかわらず、森崎は俺との縁を切ろうともしなかったし、俺もそういう森崎の態度に甘えていた。考えてみれば、卑怯この上ない人間である。そう知りつつも、なぜするずると付き合いを続けるのか。その弱さがなんなのか。森崎に対する情なのか、それとも、未来に対する不安からなのか。自分でも判然とできぬままに時だけが過ぎていく。

けれど、いずれはきっぱりと答えを出さなくてはならないだろう。逃げ続けたところで問題は追いかけて来るのだから。

しかし、幸いにして（皮肉にも）、世の中そんなに甘くはなかった。

「河井弟さーん」

前田君の声がある。

途端に俺の隣で作業していた宮沢さんが「またかよ」って吹き出した。

前田君が弟を呼ぶのは、奴が何かをやらかしたからであるが、1時間に1度はそれを繰り返すのが、近ごろのこの職場での恒例になっていた。やれやれ、今度は何をやらかしたんだよと、あきれ気味に耳をすませていると、前田君の言葉が聞こえて来る。

「これ、弟さんが分けた部品ですよね」

「え？　そうでしたっけ？」

「そうですよ。弟さんの作業台の番号が書いてある。ほら」

「あ。本当ですね」

「『本当ですなえ』」

前田君が、わざと弟の口まねをする。

「…で、それはいいんですけどね、このネジの箱の中にコイルが混じっちゃんでるんですよ。ほら、1個、2個…」

「あ…本当だ」

「『本当だ!』。で、前にも言いましたけど、困るんですよ、こういうことされると。2度手間になっちゃうんで」

「…すいません。急いでいたから、よく見ていなくて」

「あの、前にも言ったと思うんですけど、慌てなくていいから、ミスのないようにお願いします」

「分かりました」

「『分かりました』か。弟さん、いつもその場では分かってくれんですけど、その割に直りませんよねえ」

「……」

「何で同じミスを何回も繰り返すんですか？」

「…分かりません」

「自分のことも分からないんですか？ 困りますね。原因が分からないと、直せませんよね」

「…慌てているせいかもしれません」

「なんで慌てるんですか？」

「慌てないと、ノルマこなせないし…」

「慌てていても、こなせてませんよね」

「…すいません」

「何度も言いますが、慌てなくていいからミスのないようにしてもらえませんか？」

「…はい」

「お願いします」

…まったく、聞いていてこちらが恥ずかしくなる。

その日、弟は一人で残業をさせられていた。ここしばらくは、うちのラインの成績も上がって来ていたから、ようやくサービス残業がなくなったというのに、たった一人で残されていたのである。理由は、ノルマがこなせていないからだという。誰も居なくなったフロアで一人居残りさせられている弟の姿に、哀れを覚えた俺は思わず「俺も手伝う」と口に出してしまった。

「いいよ」

弟はうつむいたまま答えた。

「けど、お前、一人じゃ無理だろ？」

「大丈夫だよ」

「だって、後何台あるんだ？」

「6台」

「6台？」

俺は驚いた。

「ノルマに6台足りなかったっていいのか？」

いくらなんでも多すぎる。

「そうだよ」

「なんで？」

「なんでって…ミスをしないようにゆっくりやっていたからさ」

「だからって…時間がかかりすぎだろう？」

「でも、かかったんだから仕方ないじゃないか」

「…やっぱり、手伝うよ。そんなんじゃ、何時までかかるか分からないだろう？」

そう言うと、俺は自分の作業台に戻った。ところが、その時。

「困りますよ…、河井さん」

聞きなれた声と共に、前田君が現れた。

「そういうの、弟さんのためになりませんよ。そう思いませんか？」
その、いやみっいたらしい言い方に、俺はムツとして前田君を見る。

「別に身内だから庇ってる訳じゃないよ。ただ、やり方としておかしくないですか？ 一人だけ居残りさせるなんて」

「仕方ないでしょう？ ノルマをこなせていないの、弟さんだけなんだから。弟さん一人のおかげで、今日の、うちのラインの成績、また最下位なんですよ」

「だったら、全員で残ればいいだろう？」

「そんなことしたら、弟さん、よけいにヒンシュクを買いますよ？ それでもいいんですか？」

言われてみればそうだと、俺は絶句する。その俺に向かい、前田君は畳み掛けるように言った。

「お兄さんとして、弟を庇いたい気持ちは分かります。でも、それでいいんですか？ 世の中は厳しいんですよ。その厳しい世の中で生きていくのを教える事も、家族の役目なんじゃないんですか？

一生そうやって、弟さんを甘やかすつもりですか？ それで、弟さん、生きていけるんですか？ 世の中自己責任ですよ」

「別に、身内だから庇ってるわけじゃないって言っただろう？」

「本気でそう思ってるなら、一度自分の姿を鏡に映してよく見てみた方がいいですね。少なくとも、僕にはそうとしか見えませんよ。客観的な意見って大事だと思います？」

くそ。なんかムカつく。大体、俺は馬鹿の一つ覚えのように『自己責任』としかほざけない人間が大嫌いなのだ。流行り言葉なら無批判に良しとする風潮も気に食わないが、それ以上に、それこそ、自分以外の全てに対する責任を放棄している言葉に他ならない……としか思えないからである。でも、この場合は言い返せない。前田君の言葉にも一理ある。

「分かりました」

俺はしぶしぶうなずくと、言われた通り弟を置いてフロアを出た。

その日、弟が帰宅したのは、夜も9時を過ぎてからだった。なんでも、作業をしている間中、隣に前田君がはりついて逐一ダメ出し

して来たせいで、少しもはかどらなかつたからだそつだ。弟はすっかり、憔悴しきっていた。

「今日は休む」

布団の中から弟が言った。

「どうして？」

たずねると、

「腹が痛い」

と答える。

「風邪か？」

「…分からないけど…最近、残業続きだったから限界が来たんだと思う」

「…なるほどね」

俺はうなずいた。確かに、ここ一週間というものの、弟は毎日一人で居残り残業をさせられていた。精神的にも肉体的にもきつかった事だろう。しかし、正直『またか』と思う。だからといって、本人が体調が悪いと言うのはどうしようもない。

「分かった。前田さんに、休むと伝えておくよ」

「頼むよ」

「じゃあ、俺は行くから」

「うん」

「…」

「…」

「…本当に、ハラが痛いんだよ」

「分かってるよ…ちゃんと病院に行けよ」

「ああ」

6月2日。

早いもので、もう、梅雨の季節だ。

傘をさして会社に向かう。

雨の中、家々の庭に咲く紫陽花が、華やかな彩りをそえてはいるが、俺の気分は天候と同じく甚だしく憂鬱だ。原因はもちろん弟である。…腹が痛いだって？ 本当かよ。こないだ、長い事休んだ時も同じ言い訳だったじゃないか。まさか、また、しばらく閉じこめる気じゃなだろうな。

ってことは、また『振り出しに戻る』か？ まるで、賽の河原の石積みだな。正直言って、もう疲れた。今度同じ事が起こるようなら、今度こそ俺は投げ出してしまいかもしれない…

ため息をつきながら重たい足を引きずり、気がつけば工場に辿り着いていた。そば降る雨の中に屹立する灰色の工場を見上げて、ますます憂鬱になる。もつとも、絵にするには最高のモチーフだが、その時だ。「優ちゃん」と明るいい声がして、意識の中に思わぬ花が咲く。どこ咲く花かと思渡せば、みーさんが1階の事務所の窓から顔を出して、笑いながら手を振っていた。

「おはよー」

「おはようございます」

なんだか、ものすごく救われた気分になり、俺は窓辺に駆け寄った。

「あれ？ 正ちゃんは？」

「休みです」

「風邪？」

「腹が痛いそうです」

「なんだ。話したい事があったのに。まあ、いいや。優ちゃん、こつと頼める？」

「別にいいけど…携帯でメールしたらどうですか？」

「携帯、壊れちゃって」

「そうなんだ。それじゃ、仕方ないですね。で、何です？」

「うん。…今は、時間がないから後で…昼休み、食堂に来れる？」

「行けますよ」

「じゃあ、その時に…」

そう言うと、みーさんは「戻らなきゃ」と窓を閉めて走り去って行った。その後ろ姿を見て、少しだけ気が晴れる。俺は、深呼吸をして自分の職場へと急いだ。

昼休み、約束通りに食堂に行くと、既にみーさんが来て待っていた。

「で、話ってなんですか？」

と尋ねると、なんて事はない。例の眼鏡の彼女：居酒屋で会った子が、どうしても正と話したいと言っているんだそうだ。それで、なんとか説得してくれないかと頼まれる。

「いいですよ」

と、俺は答えた。

「でも、どうしてそんなに会いたがるんでしょうね」

「このまま誤解されているのが嫌なんだって」

「そういう事ですか」

俺は納得した。やっぱり恋愛感情があるとかそういう事ではないらしい。

「分かりました。あいつに伝えてみます。でも、あいつがOKするかどうかは保証できませんけど…」

「なんであろう？ 会って、話せばいいのにね」

みーさんには、弟の心境がさっぱり理解できないようだ。

「うーん。あいつなりに色々あるんだと思いますよ」

俺はあいまいに答えた。

それから、とりとめの無い話をする。森崎の事、職場の事、そのうちに前田君の事に話がおよぶ。そして、弟がここしばらくずっと1人で残業をさせられていた事を話すと、途端にみーさんが怒り出した。

「嘘でしょ？ そんなおかしな話ないよ」

「でも、本当なんですよ」

「毎日何時までやっているの？」

「9：00です」

「9：00!？」

「ええ。それがもう10日も続いたもんで、とうとうぶっ倒れたんじゃないかと本人は言ってるんですが…」

「そうか…疲れから風邪をひいたのかもね」

「…ただの風邪ならいいんですけどね」

思わず不安を口にする。しかし、その真意はみーさんには伝わらない。

「そうだね。もっと重病だと怖いよね」

「いや…」

そうじゃなくて、俺の心配しているのは、弟が再び登社拒否になるんじゃないかということなのだが…しかし、まさかそんな事は言えないと思いつ返し、

「そうです。重病だと怖いですが…」
と適当にうなずいておいた。

「それにしても、ひどいね。一人で残業なんて」

「正確には一人ではなくて、その、前田って奴が一緒にいるらしいんですけど、それがかえって負担になって、仕事が遅くなるって言っていました」

「コガちゃんは助けてくれないの？」

「小金井さんは、最近会議が多いらしくて、ほとんどフロアに顔を出しません」

「そうなんだ。じゃあ、結局は、その前田って子のやりたい放題なんだ」

「そうですね。指示は彼が出しますね」

「むかつくね」

「うん。根は悪い人じゃないんだろとは思うけど。弟の事に関しては、完全に空回りしてますね。というか、むしろ、悪意があるの

かも」

「このままだと、正ちゃん、辞めちゃうんじゃない？」

みーさんの言葉が俺の不安を直撃する。それで俺も

「実は、俺もそれが一番心配で……」

と、つい本音をもらした。

すると……

「辞めたければ、辞めてもらっていいんですよ」

聞きなれた声がした。ぎくりとする。それは、少なくとも、今の場で、最も聞きたくない声だったからだ。おそろおそろ振り返ると、前田君が立っている。今の会話全部聞かれたのかよと胃が痛くなる。前田君の方は堂々としたもんだ。自分の悪口を聞かされても、平然としているところ、たいした根性の持ち主である。彼は、顔色一つ変えずにこう言った。

「やる気のない人間にいてもらっても、迷惑なだけですから」

そして、何も言い返せずにいる俺らを尻目に、悠然と去って行く。その後ろ姿を見ながらみーさんが言った。

「何、あれ？ 感じが悪い」

それで、俺はみーさんに教えた。

「あれが、前田君です」

昼飯が終わりフロアに戻ると、既に前田君が戻っており、何ごともなかったかのように仕事をしていた。腹いせにさぞかし嫌がらせでもされるかと思ったが、案に相違して何もされなかった。しかし、俺の立場として目をあわせる度胸は持てない。

こうして、なんとも気まずい一日が過ぎて行った。

家に帰るとおふくろと親父が無言で飯を食っていた。テレビもつ
けずに、何やら陰気くさい。時計は既に7:00を回っていて、秒
針だけがカチカチと音を立てている。

「ただいま」

そう言っつて、俺はカバンを床に放り出しどかっつと椅子に腰を降ろ
した。

「遅かったのね」

おふくろが言っつ。

「残業だった」

「まっつたくあんた達は…どちらかが残業やらされなくちゃ気が済ま
ないわけ？」

「言っつとくが、俺はやらされ残業じゃないぞ。正が休んだ穴を全員
で埋めただけだ」

これは事実である。しかし、おふくろは聞いているのかいないの
か、無言で奥の台所に消えて行っつた。かわりに親父が言っつ。

「まっつたく…あいつは皆さんに迷惑ばかりかけて…」

親父もおふくろも弟が人並みに仕事ができずにいることを知っつて
いる。親父にとっつては、それが、ふがいなくて仕方ないようだ。

「仕方がないだろう？ 体調がわるいんだから…で、あいつの具合
はどうなの？」

「胃腸風邪ですっつて」

おふくろが、俺の目の前に茶わんを並べながら答えた。

「今朝、病院に行かせたわ」

「病院に行っつたんだ」

「ええ」

「で、薬は？」

「飲んでたわ」

「それなら、本当の病気だな」

「…でも、これをきっかけに、また引きこもるつもりじゃあ…」

「そう、疑ってやるなよ。あいつはあいつなりに、ずっと頑張っていたんだ。残業疲れから来た風邪っていうのも案外本当かもしれない」

「ずっと、家にこもって自分を甘やかしていたからだ」

親父が腹立たしげに言う。

「父さんの若い頃は、9時までの残業なんて当たり前だったぞ」

「…今だってそうだよ。いや、むしろ今のが職場環境はシビアだっ
て言われているぞ。それに、自分から進んでやる残業と、無理やり
やらされる残業とじゃ、気分的にまったく違うだろう？」

「無理矢理、残業をやらされなきゃいけないような状況になる事が、
情けないと言っているんだ」

確かに親父の言う通りではあるが、なんだかやり切れないものを感じ
る。

「そりゃそうだけど…一番辛いのはあいつだろ？ 家族が分かって
やらなきゃ、誰が分かってやるんだよ…」

そう言つと、俺はテレビをつけた。

食後、弟の部屋に向かう。みーさんからの伝言を伝えるためだ。

ドアをノックすると「入れよ」という返事が聞こえる。やけにあっ
さりしているなと拍子抜けしながらも扉をあけると、弟は布団の中
で起き上がり、パソコンを眺めていた。枕元には錠剤のカラとコッ
プが置いてある。なんだ、起きれるんじゃないか。

「調子はどうだ？」

と、尋ねると

「見ての通りだ」

との答え。

「起きあがれるって事は、だいぶん良くなっただって事だな？」

「薬がよくきいているみたいだね」

弟は振り向きもせずに答える。パソコンには森崎の掲示板が表示されていた。俺も書き込んだ事のある例の掲示板だ。自分の書き込みを思い出し、少し気まづくなるが、しかし、もちろん、何食わぬ顔を決め込み、そしてさり気なく話題をふる。

「明日は行けそうか？」

「分からない。俺は医者じゃないから明日の体調まで予測できない」

「そうかよ」

「本音を言えば、行きたくない。前田の顔を見るのもいやだ」

「…」

「できれば、もう辞めたいぐらいだ」

「じゃあ、休むのか？」

「…」

「進むも、戻るも、お前次第だよ」

「分かってるよ。だから、すこしでも気を強く持てるように掲示板を見ているんだ」

「…掲示板？ 今、見ているそれか？」

「そうさ」

弟は、そう言っとうなずくと、はじめてこちらを振り返った。

「俺のネット上の知り合いに、二トの弟を持った女の人がいるんだ…」

その言葉にドキツとする。そりゃ、俺の嘘の書き込みの事じゃないか？ が、しかし、内心の動揺を気取られぬよう、努めて平静をよそおう。

「そうか。そんな知り合いがいるのか」

「うん。…でも、その人の弟、病気で死んじゃったんだって」

「そうか。それは、気の毒だったな」

やはり、俺の書き込みの事をさしていたようだ。

「その弟が死ぬまぎわに、泣きながら後悔したんだって。『やつぱり働いておけばよかった』って。ねえ、兄ちゃん。もし、俺が今のまま死んだら、やっぱり後悔すると思う？」

「そりゃ、するんじゃないか？」

「本当に、そう思う？」

「思うよ」

「何を根拠に？」

「根拠ってそれは……」

一瞬口ごもり、俺はこう答えた。

「それは……お前、ほら、覚えてるだろ？ 東京での師匠の話。自殺まで考えたあの人が、生死の境目で思った事」

「……ああ……！」

その言葉に弟が瞳を輝かせた。

「そうか。あの人も同じ事を言っていたな」

「ああ。『生きていれば幸せになれたかもしれないのに』って。日頃『死にたい、死にたい』と言っていたって、いざその瞬間になれば生きたいと思うんじゃないのか？」

「そんなもんかな？」

「……少なくとも、俺は溺れた時に死ぬもんかと思ったぞ」

「そりゃ、兄ちゃんが、心から死にたいと思った事がないから……」

でも、そうか。やっぱりそういうものなのか……」

そう言つと、弟は再びパソコンに目を戻した。

「正直、そこまで言われてもよく分からないけど……でも、頑張るしかないな。この画面の向こうで、僕を励ましてくれた人のためにも……」

最後はまるで、独り言のようだった。

その言葉を聞き、俺は少しだけ胸が温かくなるのを感じた。森崎や俺の言葉がちゃんとこいつに通じていた事が分かったからだ。同時に、またしても俺の中にイメージが降りて来る。それは、この間、小金井さんと話し合った夜に、つかもうとしてつかめなかったあのイメージだった。

しかし、弟や俺の心の中にどれだけドラマティックな変化が起きようとも、日常に大きな変化があるわけでもなく（実際、心の変化がもたらす効果などというものは、決して速効性のある薬のごときものではないようだ）、次の日なんとか出勤できたものの、弟は相変わらず前田君に叱られてばかりだし、フロアに失笑は漏れ続けるしで、俺はうつうつと作業を続けていた。

しかも、弟は、完全回復しているわけじゃない。まだ、時々、たまに、腹が痛むんだという。それでも出勤したのは、寝ている程の痛みでないという事と、せつかくのやる気を削がないためなのだそう。その姿勢は、立派だと思う。もつとも、世の中には熱が出て、点滴を打つてまでも出勤してくる人もいるくらいだから、弟の行動は、社会人として当たり前といえば、当たり前である。それが正しいかどうかは甚だ疑問だが、そういう真面目さと勤勉さが世界的に認知された日本人の国民性であり、戦後の荒廃から経済大国に発展させた理由でもある。と、いわれている。それならば、ありがたがるべき個性ともいえるが、その割に我々世代の心の荒廃っぷりはなんだ？ 自殺者年間数万人てのはなんだ？ もしかして、俺らのじいちゃん、ばあちゃん達は、あまりにも上昇する事に夢中になりすぎて、多くの大事なものを置き忘れてしまったんじゃないか？ おかげで『最高に恵まれた子供時代を送った』俺らが、そのカルマを刈るべき運命になったのじゃないのか？ だとすれば、迷惑千万な話だ。しかし、産まれ落ちた時代に文句をいってもどうにもならない…。

そんなことより、やはり弟は今日も居残りをさせられていた。時おり腹を抑えながらも、一人黙々と作業をするその姿に心の中でエールを送りながら、帰ることにする。

建物から出るとみーさんが待っていた。そして、いつもの明るい

声で「おつかれさま」という。

「おつかれさま。どうしたんですか？ そんなところで、珍しい…」

「うん。正ちゃんに用事があった。…正ちゃんは？」

「今日も居残りです」

「え？ 病み上がりなのにな？」

「そんなの関係ねーですよ」

「…かわいいそう」

「うーん。まあ、本人は仕方ないと思っっているみたいだけど」

「そう。がんばり屋さんね。…ところで、昨日の話伝えてくれた？」

「ああ。例の眼鏡の彼女の事？」

「そう」

「伝えましたよ。でも、やっぱり無理って…」

それを聞くと、みーさんは残念そうな顔をした。

「…そうなんだ。なんでだろうね？」

「分かりません」

「まあ、仕方ないか。とりあえず、私、正ちゃんの様子見て来る。

応援してあげなくちゃ」

「…ははは。ありがとう。喜びますよ」

そういうと、俺らは手を振り、別れた。

その日、弟は10:00過ぎに帰ってきた。「えらく遅かったじゃないか。また、どんだけノルマこなせなかったんだ？」と尋ねたところ、弟は珍しく興奮気味に語りだした。

「いや、今日は、大変だったんだ。アニキにも見せてやりたかった

よ」

「何を？」

「何をって…前田とみーさんが大喧嘩したんだ」

「へ？」

「驚いた？」

「そりゃ…それで、こんなに遅くなったのか。でも、なんで、喧嘩

なんて…」

「やり方がおかしいって、みーさんが前田さんに言ったんだ」

「やり方が？」

「つまり、俺、一人だけに残業をさせる事さ」

「ああ。あの人、その件ではキレていたからね。でも、まさか直接喧嘩するなんて…それで、前田さんは、何って？」

「ノルマがこなせていないから、仕方がないって…」

「ああ。前に俺に言ったのと同じセリフだな」

「そしたら、みーさん、あなたの指導が悪いからじゃないかって。そこから2人で大喧嘩になって…」

「で、お前は、その間何をしていたんだ？」

「見てた」

「止めるよ」

「入る隙がなかった。2人とも機関銃みたいに喋るんだもん。仕方ないから作業に集中してた。おかげで、すぐくはかどったよ」

「すぐくはかどった割には、遅かったじゃないか」

「しまいに、みーさんが泣いたから、なだめるのに30分かかった。仕事が終わった後も、しばらく2人で話をしていたし…」

「何を？」

「前田の事。みーさん、絶対におかしいって言い張ってた」

「お前は、何か言ったの？」

「うん…まあ…色々と溜まっていた事を吐き出した」

「なるほど…愚痴だったってわけだ。少しは気が晴れたか？」

「まあね。で、今度、飲みに行く約束をしたんだ。アニキも行く？」

「俺はいいよ」

「何で？ 来いよ」

「2人で行けばいいだろう？」

「2人で行ってもつまらないって、みーさんが言っただよ」

「分かったよ」

俺はしぶしぶうなずいた。

やれやれ…と思う。が、しかし、昨日までと違って変わって元気
そうな弟の様子に、少しだけほっとした。

しかし、騒ぎはこれだけでは収まらなかった。しかも、意外な方
向に状況は展開して行った。

48 (前書き)

すいません。先ほど間違つて最新話を削除してしまったのでもう一度あげ直します。ご迷惑をおかけします；

生きていると思ってもよらない方向に事態が進む事がある。それは、思わぬ幸福をもたらしたり、不幸をもたらしたり、あるいは新しい道筋へと人を導いたりもする。

その時、弟の身の上に起きた事といえば、少しの不幸のちラッキー。そして、前田君にとっては100%の大きな不幸であった。徴候はあつたのだ。ただし、それは、その後起きる事とは一見まったく無関係のように思われた。しかし、もし、この世界で起きる出来事の全てが干渉しあい、絡み合っているのだとしたら、やはりその出来事はその後の彼の運命を予告していたといえよう。

とりあえず、前田君は糸をひいた。それは、弟に対する、理不尽な態度というネガティブな形で。

公平に見れば、どちらにも非はある。しかし、この際そんな事は問題ではない。この際問題なのは、どちらがより多くの味方を持っているかということだ。本来であれば、弟に勝ち目は無かつたかもしれない。なにしろ、あの性格だ。ただ、この場合前田君にとって不幸だったのは、弟とみーさんの仲がとてつもなくよかつたという事だ。みーさんは冗談抜きで、この会社の隠れた主である。

彼の非道な振る舞いは、弟の口からみーさんに伝わり、みーさんの口から全女子社員に伝わり、やがて会社の主だった人間全部に知られる事になった。そして、なにより前田君が不幸だったのは、全ての出来事が弟側の視点で語られた事である。同情はすべて弟に集まった。

そして、前田君は一部の女子従業員からは口もきいてもらえなくなつたらしい。理由は『厳しすぎる』『思いやりが無い』ということとだった。しかし、前田君の凄いとこころは、女子従業員に陰口を叩かれようが、無視されようが、平気な顔をして仕事をし続けていられたところである。この辺りが、やはり弟とは根性が違う。これな

らば、プチいじめも直に収まるだろうと眺めていた矢先、こんどは、もっと大事件が起こった。ネガティブに引かれた糸が、ネガティブな雪崩になって、糸を引いた本人に襲いかかったのである。

「近いうちに、大幅な組織変更があるらしい」

隣の原口さんからそんな話を聞いたのは、7月半ばのことだった。

「Aグループの連中がごっそり抜けるって」

「Aグループって事は、となりのラインじゃないですか？ また、どうして？」

「なんか、会社側と揉めたらしいよ。ノルマが厳しすぎるとかなんとかいって」

「全員が？」

「ああ。全員が。自分達が抜ければ会社が困るという腹いせのつもりだろう」

「でも、生活は、大丈夫なんですか？」

「元々、ずっとここにいる気もなさそうな連中だし、こんな仕事ならどこにでもあるしって事じゃ無いか？」

「それって、考えが甘く無いのかな？」

「知らないよ。当人達の問題だし。それより、抜けられれば、ここからも人員削られるからな。大変になるぞ」

「…キツイっすね」

そんな話をして、一週間もしないうちにAグループ全員辞めてしまった。これには、フロアの間全員が困惑した。そのしわ寄せはすべて俺らにくるのだ。この先の残業の日々を思うと、気が重くなる。しかし、その中でただ一人ラッキーだった奴がいた。それは、他でも無い弟だ。何がラッキーって、これで奴の首が繋がったからだ。忘れもしない。一度首になりかけた弟の、とりあえずの契約期間は3カ月だった。3カ月たっても使い物にならなければ、今度こそ首になる筈だった。そして、その期限は7月25日の筈だった。しかし、こう一挙に人に辞められては、たとえ弟とはいえ貴重な人

材だ。こうして、奴の首は、とりあえず、もうしばらく繋がる事となった。もし、この事件が無ければどうなっていたか分からない。

しかし、胸をなでおろしているひまは無かった。早速グループ変更が発表され、各グループからAグループの穴を埋めるために2名ずつ移動する事になった。その中に、なんと俺の名前も含まれていた。何で俺が？とも思ったが、ラッキーな事に一緒に引き抜かれたのが超ベテランの川岸さんという人だったので、少しホッとした。弟とはいえば、引き抜かれた俺の事をしきりと羨ましがっていた。理由は簡単だ。前田君と離れられたから。(まあ、俺にとってはたいてい意味のない出来事ではあるが)。しかし、前田君にとってもそれは同じ事だろう。引き抜かれた人員の中に、一番ベテランの川岸さんがいた上に、残った人員の中に一番役立たずの弟がいたのだから。

しかも、人が減ったというのに、1日あたりのノルマ自体はほとんど変わらず、達成できない分は、以前やったように残業でまかなわれる事となった。ただし、今回は、ちゃんと残業した分は払うという事だ。

しかし、さつきも書いたとおり、俺の配属された先にはベテランの人ばかり集められたので、俺自身はさほどの残業をせずにすんだ。一方、前田君と弟のチームは、連日9時までの残業をしていた。グループが変わってもフロアは同じなので、その様子が見つきり見てとれる。帰り際、いつも弟達が残されているのを見るたび、なんとも申し訳ない気分になってきた。

「いつまで、こんな事が続くんだ？」

ある、休日弟が言った。

「熱いし、足は痛いし、前田はウザイし、いつも帰ると9時過ぎてるし、最悪だよ。ねえ。なんで、あそこ、冷房入れないの？」

「入れてるけど、広すぎて効きが悪いだけだろ？ かわりに扇風機置いてるじゃないか」

「扇風機なんてきくかよ。ねえ、いつになったら人入れるの？」

「入ったじゃないか、3人」

「3人つて……。少なすぎるし、しかも、全員学生の短期バイトだろう？ あいつら、台車運ぶぐらいしかしないじゃないか」

「そのうち解体も教えるだろうけど、今は教えてるヒマがないんじゃないか？」

「そんな事いつてるうちに辞めちゃうんじゃないのか？ あいつら、あくまで短期だし。ちゃんと、長期勤められる社会人を入れろよ。バイトでも派遣でもいいからさ」

「募集かけても来ないんじゃないのか？ 同じラインの仕事をするなら、みんなソニアに行くんじゃないか？ あつちのが待遇良いし」

ソニアとはうちの会社の近くにある、世界的に有名な電化製品の会社である。

「そうかよ。あー！ 嫌になる！」

弟は、そういうとばたつと床に寝転がった。

「いいじゃないか。とりあえず、残業代はついてるんだから」

「でも、いいかげん限界だよ。体力的にも、精神的にも」

「ぶつぶついうな。働ける場所があるだけでも、幸せなんだから。そういうと、俺は弟の足を軽くつけた。

それにしても、おかしな話である。

会社側の『この度のグループ変更は暫定的な措置です。すぐに、人員を増やします』という言葉の割に、少しも人が入って来る気配がない。タウンワークなどのバイト情報誌を見ても、募集をかけている気配がない。もしかすると、業績不振のおり、人件費削減で乗り切ろうとしているのかもしれない。だとすれば、この生活がいつまでも続くという事になる。そんな不吉な予感が誰の胸にもよぎり、次第に皆の表情にも、疲労といら立ちの色が見えはじめてきた。特に弟のグループで、それは顕著になり、前田君の怒号も目を追うごとに増えて行った。思うにまかせない現実に苛立っているん

だろうが、その声を聞かされる方も、陰鬱になって来る。

「たまらないよ。アイツ」

連日のように弟はぼやいていた。

「仕事が思うように行かないからって、俺に当り散らして」

どうやら、相変わらず怒りの主な銚先は弟らしい。

それでも、感心な事に弟は、歯を食いしばって頑張っていた。それというのも、みーさんの励ましがあつたからである。心底、みーさんには感謝している。誰か一人分かつてくれる人間がいるだけで、人はこんなに強くなれるものなのだとということを知った。

そんなある日の事だった。ついに事件がぼつ発した。

「なんだ？ その上から視線は！」

原口さんの罵声がフロア中に響き渡った。

皆、驚いて作業の手を止める。そして、Bグループに注目する。

そこでは、原口さんと前田君が睨み合っていた。前田君はともかく、普段は温厚な原口さんが切れるなんて余程の事だ。一体何ごとかと見ていると、原口さんが口を開いた。

「一体、何様なんだよ？ お前は」

その剣幕に、さすがの前田君も青ざめていた。無理もない、普段は温厚とはいえ、原口さんは前田君よりはるかにガタイがいい。白髪まじりのゴマジオ頭だが、角刈りで迫力がある。一方、前田君の見かけは、性格に似合わぬ好青年。二人が並ぶと、虎とプレーリードッグぐらいの違いがある。けど、前田君は憶病者じゃない。怯んだのは一瞬。すぐに言い返した。

「俺はこのまとめ役だよ！ ちゃんと従えよ！」

「なんだと？」

「カゴ車を戻して来いって言ってるんだよ」

どうやら、前田君は、カゴ車にテレビがまだ残っているにも関わらず、原口さんが次のカゴ車を持ってきた事にキレているらしい。前にも弟が同じ事で怒られていたっけ。しかし、そんな事ぐらいで喧嘩になるなんて、よっぽどみんな疲れているよな…。そういえば、ここしばらく笑顔つてもんが見られない。つくづく嫌になる。うんざりしながら、作業に戻る俺の耳に2人のやり取りはまだ聞こえて来る。

「うるせえな。もうすぐ空になるから持ってきただけだろ？」

「こんな所に2台もあると、危ないんだよ！ テレビ、崩れてきたらどうするんだよ？」

「崩れて来るかよ、こんなの」

「いいから戻して来い！」

「やだね」

「戻してこいよ！」

「お前は偉そうなんだよ！」

…いい加減に、してくれないかなあ。そんな事はどっちでもいいだろう…。そう思いつつ、外したネジを鉄素材専用ボックスに放り込む。その時、隣からこんなぼやきが聞こえてきた。

「なんで、前田は、ああやっていちいち噛みつくかな…」

「え？」と思つて隣を見ると、川岸さんがあからさまに嫌な顔をして2人を見ていた。

「イライラするんだよな。アイツの声聞きたび」

それだけ言うと、川岸さんは俺の答えを待たずに自分の作業に戻った。

…あーあ。前田君、ここでも反感もたれているよ…

ため息をつき、俺も作業に戻る。

結局その場は、騒ぎを聞いて駆け付けた小金井さんの取りなしでなんとか収まったが、原口さんと前田君の間には深い溝ができてしまった。元々あった物が表面化しただけかもしれない。それは、二人だけの問題でなく、グループ全体にも広まった。つまり、前田君 vs グループ人員という構図が出来上がってしまったのである。

このころから、前田君の顔つきに変化が見られてきた。やけに元気が無くなり、無表情になったのだ。元々朗らかなタイプではないが、しかし、全身にみなぎるパワーみたいのがあった。仕事に対

する責任感からきたものと思われる。しかし、最近ではそれもなくなった。陰鬱な表情で、時おりこめかみを抑えている。何か考え込んでいるかのようにも思える。後で聞いたところによれば、このころ、人員不足による作業超過を補うために、彼は休日出勤を続けていたらしい。しかし、そんな彼の見えない努力も、決して報われる事はなかった。

ある日の夕食後、風呂へ行こうと階下に降りると、突然弟に呼び止められた。「なんだよ」って奴を見たら、奴はだらしくソファに腰かけてこう言った。

「明日、俺、仕事休むから」

それは、まるで、明日、遊園地にでも出かけるみたいないな軽い口調だった。

「え？ 具合でも悪いのか？」

尋ねると首を振る。

「じゃあ、急用でもできたのか？」

すると、弟は再び首を振る。

「だったら、なんで休むんだよ？」

「うん、実はな……」

そう言ったとき、奴は口を閉じ、意味ありげな笑みを浮かべた。その態度にちょっとイラツと来る。

「なんだよ？ さつさと言えよ。俺は、風呂に行きたいんだよ」

「実は、前田へのリベンジ」

「はあ？」

「Bグループ全員で、仕事をボイコットする」

「なんだって？」

あまりの驚きに、持っていたタオルを落としてしまう

「本気かよ？」

「本気だよ。Bグループのメンバー全員、前田には、キレまくって

るんだ」

「だからって、ボイコットなんて…」

「会社への意思表示だよ。あいつとは、仕事できないって…」

「辞めさせられるのが、オチだぞ」

「大丈夫さ。これ以上、人、減らせないだろう？ それに、万一辞めさせられたって、こんな仕事ならいくらでもあるし」

「バカヤロウ！」

思わず怒鳴り付ける。

「お前、自分が、どの程度の人間だと思ってるんだ？ 他所でつとまる程、進歩できたかっていうのかよ？」

その言葉に、弟は口ごもった。自分が半人前の自覚があるからだろう。

「お前、そんなくだらない事に加わるなよ」

「アニキは前田の味方なのか？」

「どっちの味方でもないよ。前田君は、確かに厳しすぎると思うし、でも、お前が仕事できるようになったのは前田君の指導のおかげだろうっ？」

「あんなの指導じゃねえよ。イジメだよ。精神的におかしくなりそうだよ」

「向こうだって、お前のせいで、迷惑かけられてるんだ。おあいこだろうっ？」

「…やっぱりアニキなんかには話すんじゃないかった」

「いいから、明日はちゃんと出勤しろよ」

「やだよ」

「出るよ」

「うるさいな。俺の勝手だろ？ 大体、俺一人だけ出勤したら、裏切り者になっちゃうじゃないか、アニキは俺を卑怯者にしたいのか？」

そう言われると、返す言葉もない。確かに、明日仲間を差し置いて出勤したりしたら、弟は仲間から、下手すれば会社中から総ス力

ン食らわされるだろう。

「分かったら、さっさと風呂行け！」

「……」

「行けよ」

「……分かったよ。勝手にしろよ。ただし、どうなっても、俺の知った事じゃないぞ」

そう、言い捨てると、俺はタオルを拾い上げ、風呂場に向かった。風呂から出てリビングを抜けると、弟がまだそこにいて、食い入るようにテレビを見ていた。その横顔は完全に俺を拒否している。ため息をつき、2階に戻った。ベッドに入るが、明日の事を思うと眠るに眠れない。まんじりともせぬまま、夜が深けていく……。

翌日、宣言通り、弟は会社を休んだ。

両親は、弟の「体調が悪い」という言葉にコロっと騙され、俺も敢えて本当の事は語らず（弟もいい大人なのだから、両親にチクリを入れてまで行動を強制する必要もあるまい）不安を抱えつつ、同時にこの状況の成りゆきを楽しむ悪趣味な野次馬根性も抱きつつ工場に向かった。

フロアにたどり着くと、弟の言った通りBグループは前田君を除いて誰もいなかった。さぞかしみんな騒いでいるだろうと思いきや、誰も…前田君ですら…顔色一つ変えずに自分の持ち場にいた。それで俺も、何くわぬ顔で自分の作業台に向かった。そして、他の者と同じく無言で…時おり不可思議な視線をBグループの方へ向けながら…始業時間を待った。

しかし、水面のおだやかさはどうであれ、困った状況である事には変わらない。Bグループの仕事を全て止めるわけにもいかないの
で、俺や、川岸さんなどの元Bグループのメンツと、他、3名ほどの人員がBグループに割かれる事になった。人数が足りないのだから、当然、その分の残業はすることになる。定時を過ぎ、7時を回っても帰れぬ状況に、フロア内のいら立ちは募り、8時を過ぎた辺りでついにほころびが大きく割けた。

「まったく。他部所に迷惑かけるなよ！ Bグループ！」

前田君に向けてどこからか罵声がとんだ。フロア内に緊張が走る。

「管理者の責任じゃないのか？ これは？」

もう一度、そんな声が聞こえて来る。誰の声かは分からなかった

が、おそらく、アンチ前田派の人間の嫌がらせだろう。今では、この騒ぎはフロア中、いや、工場中を巻き込む程に広まっているのだ。前田君の真後ろで仕事していた俺は、気が気でなかった。前田君が怒り出すのではないのか、もしくは、泣き出すのではないかと。しかし、前田君は、顔色一つ変えず、なすべき仕事を淡々とこなしていた。淡々というより、むしろ、投げやりに思えた。痩せた背中が今にもポキンと折れそうで心配になる。だからといって、何一つ慰めの言葉をかけられるでもなかった。自分の弟がこのくだらない企みに参加している以上、どんな慰めの言葉をかけたところで、しらじらしくしか感じられないと思ったからだ。

家に帰ると、居間でテレビを見ていた弟が、待ってましたとばかりに俺を質問攻めにした。

「みんな、約束通り休んだのか?」「フロアの様子はどうだった?」「小金井さんはなんて言っていた?」「前田は落ち込んでいたか?」などなど…。

その質問一つ一つに真面目に答えるのも馬鹿馬鹿しいので、「安心しろ、みんな休んでいたが、前田君はいつも通り、普通に仕事をしていたよ」

とだけ答えて、カバンを投げ付けてやった。

そして、とっとと飯をかきこむと、風呂にも入らずベッドにもぐり込む。今日は疲れた。そりゃそうだ。もう12時過ぎているのだもの。そういえば、会社を出たのが10時過ぎだったもんな。最悪だよ。でも、俺らが帰る時も、前田君はまだ仕事をしていたっけ。彼、明日出て来れるんだろうか? 心配だな。そんな事を考えているうちに眠りに落ちていく。

その夜、見た夢は最悪だった。

前田君の痩せた背中がさらにどんどん痩せ細り、最後は針金みたいになってポキンと折れてしまうんだ。

それを見て弟が笑っていた。俺も一緒に笑っていた。それで良いのかと思いつつ、笑うしかねーなど、ゲラゲラ笑っていた。

次の日は、弟を含めたBグループのメンバー全員は普通に出勤していた。前田君も、前の日にあんなに遅くまでいたにも関わらず、普通に出勤していた。そして、いつもと変わりのない午前中が過ぎ、昼飯は食堂でみーさんと一緒に食う。

弟は得意げに昨日の一件をみーさんに話した。身ぶり手ぶりつきで、熱のこもった話し方だ。みーさんは、時おりあいづちを打ちながら弟の話を聞いていた。そして、「それくらいやってやりや、前田もきつと分かるよ」と言った。俺はそんな二人の会話を黙って聞いていた。

正直言つて、複雑な気分だった。弟の馬鹿はともかく、みーさんの態度がさ。本音を言つと、少し失望していた。俺はみーさんに止めて欲しかったんだ。弟の愚行を止めて欲しかったんだ。いや、きつと、みーさんにしてみれば、これも優しさのつもりなんだろう。彼女は、弟に心から同情しているのだから。そうだ、彼女は、弟の事を思いやつてくれるだけなんだ。彼女にとっては、これも思いやりのつもりなんだ。

その時、俺は、突然、弟がホームページに書き綴った詩を思い出した。「内戦」て名付けられた、あの詩の中の一節だ。

強いやつは、弱いやつを責める。

責める理由は、どれだけだつてつくりだせる。

弱い奴は永久に責め続けられる。

そして、いつか醜悪な化け物に仕立て上げられる。

気付かぬうちに悪者にされるんだ。

それもしかたのない事だ。

誰だつて自分は正しいと信じたいから

大義名分は必要だもんな

そのフレーズを思い出して、俺は笑い出しそうになった。

…確かにその通りだよ、弟よ。

でも、分かっているのかな？ 今、お前がやっている事が、まさにあの詩のそのままじゃないか。

まったく、人間なんて勝手なもんさ。人の欠点はやたらと目につく癖に、自分のこととなると、とたんに目が曇る。しかし、まあ、世の中そんなもんだよ。そんなもんさ。俺だつてきつと、そうなんだから。

それにしても、2人の会話にはついていけなかった。人の悪口なんか聞いていて楽しいもんでもないし。俺にとって、前田君はそこまでの存在でもないし。それで、「俺、事務所に用事があるから」とかなんとか理由をつけて立ち上がる。

そして、後ろを向いて俺はぎよつとした。なぜなら、すぐそこに、前田君がいたからだ。彼は、俺らのちょうど後ろに、背中を向けて座っていた。本来、死角だが、立ち上がった俺の位置からは彼の顔がはっきり見えた。しかし、俺の横に座っている弟は、当然ながら気がつかない。みーさんも話に夢中になっているため、気付かない。しかし、この至近距離だ二人の会話は全て前田君につつぬけているんだろう。前田君はいつになく青ざめた顔をしていた。こんな表情はかつて見せた事がない。よほどショックだったんだろう。

ぼやっと立っている俺に、違和感を覚えたのか、前田君が顔をあげる。目があった瞬間、思わず、俺は「大丈夫ですか？」と口を開きかけた。しかし、そんな俺に気が付くと、彼はさも軽蔑したような視線をこちらに向け、立ち上がって行ってしまった。

後には間抜け面の俺だけが残される。その背後で弟が得意げに喋

神様の不良品

り続けている。その後頭部を、思いきり殴りつけてやりたくなった。

けれど前田君が偉かったのは、1日たりとも仕事を休まなかった事だ。無視されようが、聞こえよがしに嫌みを言われようが、嫌がらせをされようが、毎日必ず始業時間には現れ、黙々と業務をこなしていた。さすがは、この若さでグループの管理をまかされるだけあって、低レベルの争いには目もくれないのかと感心していたが、実はそうでもなくしつかりダメージは受けていたらしい。仕事はきつちりこなすものの、以前のように口やかましく注意する事は無くなり、したがって口数も減り、日に日に元気が無くなって行った。それと、対照的にうちの馬鹿弟は日に日に元気に…いや、日に日に増長していく。それは、決して仕事ができるようになったからではない、味方が増えたからでもない。単にアンチ前田君が多かったからだ。奴は依然として足手まといであり、内心苛ついている人もいたと思う。しかし、とりあえずの共通の敵が前田君だから見逃してもらえているというだけのことだ。

「でも、何とか仕事をする事には慣れてきたってことよね、正君も」
全てを聞き終わると、森崎は言った。

「まあね。以前よりは気が楽になってきたみたいだよ」

俺はレンガ色の建物の向こうにそびえる鉄塔を見上げながら答える。銀色の鉄塔は7月の日ざしを受け、ギラギラと光っていた。

「どつりで、最近サイトに書き込みしてこないと思った」

「サイトって、森崎の?」

そういうと、俺は鉄塔から森崎へと視線を移す。森崎は白いワンピースに、白い帽子をかぶり、白いベンチに座っていた。

「うん。でも、書き込みがないって事はいいことよ。リアルな生活が充実しているって事だから」

「ふーん…そういうもんなの?」

俺は書き込みとかしないから（そもそも、インターネットをする環境もないから）よく分からない。

と、その時、広場中央の時計が10時を告げる鐘を鳴らした。それを機に、俺達はベンチから立ち上がった。

7月終わりの日曜日、つまり、今日。

俺は森崎からの電話で朝早く起こされた。

なんでも「市の美術館でモネ展があり、今日で最後だから付き合っ
てほしい」という。「仕事で徹夜開けでしんどいけど、どうしても見たいから」と。

モネは嫌いじゃないから「いいよ」と答えた。「じゃあ、美術館で待ってる」と森崎は言った。徹夜明けで美術館に直行してしまっ
たために、その時既に会場前の広場において、話し相手もなく手持ち
無沙汰にしてるんだそうだ。それで、俺も急いで美術館に向かった。
しかし、あまりに早く着いてしまったために、まだ会場は閉まってい
た。それでベンチに座って開場時間を待っているうちに弟の話にな
ったというわけだ。

まあ、そんな事情はどうでもいいだろう。とりあえず、俺達はレ
ンガ色の美術館の中に入っていった。

会場の中に入ると、白い展示場にモネの代表作である睡蓮の絵が飾
られていた。

壁の端から端まで届く程の横長のキャンバスのあちこちに、うす
桃色の睡蓮の花が浮かんでいる。水面には柳の影が映りこみ、その
ため本来青色のはずの水面の大部分が深緑に染められていた。次の
部屋にも大小さまざまな睡蓮の絵が飾られていた。それらは、歩を
すすめる程に水面と睡蓮の輪郭があいまいになり、水面の青色に花
も柳の影も溶け込んでいき、いつしか夢の中を漂っているような幻
想的な気分になってくる。

大昔は、正直いってこの画家の価値が分からなくて「睡蓮ばかり描いて何が楽しいのか」と生意気な事をほざいていた。けれど、今はそのすごさも何となく分かるようになってきた。人間的に成長したのかも知れない。さらに先に進むと、モネの比較的初期から中期の作品ばかりが飾られた部屋にたどり着いた。

「綺麗な人だったんだね」

森崎が言う。

彼女の目の前には赤い着物を着た金髪の女性の絵が飾られていた。

「これって、モネの最初の奥さんなんですよ？」

「うん。カミーユ・モネだ」

俺はうなずいた。

「彼は奥さんや家族をよく絵の中に登場させてるらしい。ほら、これもカミーユだ」

と、俺は横に飾られている絵を指さした。そこには、白いドレスを着た女性が日傘をさして立っていた。彼女は丘の上で強い風を受け、髪をなびかせている。

「よっぽど彼女を愛してたのね」

「その割に再婚するけどね」

その言葉に、森崎がちよっと笑った。それで、俺は森崎が今日はいじめて笑った事に気付く。

「でも、家庭的だったのは確かだ。庭いじりが好きだったみたいだし」

「庭いじり？」

「そうだよ。モネの睡蓮の連作は、彼の庭の池に咲いていたものなんだよ。モネは抽象画の先駆けともいわれるらしいけど、それ以上にガーデニングの先駆けでもあるって世界の常識」

「何それ」

森崎が、また笑った。

「河井君はモネに詳しいね」

「割と好きだからね」

「そうなんだ。ちよつと意外」

「意外かな？」

まあ、そうかもしれないな。俺の神経質で暗い画風と、モネの世界とはあまりにも違うしな。そういえば、モネの絵と師匠：菊池大成の絵はどこか似ている。一見無造作のようでもあり、的確にも思われるような筆の置きかたも、描かれている世界の明るさも。もちろん、二人とも明るい世界ばかりを描いていたわけじゃない。その次に俺の目に入ってきたのは『死の床のカミーユ』と題された作品だった。タイトルの通り、死の床についた彼女を描いた作品だ。ほの暗い死の帳の向こうに、わずかに顔を歪ませたカミーユの姿がある。この絵を見るたびに思う。なぜ、モネはこんな絵を残したんだらう？

「そういえば、私のサイトにもモネ好きの人が来た事がある」

突然、森崎が言った。

「え？」

俺は隣の森崎を見た。彼女も『死の床のカミーユ』を食い入るように見つめている。

「確か、その人、マリアさんて名乗ってた」

その名にドキツとする。なぜなら、そのマリアと名乗る人物の正体が他でもない自分だからだ。

「でも、一度きりで来なくなっちゃった」

「へえ…よく覚えてたね、一度しか来なかった奴の事なんて」

「うん。何で覚えているかっていうと、その人がもぐちゃん…正君のことをとても心配してたから。本当に不思議なぐらい心配してた」

「ふーん。なんでだらうね？」

「たしか…同じようなひきこもりの弟さんがいるからって言った

…」

「…なるほどね」

その弟が死んだという（俺の創った）設定は…忘れていたのか…
森崎は口にしなかった。

「マリアさんも喜ぶかな」

「何を？」

「もぐちゃんが、頑張ってるって聞いたら」

「さあ…どうだろうね。どっちかっていうと、複雑な気分になるかもね」

あいまいに答えると、俺は再び『死の床のカミュー』に見入った。その時…森崎の言った『マリア』という言葉に触発されてか、いつしか俺は無意識に師匠の『つぎはぎのマリア』をその横に並べていた。似たようできて徹底的に異なる二人の世界がその先に広がる。何が違うんだろう？俺はマリアに向かい合って考える。いつか、カミューの姿は消え、マリアの姿だけが俺の前に横たわっていた。彼女の上には陰惨な死の影は降りていない。そこにあるのは、ただ、ただ、敬虔な光だけだ。これは二人の死に対する認識の差なのかもしれない。モネは『死』を『死』として捉え、画家として忠実に描いた。しかし、師匠にとって彼女の『死』は自らのこの世での再生のための胎動でもあった。別に、どっちが正しいということでもない。ましてや、世界に名立たる巨匠にケチをつける訳じゃない。けど、その発見に俺の心が昂揚していた。俺ならどう描くだろう？そう、俺ならどう描く？そうだ、描かなくちゃ、俺の絵を描かなくちゃ…。しかし、そこまで考えた時、その想念の渦を断ち切るがごとくに、再び森崎の声が聞こえてきた。

「それで、河井君どうするの？これから」

目の前に塔がそびえている。あれは鉄塔だ。太陽の光を受け、鈍く銀色に光っている。しかし、奇妙な塔だ。屋上に街が広がっている。それは、緑があふれる平和そうな街だ。

街のあちこちには銀色の建物が点在していて、街の中央には美術館がある。そして、その建物を背に俺が、俺に向かい合うようにして森崎が立っている。

森崎は言った。

「今日は、ありがとう。おかげでモネの絵が見られてよかった」

「礼なんていいよ。…それより、これからどうする？」

「そうね…」

森崎はちよつと首をかしげ、考えるような顔をしたが、すぐにこう答えた。

「会社に戻るわ」

「今から？」

「うん。この近くだし、まだやらなくちゃいけない仕事があるし」「徹夜あけで？」

「大丈夫。仕事場で、少し眠るから」

「でも、今日は休みだろう？」

「今、すごく忙しくて…」

「そうなんだ」

「うん。だから、しばらくは連絡できないかも」

「…そう」

「じゃあ、今日は本当にありがとう」

「だから。礼なんていいよ。それより、仕事頑張れよ。倒れるなよ」

「ありがとう。大丈夫だよ。じゃあ…」

そういうと、森崎は手を振ってかげろうみたいになんて消えていった。残された俺の胸にうら寂しい風が吹き抜けていく。

「おい！ アニキ」

ふいに肩をゆさぶられ、俺は我にかえる。目の前に弟の訝しげな顔があつた。

今は仕事場で作業中だ。目の前に緑の基板を乗せた、塔みたいな偏向ヨーク（ブラウン管テレビ内の部品）が立っている。いかんいかん、現実逃避していたらしい。しっかり仕事をしなければと、ドライバーを手に取る。すると、

「おい、何やってるんだよ。もう、昼休みだぞ」

弟が言った。

「え？ マジで？」

時計を見ると、確かに12時過ぎていた。

「大丈夫かよ、アニキ。こないだの日曜から、なんか変だぞ。例のなんとかかって彼女となんかあつたのか？」

「いや？ 何も無いよ。気のせいだろ？」

言つと、俺はカバンを持って立ち上がった。そして、弟をおいてさっさと歩き出す。

「おい、待てよ」

弟の声が追いかけて来る。

「あのさ、アニキ。俺、今日はグループの人達と一緒に食べるんだけどさ、アニキも来る？」

「え？」

俺は振り返つて弟を見た。

「グループの人達と一緒に？ 随分仲良くなつたもんだな」

「いや…」

弟は少しはにかんだ。

「そうじゃなくて、みーさんがみんなに何か話があるって言うから「ふーん」

みーさんの話つていえば、大方前田君の悪口か何かだろう。しかし、正直言つて昼飯時に、そんな話は聞きたくない。それで、俺は

弟に言った。

「…いや。俺はパンでも買って外で食うよ」

「外で？ 何で？」

「うん。実は、外でスケッチをしようと思って…ほらスケッチブックも持ってきてるんだ」

そう言うと、俺はカバンの中からスケッチブックを取り出した。

「スケッチ？ 仕事にお絵書きかよ」

「休み時間だろ？ この間から、構想が浮かんで、浮かんで仕方がないんだ。消えないうちに書き留めたくて」

「ふーん。相変らずの変わりもんだな。まあ、いや、勝手にしろよ。俺は、食堂に行くから」

そう言うと、弟はさっさと行ってしまった。

スケッチをしたい…それは本当だ。

しかし、構想が浮かんで、浮かんで仕方がないというのは、嘘だ。確かに、ぼんやりとしたイメージは見えているが、一つきりだし、いまだに紙の上に描き出せないでいる。ともあれ、俺は出荷倉庫裏の狭い空き地に腰を降ろした。

ここは、以前、よく一人でスケッチをしていた場所だ。そして、森崎と再会した場所でもある。フェンス越しに小川が流れ、その先に緑の田んぼが広がっている。のどかな風景だ。

俺は、フェンスのそばに寄り、流れる川を見降ろした。水面に、小さな水草が生えている。小さな草だが、その円い形が少し睡蓮に似ていると思う。睡蓮の連想からモネの絵を思い出し、さらにそれが飾られた美術館の一室を思い起こさせ、やがて思考の糸は森崎へと繋がる。

「それで、河井君はこれからどうするの？」

と、あの日、彼女はたずねてきた。とても真剣な目をしてたずねてきた。けれど、俺は何も答えられなかった。答えられずに立ち尽

くしていると、彼女の目にみるみるうちに失望の色が浮かんで来た。そして、彼女はひとりで先に歩き始めた。歩きながら言った。まるで、ひとりごとのように…。

「東京に、帰った方がいいのかもね」

「え？」

「だって、河井君は何も見ていない。何も聞いていない。私のことも見ていない。ただ、そこに居るだけ」

水草が、川の流れのままに揺れている。

確かに、森崎の言葉の通りだ。今の俺は何も見ていない、何も考えていない。流れにまかせて漂っているだけの、根無し草みたいなもんだ。

スケッチブックを開いてフェンス越しに水面を描く。モネがそうしたように、光を写しとろうと試みる。しかし、川の流れは案外早く、紙の上にはうまく留められない。俺は、絵を描く手を止めて思った。

…このままじゃ、時間が過ぎていくだけだ。そうだ、そろそろ決着をつけないといけない。

そして、再び手を動かしはじめる。川の流れの上に、なぜか俺は弟の顔を描いていた。絵の中で、弟は笑っている。その絵を見て俺は決意した。

…そうだ。もう戻ろう。ここから、出ていこう。

そう決めた途端に、雲間からにわかには青空が見えたような心地になる。それは、つかのまの晴れ模様かもしれないが。

それでも…たとえ錯覚とはいえ…工場を辞めると決めた途端に俺の心は驚く程軽くなっていた。まるで、今まで自分の上に覆いかぶさっていた大きなおもりが取れたような心地だ。それほど、ここでの暮しが俺にとって苦痛だったということだろう。

…しかし、辞めると決めたはいいが、いつ上司にきりだそうか。

ドライバを片手に思案する。

なにしろこの人手不足のおり、相変わらず毎日皆が残業をやらざるを得ない状況下だ。軽々しく「辞めさせてください」とはさすがの俺も言いにくい。第一、あっさり辞めさせてもらえるかどうかも分からない。さりとていつまでも、心にもない場所でするずる働き続けられる程のお人好しでもなし、どちらにしろ、一刻も速く切り出さなくてはならない。俺の人生なのだから。

作業台に置かれた卓上カレンダーを見て日にちを数える。辞めるにも最低1カ月はかかる。今日は8月4日だから、今日辞めさせて欲しいといってすんなり受け入れてもらえたとして…辞めるのは9月3日か。9月…盆休み後2週間強。どうだろう？ まだ忙しいだろうか？ 少しはヒマになってるんじゃないだろうか…そんな風に思案した時だ。突然、背後から誰かの怒鳴り声が聞こえてきた。やれやれ、また喧嘩かよ…と思いつつ、野次馬根性でそちらをみてぎよっとする。

いや、喧嘩自体には、もう慣れっこだ。なにしろ、この職場ときたら3日に1度は誰かが誰かをのしっている。じゃあ、何に驚いたかって、今回の喧嘩のメインキャストの意外さだ。

その一人は、前田君。今さら言うまでもない、Bグループの口うるさい責任者だ。

そして、もう一人は、弟だ。よくある取り合わせといえはいる。(もっとも最近はめつたに見ない取り合わせになっていたが)

その何に驚いたかつて？ それは、怒鳴っているのが、前田君でなく弟だった事だ。そうだよ。あの弟だよ。つい、この間まで前田君に怒鳴られては小さくなっていた、あの、役立たずの弟だ。

弟は、言った。

「お前は、いちいちうるさいんだよ。人の事見てんなよ」

どうやら、前田君に何かを注意されて、逆切れしているようだ。

前田君、ここところ沈黙を守っていたはずなのに：よほど弟が間抜けなドジをふんだんだろう。その当の前田君は、弟の反撃に少々面喰らった顔をしていたが、しかし、穏やかに言い返した。

「落ち着いてくださいよ。ボクは、ただ、素材の分別はちゃんとしてくれないと困るって言っただけです。ほた。黙っていたら、3回めでしょ？ 同じミス」

口調は丁寧である。気をつかっているな、前田君。まあ、口調が丁寧な分、皮肉がきいてかえって慇懃無礼って気がしないでもないけど。

「だから、何回とかイチイチ数えるなって言っているの。細かいんだよ。人間ならたまに間違える事ぐらいあるっていろいろ」

：おいおい。何だ？ そのへ理屈は。どう見ても、悪者になつてるぞ、お前。。

心の中で弟に語りかける。

その、弟に対する前田君の答えが、また傑作だった。

「いや。仕事場では、フツーないです。少なくとも、僕の知る限りではないです」

「なんだと？」

この言葉に弟が逆上した。さすがに、馬鹿にされたと分かったんだらう。

「お前、偉そうなんだよ。そんなんだから、みんなに嫌われるんだよ。知ってるか？ みんながお前の事をなんて言ってるか」

『みんな』ってのは、みーさん並びにグループの仲間の事か…。

「知りませんねえ」

前田君が首をかしげる。なんか余裕の態度だ。

「どう言ってるんですか？」

「傲慢で、感じの悪い奴だよ」

「へー。そうですか」

前田君はくすつと笑った。

「別に、全然構いませんね、僕は。『できない奴』って言われるよりマシですから」

「できない奴？」

弟が顔を引きつらせて言う。

「…それ、誰のことだよ」

お前のことだよ…と、俺は心の中で突っ込んだが、前田君は「さあねえ…」と明確には答えず、かわりにこう言った。

「ところで、河井弟さん、満足ですか？」

「何がだよ？」

「女性に守られて、さぞかしいい気分でしょうね」

「なんだと？」

弟が色をなした。

俺は耳を塞ぎたくなる。弟よ、お前に勝ち目はない。おとなしく、引っ込んでいろ。

ところが、その時、弟に加勢する声が上がった。

「おい、前田、言い過ぎだぞ」

「思い上がり過ぎなんだよ、お前は」

原口さんと佐々木さん（Bグループの一員）の声だ。すると、それまで冷静だった前田君がついに爆発した。

「誰が思い上がってるんだよ」

ものすごい怒声だった。あまりの大声にフロア中がシンとなる。

「お前らがそうやって甘やかすから、こいつがいい気になるんだろう。ここは仕事場だぞ。まずは、ちゃんと仕事をしろよ」

その剣幕に弟も真っ青になる。

「河井、弟。お前もだよ。仕事できてから、そういう事は言えよ。

お前のだらしなさで次工程から山のように苦情きてるんだよ。誰が始末つけてやってると思ってるんだ？」

「……」

「大体、お前、昨日の解体台数何台だ？」

「……」

「忘れたなら教えたやるけど27台。残業2時間やって30台！

他のメンバー定時内に一日平均34台のところ、お前だけ30台。

俺に叱られる前に、自分で自分を恥ずかしいと思えよ」

「……」

「俺は、別にあなた方に何を言われようが全然構わないんで、仕事だけはちゃんとやってください。以上です。それじゃ、作業台に戻ってください」

そう言うつと、前田君はくりと向こうを向いた。

しかし、弟はいつまでもその場から動こうとしない。訝しく思ったのか、前田君はもう一度奴を見て

「早く、作業台に戻れよ」

と、言った。しかし、それでも弟は動こうとしない。そして、動くかわりに言った。

「あんななんかに、何が分かるよ」

「……はい？」

「あんたみたいに、なんでも器用にこなせる奴に、俺の何が分かるかって言ってるんだよ」

「僕が、器用ですって？」

「そ…そうだよ。俺は、俺なりに…これでも、必死なんだよ」

「…だったら、もつと必死になって下さい。さ、作業に戻って」

前田君はにべもなく弟を追い払おうとする。しかし、弟は動こうとしなかった。

「だから、俺なりに必死だと言っててるんだよ。分かって欲しいんだ。ただ、それだけだよ」

しつこく食い下がる弟の態度に、とうとう前田君は切れたようだ。目の前にあるカゴ車を蹴りつけた。ちなみに、カゴ車は前田君の皆さんの注意にも関わらず、2台並べられていた。前田君もあきらめたのか、もう何も言わない。前田君は、テレビが高く積み上げられたカゴ車の底を思いきり蹴りつけると、弟の顔を見てこう言った。

「甘えるなよ。誰だつて必死で頑張ってるんだよ。やり方が分からなきゃ、自分で考える努力をしろ！」

その時だった。

カゴ車がガタンと音をたてて傾くのが目に入った。

それは、スローモーションみたいにゆっくりとした動きだった。

その勢いで、積み上げられたブラウン管テレビ達も傾ぎ、黒い津波みたいに前田君に襲いかかっていった。

人間危機に瀕した時は一秒が何分にも感じられるというが、その時、俺の目に映った光景がちょうどそんな具合だった。そう、まるで映画のコマ送りのように思えたんだ。

まずは弟が「危ない」と叫んだ。

その声が終わらぬうちに、崩れかけていたブラウン管テレビが前田君めがけて落ちていく。

弟が、手を伸ばし、前田君の腕をつかむ。

そして、前田君を思いきり引っ張る。

TVが前田君の頭に当る。

前田君が白目を向き弟に倒れかかる。

その勢いで、弟の腰がくだける。

そして二人同時に倒れる。

その後は、ドンドンドン…と響きをたてながら数台のテレビが落ちてきて、そして…。

「おい！ 大丈夫か!？」

原口さんが叫んだ。

それで、ぼう然とこの光景を眺めていたフロア全員が我にかえった。

目の前には、蹴散らされた積み木のようにテレビが転がっている。床の上には割れたガラスの破片が光っており、そのまん中あたりに、折り重なるようにして倒れている弟と前田君の姿があった。二人とも辛うじてテレビの下敷きにはなっていないものの、ピクリとも動かない。その、あまりの動かなさに不安になる。…まさか、

打ちどころでも悪かったのか？

「正…！」

俺は、仕事場である事も忘れて弟の名を呼んだ。すると、弟は上半身をむくりと起こす。そして、服についたガラスの破片を手で払うと「大丈夫。ちょっと驚いただけだ」と言った。それで、ほっと胸をなでおろす。

「ケガはしてないか？」

原口さんの言葉に、弟は体のあちこちをさすりながら

「…今のところ、どこも痛くないから大丈夫だと思う」

と答えた。すると、再び原口さんが尋ねた。

「前田は？」

「…前田？」

弟はつぶやくと、己の膝の上のっかっている前田君を見下ろした。前田君はうつ伏せに倒れたままぴくりとも動かない。眉をひそめながら、弟は前田君の頭を軽くつつき、つついたと思ったたら手を引っ込め、悲鳴を上げた。

「…し…死んでる！ 死んでる！」

「何だつて？」

原口さんが青ざめる。

「血が…血が…こんなに…！」

そういつて、ひろげた弟の手にべっとりと血がついていた。

「そんなに落ち込む事ないよ」

皿にのつてる揚げ物を取りわけながらみーさんが言う。

「正ちゃんだけの責任じゃないし」

「ここは『さくら』。以前、小金井さんに連れてきてもらった居酒屋だ。」

「確かに」

俺は、ビール片手にうなずいた。

「必ずしも、お前だけの責任じゃない。カゴ車が倒れたのは、ケリを入れた前田君のせいだし」

その言葉に、弟がちらりとこちらを見た。

「ただし」

…と俺は付け加える。

「あのカゴ車をあそこに置いたのは、お前だけだな」

「じゃあ、やっぱり俺のせいって事じゃないか」

「だから、お前のせい『だけ』とは言っていないだろう？ けど、もしも前田君が事件の当事者でなければきつところ言うだろう。』だから、カゴ車を2台並べるなって言ったでしょう？』」

軽く前田君の口まねをすると、みーさんが吹き出した。しかし、弟は露骨に嫌な顔をする。

「落ち込んでる人間に向かって、よくそこまで言えるな。それでも、アニキかよ」

「血の繋がった人間だからこそ言える、厳しい意見つてもある」

「鬼かよ…」

「でも…！」

と、みーさんが割って入って来る。

「みんなが騒いだほど、たいしたケガじゃなかったってコガちゃんも言ってたじゃない。正ちゃんがそこまで落ち込む事ないよ」

そう。弟は、死んでるのなんの大騒ぎしたが、前田君のケガは奇跡的に軽症だった。とはいえ、確かに出血はひどかった。それは、ガラスで頭を切ったからで、頭つてのは大袈裟に血が出るもんらしい。それに、脳しんとうをおこして救急車で運ばれはしたものの、搬入先の病院ですぐに意識を取り戻したそう。他には体のあちこちに、軽い打ち身とねんざ。頭を針で縫い、念のために一日入院す

るらしい。ちなみに弟はといえば、まったくの無傷だった。

しかし、体は無傷でも、精神的になダメージが相当ひどいらしく、午後はろくに仕事にならなかったようだし、仕事が終わっても自縛霊のごとく作業台の前にはうずくまって、いつまでたっても動こうとしないので、心配になった俺がみーさんの力を借りて、ようやくこの『さくら』まで連れて来ってわけだ。

「…それに」

と、みーさんが言葉を続ける。

「確かに、前田は、ケガをして大変だし、かわいそうだけど、ある意味自業自得だと思うよ」

「自業自得って、どういう意味？」

俺はみーさんに尋ねる。

「正ちゃんを虐めた天罰よ」

「それは…」

違うでしょう？　と言いかける言葉を、弟が遮った。

「そうかな」

「そうよ」

「でもさ、俺、妙にひっかかるんだよ」

「なにがひっかかるの？」

「…あいつに言われた事だよ」

「前田が正ちゃんになんか言ったの？」

「うん。『俺だって、できないなりに頑張ってるんだ』って言ったから『誰だって必死で頑張ってるんだ。やり方が分からなきゃ、自分で考える努力をしろ』ってさ。俺なりに頑張ってるっていつてるのに…」

「そりゃ、頑張る方向が間違ってるって事じゃないのか？」

俺は口を挟む。

「もしくは、もっとやるべき事があるのに、見えてないって事か」

「でも、俺、精一杯やってるつもりなんだ。でも、ダメなんだから仕方ないだろう？」

「…前田君は、自分で自分をダメと決めつけるなって言ってるんじゃないかな？」

「そうなのかな？」

弟はそう言っていると、黙りこくってしまふ。すると、みーさんが、また慰めにはいる。

「どつちにしても、あの子もたいしたケガじゃないし、3日もすれば戻って来れるってコガちゃんも言ったじゃない。だから、そんなに気に病む事ないよ」

「うん。みーさんの言う通りだ。終わった事をくよくよしても仕方がない。肝心なのは、これからどうするかさ」

「これから？」

「そうだよ。もし、お前が前田君に対して責任を感じるなら、この先彼が納得してくれるまで頑張るしかないよ」

「どつやって？ 俺は精一杯やってるつもりだって言ってるのに」

「だから…彼の言った事にヒントがあると思うよ、俺は」

そう言つと、俺は目の前のグラスを一気に飲み干した。

この時…前田君には気の毒だが…俺は弟のために少し喜んでいただけなら、こうして自分を振り返るきっかけを彼は弟に与えてくれたからだ。もし、弟が彼の言った事を心か理解して、そして前田君と和解できれば、弟はワンステップ前に進める事になる。その一歩が、奴に生きるための真の自信を与えてくれるだろう。そう、期待したからだ。

けれど、その夢が叶う事はなかった。

なぜなら、それきり前田君が会社に来なくなったからだ…。

「前田君は、今日も休むそうだ」

朝礼の時、小金井さんが言った。

「まだ、ちよつと、具合がよくないそうだ」

えーって感じでざわめきが走る。あの事件から数えて既にもう10日目だ。見かけ程重傷ではないから、すぐに復帰できるんじゃないかなかったのか？

「何が、どう悪いんですかね？」

作業をしながら隣の川岸さんに言う。

「さあ、何か後遺症でもあるんじゃないのか？」

「でも、見かけ程重傷じゃないし、後遺症はないって医者も太鼓判押したそうじゃないですか。なのになんで、出て来ないんですかね？」

「俺に聞かれても……」

川岸さんはそっけなく答えると、俺の言葉を拒否するように、自分の作業に没頭しはじめた。

「まったく……」

うだるような暑さの中、独りごちる。

「早く戻ってきてくれないと困る……」

前田君の抜けた穴は、思いのほか大きかった。それは、彼が常日頃から人の3倍以上も仕事をこなしていたからである。連日の残業時間はさらに増えた。けれど、俺が困っているのは何も忙しくなったからじゃない。忙しいのは苦にならない。それより、何より、当惑しているのは、これではいつまでたっても『辞める』と言いつせえない事だ。この状況下で『辞めさせてください』と言いつせ出る程、俺は鬼でも蛇でもない。

「盆明けには戻って来るんじゃないか」

川岸さんがボソリと言った。

「そうか」

言われて気付く。

「そういえば、もうすぐ盆休みか」

「そうだよ。ついでに、長期休暇とってやるうって魂胆じゃないか？」

「ありえますね」

「…だとすれば、あと10日程の辛抱だな、と無理矢理自分を納得させ、俺も自分の作業に没頭しはじめた。」

しかし、期待も空しく、盆があけても前田君は戻って来なかった。かわりにこんな噂が流れはじめた。『どうやら、前田は精神的な事が原因で、会社に来られないらしい』

「…つまり、それって、登社拒否って事ですか？」

俺は、みーさんに尋ねた。すると、みーさんがパンをかじりながら答えた。

「心の病気で、会社に来られなくなったって事よ」

「心の病気って…鬱病とか？」

「詳しい事は、分からないけど…」

「…信じられないな。あの気の強い前田君が…」

「でも、そうなんだって」

みーさんの横で、弟が黙々と定食を食っている。食堂で3人揃って昼飯を食うのは久しぶりなのに、その日の弟は終始無言だった。

「前田、クビになるのかな？」

その日の帰り道、弟がボソリと言った。

「いや、…社員だから簡単にはクビにしないだろう」

「社員なら無事なのか？」

「…みたいだよ。それに、彼、優秀だったし」

「ふーん」

「けど、本当に信じられないな。あの前田君が心の病なんて」

「そうだな。人を追い詰めても、自分は追いつめられない奴だと思つてたのに」

「人は見かけによらないつて事かな。かえつて、ああいう、弱味を見せたがらない人程、限界を越えると弱いのかも」

「前田、限界を越えたのか？」

「じゃないかなあ？ 俺が思うに、色々重なつて参つてた心が、あの事故をきっかけにポキンと折れたんじゃないかな？」

「それつて、俺のせいつて事？」

「さあ…俺にはなんとも…」

「…自業自得だろ」

「そんなもんかねえ…？」

それきり、俺達の会話は途切れた。

それ以後、俺のいるフロア内では、前田君の話題はタブーになった。確固とした理由があるわけでなく、なんとなくそうだった。多分、大半の人間に自分達が彼を追い詰めたという自覚があったからだろう。自分の罪を自覚し、反省する事はいい事だ。しかし、この場合、困つた事に自責の念が負のエネルギーを産み出した。そして、その銚先は弟に向かつていった。というのも、全ての原因は弟の無能さにあったからだ。前田君というスケープゴートを失つた今、弟は再び自分の無能さと向き合わなければいけないようになった。それで、以前は頻繁に聞こえていた弟を罵る前田君の声が、今度はBグルーブの誰某に変わった。

「おい、河井。また、部品入れ間違えてる」

「お前、何、モタモタしてるんだよ！」

こうして、話は振り出しに戻り、俺の東京への道は再び遠くなっ

た。

「おい、正、起きろよ！」

9月の第一日目の朝、俺は弟の部屋のドアを叩いた。

「休むのか？ おい、正」

返事がない。

「おい、開けるぞ」

やはり、返事がない。それで、ドアを開けて突入してやると、パソコンの前にうずくまっている弟の姿があった。

「おい、何、ネットなんかやってるんだよ？ もう、会社に行く時間だぞ」

すると、弟は、背中を向けたまま「休む」と答えた。

「どこか、悪いのか？」

「別に」

「じゃあ、なんで？」

「…」

「おい、なんでだっけ聞いてるだろ」

「…」

「おい、なんとか言えよ」

そう言うと、俺は奴に近付き、弟が見ている画面を覗き込んだ。

そして、ドキッとす。弟が見ているのが、リリカの…森崎の掲示板だったからだ。瞬間、あの日の、白いブラウスの森崎の姿が目に見え浮かぶ。が、それを払いのけ、俺はさらにパソコンに近付き、そこに書かれている文字を目で追った。

そこには、こう書かれていた。

「モグちゃんが、そのMさんにやった事は、モグちゃんが、学生時代に因幡って子にやられた事と同じだよ」

…ああ、言われちゃったか…

俺は同情と、哀れみの目をもって、弟を見下ろした。

…これに、ショックを受けたんだろうな。

「おい、正」

俺は、弟の肩を叩いた。

「しつかりしろよ、本当に休むのか？」

すると、弟は無言のまま、頭をたてに振った。

「分かったよ」

ため息をつき、立ち上がる。

「好きさだけ、考えるよ」

そう言つと、俺は奴の部屋から出ていった。

しかし、考えてみれば俺も甘いよな。

本来、そんな事で仕事をさぼっちゃいけないんだ。いくら、リリカ…森崎の言葉がショックだったとはいえ…。

この甘さが、弟をダメにしたのかと思いつながら家路につく頃には、すでに10時を回っていた。ただでさえ人手が足りないところに、弟が休んだ事でますます忙しくなり、この時間まで働くハメになったってわけだ。

疲れた体を引きずり家に辿り着き、玄関前で2階を見上げれば、弟の部屋の明かりはまだついてる。何をやってるのかと部屋を覗けば、朝見たままの同じ姿勢でパソコンを見ている。石像みたいに固まった後ろ姿に「おい」と声をかけるが返事がない。それで、「おい」って言って部屋の中に入り、背中をつつく。すると、弟はギョッと音をたててこっちを向いた。いや、本当に音をたてたわけじゃないが、まさに音でも鳴りそうな感じだったんだ。

「おい、飯は食ったのか？」

と、尋ねると、

「食った。一応」

とのこと。

「あ、そう。じゃあ、いいや。さっさと寝ろよ」

と、部屋を出ようとするよ、

「アニキ…」

死にそうな声が追いかけて来る。

「なんだ？」

振り返ると、弟は極めて驚くべき事を言った。

「俺、会社を辞めようと思うんだ」

「はあ？」

二の句が継げない。

「俺、今日一日考え抜いて気付いたんだ。俺は、あそこにはいけない人間だという事に…」

何をどう考えたらそういう結論になるのか？ 悪い冗談なのか？ しかし、弟の表情はいたって真面目だ。こりゃ本気で言ってるわ。それで、俺は慌てて奴の隣に正座して、軽く説教モードに入る。

「まあ、落ち着け。なぜ、どうして、そんな考えに至った？ 兄ちゃんに説明してみろ」

「うん。話せば長くなるけど…」
と、弟は語り出した。

「実は、昨日インターネットの知り合いに言われたんだ。俺が前田にやった事は、俺が高校時代にエって奴にやられた事と同じだって」「ああ…」

その書き込みなら、俺も見た。けど、見てないふりしてこう言う。「エって、お前の小説に出てきた因幡って奴か？ あの裏切り者」

「そうだよ。俺の人生を8年間も無駄にさせた張本人さ。そいつと、俺が同じって」

「なる程、それで落ち込んでたってわけね」

「そりゃ、落ち込むさ。あんな奴と一緒に言われたら。俺は別に裏切ったわけでもないし、前田がこんな事になったのは、あいつが俺に不当な当たり方をしたからであって、いわば自業自得だろう？」

「アニキはどう思う？」

「うーん」

俺は首をかしげた。弟が食い入るように俺を見てる。

「正直な事を言っただけかい？」

「…いいよ」

「お前、ホームページに『内戦』って詩を書いているよな」

「…書いてるよ」

「俺、あれは、お前が書いたにしちゃ良いできだと思ってるんだけどな」

「…だけど…なんだよ」

「今のお前はあの詩の作者とは思えない」

「…」

「むしろ、あの中でお前が批判した人間になつてると思う」

「…」

「悪いな。こう言い方、卑怯かもしれないけど」

「いいよ。その事にはずっと前から気付いていた」

「気付いていた？」

「そりゃ、気付くさ。書いた本人だもん。でも、あれは、まごう事
ない俺の本心だよ。学生時代に芯から思った事さ。でも、学生時代、
もう一つ学んだ事がある」

「なんだよ」

「正しい事を言ってるだけじゃ、生きていけないって事さ」

「そうか？」

「そうだよ。今回の事だつて、もし、俺が前田に同情して、前田を
庇ったりしたら、俺の方がひどい目にあつてたさ」

「そういうもんかね。…でもさ、今回の件についてはイジメがどう
こう以前の問題じゃないかと俺は思うけど」

「どういふことさ？」

「まず、お前にやるべき事があつたつてことさ。つまり、仕事をち
やんとやる事だよ。それができていれば、そもそもこんなもめ事に
はならなかった」

「…それも分かつてるよ。みんな俺が悪いんだ。俺が、あそこにい
る事が悪いんだ。だから、俺はあそこにいちゃいけない人間なんだ
つて言ってるんだ」

「ちよっと、待てよ…」

俺は慌てる。どうやら、引き止めるどころか、背中を押してしま
つたようだ。

「そう、慌てて結論を出すなよ。俺は、そうは思わないぞ」

「同情はいいよ。自分で分かつてるんだ。現に前田がいなくなつた
今、俺がいる事でみんな苛立つてる」

「そんな事…」

「ないとは言いきれないが…。」

「兄ちゃんには分からないよ。まるで、針のムシロなんだ。この辛さが分かるか？ 相手も苛立つ、俺も辛い。お互いに何もいい事がない」

「そうかもしれないけど…！」

俺は声を荒げた。

「それを克服しない限り、お前はどこに行っただって同じだぞ…。」

「俺は思う。お前には2つの道しかない。針のムシロの辛さに耐えるか、それともこれを克服するか」

「辞めるって選択もある」

「いいや違う。そんなのは逃げだ。選択じゃない。とにかく、自分から辞めるな。会社が辞めると言うまで粘れ」

「はあ」

弟がため息をついた。

「もういいよ。兄ちゃんには俺の気持ちなんか分からないんだ。俺の決心は変わらないよ」

そう言っただけで背中を向けると、それきり弟は、何を呼びかけてもうんともすんとも答えなかった。

そうは言っても、この人手不足のおり、さすがの弟もそう簡単に「辞めさせてくれ」とは言い出せないようで、何だかんだいってそれから一週間程過ぎてしまった。

そして、9月の第二土曜日。両親揃って親類の家に泊まりに行ってしまったため、珍しく兄弟揃って近所のスーパーに買い物に行く事になった。店はそう遠い場所にある訳でもないのに、2人でだからと緩い坂道を上がっていくと、坂の上から黄色いオレンジが転がって来る。「あれ？」と思い、オレンジを拾って見上げると、緩やかな坂のてっぺんでうすぐまってる人影がある。その横には自転

車が倒れていて、カゴに入ったビニール袋の中から野菜や果物がこぼれだしていた。

「大丈夫ですか？」

声を上げ、坂を登る。人影は、どうやら女性のようだ。足を抑えて痛そうに眉をしかめている。その顔を見て俺は「おや？」と首をかしげた。すると、向こうも顔を上げ、俺の顔を見て「あれ？」と言う。

「もしかして、河井さんの…お兄さんの方ですか？」

それが分かると言う事は間違いない。

「君、前に飲み屋で会った」

「そうです。尾崎かなえっついていきます」

そういうと彼女は眼鏡越しにっこり笑った。

ちようどそこに弟が追いついて来る。やつは、その手に、拾い集めたらしき野菜を抱えていた。そして「おい、大丈夫かよ…」と言いかけて、口を閉じる。奴にも彼女が誰か分かったらしい。そして、なんとも気まずそうな顔をした。

…そういえば、みーさんが彼女と弟をしきりに会わせたがっていった事を思い出す。弟は一切拒否していたが、まさかこんな所で再会とは…なにやら運命的なものを感じないでもなかった。

しかし、弟はそっぽを向いていた。無愛想な奴だ。というか、むしろ、感じ悪い。しかし、一方の彼女の方も気まずいに違いないらしく、なんとも居心地の悪いムードが漂ってきた。いや、そんな事言ってる場合じゃない。

「大丈夫？ 自転車倒したんだろ？」

「あ、…ええ。自転車ごと倒れちゃって。でも、大丈夫です」

そう言うと、彼女は立ち上がり、自転車を起して、弟から野菜を受け取ると「ありがとう」と言っぴひよこひよこ歩き始めた。どうやら、足をくじいているらしい。

「おい、待ってよ」

俺は叫んだ。

「そんな足で一人じゃ無理だよ。どこまで行くの？ 送っていくよ」

「いいえ。大丈夫ですから」

「大丈夫じゃないって」

そういうと、俺は彼女から強引に自転車を奪い取り、彼女を後ろの荷台に乗せた。

「さあ、どこまで？」

尋ねると、彼女は「ふれあいの家」と答える。

「ふれあいの家？」

それどこだっけ？ 聞いたような聞かないような…。首をかしげていると、弟が無愛想に言った。

「坂上町の福祉施設だよ」

「福祉施設？」

「ああ。障害者対象の入所施設」

「お前、よく知ってるな」

「みーさんから聞いた」

「へえ、そこで間違いないの？」

尋ねると彼女はうなずいて言った。

「ええ。私、先月からそこで働いてるんです」

「なる程ね。で、正、お前、道知ってるのか？」

俺の問いかけに弟が仏頂面で答える。

「一応…」

「そうか、じゃあ案内してくれ。行くぞ」

号令をかけると、俺らは坂の上の道をゆるゆると歩き始めた。

それから、坂の上をしばらく歩き道を左に曲がる。なだらかに下るその先は並木道になっていて、こんもりと木々の繁る施設へと繋がっている。その、涼しげな敷地のあちこちに、建物が点在しているのが見えた。

「あれが、『ふれあいの家』です」

自転車の荷台から、かなえが指をさす。

「へえー」

俺は思わず声を上げた。

「こんな住宅街に、あんな施設がねえ…」

足を一步踏み入れれば、そこはまったくオアシスだった。9月とはいえ、ここ数年来続く異常気象により真夏のごとく世の中を支配する猛暑などとはまるで無縁のような、ひんやりとした清浄な空気に満たされている。繁る木々が直射日光を遮ってくれるおかげかもしれない。点在する建物も、一目見て機能重視と思えるような灰色の鉄筋ではなく、昭和の昔を彷彿とさせるような懐かしい暖色系の物ばかりだった。

「なんか、癒されるな…」

思わず口にするが、返事はない。代わりに

「あの建物まで送ってくれますか？ 事務棟なんです」

かなえが言う。見ると、なるほど100メートルほど先に円形の建物が建っている。

「あ、分かった。あれね」

うなずくと、ひたすら自転車をひいていく。その真ん前を弟は目の前を黙々と歩いている。かなえも黙ったきりだ。この上なく気まぐずい。しかし、このきまぐずさを打ち破れる程の話題もなく、ひたすら敷地内中央の事務棟を目ざしていった。

と、その時、どこからかボールが転がってきた。それはサッカーボールを模したビーチボールだった。どこから来たのかと辺りを見回すと、少し離れた高台の上から小学4年ぐらいの男の子が手を振っている。

「すいませーん、そのボール取ってもらえませんか？」

それを見て、荷台からかなえが叫んだ。

「大地君！」

すると、少年もかなえに気付いたらしく。

「あ、かなえさん。今日、仕事なんだ」

と、無邪気な笑顔を見せた。

「大地君、1人なの？」

「ううん。翼がいるよ」

「翼君がいるって…大人はいないの？」

「事務員のおじさんが、その辺にいますよ」

「だったら、いいけど…」

「それより、ボールを取ってもらえませんか？」

「自分で取りにこりやいいじゃないか…」

弟が小さくつぶやく。すると、かなえが言った。

「彼、足が悪いんです。あの階段を降りるのは無理です」

言われてみれば、なるほど、大地少年は銀色の機具みたいなものをつけている。そして、高台からここに来るには、たいして段数は無いとはいえ急な階段を下らなくてはいけないうようになってる。

とはいえ、俺の手は塞がっているし、かなえは足を怪我しているし…。

「おい」

俺は目の前に又ボットと立っている弟に向かいボールを蹴り上げ「持って行ってやれよ」

と命令する。弟は、はじめて気付いたようにボールを受け取ると、めんどくさそうに階段を昇っていった。そして、直に少年の横に辿り着くと「ほい」とボールを渡した。

「ありがとう」

大地が笑顔で受け取る。

「ねえ、大地君…！」

かなえが叫んだ。

「何？」

大地がこつちを見下ろす。

「大地君、翼君と2人で、どうやってここまで来たの？」

「俺が、翼の車椅子を押して来たに決まってるじゃん」

「大地君の車椅子は？」

「ちゃんと部屋に置いてあるよ」

「どうして乗って来なかったの？」

「どうしてって…俺が車椅子に乗っていたら翼を連れて来れないじゃないか」

「…でも、大地君だって、足が悪いのに。なんで、そんな無茶な事するの？」

「それは…翼がどうしてもサッカーやりたいって言うから…。俺は、翼と違って歩こうと思えば歩けるし」

「それならそれで、誰か大人を呼べばよかったのに」

「だって、土曜だし…呼ぼうと思ってても誰も居なかったし」

「誰か一人ぐらいいはいるはずだよ。お願いだから無茶しないでよ！」

「別に無茶じゃないよ」

「無茶だよ。ねえ、もう部屋に戻ろうよ」

「何で？ まだ全然遊んでないのに」

「どつちみち翼君と二人でサッカーなんて無理だよ。戻ろうよ…！」
「なんだか、かなえはもの凄く必死だ。しかし、さっぱり話が見えない。たまりかねて口を挟む。

「ねえ。カナエさん。全然話が見えないんだけど…。翼って誰？

どこにいるの？」

すると、弟が上から叫んだ。

「ここに居るよ。そんなところで言い争ってないで、上がって来いよ」

「上がって来いと言われても…」

俺はかなえを振り返った。すると、かなえは言った。

「弟さんの言う通りです。降りして下さい。これぐらいの距離歩けますから」

「でも…」

俺は彼女の足を見る。しかし、

「本当に大丈夫ですから。ちょっとくじいただけだし」

と言って、彼女は強引に降りて行ってしまった。

「おい…待てよ！…もう！」

仕方なく、俺は自転車をそこに止め、かなえの後を追いかけて階段を昇って行った。そして、昇り切った時、全てに納得する。そこに、『翼』が居たからだ。彼は、車椅子に乗っていた。鼻にはチューブをさしている。俺らを見ると「あー」と声を上げた。一目で重度の障害児と分かる。

「事務員さんはどこにいるの？」

かなえが詰問するように言う。

「え…と。さっきまで居ただけど…」

大地が言葉を濁す。あきらかに嘘をついている。かなえもそれに気付いたらしい。

「帰ろう！」

と少し厳しめの口調で言った。

「その方がいいな」

俺もうなづく。かなえが俺を見る。

「河井お兄さん…」

「優でいいよ」

「じゃあ、優さん。この子を自転車に乗せてあげて下さい。私は、歩けますから」

すると、俺の応えも待たずに「大丈夫だよ」と大地が叫んだ。

「僕だって、歩けるから」

「無理よ！」

「無理じゃないよ。さっきだって翼を連れてここまで来れたもん。ゆっくりだけど、歩けるよ!」

「無理だつてば!」

「無理じゃない」

「無理よ! お願いだから言う事聞いて!」

「なんだか、また二人だけでヒートアップしている。そこへ、弟が口を挟んだ。」

「大地の言う通りにさせてやれよ」

「え?」

「詳しい事分らないけど、一方的にダメって決めつけられるの気分よくないと思う。仮に自分されたら、嫌じゃないか?」

その言葉にかなえは黙り込んだ。

俺は…俺にも詳しい事情は分からないけれど…弟の言う事にも一理あるような気がしたので

「じゃあ、とりあえずみんなと一緒に行こう。どうしても無理なら、その時自転車に乗ればいいよな」

と、折衷案を出した。

「でも…この子達の寮は、第2棟なんですけど」

「いいよ。どこでも送ってくよ。第2棟ってどこ?」

「あそこです」

そういつて、かなえが指差す方を見ると、今いる広場からまっすぐ南に100メートル程先の木々の向こうに、4階建てのレンガ色の建物が見える。

「自転車、下に置いてあるじゃないですか。ここから、下に降りていったらすぐく大回りになるから、とても大地君には歩けません。やっぱり、無理です」

「ああ。そんなの、自転車を運んでくりゃいいだけの話だろ? 簡単だよ」

「…わかりました。それならいいです」

「ようやく、かなえは納得したようだ。それで、俺は弟に言った。」

「じゃあ、俺自転車運んで来るわ。お前は翼を連れて行ってやってくれ」

「へいへい」

弟は答えると、のそのそと翼の方に行く。

こうして俺達は当初の目的を変更して、事務棟ではなく、第2棟に向かう事になった。

57 (後書き)

サッカー好きの翼君が出てきますが、某マンガとは何の関係もありません。たまたまの偶然です。よろしくご了承ください。

とはいうものの、その道のりは思った程楽ではなかった。なにしろ、この大地という奴は予想を超えて歩くのが遅い。まず、歩き方が普通でなく、足を開いて腰を振りながら前進して行くのだ。

装具をつけた足からして、また、こいう場所にいることからしても、何らかの病気を持っているのだろうと頭では分かっているのだが、それにしても間が持たない。まるで、砂漠をあてどなくさまようキャラバンのような気分になって来る。軽々しく大地を歩かせる事に賛成した自分に後悔しかけた時、とうとう、大地が転んでしまった。

「大地君！」

かなえが足をひきずりながら大地の元に駆け寄り、手を取って立たせた。

「大丈夫？　ねえ、やっぱり自転車に乗ろうよ」

そう言つて、かなえがこちらを振り返る。（俺達は、かなえの希望で大地の後ろを歩いていた）

「乗るか？」

俺も声をかける。気を遣つたというよりは、その方が助かるといふ思いからだつた。しかし、大地は首を振つた。

「いい。歩けるから」

ヤレヤレ。こりゃ、随分頑張りやさんだ。感心するというか、あきれるといふか…。

「大地君。頑張るのは立派だと思うけど…」

かなえが言つ。

「頑張り過ぎても体によくないし、ダメならダメって認めるのも勇気だと思つよ」

「そんなの勇気じゃないよ！」

大地が言い返す。

「それに、僕、知ってるんだから。僕の病気はダメって認めたら、本当にダメになっちゃう病気なんだって。少しでも歩かないと、いつか本当に歩けなくなるんだって」

大地の言葉にかなえは黙り込んでしまふ。そして、しばらくうつむいて考え込んだ後「分かった」とうなずいた。

「じゃあ、歩こう。そのかわり、手をつないでね」

しかし、少年はその申し出も拒否した。

「大丈夫だよ。一人で歩けるから」

そして、また、ぎこちなく歩き出す。かなえはその場にぽつんと取り残された。俺らはかなえに追いつくと、

「ねえ、今のどういう意味なの？ あの子、一体何の病気なの？」
と、たずねた。

すると、かなえは答えた。

「大地君は、筋ジストロフィーという病気です」

「筋ジストロフィー？ 何だ？ それ」

「筋肉が壊れて、だんだん動けなくなっていく病気です」

「動けなくなる？」

「そうです。今は、無理してでもああして歩けるけど、いつか、全然歩けなくなってベッドに寝たきりの生活になるんです。足だけじゃなくて、体中の筋肉が壊れていくから、話す事もできなくなって、最後は心不全になって亡くなる事が多いそうです」

「心臓の筋肉も壊れるって事かよ？」

弟が後ろから口を挟む。

「そういうことになりますよね」

かなえはうなずいた。

「あの子が…？ 嘘だろう？」

がく然として、俺は少年の後ろ姿を見る。かなえは、黙って首を振った。

「あの子は…知ってるの？ 歩けなくなる事…」

「いいえ。まだ、そこまでは。ただ、足が悪いだけだと思ってみたいんです。でも、動かないと、病気の進行が速まるっていうのは本当の事なんです」

「それで、ああやって無理してるのか」

弟が言う。

「そうだと思います。それは、分かってるんだけど、どうしても、見ていられなくて……」

かなえの言葉が終わるか終わらないかのうちに、大地がまた転んだ。かなえが足を引きずり、大地の元に駆け寄っていく。そして、大地を抱き起こし、強引にその手をとると、2人でゆっくり歩き出した。その後ろ姿を見て弟がつぶやいた。

「あの体で、この車椅子を押して、あのグラウンドまで行くなんて……」

さすがの奴もショックを隠しきれないようだ。

車椅子の上では、俺らの話が分かっているのか、分かっていないのか、翼がぼんやりと座っていた。

それからしばらくカタツムリのごとき行進を続け、やっと目的地の建物に辿り着いた時、頭上からいきなり元気のいい声が聞こえて来た。

「あれー？　かなちゃん、今日出勤なの？」

驚いて顔を上げると、目の前のレンガ色の建物の2階の洗濯物干場とおぼしき所から、髪の毛長い女の人がこちらを見下ろしている。

「あ、ゆきえさん」

かなえが叫んだ。

「ゆきえさんも出勤ですか？」

「見ての通り！」

ゆきえと呼ばれた女性が答える。

「っていうか、どうしてそこに大地君と翼君がいるの？」

「抜け出してたんですよ」

「抜け出してたー？」

ゆきえは、よほど驚いたのか声を上げると、

「ちよつと、待ってて降りていくから！」

と、いったん姿を消した。そして、やがて、建物の正面玄関から飛び出して来て、大地の元に駆け寄り、

「こらー」

と叫ぶ。

「どういうことよ。無断で抜け出すなんて」

「だって、翼がサツカーしたがるから」

「だからといって、2人きりで行っちゃ危ないだろうー！」

「だって…俺、歩けるし」

「大地が大丈夫でも、翼が大丈夫じゃないでしょう？ 何かあったらどうするの？」

そういうと、ゆきえは大地の頭を軽く叩いた。すると、大地が謝った。

「ごめんなさい」

なんだ、素直じゃないか…。

「で、ところで…」

ゆきえはかなえを見る。

「その人達は誰？」

「ああ…この人達は…」

かなえがちらつとこちらを見て言う。

「みーちゃんの知り合いで、河井さんといって、御兄弟です」

その言葉にゆきえは目を丸くした。

「みーの？」

「はい」

「じゃあ、もしかして、ボランティア志望とか？」

「あ、違います。私、足をくじいちゃって…それで困ってたなら、偶

然この人達が通るかかって、それで、ここまで送ってくれたんです」

「足をくじいた？」

「はい…。自転車ごと転んで…」

「大変じゃない！ 早く医務室に行って湿布を貼ってきな！」

「あ…はい…でも」

かなえが俺達を見る。

「ああ。みーの友達なら遠慮しないでお茶でも飲んでいってよ」

「そんな、いいですよ！」

俺らは首を振ったが、ゆきえの押しが強さに負けて、ついに図々しくも上がりこむはめになってしまった…。

それから俺らは、レクリエーションルームというところに通された。子供が利用するにふさわしく、色紙で作った動物や花が窓にも壁にもごてごてと貼られた、なんだか落ち着かない空間だ。

俺と弟はそこではばらく待たされたが、やがてゆきえが麦茶を持って入って来た。

「ごめんね、待たせちゃって。やっとあいつら部屋に戻させたから……」

あいつらっていうのは大地と翼の事だろう。

「ありがとうね。かなえを助けてくれて」

「いいえ、たいした事じゃないですから」

この間、弟は一切会話に加わらず、ひたすら部屋の中をうろろろしている。

「……えーっと。それで、2人はご兄弟って事だけど……どっちがお兄ちゃんかで、どっちが弟さん？」

「あ……俺が兄で、優。あのうろろろしてるのが、弟で正です」

「そっくりね」

「そうですかあ？」

「うん。そっくり。で、みーとはどういう知り合い？」

「あ……彼女の勤める工場の同僚です」

「ああ。産婆沙メタル工場の？」

「ええ。みーさんには、色々とお世話になってます」

「あいつ……うるさいでしょう？」

「え……まあ、工場の隠れた主ですし」

「だと、思った」

ゆきえは大笑いする。

「で……あの……ゆきえさん……でしたっけ？」

「ああ……自己紹介忘れてた。ゴメン。田辺由紀恵です。自由の由に

糸偏に己の紀に恵むの由紀恵。よろしく」
「よろしく」

俺と由紀恵は互いに頭を下げあった。弟は相変わらず知らんふりだ。あきれた奴だが、このさい放っておく。

「で、田辺さんは、みーさんとはどういう知り合いですか？」

「由紀恵でいいよ。幼馴染み」

「じゃ、みーさんの子供の頃も知ってるんですか？」

「ああ。知ってるよ。大親友」

「どんな子だったんです？ みーさん」

「うーん。あのまんまだよ。あ、そーだ。写真持ってるよ。見る？」

「え？ こここに？」

「うん。あるよ。あいつ、小6の頃からずっとここで暮らしてたし。その前は家から通ってたし…。だから、写真も結構たくさんあるはずだよ」

すると、今まで無関心だった弟がこちらに寄って来て言った。

「見る！」

「じゃあ、こっちにおいでよ」

そう言つと、由紀恵はホワイトボードの裏にある扉を開けて手招きをした。言われるままに入っていくと、そこは事務所だった。

「土曜だから、誰も居ないし、適当なところに座って」

言われた通り適当な場所に座る。俺の座った席は雑然としており、イベントのチラシが数種類束になって置かれていた。何気なく手に取ると、

「あー、それ、よかつたら参加してね。常時ボランティア募集中だから」

言いながら、由紀恵がこちらに来る。その手に数冊のアルバムを持っていて。そして、彼女はいまだに戸口でぼやっとしている弟を、
「ほら、おいでよ」

と、手招きして呼んだ。弟はその言葉に促されるように、だらだらとこちらに来て、俺の横に座った。それを見届け、由紀恵がアル

バムをめくる。

「…みーさん、一体、どんな子だったんだらう？」

わくわくしながら、由紀恵の手元を覗き込む。

アルバムを開くと、まず、最初に目に入ったのは、入所式らしき写真だった。

「ほら、これはまだ通所の頃」

由紀恵が指をさす。

そこには、おかつぱ頭の…なるほど、みーさんの面影を残す少女がいた。それから、由紀恵はページをめくり、

「これは、…多分バザーの写真。これが、交流会」

と、説明してくれる。

どこでも、みーさんは楽しそうに笑っていた。が、しかし…。

「どう？ 意外に可愛いでしょ？」

由紀恵が言っていると、弟がぼそっとつぶやいた。

「…キズが、ない」

そう…そうなのだ。この、おそらく小学1年から6年までと思われるみーさんの写真には、あの頬のキズも、ケロイドみたいなものもなかった。答えを求めて由紀恵を見ると、由紀恵は少々気まずそうな顔をした。

「ああ…知らないんだ。あのキズは、もっと、後にできたものだから…」

それは、知らなかった。だって、聞くに聞けないし…。

「いつできたの？」

弟が遠慮なく尋ねる。

「中学1年の時だよ。その時、みーの家、火事になってね、助け出された時にはあのキズができてた」

「火事？ じゃあ、あのケロイドみたいなものですか？」

「うん。その時できたんだよ、お兄ちゃん」

「そうだったんだ…」

俺は全てに納得する。

「その時、お母さんが亡くなったの。可哀相だったんだよ、みー。泣けない程ショック受けちゃって。あのお喋りが、それから半年ぐらいはほとんど喋らなくなって。ほら、これがみーのお母さん」
そこには、どことなくみーさんの面影を残した女の人が写っていた。

「綺麗な人ですね」

「うん。それに、優しい人だったよ。ずっと、一人でみー達の面倒を見てただけど、あんな事になっちゃって」

「親父は写ってないの？」

弟が聞くと。由紀恵は「うん」と頷いた。

「お父さんは、商売やってとても忙しい人だから、ここには写ってないと思うよ」

「自営業ですか？」

「そう。それで、どうしても子供達の面倒を見ているヒマがないって。それで、洋君と一緒にみーもここに預かられたんだよ」

え？ 『洋君』？ 突然、飛び出した名前に戸惑っていると、俺の気持ちを弟が代弁してくれた。

「洋君て誰だよ？」

「え？ 知らないの？ みーの兄貴の事」

由紀恵が驚く。

「いや。みーさんに兄貴が居たのは知ってるし、死んだって事も知ってるけど…でも、なあ…」

そう言っつて弟が俺を見る。俺は頷いた。

「名前まで聞いてないし、それに、お兄さんもここに入ってたてことは…」

「そつだ。ここに居たって事は…」

「そつか」

由紀恵はため息をついた。

「『それ』は聞いてないんだ…」

そして、彼女は。今更隠しても仕方がないとばかりにアルバムの

ページをめくった。

「ほら、この子だよ。みーのお兄さん」

由紀恵が指さした先に、車椅子の男の子が写っていた。ちょうどさつきまで一緒にいた翼みたいに、鼻にチューブをさしている。それを見て、俺は少なからずショックを受けた。弟も同じだったようだ。しばらく、重い沈黙が流れた。それから、弟が言った。ちよつと、怒っているようだった。

「…っか、無責任な親だよな。子供をこんなところに放り込んで知らん顔なんてさ…」

「確かに…」

珍しく俺も弟に同意する。障害のある我が子を見捨てるなんて、あまりにも薄情に過ぎないか？

「人の親になる資格ないよな」

ちよつと厳しめに弾劾すると、「責めないであげて欲しい」と由紀恵が言った。「え？」って顔する俺らに向かい、由紀恵は淡々と語りだす。

「…確かに、昔は、あたしも同じように思ってた。でも、障害児を持ったご両親は本当に大変なんだってこの仕事して分かった」

「どんなに大変でも、それが親に与えられた義務じゃないのか？」

弟が口を挟む。

「弟君の気持ちは、もつともだよ。でもさ、考えてみてよ。生まれ来てたわが子が障害持ってたって分かった時の親御さんのショック」
言われてみれば、障害者自身を気の毒に思った事はあっても、その親の気持ちというのは考えた事はない。

「でも、親なら、どんな子供でも愛するはずだろう？」

弟が食い下がる。確かにそつだ。そんなものだと、俺も思っていた。

「誤解しないでね。親御さんが愛情を持ってないわけじゃないのよ。でも、人が人を介護するって、精神的にも、肉体的にも本当に大変なの。介護疲れでお母さんの方が病気になるケースも少なくないの

よ。私達は、親御さんの負担を少しでも減らすお手伝いをしているだけで……」

「でもさ……」

弟は、まだ納得いかないようだが、俺は『そういうものなのか』とも思う。どちらにしろ、俺らには介護の経験がないから分からない。考えてみれば、気ままな身分だ。

と、その時だ。

「…由紀恵さん」

小さな声をした。見ると、車椅子に乗った大地がいる。

「どうしたの？」

驚いて由紀恵がたずねると、大地が小さな声で言った。

「どうしても、サツカーしちやダメ？」

その無邪気さに、思わず笑顔がこぼれた。

「何？ そんなにサッカーやりたいの？」

由紀恵さんはあきれ顔だ。

「俺じゃなくて、翼がどうしてもやりたいって……」

まったく子供は無邪気でいいなど、思わず大地の髪をくしゃくしゃしたくなる。

「でもさ」

弟が無表情に言った。

「なんで、翼がサッカーしたいって分かるの？ あいつ、喋れないんじゃないの？」

子供にも情け容赦のない突っ込みようだ。

「確かに、翼は喋れないけど……」

そう言うつと大地は自分の片目を指さし、

「そのかわりに目で合図するんだよ。こうして」
パチンと、片目を閉じる。

「右目を閉じたら、何かして欲しい証拠。左目は、もういいって事」
「へー。色々やり方があるもんだな……」

弟は心から感動したように仕切りと首を振る。そして、由紀恵を見る
と意外な事を言った。

「ねえ、センセイ。ここまで言うんだから、やらせてやったら？
サッカー」

おお……！ まるで、人間みたいな温かいセリフじゃないか！
俺は感動と驚愕の思いを込めて弟を見る。が、しかし、由紀恵は渋い
顔をした。

「そりゃ……やらせてあげたいのは山々だけど……でも、二人だけじゃ
何かあった時困るじゃない」

「じゃあ、俺らがついていくよ。男手があればいいだろう？」

「確かに、男の人がいれば助かるけど、それだけじゃ……」

「いいじゃないか、センセイ。この天気がいいのに、部屋の中にもってたんじゃこいつらだつて退屈でしかたないだろう?」

「そうだよ。僕、退屈」

大地が弟の尻馬に乗って叫ぶ。2対1の勝負に勝ち目がないと悟つてか、ついに由紀恵も観念したらしい。しぶしぶ「分かった」とうなずいた。

「やった! ありがとう、お兄ちゃん! 由紀恵さん!」

大地が万歳する。

「ただし!」

由紀恵が口を挟んだ。

「私も行くからね!」

「そんなの、別に構わないよ。ねえお兄ちゃん」

「ああ。とにかく、これで、決まったな」

そういうと、弟は、大地の車椅子を押して歩き出した。

「でも、ちよつと待って」

「何だよ、センセイ。まだ何か文句あるのかよ」

「うん。実はあだし…今、洗濯途中だったのよね。誰かにやってもらわないと…ケガしてるかなえ一人じゃ可哀相だし」

と、再び由紀恵は考え込み、やがて俺の顔を見た。

「そーだ、お兄ちゃん!」

「え? 俺?」

「そ、お兄ちゃん。悪いけどかなえの手伝いをしてくれる?」

「…」

断れるはずもなかった。

青空の下、白いシートが揺れている。空気は停滞しているように思えるが、多少の風は吹いているらしい。

「ごめんなさい。送ってもらった上に仕事の手伝いまでやらせるはめになっちゃって…」

かなえがシーツを広げながら言った。

「別に、気にしなくていいよ。これくらい」

そう答え、俺もシーツを広げる。そして、思いきりはたいて皺を伸ばすと、竿にかけた。

「それにしても、結構な量だね」

「ええ。何しろ、入寮者全員分だから」

「何人いるの？」

「この棟には15人かな」

「ふーん。そんなに居るんだ。そのわりに静かだね」

「今日は土曜で、みんな家に帰ってるんです。ああ。大地君と、翼君を除いて」

「ふーん。あいつら居残り組か。可愛いそうだな」

その『あいつら』の姿が、この2階の物干台からはよく見える。

先きほどまで俺らが居たグラウンドで、ちょうど今大地がボールを蹴っているところだ。その向こうに車椅子の翼が居て、その車椅子を正が押している。

「ほら、こっちこっち！」

弟の叫び声がある。あいつのあんな声を聞くのは、何年ぶりだろう？ 子供の頃は、あいつもあやつて外でよく遊んでいたが…。

ぼんやり見ていると、いつの間にか隣に来ていたかなえが言った。

「弟さん、子供の事は好きなんですね」

「…みたいだね。俺も初めて知った」

「面倒見もいいみたいだし」

「…みたいだね。俺も、今日初めて知ったよ」

「本当は、優しいんですね？」

「いや、それは、知らないけど」

「優しいんですよ。大地君がサッカーできるように由紀恵さんを説得するなんて」

「そうかな…？」

「私ならできません。どうしても、何かある事考えちゃうし」

「もしかして、弟のやった事迷惑だった？」

「いいえ。違います。全然逆です。だって、よく考えてみると弟さんが正しいって思うもん。大地君は時間も限られてるんだし、動けるうちに、できる事をさせてあげなきゃって……」

「…限られた時間か……」

確かに、大地に許された時間は、俺らとは比較にならない程少ない。しかし、天と地の間には光があふれ、鮮やかな青と緑に彩られている。その中を笑いながら大地が走っている。いつか確実に訪れる悲劇の萌芽など微塵も感じさせない、時の流れとは無縁のような穏やかな風景……。

「…でも、いいですよ。子供はなんだかんだ言っても無邪気で」

ふいに、かなえが口を開く。

「え？ ああ。本当だね」

俺はあいづちをうつ。

「本当ですよ。私も子供の明るさに救われる事が多くて。そんなじゃダメなんだけど」

そう言うと、足を引きずりながら、再びかなえはシーツを干しに戻った。

と、その時。

「コラ……。大地！」

由紀恵の怒鳴り声が響いて来る。何ごとかと思っただけでグラウンドを見ると、由紀恵が大地に向かって何やら説教している姿が目に入ってきた。どうやら、大地の奴が何かやらかしたらしい。

「…あの人……田辺さん？ パワフルな人だね」

「ああ。由紀恵さん？ いい人ですよ。明るいいし、おもしろいし。

でも、仕事には結構厳しくて頼りになるし。…私なんか、叱られてばかりだけど」

「ははは。最初は誰でもそんなもんだよ」

「ですかねー」

そう言つと、かなえはバシツと音を立ててシーツを広げた。

シーツを全て干し終わると、「私は仕事があるから」と、かなえは事務棟に戻った。一人残された俺は、この暑さの中を弟達のいるグラウンドに行く気力もなく、かといって、他にやる事もなく、手持ち無沙汰のまま建物の中を最上階から歩き回った。

最上階といつても3階だ。細長く見えた外観とは裏腹にゆつたりとした広いフロアで、3つあるエレベーターホール脇の大きな窓から、緑の森が見えるようになっていた。中央には大きな白い柱があり、子供が描いた絵が飾られている。それを囲むように、いくつものドアが並んでいる。どうやらここは、個室ばかりのようだ。2階も同じように個室と、それから浴場にリハビリテーション室。そして学習室があった。ナースステーションのようなものも有る。施設の性質上、病院に似た雰囲気も漂う。その雰囲気、少し物悲しさを感じる。…このどこかにみーさんも居たんだよな？ どんな子供だったんだろう？ きつと、今のまま気の強い女の子だったんだろうな。兄貴の事虐める奴がいたら、絶対にやり返したりしたんだろうな。彼女の事だ、どんな環境だって楽しいものに変えたに違いない。…それにしても…。

と、俺は、先ほどの由紀恵から告げられた、みーさんの過去についてに思いを馳せる。

あの傷は、火事が原因でできたものだったのか。なる程、それであのケロイドのような跡には納得がいった。けれど、あの頬の傷はなんだろう？ 刃物で切ったようなあの傷の跡は？ 大体、出火原因はなんだったんだろう？ 一瞬、いやな想像をしてすぐに首を振る。いや、そんなわけがない。まさか、そんなわけが…。

しばらく、フロア内をうろついていたが、3度目に例の物干台に

辿り着いた辺りでいい加減飽きが来る。それで、昇って来た時とはルートを変えて、エレベーターを使わずに階段で下に降りていった。降りた先はちょうど一階のロビーになってい。レクリエーションルームに戻るには、受付を過ぎて、医務室の横を通りさらに先まで進まなくてはいけない。ところが、受付を過ぎて数歩と行かないうちに、俺は身動きが取れなくなってしまった。なぜなら、そこに一枚の絵を見つけたからである。

それは、荒々しいタッチで描かれた巨大な木だった。おそらく3階まで貫かれているのであろう、あの大きな白い柱のまん中で、わずかに四方の紙を突き破るがごとくに、その幹はうねりながら空へと向かっている。幹の先からは二つに別れた枝が、まるで幹にかわり空をつかもうとするがごとくに広く、高く伸びている。そして、そのてっぺんには、太陽のような赤い花を咲かせており、その花からは異様な生命力がほとばしっていた。その、生命力に目を奪われたのかもしれない。

しばらく、その絵の前に立ち尽くしていると、後ろから唐突に話しかけられる。

「その絵、気にいったんですか？」

驚いて振り向くと、かなえが立っていた。

「あれ？ もう仕事終わったの？」

「ううん。どうせだから、こっちでやるうと思って戻って来たんです。…デスクワークだし」

そう言っ、かなえは手にしたファイルをこちらに見せた。

「それより、それ、いい絵でしょ？ 私も好きなんです」

「君も？」

「うん。なんか迫力あるじゃないですか？」

「そうだね。誰が描いたんだろう？」

「この、通所の人が描いたんですよ」

「え？」

「びつくりでしょう？ でも本当ですよ。長谷川さんっていつて、個展もやってて、けっこうファンも多いらしいですよ」

「長谷川？…男？ 女？」

「男の人です。30後半ぐらいの。でも、その人両手が無いんです」「両手が？」

「はい。それで、こんな絵を描いちゃうんだから、本当に凄いでしょう？」

「ああ」

俺は戦慄しながら、その絵に眺め入った。

5時ごろ、遊び疲れた大地と翼を連れて弟達が戻って来た。そのタイミングで、俺らも家に帰ろうとした。が、しかし、「ついでに、かなえを送ってやって」という由紀恵の言葉に従い、俺らはしばらく事務所の中で待つことになる。

手持ち無沙汰でうろろしていると、机の上に一枚の絵ハガキが置いてあるのに気付いた。そこには、見覚えのある野太いタッチで、一人の男の正面図が描かれていた。

「これは？」

思わず手に取り尋ねる、かなえが答えた。

「あ、やっぱり反応した。それも長谷川さんの絵ですよ」

「やっぱり！」

俺は感動して、しげしげとその絵に眺め入った。

「え？ お兄さん、ハセちゃんを知ってるの？」

由紀恵が、驚いて俺を見る。

「いや。さつき、受付のところに飾ってあるのを見て知ったところです」

「ああ、あの木の絵ね」

彼女はうなずいた。

「そうです。あの、柱の所に飾ってある……」

「…確かにあれはちよつと良い絵だよ」

「『ちよつと』どころか、『ものすごく』良い絵だと思います」

「ふーん。よつぼど気に入ったんだね」

「ええ。とても」

「じゃあ、そのハガキ持って行きなよ」

「え？」

その言葉に面喰らう。

「でも、これ、売り物っばいですけど……」

俺は包装用ビニールに貼ってある100と印刷されたシールを指して言った。

「ああ。本当は売り物だけど、サービス、サービス。手伝い賃」

「いいんですか？ たいして手伝いしたわけでもないのに」

すると、窓際からかなえが満面の笑顔でフォローしてくれた。

「そんな事無いですよ。すごく助かりましたよ」

「ほーら。かなえもこう言ってるし、持っていてきな」

女性2人に進められ、俺はありがたくそれを受け取る事にした。

そして、受け取ったが最後、女性二人の話など上の空で、じっとそれに見入ってしまう。ぼやーっと、それを見つめていると、

「お兄さん、お兄さんてば！」

いきなり、耳もとで呼びかけられて、飛び上がる程驚いた。

「え？ あ？ 何でしたっけ？」

「何でしたっけ？ って…聞いてなかったの？ 私達の話」

「あーっと、何だっけなあ？」

全然聞いてなかった。

「はあー」

由紀恵があきれ顔で首を振る。

「本当に、その絵が好きなんだね…。確かに、ハセ君にはファンが多いけど。にしても、ここまでハマる人も珍しいよ…」

すると、俺の記憶する限り、今までずっと無言だった弟が重い口を開いた。

「兄貴は、画家志望なんだ。だから、絵に対する執念がちょっと異常なんだ。はつきり言ってヤバいんだよ」

どういう言いぐさだ。それじゃ、まるで俺がおかしい奴みたいじゃないか…。俺はおおいに批難を込めて弟を見た。が、しかし、弟の言葉に由紀恵は納得したようだ。

「ああ。なるほどね」

と、軽くうなずくと、

「だったらさ、文化祭の時おいだよ」

と言う。

「文化祭？」

俺は首をかしげた。なんで、そこで、文化祭が出て来るのか？

まったく脈絡が無い。…という俺の気持ちを代弁するように、弟がストレートに尋ねた。

「なんで、そこで、いきなり文化祭が出て来るんだよ？ 全然話が見えないよ」

「ああ。悪い悪い。話す順序を間違えた。あのね、その絵の作者の長谷川誠が文化祭に顔を出す約束になってるんだよ。だから、おいでって言ってるの」

それで、俺らも納得する。

「そういうことなら、ぜひ来させてもらおうかな？ でも、いつやるんです？」

「10月の連休あるでしょう？ その時」

「10月の連休ですか…。何日だっけ？」

「ちよつと待って、チラシがあるはず…」

そう言うと、由紀恵は自分の机の引き出しを開け、B4のチラシを出した。

「これこれ。これがチラシ」

見ると、なるほど『ふれあいの家、文化祭』とでかでかと書かれている。

「ああ、12、13日ですか」

「そう、ぜひ来てね。そのチラシ持って行っていいから」

「ありがとうございます」

俺はありがたくチラシを受け取り、2つに折った。すると、由紀恵がこう付け加えた。

「ついでに、ボランティアも募集してるから、よかつたら参加してよね。特に、弟君。君、向いてるから、よかつたら来てよ」

「え？」

いきなり声をかけられて、弟が戸惑った顔をする。

「待ってるからね」

由紀恵はそう言うと、ニコツと笑った。

それから、20分程待ち、俺らはかなえとともに施設を出た。由紀恵は、まだ仕事があるからと、そこに残る。

既に日の暮れかかった坂道を、自転車をひいて歩く。坂を昇り切ったあたりで、かなえがぼつりと口を開いた。

「凄いですね、あの由紀恵さんにほめてもらえるなんて……」

「え？ 誰が？」

俺は振り返って荷台の上のかなえを見た。彼女は行く時と同じく、帰りも自転車の荷台に乗っていた。

「誰って、河井…弟さん」

「…弟が？ ほめられたっけ？」

「…ほめられたじゃないですか。『向いてる』って」

「ああ…そういうえば、そんな事も言われてたっけ？」

そういうと、俺は弟に視線を向けた。しかし、弟はたいして嬉しそうでもなく

「お世辞だろ？ あんなもん」

…あくまで、かわいくない。

「いいえ。あの人、お世辞なんかいいません」

かなえが、ムキになって言う。

「あの人、気さくそうに見えるけど、本当は物凄く厳しいんです。特に仕事に関しては」

と、弟の直球。

「とても厳しいようには、見えないな」

「厳しいように見えなくても、厳しいんです。私なんか、叱られてばかりで…。この間なんか『かなえのやってる事は自己満足に近いよ』って言われちゃったし…」

「そりゃ、確かに厳しいな」

ちよっと同情する。

「…でしょ？ 私向いてないんです、この仕事」

「そこまで、悲観しなくても…」

俺はかなえをなくさめた。そこへ、弟が、また口を挟んで来る。

「つーかさ、なんで、あんたこの仕事しようと思ったわけ？」

「なんでって…」

「だってさ、あんた元々、フツートのOLだろ？ 何で、会社辞めて

こんな畑違いの仕事してるの？」

「それは…」

かなえが口ごもる。

「別に、深いわけがあったわけじゃないけど…この仕事ならやりがいがある気がしたから…」

「OLは、やりがいなかったのかよ？」

「…あんまり、仕事がない上に、私、お局みたいな人に睨まれてある日、言われたんです『あんたの代わりなんて、いくらでもいるんだ』って。そう言われた途端に会社に行くのがどうしても嫌になって、…それで、職安通ってた時に、みーちゃんにこの仕事紹介されたんだけど…」

「なるほどね」

弟は、うなづく。そして、ぼそりとつぶやいた。

「どんな仕事も楽じゃないんだな…」

どうやら、今の自分のシヤレにならない境遇と重ね合わせているらしい。

それからしばらく、俺らは無言で歩き、やがてかなえの家についた。

「ありがとうございました」

かなえは、ぴよこんと頭を下げた。

「本当に助かりました」

「礼なんかいいよ」

俺は答える。そして、行こうとすると、背中からかなえの声を追いかけて来た。

「文化祭、絶対に来て下さい」

俺は、後ろを振り向き、うなずいた。

「絶対ですよ。大地君も、翼君も、すごく喜んでたんです。また、

一緒にサッカーやりたいって……」

その言葉に、俺は舌打ちした。

……ってことは、何だよ。来て欲しいのは、正かよ……

しかし、分かっているのか、分かっているのか、弟は振り返りもしなかった。

その休日の出来事は、俺達の心に思わぬ風を吹き込んで来たものの、長い人生航路の途中に、ほんの一瞬我が道に交叉した別世界に過ぎず、翌々日から再び退屈な日常へと埋没していった。相変わらず仕事はくそ忙しかったし、弟は怒鳴られてばかりいるし、世間では世界的な株の暴落など、何やらウソ寒い様相を呈して来て、俺の東京行き切符はますます遠ざかっていく気がする。そろそろ観念し時かなと思っていたある日、仕事中心となりの川岸さんがこんな話をふってきた。

「おい、知っているか？ もうすぐ大量に人を入れるらしいぞ」「へえー？」

俺は驚いて顔を上げた。

「このラインにですか？」

「ああ。このフロアに」

「何人？」

「5人ぐらい入れるって。ホラ、前田がいつまでたっても復帰の見込みないだろう？ それで、毎日この忙しさでみんな参っちゃってるし、どうにかしてくれないなら全員辞めるって原口さんが人事に怒鳴り込んだらしい」

「怒鳴り込んだ？」

その言葉に、俺は驚く。

「無茶するなあ、原口さんも。返り打ちでリストラされたらって考えないのかな？」

「原口さんは大丈夫だろう。なにしろ、勤務期間も長いし、上の人間に味方も多い。大丈夫って見込んだ上での行動だろう」

「そんなもんですかね？ ……それにしても5人は凄いな。前田君の存在が、それだけ大きかったって事ですかね？」

「それもああるし、夏に雇った学生バイトが何人か辞めるせいもある

し、それだけじゃなくて…」

そこで、川岸さんは言葉をとめた。その態度になんとか違和感を
感じ、

「…？ それだけじゃなくて、何ですか？」

と、訝しげに尋ねると、川岸さんは声をひそめ、なんだかとても
気兼ねするように言った。

「何人が辞めさせられるかもしれないって」

「え？」

瞬間、頭の中に弟の顔が浮かんだ。おそらく川岸さんも同じだっ
たのだろう。ますます気を使うようにこう言った。

「いや。噂だよ、噂。本当かどうか分からないよ」

「どっちでもいいですよ、そんなの」

俺は、敢えて気にしてないふりをした。

昼休み、弟と二人で食堂に行く。定食を取り、無言で飯を食う。
弟は疲れ切った顔をしていた。無理もない。さっきまでグループの
連中に怒鳴られていたのだ。詳しく話せば、こういう事だ。弟の所
属するBグループの分別用の箱が一つ無くなっており、証拠がある
わけでもないに弟が無くしたと決めつけられたのである。明らかに
理不尽であるにも関わらず、誰も、弟を庇わなかった。弟自身です
ら弁明しなかった。おそらく、もしかして自分がうっかり無くした
かもしれないという思いが心の片隅にあっただらう。普段の行い
の悪さの報いとも言える。

弟はこのことについて話そうとしなかった。俺も話題にしようと
思わなかった。ただ無言で飯を食う。弟も黙って飯を食う。周りの
にぎやかさが、やけに耳について来る。と、その時、ふいに弟が口
を開いた。

「ところで、聞いたか？」

「…何を？」

「近いうちに人員補給があるって話」

「ああ……」

その話かよ……と、俺はますます鬱になる。

「5人も入れるらしいよな。随分もつかってるんだな、この会社」

「みたいだな」

「でさ……」

と、弟は一息入れた。

「同時に人員削減もするらしい」

「みたいだな」

俺はあっさりうなずいた。

しかし、それ以上のコメントは控えておく。おもしろくない方向に話が進みそうだからだ。すると、弟が自嘲気味に笑い、それから、やけにサバサバとした口調で言った。

「まあ、俺は別にどっちでも良いんだけどね」

「そうかよ」

と、俺は手短かに答える。本音を言えば、一刻も早くこの話を終わらせたかった。そんな俺の願いが通じたのだろうか？

「おつかれ」

と、明るい声がして、みーさんがやって来た。

俺は救い主を見つけたがごとく、みーさんを見る。すると彼女は、いつもの屈託のない笑顔で

「お久しぶり」

と言った。

「お久しぶりです」

頭を下げると、

「ご一緒していいかしら？」

と、ちよっとおどけた調子で言う。

「どうぞ、どうぞ」

そう言っつて、俺は自分の隣のスペースを開けた。みーさんは遠慮なくそこに座る。それが、左側だったので、彼女の頬の傷が真横に見える事になり、ドキツとする。『ふれあいの家』で田辺由紀恵に

聞いた、この傷のできたいきさつについての諸々の話を思い出したからだ。

一方のみーさんはと言えば、俺のそんな心の内など知る由もなく無邪気に話しはじめた。

「そういえば、優ちゃん達のラインに、新人が入るらしいね」

それで、俺はがっかりする。なんだ、結局その話題かよ。

「みーさんも知ってるんですね…」

「うん。もう会社中の人知ってるよ」

「そうですか」

「そうよ。でも、よかったね。これで、少しは仕事が楽になるんじゃないの?」

「まあ、そうですけど…」

「辞めさせられる奴もいるらしいけどね」

弟が陰気くさく言った。その言葉にみーさんが驚く。

「え? そうなの?」

「そうなの? って…そうなんだよ。小金井さんあたりに聞いてみるよ」

「そのコガちゃんから、新人を入れるって聞いたのよ。でも、辞めさせる話はしてなかったけど…」

「本当ですか?」

俺はみーさんの顔を見た。すると、みーさんは俺の目をまっすぐ見て答えた。

「本当よ。嘘ついてどうするのよ?」

どうやら、みーさんは本当の事を言っているようだ。弟もそれを確信したのか、心なし表情をゆるめた。もっとも、油断はできないが…。単に小金井さんが話さなかったただけかもしれないし。

「あ、それよりさ」

みーさんが話題を変えた。

「お二人さん『ふれあいの家』に行ったらしいね」

「え?」

俺は驚いた。

「何で知ってるんです？」

「由紀恵に聞いたから」

あ、そうか。田辺由紀恵とみーさんは親友なんだから、俺らの話題が出ていてもなんら不思議な事はない。

「由紀恵、喜んでたよ。2人ともすごくよく手伝ってくれたって」

「いや…それほどでもないですよ」

「謙遜しなくてもいいよ。本当にみんな喜んでたよ。特に大地君が喜んで、『お兄ちゃんにまた会いたいって』言ってるそうだよ」

「大地？ …ああ、じゃあ、それ、俺じゃなくて、弟だ」

「そうなの？」

「…」（弟は無言だ）

「でね」

みーさんは俺を見た。

「由紀恵に聞いたんだけど、二人とも文化祭に行くんだって？」

その言葉に、俺と弟は顔を見合わせた。そういえば、そんな約束をした気もする。けど、正直言って社交辞令のつもりだった。

「まあ、一応そのつもりですけど…」

俺はあいまいに答える。

「その時にならないと分からないですね…」

「そうなの？」

みーさんがきょとんとする。

「まあ、よかつたら来てよ。私も参加するからさ！」

それきり、その話は終わった。正直、それほど興味のある話でも無かったし、そんな事よりも、俺らの関心は新たに入る新人と、その時に行われるかもしれない人員削減についてだった。

その答えは、案外早く出た。

一週間後、5人の新人が入って来たのだ。

そして、気になる人員削減についてだが…。

幸いな事に、人員削減は、みーさんの言葉通り行われなかった。つまり、弟の首は繋がったと言う事だ。

しかし、弟にとってみれば、この時に人員削減してもらったほうがマシだっただろう。

なぜなら、クビにされなかったかわりに、もっと厳しい試練が奴の身に降りかかる事になったからだ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9729a/>

神様の不良品

2009年6月22日07時30分発行